
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺, ツインテールになります。13
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。13

水沢　夢

イラスト　春日　歩


水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。13

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


トゥアール
津辺愛香
観束総二
神堂慧理那
イースナ


ツインテールは、たなびくものだ……
折れたりはしない！
だから俺たちの心も、決して折れないんだ！

目次

水沢夢

［イラスト］春日歩

俺、ツインテールになります。13

人物紹介

観東総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

観東未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

結翼唯乃（いわばねゆの）

フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

俺、ツインテールになります。

12巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

襲来した神の一剣の幹部・ヴァルキリアギルディの圧倒的戦闘力に苦戦するツインテイルズ。何とか戦いが優勢に傾きかけた時、戦女神の真価が発揮された。ドラグギルディをはじめとする、これまでに倒したエレメリアンたちが蘇ったのだ――。

アルティメギル組織図

? アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。

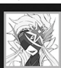


離反 首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。後に離反し、テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

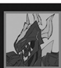
神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



最高科学者：マーメイドギルディ
戦女神：ヴァルキリアギルディ
交渉人：グリフォギルディ など

ひとたび出撃すれば、狙った世界を破滅させるとと恐れられているアルティメギル最強部隊。所属戦士は恐るべき戦闘力と変態性を兼ね備えている。

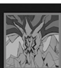
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

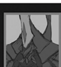
貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊** 隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊** 隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊** 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　神童の信念。

　ドラグギルディ様、覚えておいででしょうか。
　あなたの部隊の戦士、看護服属性ナースのスワンギルディにございます。

　ドラグギルディ様という指導者を失った後、若造の私はそれは多くの流る転てんをいたしました。
　あなた様の無念を晴らしたいと、根限りの修行を重ね、その果てに宿敵テイルレッドに挑んだのです。
　素晴らしきツインテールでした。完かん膚ぷ無きまでに敗北した私ですが……運命の悪戯いたずらか、何とかこの生命を繫つなぎました。
　そして出会ったのが、フェニックスギルディ殿──私の最後の師匠と決めた方です。
　彼の生き方に憧あこがれ……反逆者の謗そしりを受けることを覚悟で、私はアルティメギルを出しゆつ奔ぽんいたしました。
　再びテイルレッドに挑むべく、更なる修行を積むためです。
　ドラグギルディ様の達成されたスケテイル・アマ・ゾーンのみならず、全てのアルティメギル五大修練を収める覚悟で。
　人間の属性力エレメーラを食らうことができなくなり、いずれ朽ち果ててもいい。
　私は、ただあなたに誇りたかった。ドラグギルディ最後の弟子として、この世界に生まれ生きた証あかしを残したかったのです。
　いつしか私は、視野が狭くなっていたのでしょう。初対面の者が差し

出してきた希望に、甘い言葉に、疑うことなく飛びついてしまった。
　曰く「ツインテイルズの倒した全てのエレメリアンが、もうじき復活する。今のあなたの立場を白紙に戻し、恩師に会わせてあげるので……私について来て」と。
　お恥ずかしながら、歓喜に心踊った私が記憶しているのは、そこまでなのでございます。
　混濁する意識の中、己の手が、フェニックスギルディ殿に向けられる様だけがはっきりと知覚できたのです。ああ、私は──このマーメイドギルディという科学者に騙だまされたのだ。
　ドラグギルディ様に顔向けできない。フェニックスギルディ殿に申し訳が立たない。
　それでも、許されるのならば。あなたが再び生を得るということが、嘘うそでないのならば。

　ドラグギルディ様──どうか一目だけでも、お会いしとうございます。

第一章　益ます荒ら男おたちの再来。

『来い世つか……また逢あおうぞ』

『お前がツインテールを愛する限り……そんなこともあるかもな』

　空を引き裂さく激しい雷鳴で、俺は我われに返った。
　宿敵ドラグギルディ。
　奴やつと俺──テイルレッドが死闘を繰り広げ、その果てに交わしたいつかの約束が……まさか、こんな形で果たされることになるなんて。

　最後のアルティメギル四し頂ちよう軍ぐん・神の一剣ゴー・デイア・ソードに連勝を続ける俺たちツインテイルズの前に現れた、戦いくさ女め神がみヴァルキリアギルディ。
　それは、「ひとたび出撃すればその世界をエレメリアンの世界に塗り替える」と異世界を恐怖させた最強軍団、神の一剣ゴー・デイア・ソードの伝説の体現者──。
　元より死したエレメリアンを操る力を持っていた彼女は、フェニックスギルディの再生能力を取り込んだ。それにより、意志無き劣化コピーではなく、人格も戦闘力も全て完かん璧ぺきに再生させるという、もはや神の力そのものの能力へと昇華させてしまった。
　今、俺たちの前の崖がけの上には、ヴァルキリアギルディの〝死して尚変態ヴアルハラ〟で蘇よみがえった戦士たちが──ドラグギルディをはじめとする、これまでにツインテイルズが倒した全てのエレメリアンた

ちが居並んでいる。
　現行侵略部隊と使命を異にする独立愚連隊、ネオアルティメギルとして――。

「みんな、数に惑わされるな！　こいつらは全部、一度倒した相手なんだ！　もう一度倒せばいいだけの話だ!!」
　俺は崖の上を睨にらみ、仲間たちを鼓舞した。
「そ、そうね……一発でブッ飛ばしたような奴が大半なんだし……」
「再生した怪人は弱体化しているのが、ヒーローもののお約束ですわ！」
「ヴァルキリアギルディと戦うより、むしろ楽ができるかもしれんな」
　ブルーもイエローもブラックも、懸命に俺の言葉に応こたえてくれる。
「そうして希望を持たせるのも不ふ憫びん、はっきりと教えておこう」
　しかし、そんな俺たちのか細い闘志を、冷然と一いつ蹴しゆうする声が響いた。
　この場のエレメリアンでただ一人地に立ち、崖がけ下から蘇よみがえった戦士たちを見上げる、ヴァルキリアギルディだ。
「もう一度では足りぬよ。彼らは不滅の存在。君たちが何度倒そうとも、いずれ蘇るのだ」
「何だと……！」
　つまり俺たちは、永遠にエレメリアンと戦い続けるというのか。
　倒しても倒しても、終わりは訪れないというのか……。
「これ以上、君たちのために神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士を失うわけにはいかん。消滅と再誕を繰り返す死人を相手に、気の済むまで戦い続けるがいい」
　ヴァルキリアギルディの非情な言葉が、定められし運命を刻む。

「そして気が済んだら──罪髪ツインテールを終しゆう焉えんせよ」
　しかし、締めに告げた一言が、逆に俺を奮起させた。
「ツインテールを……諦あきらめるものかっ!!」
　俺が啖たん呵かを切った瞬間。
　ドラグギルディが歩を進め、崖を滑り下りてくる。
　それを皮切りに、戦士たちが次々と崖から降下し始めた。
　無数の戦士たちの地滑り音が唸うなり、削れる崖肌は砂嵐となって周囲に渦うず巻く。
「さあ者ども征ゆくぞ、ツインテールの名の下に！」　　　　「百ゆ合り！」
「人形を持て────っ!!」　　　　「ウサ耳！」
　　　　　　「百合ー！」　　　　　　「巨乳だ！」　　　「いや貧乳だ!!」
　　「いざ参らん、男おとこの娘こ!!」　　　　　　　「文！　学!!」
　　　　　　　　　「割腹筋ですじゃ」　　　　　　「お転てん婆ば……！」
　　　　　　「スク水ゥゥゥゥゥ！」　　　　　　「被虐ねぇん！」
　「唇くちびるをですね～……」　　　　　　「三つ編あみよ！」　「ブルマだ!!」
　　　　　　　　「百合！」　「コスプレ!!」　　「邪険だろ！」
「匂いだオラァァァ!!」　　　　「幼馴染おさななじみ……！」
　　「お、お漏もらし（ボソッ）」　　「うな────じ!!」
「リボンです」
　　　　　　　　　　「腋わきが見たい!!」　　　　「性転換──」
　　　「恋愛だろう」　　　　「教師ですよね？」
「百合百合!!」

「お母さ――――ん!!」
「おみ脚が!!」　「虚うつろ目」
「方言だべ」
「涎よだれ」　「頬ほお」　「濡ぬれ透け」　「多弁」
「閉所」　「腰」　「汗」
「百合――――――――――――――――――――――ッ!!」
　天と地をつんざき、上から右から左から、戦士たちの咆ほう哮こうが爆発する。

　――変態が、土石流となって押し寄せてくる……。

　思わず気け圧おされ、ツインテールが竦すくみそうになった。
　何やら一体だけ、やたら頑張って自己主張している奴やつがいるようだが……。
　だが、信念の強さで負けてなるものか。
「うおおおおおおおおおおおおおおお！　ツインテ――――――――――ル!!」
　俺はブレイザーブレイドと、ただ一つの信念をこの手に握り締める。
　裂れつ帛ぱくの咆哮と共に、蘇よみがえったエレメリアン・〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟〟たちへと突とつ貫かんした――。

◇

　戦士たちの再誕に驚きよう愕がくしたのは、何もツインテイルズだけではない。
　この世界に侵攻している、アルティメギルの残存部隊も同じだ。

　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は、現地逗留している彼らなど一いつ顧こだにせず独自に出撃している。今回も、ヴァルキリアギルディの存在に気づいたのはツインテイルズとの戦闘が始まってからだ。
　属性力エレメーラの反応を頼りに撮影要員の戦闘員アルテイロイドを派遣し、基地の大ホールで中継をしていた彼らが見たもの。
　それは──自分たちを遺のこして逝いったはずの隊長、そして同僚たちだった。
「ドラグギルディ様！」
「リヴァイアギルディ様にクラーケギルディ様……」
「ビートルギルディ様、ティラノギルディ様も──」
「バカな、これは夢か……⁉」
　いつもは興奮必至のテイルレッドのキュートな映像集でさえも行儀良く着席し観覧している彼らが、我われ先にと正面の大モニターに殺到していることで、衝撃の度合いが窺うかがえる。
「どうしたのみんな、モニターにかぶりついちゃって」
　男むさいホールに響く、女性の声。
　入り口から歩を進めてきたのは、今や指導者を失い下級戦士しか残っていない残存軍にとって最後の希望である、アルティメギルの女科学者。マーメイドギルディだ。
　白衣のような腰パーツをはためかせ、まるで人間の女性のような豊満な胸部を存分に揺らしながら近づいてくる彼女に、エレメリアンたちは血相を変えて報告する。
「マーメイドギルディちゃん！　あれをご覧ください……‼」
　奇跡にも等しい緊急事態を目にしながら、マーメイドギルディは楽しそうに手を合わせた。
「ああ……始まったのね。あれは神の一剣ゴー・デイア・ソードのヴァルちゃん……ヴァルキリアギルディの能力よ。倒されたエレメリアンを

復活させることができるの」
　こともなげに奇跡の絡から繰くりを説明され、戦士たちは言葉を失う。
「……では、隊長たちは自分の力、自分の意思で蘇よみがえったわけではないのですな⁉」
「いかに神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部とはいえ、こんなことが許されてもよいのですか‼」
　やがて彼らにこみ上げてきたのは……理不尽に対する怒りだった。
「あら、嬉うれしくないの？」
「聖戦に殉じた戦士たちを、再び戦いに駆り出すなど！」
「安らかに眠る魂たましいを、辱はずかしめているのも同然ではありませんか‼」
　義ぎ憤ふんに駆られる戦士たちだが、マーメイドギルディは飄ひょう々ひょうとした態度を崩さない。
「それはあなたたちが今、生きているからこそ言える余裕ね～。当の彼らは、許されるならもう一度ツインテイルズと戦いたいと願っていたかもしれないわ……違う？」
「……そ、それは……」
「まあまあ。ひとまず、この戦いを見守りましょう！」
　冷静さを取り戻していく戦士たち。
　彼らがめいめいに画面の隅にまで視線を巡らせ、復活した同僚や隊長の姿にあらためて懐旧に浸ひたる中、一人困惑を続ける者がいた。
　スパロウギルディ。老参謀が隊長ドラグギルディの次に姿を捜したのは、彼が後援を惜しまなかった若き戦士。ドラグギルディ部隊の忘れ形見、スワンギルディだった。
　だが、あの澄んだ湖面に佇たたずむ白鳥のように精せい悍かんな神童の姿は、どこを見ても存在しない。

スワンギルディ以外のエレメリアンは、強さ階級関係なく全て復活しているというのに。
「何な故ぜだ、何故お前は復活していないのだ、スワンギルディ……」
偽いつわりの再誕でも構わない。もう一度姿を見たい。
追懐に拳こぶし震ふるわせていたスパロウギルディは、やがて一つの推論に辿たどり着く。

「まさか──お前は、死んではいなかったというのか……!?」

◇

一際巨大な地揺れを巻き起こし、崖がけを滑るどころかもはや砕きながら落下してきた〝大怪獣〟ユグドラシルギルディを最後に、無数のエレメリアンたちが俺たちを取り囲む。
つるつる頭好きの戦いくさ女め神がみが不毛の大地から再誕させた、ツインテールの剛剣士──ドラグギルディ。先陣を切って俺に突っ込んできたのは……やはりこいつだ！
乱みだれ刃ばの大剣が、袈け裟さ懸がけに振り下ろされる。
俺はブレイザーブレイドで応戦し、炎と火花が周囲に爆裂する。
その余波だけで、俺を取り囲もうとした数体のエレメリアンが吹き飛ばされていった。
地面を踏みしめる轟ごう音おんと、猛たける大音声が絡み合う。ここはまるで合戦場だ。
「くの字に曲がって震ふるえる小さなおみ足……最高だな！　頬ほお擦ずり不可避!!」
横合いからにじり寄って来たのは、脚フェチの戦士・フリイギルディだ。

「だああ、寄るな!!」
「ありがとうございます――――――――っ!!」
　くの字から一文字に伸ばした足で蹴けり飛ばし、目の前のドラグギルディに集中する。
「こそばゆいぞ、テイルレッド！　我われにじゃれついているのか!?」
「くっ……!!」
　鍔つば迫ぜり合いの膠こう着ちやくが、じわじわと崩されていく。
　ドラグギルディの剣に押し抜かれるのを堪えて震えるブレイザーブレイドの刃やいばの向こう、ドラグギルディの背後に、悠々と立つヴァルキリアギルディの姿が見える。
「苦戦しているな……無理もない。ドラグギルディは予かねてより、神の一剣ゴー・デイア・ソードとして迎えるべく声をかけられていた優秀な戦士だ。彼かの者が戦い始めたばかりのツインテールの戦士に倒されるなど、考えられぬこと」
　全てを見下し、全てを剃そり落とすと驕おごっていたヴァルキリアギルディが、ドラグギルディには幾分かの敬意を払っているように見えた。
「ドラグギルディ敗北の事実が神の一剣ゴー・デイア・ソードにまで届いていれば、もっと早くにこの私が動いていた。即座にこの世界を危険だと判断してな」
　……まかり間違えば、ドラグギルディと戦った直後……イエローもブラックも仲間になっていない時期に、俺はこいつと戦う羽目になっていたかもしれないというのか……！
　紙一重でこの世界を守り抜いてきていたのだという実感が、俺のツインテールを震わせる。
「ぐっ……おおおおおお!!」
　ドラグギルディの剣を強引にかち上げた俺は、

「はっ……!?」
　背後に殺気を感じて振り返る。
　太く張り詰めた、リヴァイアギルディの股間の槍やりが迫っていた。
「ぬうううううううううん!!」
　全力で後方に飛び退のき、高速で突き出されてくる股間を回避する。
　左手で側転し、体勢を立て直す。だが間かん髪はつ容いれず、今度は頭上から猛烈な勢いで棍こん棒ぼうが振り下ろされてきた。
「むおおおお！」
　超重量級の戦士、トリケラトップギルディだ。
　受け止めたブレイザーブレイドもろとも弾はじき飛ばされた俺は、砲弾のように地面を転がる。
「どうしたテイルレッド、母性が足りんぞ！　もっと甘えさせぬか!!」
　さらに、無理難題をほざいて上空から超高速での飛ひ翔しよう攻撃をしてくる、プテラギルディ。
「ぐっ……次から次に……！　捌さばききれねえ!!」
　巻き上がる土砂で汚濁する視界の先で──仲間たちも、大苦戦を強しいられていた。
　復活したエレメリアンは、ブルーに無惨に倒された者も多い。
　だからだろう、率先してブルーにかかっていく物好きはさほど多くなかったが……その中で、特攻服をまとったような見た目のエレメリアンが、嬉き々きとして乱激を繰り出している。
「ヘイヘイどーしたテイルブルー！　てんで力リキ入ってねえぞお!?」
　貴の三葉ノー・ブル・クラブの特攻隊長、ラフレシアギルディだ。
「あぐっ……！」
　ブルーは、いつ取り落としてもおかしくないほど弱々しく握られたウェイブランスで攻撃を凌しのぐ。防戦一方だった。
「聞いた話じゃおめえ、四し頂ちよう軍ぐんの幹部の旦那たち相手に金

星上げたそうじゃねえか！　それがあたいみてえなチンピラにボコにされて、情けねえと思わねえのか!?」
　無茶苦茶な因縁をつけ、ブルーへの攻撃をさらに苛か烈れつにするラフレシアギルディ。
「つるつる頭好きに悪趣味な攻撃されて、疲れてんのよ……！」
「言い訳はよしなよ！　ドタマじゃねえ……剃そられたのはてめえの心の毛だろう！　気合いが足んねえだけなんだよお!!」
　駄目押しとばかりに鉄パイプ状の武器を振り上げたラフレシアギルディの横腹に、強烈な砲撃が着弾した。イエローの放った胸のホーミングミサイルだ。
「ブルー、大丈夫で……きゃあっ!!」
　何とかブルーを援護したイエローだが、彼女自身にもそんな余裕はない。
「あはぁん、雨のような攻撃を必死に我慢するその姿……素敵だわぁ！」
　イエローには被虐属性マゾヒステイツクのマンドラゴラギルディをはじめとした無数のエレメリアンが殺到し、身を守るので精一杯という状況だ。
「おのれ、むさ苦しい！　これが握手会なら剥はがしどころか出禁案件じゃぞ、貴様らあああああああああ!!」
　ブラックも健闘している。
　だがエネルギーを使い果たし、ついに休止状態スリープモードにまで陥おちいったメガ・ネを庇かばいながら戦っているので、動きに精彩を欠いていた。
「みんな！　くそ、このままじゃ……！」
　みんなの苦戦が見えていながら、援護もままならない自分が歯は痒がゆい。

　混迷を極めた戦場で翻ほん弄ろうされる俺たちに、トゥアールの通信が届く。
『退却してください！　皆さんの今の状態コンディションでは、それほどの敵戦力は退けられません!!』
「無茶言うな！　そのやばい量の敵が、一気に街に向かったらどうする!?」
　ユグドラシルギルディに至っては、体長百メートル以上もある大怪獣だ。
　ここは人里離れた岩場だが、これだけの巨体……相当離れた市街地からでもこいつの存在は視認されてしまっているはずだ。
『ここでツインテイルズが全滅したら、それこそ世界の終わりです！　今は耐えて、どうか退却を!!』
　エレメリアンの方から理由をつけて撤退し、勝負が流れたことは何度もあった。
　だが、俺たちツインテイルズが、健在のエレメリアンを目の前にして逃げるなんて……。
「ブルー！　イエロー！　ブラック！」
　指示を出しているトゥアールが一番辛つらいんだ。それに、俺の意地でこれ以上みんなを危険に曝さらすわけにはいかない。
　ツインテールを解ほどく思いで、みんなに退却を促うながそうとした瞬間──
「テイルレッドちゃん～、私に近づいちゃってます！　危ないですよ～」
　しなやかで強きよう靭じんな神樹の枝が、巨大なムチとなって眼前に振り下ろされる。
　ただの一打が地面を叩たたくその衝撃だけで、周囲の戦士たちの身体からだが浮き上がる。

「ぐあっ……ユグドラシルギルディ……！」
　見上げる崖がけから降りてなお、その頭頂は崖より高く。アルティメギル最巨体の怪獣が、俺たちの退却を予期したかのように触手を乱舞させ、動きを封じてきた。
　思い出したぞ。ユグドラシルギルディの触手は、自身の意志とは関係なく飛旋し障害を排除する、危険な防御兵器だ。まともに食らえばただでは済まない！
　すまないトゥアール。逃げたくても、こいつらが許しちゃくれないみたいだ……!!
「こっちだって、しなくていいなら自分からお前に近づきはしねえよ！」
「では、私と創作活動をするか、テイルレッド……。戦いという名のな!!」
　長大な一本角づのを頭部に携たずさえた戦士が、手にした剣で鮮やかな刺し突とつを繰り出してくる。
「！　ビートルギルディ！」
　名画のように、見る者を魅了する華麗な剣捌さばき。懸命にそれを回避していると、
「ええい、お前は引っ込んでおれ！」
　今度はビートルギルディを押しのけ、砂さ塵じん舞う戦場に聖剣を煌きらめかせる戦士が。
「ティラノギルディまで……!!」
「ドラグギルディごときを無む闇やみに美化しおって！　お前の最大のライバルは、この帝王ティラノギルディだ！　そこを間違えてはいかんぞ!!」
「そう言うお前は相変わらずだな！　美化のしようがねえよ!!」
　ビートルギルディ、ユグドラシルギルディ、ティラノギルディ……！

アルティメギル四し頂ちよう軍ぐんのうち三軍の隊長が、一度に襲おそってくる……まさに悪夢か！
「イエロー、大丈夫か！　わらわの肩に掴つかまれ!!」
「すみません、ブラック……。ああ、もう脱ぐ装甲ふくがありませんわ……こ、こ、こうなったら……」
「わらわの胸とお股隠し三点セット……チョコ菓子のおまけシールしかないが、使うか!!」
「全部キラキラのシールですわね!!」
俺に追撃しようとしていたティラノギルディは弾はじかれたように背後を振り返り、身を寄せ合ってかなり危険な女子トークをしているイエローとブラックに注目する。
「これはどういうことだ？　俺が戦った時にはさほど感じなかった、テイルイエロー×テイルブラックに幾いく許ばくかの百ゆ合りコスモを感じる……。フフ……フフフ、ささやかで、健けな気げで、未成熟で、純粋な百合ポテンシャル……フッフッフッフッフ、何があったのやらフフフ」
「ねっとりした視線でわらわたちを洞察するな気持ち悪いわ――――――――っ!!」
俺たちが何を言おうが、どう抗議しようが、エレメリアンたちの雄叫びにかき消される。
溢あふれ出す主義イズム。
乱れ飛ぶ感情エモーション。
無数の愛、趣味嗜し好こう――属性力エレメーラが高波となって俺たちを呑のみ込み、溺おぼれさせようと荒ぶる。
「はっ……!?」
悪お寒かんがして視線を落とすと、地面に寝転んで俺の足と足の間に頭を置く不ふ逞ていの輩やからが。

　ゴキブリ型のエレメリアン。お漏らし属性ピーイングのコックロチギルディだ。
　こいつ、いつからいたの……。
　コックロチギルディはくわっと目を見開き、俺に抗議してきた。
「この大軍勢に恐怖した今がお漏もらしを注文するチャンスと思ったのに……注文したドリンクバーがいつまで待っても来ぬぞ、テイルレッド!!」
「ドリンクバーは自分で取りに行け――――――――ッ!!」
　バンカーに嵌はまったゴルフボールを打ち上げるかのように、ブレイザーブレイドの一いち斬ざんでコックロチギルディを空高く舞わせる。
　喫茶店の息子にドリンクバーを頼むんじゃねえよ!!
　……って、なんだこの反論は!?　混乱しまくってるじゃねえか俺は！
　さらに、コックロチギルディのクレームに引き寄せられ、涎属性スロバーのチェリーブロギルディ、汗属性スウエツトのトリロバギルディまでもが群がってきた。
「よだれのドリンクバー注文よー！　四ヨ露ロ死シ苦クーん！」
「こっちは汗のドリンクバーを頼む！　他のメニューの注文は不要、それがメインディッシュだからな!!」
「貴様らー！　テイルレッドのドリンクバーを最初に考えたのは俺だぞー!!」
　部隊を超えて結成した液体属性トリオが仲間割れを始めた隙すきに、俺は事態の打開を図る。
　しかし。
「なるほど確かに……ほのかに汗が滲にじむうなじもまた、趣おもむきがある!!」
　後ろを向けば、うなじ好きのクラブギルディが。
「一般兵士にしてはいい目の付けどころだ。しかし汗とくれば腋わき

だ、覚えておけ!!」
　横を向けば、腋を愛するメガネウラギルディが。
「いやぁ～よだれですかぁ～。よだれとくればやっぱり唇くちびるですねぇ、はい」
　──前を向いたら、唇フェチのパピヨンギルディが。
　嫌すぎる結界が、俺を取り囲む。

「ぐあああああああああああああどこを向いても変態しかいねえええええええええええええ!!」

　残されていた最後の力まで、変質者たちに吸い取られていくようだ。
　こ、ここまでか……!!
「───そこまでです!!」
　憔しよう悴すいして白目を剥むきかけた俺は、凛りん然ぜんと戦場に響く声に意識を引き戻された。
「私の名は、世界をわたる復ふく讐しゆう者、仮面ツインテール!!」
　白衣をマントのようにはためかせ、崖がけの上に立つのは……仮面ツインテールだった。
「ほう、仮面ツインテール……貴様も健在であったか」
　崖の上に立つ仮面ツインテールを、懐かしげに見上げるドラグギルディ。
　それにつられるように、他のエレメリアンたちも視線を崖上に集中させた。
「来るな！　今回ばっかりは危険すぎる!!」
　俺の忠告も届かず、仮面ツインテールはドラグギルディへと不敵な言葉を投げかける。
「ドラグギルディ、聞いていますか。今のテイルレッドたんは、あなた

と戦った時よりも、一回りも二回りも強く可か愛わいくなっている。それどころか、あなたが追い求めた究極のツインテールをも超越したことを」
「究極のツインテールを……⁉」
　ドラグギルディの貌かおが、緊迫した硬質感を帯おびる。
「疲ひ弊へいした今では、その姿になることは叶かないませんがね」
　こいつらの誇りを、あえて刺激している。トゥアールの狙ねらいは、もしや……。
「どうです？　武人ならば、最高のツインテールと戦い、それを手にしたいとは思いませんか？　……それともネオアルティメギルとやらは、へとへとの小ちっちゃな女の子をいじめて悦に入る、ろくでなしの集まりですか‼」
　仮面ツインテールの挑発に、エレメリアンたちが殺気立つ。
　当のドラグギルディは、不敵な微笑でそれを受け流した。
「相変わらず熱き女だ。貴様の執念に、我われは辛酸を舐なめたのだったな」
「あいつはエレメリアンに一言ぶちかますのがライフワークなだけでしょ……‼」
　ツインテールをハラハラさせながら、ブルーも二人の対たい峙じを見守る。
「確かに、究極のツインテールを求めて戦う我らが、それを目にせず奪うなど無粋よな」
　仮面ツインテールへ向け、勇ましき戦士の貌かおを見せるドラグギルディ。
「全くだ。斯か様ようにひ弱な支援者までもが駆けつけるほど、貴様らが余裕を失うとは……興が削そがれたわ‼」
　先ほど俺に攻撃を仕掛けてきたリヴァイアギルディが再び近寄ってく

ると、ドラグギルディの一考を援護するように胴どう間ま声ごえを響かせた。
　そういえばこいつは、ブルーが戦いの最中に触手に怯おびえて泣いた時、優位を放棄して撤退したことがある。荒い言葉とは裏腹、正々堂々たる戦いを重んじる、生きつ粋すいの武人だ。
　周囲のエレメリアンたちも、二人の言葉に賛同するように闘気を収め始めた。だが、問題はここからだ。
　ドラグギルディたちは、騎士道に訴えれば駆け引きに応おうじる打算はあった。しかし、それを統すべるヴァルキリアギルディは、勝利至上主義者。こいつをどう切り抜ける……！
　俺の焦しよう燥そうを見透かしたかのように、ヴァルキリアギルディは冷笑を口くち許もとに湛たたえた。
「……私は構わん」
「！」
　意外な言葉に、思わず息を呑のむ。
「神の部隊に刃やいばを向けた大罪も、君たちのその滑稽なまでの悪あがきを見れば溜りゆう飲いんも下がろうというもの」
　何とでも言え。今は、トゥアールや愛あい香かたちを無事に帰すことが最優先だ……！
「──何な故ぜわざわざ勢揃ぞろいした様を見せたと思う。君たちの記憶に、この光景を深く深く刻み込むためだよ。これから奮起する度たびに、君たちの心の髪は儚はかなく剃そり落ちるだろう。今日見た悪夢を思い出してな」
　そう断じる彼女の背後に、極彩色のゲートが出現する。
「ま……待ちなさいよ！　まだ勝負はついてないのに、逃げる気⁉」
　闘争心がそうさせるのか……ブルーが、ヴァルキリアギルディを呼び止めてしまう。

俺は咄とつ嗟さにブルーの肩を掴つかんだが……その小さな肩は、か細く震ふるえていた。
「……憐あわれな。立ち去って欲しいと懇願しつつ、自尊心を満たすために吠ほえずにはいられない……私に待たれて困るのは、ほかならぬ君だろう」
ヴァルキリアギルディは、乾いた嘲あざけりとともにこちらへと腕を突き出した。
ただの挑発めいたその仕草に、ブルーは身を強こわ張ばらせて後あと退ずさってしまう。
「君のツインテールなど、すでに死んだも同然。亡者と戯たわむれているのが似合いなのだよ」
「っ……！」
屈辱に震ふるえるブルーを見下すように一いち瞥べつし、ついに戦場から姿を消すヴァルキリアギルディ。それに続いて、〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちも次々とゲートの中へ消えていく。
ティラノギルディはしつこく、俺の方をちらちらと見ているが……トリケラトップギルディに背中を押され、撤退していった。
「テイルレッドよ、楽しみにしているぞ。全力のお前と再び相あい見まみえるのをな」
そう言い残すと、ドラグギルディはマントを翻ひるがえして踵きびすを返す。
一番最後に、全エレメリアンの背景同然に高々とそびえ立っていたユグドラシルギルディが姿を消し──周囲は、静寂に包まれた。
「……助かったん、ですの……？」
思わずへたり込むイエロー。ブルーとブラックも膝ひざをつき、俺も精根尽き果てて大の字に倒れた。
仮面ツインテールを見ると、その両脚は微かすかに震えている。

ここは紛まぎれもない地獄だった。怖かっただろう、トゥアール。無理をさせてすまない……。
これよりもっと長い時間戦い続けたことなんて、何度もあった。
それでも、おそらく俺を含めた全員がこう思っていることだろう。
ツインテイルズのもっとも長い一日が、ようやく終わった──と。

◇

「やばいですね」
基地に帰って開口一番。仮面を外したトゥアールは、深刻な顔でそう零こぼした。
俺、愛あい香か、慧え理り那な、イースナは同時に変身解除。まずは、休止状態に追い込まれたメガ・ネを整備室へと運ぶ。
そしてコンソールルームで、いつもの女幹部コスの母さんに迎えられ、各々の席についた。
だが揃そろって着席しても、いつものように早速会議だ！　とはいかない。
「色々なことがありすぎて、頭が回らねえ……何がどうなってんだ」
俺は椅い子すの背もたれに深く身体からだを沈め、虚空へと嘆息した。
いや、どうもこうもないか。これ以上ない緊急事態だが……俺のツインテールが、事実を受け容いれることを拒こばんでいるかのようだ……。
「あいつの言うとおり、あたしたちの戦い……全部やり直しリスタートってわけ……？」
最初期から俺とともに戦い続けてきた愛香の溜ため息いきは、実感を伴って重い。

「まさかアルティメギルの作戦が、ここまで完かん璧ぺきなものだったとは……」
「アルティメギルの、作戦……？」
　俺が聞き返すと、トゥアールは無念を滲にじませながら語り始めた。
「侵攻する世界の人間にあえて技術を渡し、ツインテール属性を世界に拡散する女神を自分たちの手で作り上げる……。私一人では乗り越えられなかったこの常じよう套とう作戦すら、奴やつらには第一段階に過ぎなかった」
「けどその作戦は、俺と愛あい香かとトゥアールで、力を合わせて粉砕したじゃないか」
　押し黙る他の面々に代わり、俺はトゥアールへ穏やかに反論。意見の応酬が始まった。
「第二段階。作戦の一が頓とん挫ざした場合、次々に補充部隊を送る──」
「それもすぐに撃破したぜ。慧え理り那なが加わってくれたからな」
「そして第三段階。通常の侵攻部隊では持て余すほど強大になったツインテールの戦士は、首領直属のアルティメギル四し頂ちよう軍ぐんを投入することで、確実に倒す」
「それは、イースナやメガ・ネが仲間になってくれたおかげで、乗り越えた」
　正確には、乗り越えている途中だが……そのぐらいはいいだろう。
「……最終段階。四頂軍ですら倒しきれないほどの戦士がもし現れた場合──それまでに倒した戦士を復活させ、反抗する気力が無くなるまで永久に戦いをループさせる……」
「トゥアール」
　場がさらに沈ちん鬱うつな空気になったのを感じ、俺はトゥアールを制止した。

「すみません、総そう二じ様、皆さん……不必要に危機感を煽あおるつもりはないんです」
　とはいえ、トゥアールの言ったことは誇張じゃない。紛まぎれもない事実だ。
　伊だ達てに無数の世界を侵略してきたわけではない。二重三重どころではない、そのさらに数手先までも見越して張り巡らされた作戦──。
　アルティメギルは、絶対にツインテールの戦士に敗北するつもりはないのだ。
「大おお袈げ裟さに考えすぎだと思うぜ。新しいエレメリアンが現れてそいつらと戦うか、今までのエレメリアンともう一度戦うかの違いじゃないか」
　気軽に言ったところで、やっぱりみんな、ショックは大きいよな。かくいう俺も、半分はやせ我慢みたいなもんだ。
　けど、とにかく一秒でも早く、場を支配する空気を払ふつ拭しよくしたい。
　意気消沈が長引くだけ、後に引きずる。それは、心の力で戦う俺たちにとって、深刻な戦力低下を招くだろう。
「アルティメギルは……誇りを捨てました……。持久戦に持ち込んで、私たちが、根負けするのを待つ、つもりです……」
　イースナが親指の爪つめを噛かみながら、失望を口にする。
「そうね。どんなに変態でも、あいつら根っこでは誇りを大事にしてたのに……」
「これまで、一度に無数のエレメリアンが攻めて来たことは何度かありましたが……それは各部隊の最終戦と覚悟したからこその全戦力。今回とは全く意味が違いますもの」
　愛あい香かも慧え理り那なも、ある種の信頼がエレメリアンにあったはずだが、それが崩れかけている。

「隊長級のエレメリアンまでもが蘇よみがえり、徒党を組んで襲おそってくるのは、確かに恐るべき脅威です。けれど、今の総そう二じ様たちなら決して退しりぞけられない戦力ではありません」
「一度きりの、殲せん滅めつ戦なら……ですね」
　イースナの言葉に頷うなずき、トゥアールは続けた。
「ヴァルキリアギルディが蘇らせたあのエレメリアンたちは、能力を取り込んだ元のフェニックスギルディと同じく無限再生の能力を備えているとのこと。そこが今回の一番の痛点です」
「何度倒そうとも、際限なく復活してくるということですのね……」
　考えれば考えるだけ、深みにはまっていく。雰囲気が暗くなっていく。
　ここは一つ、ギャグでも飛ばしたいところだが……俺には、愛香とトゥアールのような笑いの才能がない。誰だれかを笑わせられるような人間じゃないのが口惜しい。
　それまで押し黙っていた母さんが俺たちの様子を見て、仕切り直すように手を叩たたいた。
「ねえ、みんな。トゥアールちゃんがさっき、今が作戦の最終段階だって言ったでしょう？　でも逆に言えばそれって、総ちゃんたちがこれを乗り越えれば、どうしようもなくなるのはアルティメギルの方ってことよね？　悪いことばかりじゃないと思うけど」
　悪の女幹部コスプレをして、悪にひるまぬ頼もしいことを言ってくれる。
「母さんの言う通りだ。全員集合のあまりのインパクトに気け圧おされちまったが……ひとまずはいつもどおり、現れたエレメリアンを倒していくことに集中しよう」
「観み束つか君……！」
「そ、そうです、ね……」

　ようやく慧理那やイースナの顔が綻ほころび、俺もほっとする。
「そうね。あの変態たちとまた一から戦わなきゃいけないと思うと気が滅め入いるけど……ヴァルキリアギルディは、きっちりブッ飛ばして借りを返してやらないと収まらないし」
　隣に座る愛香が、俺にウインクをしてくる。
　俺が一番気がかりなのが、そうして強気にリベンジを口にする愛香だ。
　今回の戦いでは、身体からだよりも、精神こころに大きな傷を負ってしまったのではないか。
　愛香のツインテールを凝視する。
　心なしか、髪の毛のハリや艶つやが薄れているように見えるが……。
　じっと見つめていると、やがて愛香のツインテールは、俺にか細く訴えかけてきた。

（イタイヨ……　コワイヨ……）

　俺は両手でテーブルを叩たたき、おもむろに立ち上がっていた。
　……泣いている……愛あい香かのツインテールが……!!
　やはり、ヴァルキリアギルディとの戦いで深刻なダメージを!!
「そーじ？　どうし──」
「愛香のツインテール!!」



心が締め付けられた俺は、愛香の右のツインテールを抱き締めた。
「ひゃわっ⁉」
甲かん高だかい声を上げて驚く愛香。
「あ、すまん……。愛香のツインテールが傷ついてるのを感じて、つい……」
「そんな無意識で、どうして器用にツインテールだけ抱き締めるのよ！　心配してくれるなら、もっと簡単な抱き締め方があるでしょ⁉」
愛香が、自分の腰をぽんぽんと叩いて抗議してくる。
「……？？」
俺は、愛香の腰の左右でふわっと揺れるツインテールに、それぞれ交互に視線を馳はせた。
「左右じゃなくて真ん中ァ‼」
「真ん中……？」
ああ、ようやく合が点てんがいった。扱いが未熟だ、抱き包むならばツインテールの正中線を捉えろ──と、そう言いたいんだろう、愛あい香か！
「わかってない……絶対わかってない顔だわ……」
両手で頭を抱かかえ、崩れ落ちてしまう愛香。やはり、ツインテールが痛むのか……。
「っは──────わかりやすいですね蛮族はもう！　総そう二じ様、愛香さんに新鮮なネタを提供するのは慎つつしんでください。この人が夜ソロでハッスルしたら、そこが震源地になって凄すさまじい揺れが町内を襲おそいます！　隣にある総二様のお家や、この基地も甚大な被害を受けてしまいますよ‼」
「耐震性に優れてるんだろ、この基地……それを揺るがすハッスルって一体……」
「わっかりました！　私が今、いつも愛香さんがやってそうなハッスル

を、総二様の前で実演してみせ──」
　白衣を放り、上着のボタンを外し始めたトゥアールの肩を、後ろから力強く掴つかむ手が。
「その前に、リクエストにお応こたえして地震を起こしてやるわ。あんたの体内にね」
「うぎゃあああああああああ────────────すくぇいく!!」
　愛香の掌底が、トゥアールの体内に波紋のように反響し、烈震を巻き起こす。
　やっぱ俺が俺が場を明るくしようとか考えても、二人のリズムには太た刀ち打ちできないな。
　でもこれで、いつもの二人だ。元気になってくれて良かったぜ。
　他のみんなの様子を窺うかがおうとした俺は、慧え理り那ながこちらをじっと見ていることに気づいた。
「うー、うー、痛いですわ……ツインテールが痛いですわ……戦いのダメージですわ……」
　唐突に慧理那が床にこてんと転び、痛みを訴え始める。
　心なしか台詞せりふが棒読みに聞こえるが……慧理那はまだまだ、他人に弱音を吐くことに慣れていないのかもしれない。
「大丈夫か、慧理那」
「あと三〇秒でツインテールが爆発しますわ」
「何だって!?」
　俺は慌あわてて慧理那のツインテールをさする。ツインテール爆弾処理班としての初仕事だ。
「ふぇぇ……ふぇー……」
　恍こう惚こつの表情を浮かべる慧理那。
　よかった、起爆は阻止できたようだな……。
「お……？」

今度は、ポケットのトゥアルフォンが引っ切りなしに鳴動する。画面を確認すると、メールアイコンの右上に表示される新着数が九九九に到達していた。

起動したメールアプリの一覧表示に同じ送信者が列挙されていたのを見て、そっと閉じる。

イースナの方を向くと、彼女は半笑いを浮かべて一言。

「いたい」

その僅わずか三文字を何な故ぜ、メールを九九九件も作成して訴える必要があるんだ……!?

「私のツインテールが、勝手に伸びようと、しています……。苦しいです……」

「髪の毛が自分の意志と関係なく伸びるのは、普通のことじゃないのか……？」

とりあえず、イースナのツインテールもさすっておく。こうすると余計に伸びそうな気がするなあ……。

「そうそう。こういう時は思いっきり甘えさせてあげるのが、男の甲か斐い性よ、総そうちゃん！」

「お義か母あ様……私だけ甘えられてないんですが……力加減を知らない野生の獣けものがじゃれついてくるだけなんですが……」

ダメージから回復したトゥアールが割り込み、俺からイースナをぺいっと引き剥はがす。

「皆さん恥も外聞もなく牝メスることを覚えちゃって！　そういうのはこのトゥアールちゃんの役目だったはずですよ！　お互いのためにもキャラ被かぶりは避けていきましょう!!」

たまに聞き逃のがしかねない気軽さで新語を生み出してるよな、トゥアールは。

「みんな今日の戦いとか、再生怪人の問題で疲れてるんだよ、トゥアー

ル。多少なりとも元気な俺が、ツインテールをケアしないとな」
「どうでもいいですよ再生怪人なんて！　行き当たりばったりで何とかなります!!」
「えええええええええ!?」
　作戦を段階分けまでして脅威を痛感していたのは、ほんの数分前だったぞ!?
「とーにーかーくー！　ネオアルティメギルが本格的に行動するのは明日以降でしょう。皆さん、今日はゆっくり休みましょう！　特に総そう二じ様、ご自身の身体からだも労いたわってください!!」
「ああ、そうしようか」
　俺は最後にもう一度愛あい香かのツインテールをさすろうと、手を伸ばす。
　──その手が、虚むなしく空くうを切った。
「……え、あ、あれ……」
　今、愛香が後あと退ずさった……？
　愛香は不思議そうに自分のツインテールを見つめる。
　もう一度伸ばした俺の手は……今度は、愛香の手で軽く払われてしまった。
「違……え!?　なんで!?」
　当の愛香自身が、自分の行動に戸惑っている。先ほどの俺のツインテールの抱き方が下手だったので、拒絶反応を示しているのかもしれない。
「すまない愛香、俺のツインテール捌さばきが未熟なばかりに、不快な思いを……」
「違うから！　全然大丈夫だから！　いつでもオッケーだから！　かもーんそーじ!!」
　テンションがおかしくなる愛香。

「……いや、今日はゆっくりと休もう。愛香も、ツインテールを休養させてくれ」
「ああ、そんなあ……」
　少し早いが解散しようとなったところで、母さんが皆に提案する。
「みんな、今日はうちでお風ふ呂ろ入る？　狭いけど、裸の総そうちゃんがおまけでついてくるわよ」
「お義か母あ様！　そのようにおまけが本編なコンテンツはみだりに会員数を増やさないでください！　ちなみに私は会員ナンバー〇〇一です!!」
「未み春はるおばさん、簡単にそういうこと言ったら駄目だってば！　今日はちゃんとそーじが無事にお風呂入り終わるまで、あたしが見張ってますから!!」
　頼むから、愛あい香かもトゥアールも今日くらい、徹夜でじゃれ合わずに休んでくれよ……。
　慧え理り那なとイースナも、二人で何やら相談をしている。
「じ、じゃあ私は、総そう二じさんの、バスタオルになる……。え、慧理那は、足拭きマットが、いいんだよね……？」
「それは変身時に経験しましたし、新しい役職に挑戦したいですわ」
「そ、そっか。それなら……ス、スポンジ……？」
「シャンプーはいかがでしょうか？」
　お嬢様が、液体生命の道を歩もうとしている……。
　微ほほ笑えましい親友同士が微笑ましくない会話をしているのが気がかりだが……今はとにかく、ツインテールを休めることが第一だ。
　明日からの戦いは、過酷なものになりそうだからな……。

　　◇

超大部隊・ネオアルティメギルの面々は、古巣である母艦基地へと立ち寄っていた。
おそらくはアルティメギルの長い歴史の中でも、これだけの数の戦士が統合された部隊は存在しなかっただろう。
巨大な移動艇を何隻も格納可能な基地最奥の搬入口が、今やエレメリアンだけで溢あふれかえりそうになっている。
残存部隊の一般兵たちは、何度と新部隊を迎えてきたこの場所で、かつての同僚や隊長と再会を果たす。
「ド、ドラグギルディ様……」
しかしその面に見えるのは、隠しようのない戸惑いだった。
「行く当てもない故ゆえこうして押し寄せてしまったが、もはや我われらはこの侵攻部隊から独立した存在。かつて仲間だったことは忘れ、互いの使命に邁まい進しんせよ」
ドラグギルディは、半ば突き放すように残存部隊の戦士たちに命じる。
「……ドラグギルディ殿は、ああいうお方だ。言葉や行動は厳しくとも、心で部下のことを誰だれよりも思ってくださる。お前たちが気を緩ませぬよう、あえて突き放しているだけのこと」
気落ちする部下たちを慰なぐさめて回るスパロウギルディ。
「スパロウギルディは、貴様亡き後もずっとこの部隊のまとめ役として尽力していた。奴やつにはもう一言二言あっても、罰は当たらんぞ」
よき将しようとして兵たちに愛されたビートルギルディが、ドラグギルディの肩を力強く叩たたく。
「フッ……そうだな」
それを見て、ドラグギルディの顔からは仮初めの険が薄れていく。
名将は名将を知る。実に絵になる揃そろい立ちだ。
そんな二体を、ティラノギルディがじっと見つめている。

「…………」
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの参謀トリケラトップギルディが横からにゅっと顔を出し、無言のティラノギルディに耳打ちした。
「……『あいつらと俺の違いは何なのだ……』とか思っているようだが……残念ながら、ほぼ全部だ」
「おおお思っておらぬわ!!」
　吐いた唾つばは飲めんとばかり、ティラノギルディは肩を怒らせてのっしのっしとドラグギルディに近づいていく。
「ほーん、随分と偉そうではないか、お？　ドラグギルディよ」
「む、ティラノギルディ」
「貴様、どこ部隊出身だ？　俺は死の二菱ダー・イノ・ランヴアスだぞ、首領様直属部隊のな。しかも隊長だ！　はーい、俺の勝ちー!!」
　高校デビューしたヤンキーのような小ちっさいプライドで、ドラグギルディへと因縁をつけるティラノギルディ。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの部下たちは、悲痛な面おも持もちで縋すがり付いた。
「おやめくださいティラノギルディ様!!」
「あなたの部下であることが恥ずかしい!!」
「皆で話し合ったのですが……我われら、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスではなくドラグギルディ部隊所属であったことにするのもありかと……!!」
「なにい!?　隊長の目の前で堂々と経歴詐称の相談を!?」
　頭を抱かかえるティラノギルディの脇わきを、ぬいぐるみサイズに縮小化したユグドラシルギルディが、ちょこちょこと移動していく。
「あ、マーメイドギルディちゃん！」
「お帰り、ユグちゃん」
　搬入口の壁にもたれかかったまま、マーメイドギルディが手を振る。

彼女は、教師ユグドラシルギルディに腐女子の何たるかを叩き込んだ──言わば、「先生の先生」でもある。
「ユグドラシルギルディ、こちらだ」
　まるでマーメイドギルディと会話するのを遮さえぎるように、ビートルギルディは横からユグドラシルギルディに声をかけた。むくれているティラノギルディにも近付き、三角に向き合う。
　アルティメギルの四頂点のうち三頂が揃そろい、語らいに花を咲かせた。
「私たちの部隊は、この世界に来るのは初めてですー！」
「初めてと言えば、私たち三将しようがこうして顔を揃えるなど、まさに初めてのことではないか？　どうせならば神の一剣ゴー・デイア・ソードの将もこの場にいれば、勢揃いだったのだがな」
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長は、同じ直属軍隊長の俺たちでさえ知らんからな。どんな戦士なのやら」
　搬入口の隅で、マーメイドギルディが静かに微ほほ笑えんだ。

　しばしの間、同窓会の雰囲気でほのぼのとした空気が流れる。
　しかし同窓会といえば、格差がつきもの。人望のあるビートルギルディとユグドラシルギルディが引く手数あま多たで傍そばを離れてしまい、気がついたらティラノギルディは軽くぼっちになっていた。所在なくなり、ティラノギルディは不必要に声を荒らげる。
「いつまで和わ気き藹あい々あいと同窓会をしておる！　おいそこの……ラフレシアギルディといったか！　貴様、貴の三葉ノー・ブル・クラブの戦士を整列させよ！　これより、ネオアルティメギルはこの帝王の指揮の元で戦うという結団式を行うぞ‼」
　はぐれ者のレディースたちを与くみしやすしと睨にらんだのか、ラフレシアギルディへと居丈高に命令を下した……のだが。

「あたいらはユグドラシルギルディ先生の生徒チームだ。あんたに下げる頭ァねえな、ティラノギルディさん」
「何をう！　俺に逆らうとひどいぞ!!」
「…………あ？」
「はう！　い、いや、何でもない……」
　女傑のガンつけで身を竦すくませ、すごすごと引き下がるティラノギルディ。
「ぐぬぬ……！　伊だ達てに番バン張ってはおらぬ、この帝王相手になかなかの胆力……!!」
「どのみち私たちは、はぐれ者ですものぉー。他の部隊の人には従えないわぁん」
　被虐属性マゾヒステイツク──ドMのマンドラゴラギルディにまで、正面切って盾たて突かれる始末。
　人望の無さまで完全復活したティラノギルディは、悔しさに歯は噛がみする。
　トリケラトップギルディは、そんな世話の焼ける幼馴染おさななじみの空回りを見て、居たたまれなくなったのだろう。
「ビートルギルディ。こんな不遜な態度だが、ティラノギルディ殿はお前が死した時、一人静かに悲しまれておられたぞ」
　まるでイースナに誰だれも友達がいなかった時のメガ・ネのごとき涙ぐましいフォローで、何とかティラノギルディの心証を良くしようとする。
「そうか……」
　ビートルギルディは、何かを期待するようにそわそわしているティラノギルディを見て、柔和に微ほほ笑えんだ。
「何ッ、終わりか⁉」
　愕がく然ぜんとするティラノギルディを気にせず、ビートルギルディ

は部下たちに檄げきを飛ばす。
「フッ、今は一二月か……いい時期に復活したものだ。美の四心ビー・テイフル・ハート、総員で冬コミ原稿にかかれ！　印刷料金二割増の締切日をデッドラインとする‼」
「「「「はっ‼」」」」
　自分の元いた部屋に久々に帰っていく、美の四心ビー・テイフル・ハートの戦士たち。
「えっ……今から、帝王の結団式……が……」
　昆む虫しに無視されたティラノギルディは、いじけて搬入口の隅で体育座りを始めた。
　それでも往生際悪く、誰だれかが気にしてくれないものかとチラッチラ視線を送ってくるのが面倒臭い。
　残存軍戦士とネオアルティメギルは搬入口を後にし、大ホールへと移動していった。
　格納庫は、潮が引くように静けさを取り戻す。
　残ったのは置き去りにされたティラノギルディと、そしてマーメイドギルディだけだ。
　百合属性ガールズラブと男子愛属性ボーイズラブ──対極の属性を持つ二体が、久方ぶりに顔を合わせる。
「……此こ度たびのこの騒ぎ。貴様の差し金か、マーメイドギルディ」
　先ほどまでのどこか愛あい嬌きようのある語り口とは人変わりしたかのような醒さめた声で、マーメイドギルディを詰問するティラノギルディ。
　体育座りしたままだが、その周囲は闘気で陽炎かげろうのように揺らめいて見えた。
「うふふ。私は科学者としてヴァルキリアギルディちゃんに協力しただけよ。せっかく生き返ったんだし、あなたも新たな命を楽しめばいい

じゃない、ティラノギルディ君」
「またくだらぬことを企たくらんでいるようだが、あまり俺たちを見くびらぬことだ。無論、ツインテイルズもな」
「もちろん。そのどちらも、誰よりも評価しているわよ？　私は」
「俺は確かに言ったぞ。忘れるな」
　ティラノギルディは、マーメイドギルディの研究の功罪を身を以もつて知る数少ない戦士。
　部下たちの前で散々振りまいた失態と裏腹、狂科学者に向けられたその双そう眸ぼうは、油断なく底深い光を留とどめていた。

　大ホールに足を踏み入れたドラグギルディは、感慨深げに天井を見上げた。
　その隣に、寄り添うようにして立つ、かつての参謀。
「この場でドラグギルディ殿が指揮を取られていたのが、まるで昨日のことのようでございますな……」
　スパロウギルディは、未いまだに複雑そうな表情のままだ。
　共に過ごす時間に喜んだ分だけ、別れが辛つらくなる……多くの将しようと隊を見送ってきた老参謀の悲哀が、その背中にありありと溢あふれている。
「スパロウギルディよ。一体、姿の見えぬ部下ものがいた。後で行方を聞きたい」
　すぐにそれが誰だれのことなのかを悟ったのだろう、スパロウギルディが小さな首しゆ肯こうのみで応こたえると、ドラグギルディはマントを翻ひるがえして登壇台へと向かった。
「まずは、我われらが倒されて以後のツインテイルズのデータ、見せてもらいたいのだが」
　データとは、すなわちこの部隊が命を懸けて築いてきた財産。

　戦ってきた戦士たちに敬意を表するように、そう伝えるドラグギルディ。
　戦闘員アルテイロイドたちがモケモケと準備を始める。
「仮面ツインテール……あの白衣の少女が言っていたことだが、ツインテイルズは生来のツインテール属性にもう一つのツインテール属性を合わせることで、あの強きよう靭じんな鎧よろいを稼働させているという。つまり、我のツインテール属性も、あの戦いの後、新たな戦士の礎いしずえになったと見込んだのだ。すなわち、唯一我の知らぬ戦士。テイル、イエローのな」
　さすがは人智勇を兼ね備えた将。切れて欲しくなかった局面で名推理が冴さえ渡り、残存部隊戦士たちは冷や汗をダラダラと流し始めた。
「…………いえ、あの、ドラグギルディ様……テイルイエローの映像は……」
　エレメリアンたちは、ツインテイルズに己の心臓ともいえる属性玉エレメーラオーブを使われることに、嫌悪感を示してはいない。
　自分たちも人間の心を食らう以上、人間が勝者であればそれは当然の権利。
　むしろ、己を打ち負かした戦士に魂たましいが受け継がれていくのは、誉ほまれとさえ思える。
　………………テイルブルーに使われるのが嫌なだけで。
　そうなると、ドラグギルディほどの戦士が自分の魂の行く末を知りたがるのは、当然のことだった。
「ドラグギルディ隊長の魂を受け継いだとあらば、テイルイエローなる戦士の戦いはまっこと勇猛なるものでありましょう！　じっくりと目にするのが楽しみだわ!!」
　ドラグギルディ部隊の斬きり込み隊長・リザドギルディもウッキウキで乗っかるが、周囲の空気がどうもおかしい。

残存軍の兵どころか、ドラグギルディ部隊以外のほぼ全てのネオアルティメギルすら、微妙な表情であさっての方向を向いている。

悲しきは自我乏とぼしき戦闘員アルテイロイド、場の空気を察することができず、言われるがままにツインテイルズの戦闘データを再生してしまった。

画面に、黄色い装そう甲こうをまとった少女が大写しになる。

『ご主人様ぁ――――ん見てくださいまし――――――――――――っ!!』

脱いでいる。あのツインテイルズ、脱いでいる。

豊満な肢し体たいを惜しげもなく満天下に晒さらしている。

雌めす犬いぬじみたとろけ顔でテイルレッドに迫っている。

「…………」

猛将ドラグギルディが言葉を失い立ち尽くす姿を、部下たちは初めて目まの当たりにする。

鳴り物入りで結成された新組織・ネオアルティメギルだが、その行く末は色々と不安を隠せぬものだった。

◇

基地での話し合いの後、観み束つか家の風ふ呂ろ場ばでは、愛あい香かとトゥアールたちの小競り合いが繰り広げられた。

総そう二じが無事に入浴を終え、トゥアールもやっと諦あきらめて基地に帰り、解散した後。

「……ごめんね、そーじ……手を払ったりして……。嫌じゃないのに……」

自宅の洗面所で、愛香は鏡に映った自分を凝視した。

――不意に、鏡に映った自分のツインテールが解ほどけ始める。

条件反射で髪に手を伸ばし、瞬まばたきを繰り返す。

触れた髪も、鏡に映る自分も、変わらずにツインテールだ。愛香は大きく息をついた。

ただの幻覚だろう。ツインテール絡みの白昼夢に襲おそわれるなど、総二のことを注意していられない。

何より、せっかく総二がツインテールを労ねぎらってくれているのに、それを拒こばむなど勿もつ体たいない。

鏡に、自分のツインテールに優しく手を伸ばしてくれる総二が映り──

「ッ────あ、あ……!?」

──その手が、自分のツインテール属性を奪おうとするヴァルキリアギルディに変化した。

震ふるえながら後あと退ずさり、ツインテールを抱きしめる愛香。

総二の手を拒んだのは、不快感からではない。ツインテールに触れられることに、無意識のうちに恐怖を感じ始めているのだ……。

無毛──ツインテールではなくなってしまった自分の幻影と、戦いの中で直面した。

敗北した果ての姿を、ツインテール属性を奪われた自分の未来を見てしまった恐怖。

そして何より──その恐ろしい敵と、再び戦わなければならないという恐怖。

総二が言っていた。愛香のツインテールが……傷ついていると。

戦いの傷痕は、かつてないほどに愛香のツインテールを蝕むしばんでいた──。

第二章　ほつれたツインテール。

　欠伸あくびを噛かみ殺しながら、通学路を歩く。一二月の空気は冷たく、目覚ましに丁ちょうど度いい。
　昨夜ゆうべはネオアルティメギルのことを考えて、ろくに眠れなかった。
　横を歩く愛あい香かやトゥアールも疲れているようだし……今朝は慧え理り那なやイースナも俺の部屋に現れなかったのは、疲れが尾を引いてそれどころじゃなかったのかもしれない。
　俺は、朝風に靡なびく愛香のツインテールに眼まな差ざしを送る。
　いつもの愛香らしくない。ひどく乱れたツインテールだ。
　左右で結び位置が少しずれているし、まとめた髪の量も一目でわかるほどに違う。
　何より、リボンの結びがゆるく、あのままではそのうち解ほどけてしまいそうだ。
　すっげー気になるけど……女の子って、身だしなみの落ち度について男から指摘されたりしたら、恥ずかしいんじゃないかなあ。
　なので、トゥアールに小声で頼んでみる。
「なあトゥアール……お前から伝えてやってくれないか。愛香、ツインテールが解けそうなんだけど……」
「えっ、すみません、よく聞こえなくて……もう一度お願いします！」
　そう言って胸を持ち上げ、俺の顔に近づけてくるトゥアール。耳の位置おかしくないか!?
　仕方ない、指摘はしないでささっと俺が結び直してあげよう。そのた

めには――
「……愛香。抱かせてくれ」
「うん、いいよ…………………………………………はあ!?　ちょ、ええ!?」
　生返事のあと長考に入り、やがて顔を真まっ赤かにする愛香。俺はさらに近寄る。
「大丈夫、今度は嫌な思いをさせない、上う手まく抱くから!!」
　通りがかったクラスメイトの女子たちが白目を剥むき、やがて奇声と喜き声せいを発しながらダッシュしていったのが気がかりだが……ヒートアップしてしまい、それどころではない。
「でも、こんな往来で――学校の子たちも見てるのに！」
「仕方ないだろ、ツインテールを抱いて固定してからじゃないと、また避けるんじゃないかって思って……あ」
　しまった、結局ツインテールが解けかけていることを愛香に悟らせてしまった。
「あ、ああ、あー……うん。うん……」
　あっという間に普通のテンションに戻る愛香。溜ため息いきをつかれてしまった。
　すまない、そうして恥ずかしがられると思ったから、俺も指摘しまいとしたんだが……。
「…………」
　つぶらな瞳ひとみで半笑いを浮かべ、上体で小さなビートを刻むトゥアール。
　愛あい香かもそのビートに合わせて上体を揺らしながら、一気に跳躍。肩車の要領で飛び乗ると、両脚をトゥアールの首に巻き付け、一気に締め付ける。
「何も言ってないのにひどすぎますよこの大怪獣ムッツリンはぎゃあああああああああ!!」

「んなアスキーアートみたいな顔で笑って、何言いたいかわからいでかっ!!」
「いや———愛香さんの下腹部の感触を感じるのはいや————————っ!!」
「下腹部って言うなあ!!」
　野生味溢あふれるギブスによって、首を極限まで絞られるトゥアール。
　愛香はようやく自分のツインテールを手で掬すくうと、
「寝不足で、ちょっと油断してただけよ。ありがとそーじ、気をつけるわ」
　いやに素っ気なくそう言い、緩んでいたリボンを締め直した。

　今までどんな辛つらい戦いがあっても、愛香はツインテールだけは絶対に疎おろそかにしなかった。
　昨夜ゆうべ愛香のツインテールの苦しげな声を聞いたこともあり、俺の不安は徐々に増していく。

　愛香、お前のツインテールは本当に大丈夫なのか——？

◇

　悩んでいるのは総そう二じだけではなかった。
　人間は社会や組織の中で他者との関わり合いに悩まされるが、アルティメギルという組織に所属する以上、エレメリアンもそれは同じだ。
　対処に困る上司、使えない部下、開く同僚との差。様々ある組織内の悩みの中、やはりもっとも面倒なものの一つが、もつれた恋愛関係ではないだろうか。

　エレメリアンは戦士だ。最後の瞬間、思いのたけをぶちまけて散ることも少なくない。
　そんな彼らが生き返ってしまったその時。もつれた関係やぶちまけた感情も、もれなくセットで復活してしまうわけだが──。

　久しく主あるじを失っていた、基地内にある唯一の和室──武道場。
　中央には、三人の戦士が正座している。
　そのうちの二体は厳おごそかな雰囲気で押し黙り、彼らと向かい合ったもう一体は、空気に戸惑って視線を彷徨さまよわせていた。
　多くの門下生を抱かかえ、男おとこの娘こという名の武士道に邁まい進しんした侍、アラクネギルディ。
　そして巨大な殻を背負ったカタツムリ型のエレメリアン、性転換属性トランスセクシヤルのスネイルギルディ。
　押し黙る彼らと向かい合って戸惑い気味に視線を移ろわせるのは、ミミズじみたウネウネした外見がキュートな、美の四心ビー・テイフル・ハートのアイドル。ワームギルディだ。
　アラクネギルディに大事な話があると呼ばれやって来たワームギルディだが、当の本人はいつまで待っても一言も発しようとしない。
「あ、あのぅ……」
　沈黙に耐えきれなくなったのか、ワームギルディがおずおずと質問しようとした瞬間。
　アラクネギルディは、居合いもかくやという神速で起立した。
「ワームギルディ！」
「は、はい！」
「──拙者 ラブ お主……！　で候そうろう!!」
　気の張り詰めた道場で、不器用なアイラブユーが炸さく裂れつする。
「え、えええええ!?　師範せんせいが、僕を!?」

　だが、仁じん篤あつきサムライは、己が心の裡うちを明かすだけでは是としなかった。
「そしてこのスネイルギルディも……お主のことを想っておる」
「はぇぇぇっ⁉」
　驚きの許容量を超え、ウネウネボヨンボヨンと上体をパンチングマシンのように激しく揺らすワームギルディ。
「厳しきお方だ。自分で打ち明けることすら許していただけぬとは」
　観念して嘆息するスネイルギルディに、アラクネギルディは頭を低くした。
「……すまぬ……」
「いいえ。師範が言ってくださらなんだら、私はいつまでもこの想いを胸に秘めたままだったでしょう……」
　不器用な思いやりが生んだすれ違いだった。
　アラクネギルディもスネイルギルディも、ワームギルディのことを誰だれよりも想いながら、大切にするがゆえに、ついに本人に思いを打ち明けられず仕舞いだった。
　しかしこうして新たな生命を得たことで、ようやく生前の心残りは消え去ったのだ。

　ちなみに、三体とも男である。

「……まあ、そういうことだ、ワームギルディ。……師範と幸せにな」
　未練は晴れたと、疾とく立ち去ろうとするスネイルギルディ。潔いさぎよく身を引こうとする彼の肩を掴つかんで止めたのは、アラクネギルディだった。
「うつけ者め。拙者に今一度慚ざん愧きを懐いだかせるつもりでござるか」

「師範……」
　逃げるな、向き合えと、その精せい悍かんな眼まな差ざしが語っている。
「我われらはこれまでどおりでよい。ただし、もう隠し事や遠えん慮りよは無しでござるよ？」
　これぞ武士の一いち分ぶん。
　師範の思いやりに、スネイルギルディの頬ほおを男の涙が伝う。
「僕も！　僕も二人のこと、大好きです……!!」
　感極まったワームギルディが、ウィンウィンと上体をバイブレーションさせた。
　その時、入り口の戸板が外れ、何体ものエレメリアンたちが将棋倒しになだれ込んできた。
　昆虫のエレメリアンたち……美の四心ビー・テイフル・ハート、アラクネギルディ門下の戦士たちだ。
　覗のぞき見が明るみになったことで気恥ずかしそうに立ち上がり、居直って堂々と祝いの言葉を贈った。
「やあやあやあ、御三方に祝福あれ！　しかし我らも皆、ワームギルディに想いを寄せているのは同じなのですがな!!」
「お前たち……」
　さしものアラクネギルディも、その目にうっすらと光るものが。
　みんな、ワームギルディが大好きなのだ。それでいいではないか──。

　ちなみに、全員男である。
　恐るべき破壊力。
　美の四心ビー・テイフル・ハートアラクネギルディ門下名物、ワームギルディの逆ハーレム──目撃しただけでダークグラスパーが絶命しかけただけのことはある。

「うむ……うむ……!!」
　入り口でその光景を見ながら何度も頷うなずき、号泣しているのはカブトムシ型のエレメリアン。美の四心ビー・テイフル・ハート隊長、ビートルギルディだ。
「最高だね、兄さん……最高だね!!」
　そして、クワガタムシ型のエレメリアンにして美の四心ビー・テイフル・ハートの頭脳ブレーン、スタッグギルディもいる。彼に至っては、頭の二本角づのをチョッキンチョッキンさせて喜びを表している。
　恋愛属性ラブの彼らは、コイバナが大好きなのだ。
　高度すぎて、ゆるいスイーツ恋愛とは一線を画した次元にそびえているコイバナだが。
　しかし恋愛という事象を尊たつとぶ純粋な属性である彼らとは異なり、よりピンポイントに、より業深き魔界に踏み入った属性を宿すエレメリアンがいた。
　ビートルギルディ、スタッグギルディのさらに後ろでは、妖あやしく不気味な含み笑いが木こ霊だましている。
「腐腐腐……」
　エレメリアンのかけ算の始祖、マーメイドギルディだ。
　男子愛属性ボーイズラブの彼女にとって、アラクネギルディたちのロマンスは剛速球のストレート。
　そして当然、彼女の影響でかけ算が大好きになった、貴の三葉ノー・ブル・クラブの女傑たちも勢揃ぞろいし、廊下は噎むせ返るような腐の香りに侵されていた。
　まさしく、デバガメの数じゆ珠ずつなぎだ。
「嬉うれしいわユグちゃん、こんな絶景をあなたたちと一緒に見られるなんて……」
「わたしもですー。はぁん、いいですねえ、師弟三角関係!!」

マーメイドギルディとユグドラシルギルディ。
ベスト腐レンズの彼女たちは思いを一つにし、基地そのものを消し飛ばしかねないエネルギーを溢あふれさせている。
廊下を通りかかった残存部隊のエレメリアンたちは、腐女子たちの邪悪なオーラに当てられてぎょっとした。
「この妖あやしすぎる挙動の女史たちは一体!?」
「お構いなく――」
率先して構うには恐ろしすぎる集まりなので、お言葉に甘えてお構わないことにする。
「何という恐るべき化学反応……。こ、これが四し頂ちよう軍ぐん、貴の三葉ノー・ブル・クラブ……!!」

「……しかし……」
残存部隊のエレメリアンたちは、遠巻きに見えるその光景に寂しげな表情を浮かべた。
「この雰囲気。今までの日常が、帰ってきたようだな……」
同窓会は、楽しいものだ。
だが同時に、二度と返らぬ青春の日々と向き合う儀式でもある。
言葉にしないだけで、皆、胸に去来するものは同じだったのかもしれない。
いつか醒さめる夢を現実で見ているような、この儚はかなさは――。

◇

放課後、教室を出て部室に向かう俺と愛あい香か、トゥアール。
部活棟への廊下で慧え理り那な、桜さくら川がわ先生と合流し、昨日

のことについて話す。
「お嬢様から聞いたぞ。昨日は大変だったらしいな」
　桜川先生が心配そうに俺の肩を叩たたいた。俺は違和感を感じ、視線を肩から下へ落とす。
「そうですね……肩を叩かれたのにブレザーのポケットに婚こん姻いん届とどけが入れられてるのはどういうマジックなんですかね……」
　コップの底を硬貨が突き抜けるマジックを見たような気分になる。
「観み束つか、達観したようなリアクションだが、よく確認しろ。ブレザーのポケットは両側、胸ポケットとズボンの腰ポケットにも左右入れてある。合計五か所、婚こん姻いん届とどけのファイブカードだ」
「ぎゃあああああああああああああああホントだあああああああああああああああああ!!」
　意識すらさせぬ刹せつ那なの五連撃。西部劇の早撃ちガンマンですらこうはいかない。
　この人はこの人で、どこまで進化していけば気が済むんだ……！
　愛あい香かとトゥアールに抗議されるも、さらりと躱かわす桜さくら川がわ先生。
　賑にぎ々にぎしく部室に到着し、ドアを開けると、長机にはすでに一人座っていた。
「遅かったではないか。暇ひますぎてエロゲーを一本コンプしてしもうたわ」
　ノートＰＣを閉じてぼやいたのは、善沙闇子アイドル姿のイースナだ。
　壁に貼ってある、イースナ専用スケジュール表を確認する。
「あれ？　夜から生放送に出るんじゃなかったのか？」
「これから何があるかわからんからな。今日、事務所や局と話し合って、今月分のスケジュールを見直した。ようするに、仕事を抑えめに変

更してきたのじゃ」

「そんな、そこまでしなくても……」

　彼女自身が決断し、実行したのだ。俺が言っても仕方のないことだが……。

「それに、メガ・ネが療養メンテナンス中じゃからな。今や、メガネドン抜きでできる仕事は限られる」

　アイドルの仕事と両立させるのが条件で、ツインテイルズに加入したイースナ。

　アルティメギル時代から大切にしてきた仕事を減らしてまで、戦いに備えるなんて……。

「その代わり、中旬にある大きなライブだけは、絶対にお流れにはできん！　何せ、その日は慧え理り那なを初めて招待するのじゃからな!!」

「ええ。その日はわたくしの誕生日が近いので、と言ってくださって……」

　慧理那が嬉うれしそうに答える。俺も自分で行ったり、何度か招待されたこともある善いい沙すな闇あん子このライブだが、とうとう慧理那が友達として招待されるようになったんだな……。感慨深い。

「友達の誕生日をライブで祝う！　アイドルであるわらわにしかできんことじゃ!!」

「へえー。イースナにしては気が利いていますね」

　言葉こそ素っ気ないが、トゥアールが浮かべた微かすかな笑みには、お姉さんのような優しさが滲にじみ出ていた。愛香や桜川先生も、嬉しそうに見守っている。

「慧理那以外も全員招待するが、エレメリアンが現れた時は、わらわたち以外で頼むぞ!!」

「ああ、もちろんさ」

　スケジュールカレンダーでも、そのライブは花丸で強調されていた。

　目め眩まいがするような戦況の中でささやかな幸せがあることは、勇気が湧いてくる。
「では皆さん、今日はネオアルティメギルの対策について会議しましょう」
　トゥアールが唐突にホワイトボードを押してきて、長机の前に設置した。
　昨日は再生怪人なんてどうでもいい、なんて嘯うそぶいていたのに。
　何だかんだ言って、イースナのことを大切に思っているトゥアールだ。彼女がアイドル仕事を抑えてまで今後を考えていたことに、触発されたんだろう。
「今まで倒した変質者どもが復活したとは聞いたが……そんな気軽に死んだり生き返ったりできる奴やつらだったのか、エレメリアンっていうのは」
　桜さくら川がわ先生の疑問ももっともだ。俺は簡単に説明する。
「あいつらの中に一体だけ、完全復活能力を持ってる奴がいたんです。そいつの能力を、どうにかして取り込んだのが、今回の敵で……」
「なるほど、別の奴の力をなあ……。津つ辺べが戦いでよく使ってる、属性玉変換機構エレメリーシヨンってやつみたいなものだな」
「□□□□□□」
　桜川先生の何気ない発言に、トゥアールが表情を硬くしたように見えた。
「わらわが処刑人時代に倒した数あま多たのエレメリアンは、あの時集結した中にはいなかった。ではこの世界で倒れたエレメリアンだけを蘇よみがえらせたのかと思えば、わざわざ双子姫の異世界に出向いて貴の三葉ノー・ブル・クラブを復活させてきておる。つまり……」
「……『ツインテイルズが倒した』エレメリアンだけを、徹底して復活させたということですのね」

「ヴァルキリアギルディの狙ねらいは、ツインテイルズの心が折れること……じゃからのう」
　重い口調で結論づけるイースナ。それを聞いて、愛あい香かが息を呑のむ。
「ネオアルティメギルとは常に、余力を残して戦うべきですね。連戦が当たり前になるかもしれませんから……」
　トゥアールが液晶表示に切り替えたホワイトボードには、ネオアルティメギルの構成員が表示されている。けどアイコンが多すぎて、一体一体を識別できない有様だ。それだけ無数にいるんだよな……。

　トゥアールのおっぱい
　　　　　トゥアールのおっぱい
　　　　　　　　トゥアールのおっぱい

　エレメリアンの出現アラートが、トゥアールのノートＰＣから鳴り響く。
「早速現れたか……よし、出撃しよう！」
「お待ちください総そう二じ様……皆さんも」
　転送ロッカーを通って基地に行こうとした俺たちは、トゥアールに呼び止められた。
「これからの出撃について、もう一つ提案があります」

　　◇

　放課後のとある高校のグラウンドに現れた、数体のエレメリアン、そして戦闘員アルティロイドたち。
　部活中の体操服の女子たちは慌あわてて走り出すが、戦闘員アルテイ

ロイドたちが包囲してしまう。
「ここが、いいブルマを採掘できる穴場なのだ！」
　行きつけの飲み屋を友人に紹介するようなノリで豪笑するのは──タトルギルディ。
　そして、フォクスギルディ、ラビットギルディが続く。
　彼らはテイルレッドが初期に戦った、ドラグギルディ部隊のエレメリアンたちだ。
「フフフ、運動するために髪をアップにするリボンもよいものです……」
「……ウサ耳は？」
「ううむ、それはまた別に探そう」
　今時珍しくブルマ着用のこの学校の女生徒たちは、タトルギルディのターゲットとなってしまったのだ。
　瞬間──黒い旋せん風ぷうが吹き荒れ、戦闘員アルテイロイドたちが次々と空に打ち上げられていく。
「モケーッ!?」
「モケケーッ!!」
　死神の鎌かま・ダークネスグレイブを翻ひるがえし立つは、黒衣の戦士──テイルブラック。
「えっ……？　テイルブラック……だけ？」
　助けられた女生徒たちは周囲にテイルレッドの姿を捜すも、テイルブラック一人だけだ。
「悪かったのう！　とりあえず避難せい!!」
　きゃいきゃい姦かしましく逃げていく女学生を見て、溜ため息いきをつくブラック。
「カメとウサギとキツネが雁がん首くび揃そろえて、何の悪巧みじゃ。童話のようなメルヘンな組み合わせをしおって！」

「一人だけか？　他のツインテイルズはどうした」
　メルヘンな亀が質問を返す。
「その物言いをつけるには、貴様らでは実力不足じゃ。自惚うぬぼれるでない」
「ぬっ……」
　気色ばむタトルギルディを制し、フォクスギルディが進み出た。
「お会いするのは初めてですね、アルティメギル処刑人、首領直属戦士ダークグラスパー様。今は、テイルブラックと名乗られているそうですが」
「わらわもお前のことは聞いておったぞ。初めてテイルレッドを追いつめ、その結果テイルブルーという蛮族を覚かく醒せいさせてしまった大罪人──髪紐属性リボンのフォクスギルディ」
　恭うやうやしい礼で応こたえるフォクスギルディ。
「そして体操服属性ブルマのタトルギルディ、兎耳属性ラビツトのラビットギルディじゃな」
「私のような末端兵のことまで記憶に留とどめていただき、光栄の至り！」
　ラビットギルディはウサ耳じみた頭部パーツをピコピコと揺らし、喜びを表現する。
「先陣ハナは俺が切るぞ。せっかく蘇よみがえった命だ、この世界に再びブルマを再興してみせる!!」
　世界の大半の男性諸氏の願いを背負ったかのように、タトルギルディが拳こぶしと拳を打ち合わせて闘志を燃やす。
「いいや、次鋒で我慢しておけ」
　ブラックは、神眼鏡ゴツドめがねのレンズを不敵に光らせた。
「何!?」
　不意に足を止めたタトルギルディの後ろで、ラビットギルディが全身

から放電し始めた。
「ウ、ウ、ウサ――――――――――――ッ!!」
　直後、断末魔の声とともに爆発が巻き起こる。
「まさにウサギのごとくか弱き奴やつよ。わらわが腰からダークネスウィップを抜き、打ち、そして戻した──その一連の動作が、何一つ見えていなかったとは」
　倒されたことすらも相手に気づかせぬ、高速の一撃。ブラックの本領発揮だ。
「……面白い！　受けて立つぞテイルブラック!!」
　タトルギルディはブラックに背を向け、暗緑色の鈍い光彩を放つ甲羅を見せつけた。
「テイルレッドとの戦いではその可か愛わいさに見とれてあっさり敗れてしまったが、これが俺の本来の戦い方！　背にした鉄壁の盾たてを恃たのむ、無敵の後の先よ!!」
　辛抱強く我慢して、最後には勝利を掴つかむ。先ほど喩たとえに出た、童話の亀と同じだ。
　ブラックは数瞬の思案の後、神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げる。
　グラスギアが解ほどけて全身が黒い旋せん風ぷうに包まれ、新たな衣装が現れた。
　上は普段着の群ぐん青じよう色の長袖そでジャージ、そして下は──葡え萄び茶ちや色のブルマだった。
　ブルマからすらっと伸びる未成熟な脚が、背徳的な美しさを放っている。
「甲羅に身を隠していてよいのか？　ほれ、貴様の大好きなブルマがここにあるぞ」
「お……おおおお……上ジャージ下ブルマ！　再興どころかブルマの爆

発隆盛ルネツサンスが起こっているではないか!!」
　タトルギルディは歓喜のあまりあっさりと防御態勢を解き、その亀かめ頭あたまをブラックのブルマへと急接近させた。
「乙おと女めのお股をガン見するでないわ!!」
「ウアー」
　神眼鏡ゴツドめがねから放たれた光輪で一いつ閃せん。打ち上げ花火のように、真まっ直すぐ空に飛んでいく。
　戦術的優位を得ても趣味嗜し好こうには逆らえない、エレメリアンの本能が徒あだとなった。
　打ち上げ花火は爆はぜるが道理。タトルギルディは空中でもう一度ブラックのブルマへ視線を落とすと、満足げな表情で爆発した。
　過ちは繰り返される。いや、この場合童話には童話を──北風と太陽作戦を敢行したブラックが一枚上手だったと言うべきか。
「……やはりどちらも属性玉エレメーラオーブが出現せぬ。貧乳が二度目に倒したカンガギルディと同じじゃ」
　拍手が聞こえ、振り返るブラック。
　フォクスギルディが、慇いん懃ぎん無礼に今一度の礼をする。
「見事な幻術です。処刑人の手並み、しかと拝見致しました」
「たわけ、幻術や幻覚ではない、ただのお着替えじゃ。アイドルならば必須の嗜たしなみよ」
　変身したまま衣装を着替えるのは、ブラックの得意技。
　装いをグラスギアに戻すと、最後の一体であるフォクスギルディと対たい峙じした。
「では私は、真なる幻覚をお見せしましょう。揺れるリボンで心に癒しを……めくるめくリボンの世界が貴女あなたを待っています」
　ブラックの周囲を、いつの間にかリボンが旋回していた。
　気け怠だるげに一いち瞥べつするブラックの傍そばを離れ、フォクス

ギルディの元へと還かえるリボン。
　それは、磁性流体のようにボコボコと波打ち、変形を始めた。
「結晶せよ──我わが愛！」
　頭が、胴体が、手足が生え……リボンはついに、人型へと変貌する。
　笑顔でくりんとした瞳ひとみを眼鏡めがねの奥に光らせる、等身大テイルブラックフィギュアが完成していた。
　テイルレッドを恐怖のどん底に叩たたき落とした悪夢。
　リボンを対戦相手の形に模倣する、フォクスギルディの奥義だ。
「さあ、私と踊りましょうテイルブラック──」
　フィギュアの手を取り、ダンスを始めるフォクスギルディ。
　彼が見つめる愛らしいブラックフィギュアは──脳天から真っ二つに断ち割れ、左右に裂さけてしまった。
「ひえええええええええええええええええ!?」
「このにせイースナちゃんめが!!」
　絶叫するフォクスギルディを、ジト目で睨にらむブラック。ダークネスグレイブを旋回させ、肩に担かつぐ。
「何ということを……あなた自身を模した人形ですよ!?」
　ブラックは決め顔で横ピースをし、
「本物のわらわは、こう！　じゃ！　一億倍は可か愛わいいであろう！　修正せねば自撮り画像もアップできぬ、その辺の木っ端アイドルと一緒にするでない!!」
「えええええええええええええええ!?」
　恐るべし、生き馬の目を抜く修羅界・アイドルの頂点に立つ少女。
　写真より、映像より、人形より、本物の自分にこそ絶対の自信を持つのだ。
「では……これならばどうです!!」
　フォクスギルディは諦あきらめない。再びリボンを空中でこね始める

と、今度はかつてと同じ、テイルレッドのフィギュアができ上がった。
　すでに一度作り出したフィギュアは、再生産が可能のようだ。
「あなたはテイルレッドを愛していると聞きました……自分の人形はできても、テイルレッドの人形には手出しできないでしょう!!」
「なるほど……確かに貧乳ならお構いなしじゃろうが、わらわは清らかな恋する乙おと女め。そんな非道な真ま似ねはできぬな」
　真っ二つにされて地面を転がるブラック人形、物言わぬその笑顔が恨めしげに陰って見えるのは、角度のもたらす錯覚だろうか。
「さあ、もはやあなたは目を逸そらせません……私とテイルレッドが仲良くお風ふ呂ろに入る様を、指を咥くわえて見ていなさい!!」
　レッド人形の手を取り、妖あやしげに微ほほ笑えむフォクスギルディ。
　ブラックの目には確かに、強大な妄想力によって具現化した、お風呂上がりのレッドちゃん……バスタオルの代わりにリボンを巻く、愛らしい少女が映ったのだが。
「フッ……ハハハハハハハ！　テイルレッドを恐怖させた妄想攻撃、どれほどのものかと思えば、この生温さ！」
　それを見てブラックは、眼鏡めがねを揺らして高笑いを上げる。
「それしきの妄想！　わらわは自主的に毎日欠かさずしておるわ!!」
「なっ……この桃源郷な妄想を毎日!?　あまりにも自分に甘すぎるのでは!?」
「たわけ、何が悪いか！　女の子が甘い物大好きなのは、全異世界共通じゃ!!」
　ブラックの方を向き、しょんぼりする妄想レッド。入念にリボンが巻かれた胸や股の部分を存分に目に焼き付け、ブラックは確信する。
「悲しきかな、非モテの空想！　貴様はただリボンが好きだから裸リボンをしたわけではない！　地上波アニメで描写できる程度のお色気しか

知らぬゆえ、リボンで隠さねば女の裸を完全に具現化できんのじゃ!!」
「ううっ！」
　フォクスギルディの精神が乱れたためか、テイルレッドのフィギュアはほつれ、次第にリボンの形へと戻っていった。
「かく言うわらわも、他の女の裸などエロゲーでしか見たことがなかったが……今は、頼もしき仲間たちがいる！　モザイクのその先まで見せっこしあえる、友達がいるのじゃ!!」
　友達の定義がいささか不穏だが、テイルブラックの眼鏡には一点の曇りもない。
「み、見せっこ……それでは、リボンの結び合いっこも……!!」
「無論！　わらわはツインテイルズになり、そ……テイルレッドに髪をリボンで結んでもらう幸せを知った。貴様の邪よこしまなリボンなどに縛られはせぬ!!」
「羨うらやま……い、いや！　私はまだ負けていません！　さらなる幻覚で、あなたの上をいってみせます!!」
「残念じゃが━貴様はとっくの昔に、わらわの幻覚カオシツクインフィニツトに取り込まれておる」
　フォクスギルディの周囲の空間が、∞型に歪ゆがむ。
「死に装束ならぬ死に髪紐リボンじゃ。せめて愛し求めた光景に包まれて、安らかに旅立て!!」
「はああ！　こ、これは!!」
　暗黒に包まれるフォクスギルディは、呻うめき声のようなむさ苦しい呼び声を聞いた。
　天地おぼろな闇やみの中で、むくつけき筋肉の塊かたまりが像を結ぶ。
「フォクスギルディよ」
「フフフ……フォクスギルディ」

「このリボンどうかのう」
　幻影のエレメリアンたちが頬ほおを赤らめ、頭に、身体からだにリボンを巻いてフォクスギルディへとにじり寄っていく。
「ぐああああああああああああああああああああああああ全く安らかではありません————————っ!!」
　属性力エレメーラの深しん淵に呑のみ込まれ、消えていくフォクスギルディ。
　同じ妄想でも、常に進化を止めないブラックが敗北する道理はなかったのだ。
　完かん璧ぺきに消滅した暗黒空間から視線を切り、ブラックは思案顔になる。
「……焼き鳥の時と同じか。封印しても異空間そのものから消えてしまえば、無意味じゃ」
　フォクスギルディは敗北を受け容いれた瞬間、一度完全に消滅してしまった。
　無限に再生する相手なら異空間に閉じこめてしまえばよい、とはいかないということだ。
　快勝とはいえ、先は長い。ブラックは気を引き締め直すと、戦場を後にした。

◇

　地下基地のモニターに、ブラックの快勝が映し出される。
　さすがはブラック、俺が苦戦したフォクスギルディも含めて、瞬く間に三体のエレメリアンを打ち倒してしまった。

　出撃しようとした俺たちはトゥアールに呼び止められ、これからの作

戦を提案された。
『今までのように、出撃可能な全メンバーで戦闘するのは、しばらく控えるべきです。彼ひ我がの戦力差は歴然……今一番憂慮すべきは、ネオアルティメギルに同時多発攻撃が有効だと確信されてしまうことですから』
『そうだな……』
　同時侵攻。それは、俺も一番危き惧ぐしていることだ。
『あちらが純粋に数を恃たのむなら、こちらはシルバー含めたった五人でも、その全てが一騎当千。これを印象づけるのが大事です』
　全員がその意見に納得。今回は、イースナが一人で出撃したというわけだ。

「やるじゃないイースナ、フィギュアに惑わされないで戦えてた」
　テイルレッドのフィギュアも躊ちゆう躇ちよせず殺やるじゃない、でお馴な染じみの愛あい香かがブラックの思い切りのよさを賞賛する。フォクスギルディ戦の先達だもんな……。
　その間にもトゥアールは戦闘データを分析。サブモニターに、前回のフォクスギルディと、今回のフォクスギルディが二分割で表示され、不等号で結ばれた。
「再生エレメリアンの個別反応は全て、以前戦った時とは別物です。事前にどのエレメリアンが現れたかを調べ、アーカイブに照会して対策を調べてから出撃するのは無理ですね」
「問題ないさ。誰だれと面合わせしたって、一度は倒してる奴やつらだからな」
「幹部級エレメリアンだけなら、二〇体に満たない数です。それが現れた時だけ、こちらも複数人で戦闘。あとは各個撃破──まずは、このルーチンを守りましょう」

「了解ですわ!!」
　ブラックの完勝を見てはしゃいでいた慧え理り那なも、元気よく賛同する。
　今日のブラックの戦いで、トゥアールは他にもいくつかの情報を得ていた。
　再生怪人は記憶だけではない、ツインテイルズとの対戦経験も引き継いでいること。
　三体が三体とも倒されたままなことから、フェニックスギルディと違い、瞬時に再生するのは不可能だということ。これは特にありがたい情報だ。
　そしてエレメリアンの肉体である活性体シルエツトを構成するための核コア、属性玉エレメーラオーブが存在しないこと。
「倒しても属性玉エレメーラオーブが出現しない……つまり核コアが無い状態な今の彼らは、術者であるヴァルキリアギルディの力無くしては実体を維持できないはずです。やはり現状を打破する鍵かぎは、いかにして〝死して尚変態ヴアルハラ〟の起点となっているヴァルキリアギルディをもう一度前線に引っ張り出すかですね」
　トリケラトップギルディの能力で、愛香が過去に飛ばされた時の打開策と同じだな。
「…………」
　愛香が表情を昏くらくしている。過去に飛ばされた時のことを思い出したからか？
　いや、ヴァルキリアギルディと聞く度たびに反応しているように思えるが……考え過ぎか。
　ともあれトゥアールは、どれだけ敵の規模が大きくなろうと、詰まるところは今までの戦闘と根本的な打開策は同じだと熱弁する。わかりやすくていい。

　ただ迎撃するだけではない。こうやって情報を集め、対策を立て……いずれ必ず、こちらから打って出てみせるぞ。

　　◇

　仄ほの暗い静寂の中で、鳳凰の戦士・フェニックスギルディは目を覚ました。
「くっ……」
　無意識の身み動じろぎは、金属の擦こすれる音とともに阻まれた。両手首に枷かせを填はめられ、伸びた鎖は天井に繋つながっている。足が地面につかないよう、宙吊づりにされていた。
　自由になる首を動かして辺りを確認すると、果てなき広大な闇やみが広がっている。
　あれからどれほどの時間が経たったのか……意識の潰ついえた瞬間まで、記憶を溯さかのぼる。

　テイルレッドとの再戦を繰り広げたフェニックスギルディだったが、ドラグギルディの姿をした乱入者により、勝負はお流れになった。その後のことだ。
　ドラグギルディを追う途中で、人間世界で会うはずのないエレメリアンと遭遇した。
　アルティメギルの科学者、マーメイドギルディだ。
　そしてその時、マーメイドギルディの隣にある知己の姿を見て油断し、そのエレメリアンが不意に放った攻撃をまともに受けてしまった。記憶は、そこで途切れている。

「おはよ、フェニックスギルディ君」

「……てめえ……」
　闇から溶け出すように、マーメイドギルディが現れる。
　しかも先の苦い記憶の再現のように、隣に知己──スワンギルディを伴って。
「おい、スワンギルディ!!」
　フェニックスギルディは懸命に呼びかけるが、スワンギルディはまるで無反応だ。
　いくら不意打ちでも、自分を倒すほどの力を今のスワンギルディが発揮できるはずがない。
　魂たましいが抜けたように虚うつろな目をしていることといい、マーメイドギルディに何らかの不埒を施ほどこされのだろう。
「スワンギルディに何をしやがった……！」
「もうすぐドラグギルディ君に会えるって教えてあげたの。そしたら彼、今の未熟な自分が会って大丈夫かな、って不安そうだったから……私が協力して強力にしてあげたのよ♪」
「協力!?　実験の間違いだろ、ええ!?」
　顔見せだけが目的だったのか、またすぐ影に溶け込むように消えていくスワンギルディ。
　完全にマーメイドギルディの支配下に置かれてしまっているようだ。
「制裁のつもりかよ。アルティメギルを抜けて、修行だけしてるあいつに……!!」
「そんな、私は処刑人じゃないんだから。野良エレメリアンっていうの？　フェニックスギルディ君もスワンギルディ君も、面白い生態だなあって思って、声をかけただけよ」
　この科学者とまともな会話にならないのは、フェニックスギルディも散々思い知っている。
「ふん……ぬっ……!!」

　さっさとこの忌いま忌ましい拘束を脱してやろうと腕に力を込めるが、鎖が放電するだけでビクともしない。
「ごめんね、それは特別製よ。今はあなたにおとなしくしていてもらいたいから」
「ヘッ、冗談じゃねえ。こんなモン、フルパワーでブチ砕いてやる！」
　フェニックスギルディの身体からだが、炎の繭まゆに包まれる。
　灼しやく熱ねつを吹き散らして闇やみを斬きり裂さき、姿を現したのは━煌こう々こうと煌きらめくポニーテールをたなびかせる、白磁の裸身だった。



強きよう靭じんな怪人ではなく、この可か憐れんな少女・結いわ翼ばね唯ゆ乃のこそが、フェニックスギルディの最強の姿なのだ。
「とっ……おお!?」
予想に反して頑強な拘束に遮さえぎられ、唯乃の反撃はただ身をよじるだけで終わった。
反動で一糸纏わぬ胸が、腰が、闇の中で弾む。
「お生あい憎にく様……その枷かせは、力を加えられれば加えられるほど硬度を増すわ。鉄を打って鍛きたえるようなものね」
「何ィ……!?」
アルティメギル首領の封印から脱出したフェニックスギルディでさえ翻ほん弄ろうされる、恐るべき拘束……ただの手て枷かせがもはや、強固な結界だ。
「とうとう見せてくれたわね、あなたの最終闘体……真のポニーテールに到達した姿」
マーメイドギルディの細指が、唯ゆ乃のの頬ほおに触れる。
「きれい……。それが人間の女の子の身体からだなのね」
しなやかな首を、すっきりと浮き出た鎖骨を、程よく豊かな胸を、均整の取れた腹から腰を……羨うらやむようにそっと、指でなぞっていく。
総そう二じに身体を触れられた時とは真逆に不快感に襲おそわれ、唯乃は自由になる足でマーメイドギルディを蹴け飛ばした。
「おいおい、腐女子が女見てうっとりするなんざ、笑い話にもなんねえぞ!!」
「腐女子わたしがうっとりするぐらい、あなたのその姿が似合っているのよ。ただそうね、服は着た方がいいと思うわ」
鼻白みながらも、裸のままだったことに今さら気づき、炎のドレスを身にまとう唯乃。

「私もなってみたいわね……人間に」
「俺様は人間になりたかったんじゃねえ、ポニーテールになりたかったんだよ。人間の身体そのものにそこまで憧あこがれるなんて、てめえ本当にエレメリアンか!?」
「何にでもなりたいだけよ」
　唯乃は、背せ筋すじを昇る悪お寒かんに身を硬くした。
「私の属性は男子愛属性ボーイズラブ……エレメリアンの生来の特性として、ツインテールへの愛もある。けど……たった二つ！　少ないわ！　私は色々な属性を味わいたい……もっと多くの欲望をこの身に宿したい!!」
　科学者は、自らの好奇心を満たすためにあらゆる努力を惜しまない生物。フェニックスギルディは、親友ペガサスギルディを見てそれを思い知っている。
　しかしこのエレメリアンは……マーメイドギルディは、好奇心が底知れぬ欲望に転化され、それそのものに支配されているかのようだ。
「まさかてめえ……俺様やヴァルキリアギルディを騙だまくらかして、全エレメリアンを復活させやがった目的は……!!」
「騙すなんて人聞きが悪いわ。私はちゃんと協力の対価を支払っている。あなたには首領の間への鍵かぎ。ヴァルちゃんには……あの子がラブラブな首領を絶対に守り切れる戦力を、ね」
　自分たちの関係は、あくまで対等だと断じる科学者。
「対等だ？　その戦力は結局、最後にはてめえの欲望とやらの糧かてになるんだろうが!!」
「あまり怒らないでよ。私、フェニックスギルディ君のこと好きよ。だから、私の秘めた欲望こころを打ち明けた。あなたが初めてなのよ？」
「へん、いい迷惑だぜ！」
「しばらくじっとしててね♪　囚われのお姫様をやるのは、慣れてるで

しょ？」
　マーメイドギルディが去り、唯ゆ乃のは、薄暗い空間に一人残される。
　屈辱的な挑発に歯は噛がみしながらも、唯乃は闇やみの中で精神を集中し始めた。
　あの科学者に、この大きな借りを返してやるために。

　　◇

　ブラックの戦闘から明けて翌日。仮装属性コスプレのシケーダギルディとモスキートギルディなど、数体の再生エレメリアンが出現。今度はイエローが出撃した。
　地下基地では俺と愛あい香か、トゥアール、桜さくら川がわ先生がそれを見守る。
『ほひっ……シケーダギルディ君、あれ……』
『ひいっ！　テ、テイルイエロー!!』
　イエローの姿を認め、身を縮こまらせて怯おびえるエレメリアンたち。
　……そうか、完全再生した怪人って、生前のトラウマも持ち越しスタートになるわけか。
　そうなると、ブルーにやられた連中はもっと心を病んでるかもしれないな……。
『くそう、俺たちは冬コミに向けて新たな衣装作りに忙しいというのに!!』
『ふゆこみ？　まあ、冬にもこみけがありますのね！　わたくしも行きますわ!!』
『また来るつもりか貴様!?　コミケは紳士の社交場、痴ち女じよの出る

幕などないわ!!』
　怪人がイベントマナーについて、生徒会長を務める女の子に語っている……。
　イエローはエレメリアンの出現現場から上う手まく誘おびき出し、近くにある球場の中に移動した。
　あの広さなら、存分に火力を発揮できるはずだ。
『レッドたちには内緒ですが……わたくし、ちょっとだけ今わくわくしていますわ』
　モニターに映るイエローは、言葉のとおり目を輝かせている。
『たくさんの再生怪人を相手取っての大立ち回り！　ヒーローの成長が如によ実じつに描かれる、花形エピソードですわーっ!!』
　すみませんわイエロー、レッドの中の人がその内緒話を聞いちゃってますわ……。
　でもそのぐらいの心構えの方が、頼もしいってもんさ。
『テイルレッド――――――ッ！　来てくれ――――――――――っ！　嫌だ、お前の顔も見ずにまた死ぬのは嫌だ――――――っ!!』
『ほひっ……!!』
　悲痛な叫びを上げんなよこっちが悪く思えてきちまうだろ!!
　モニターにはもう、イエローの完全脱衣形態フルブラストモードが巻き起こした爆風しか見えない。シケーダギルディ、モスキートギルディに続き、次々と吹き飛ばされていくエレメリアンたち。
「好き勝手に現れては倒されてるけど、ちゃんと統制取れてんのか？　ネオアルティメギルの連中は……」
　軽い頭痛に襲おそわれる。
　すっかり脱ぎ散らかした姿で飛び跳ね、こみけですわ、ふゆこみですわ、と喜んでいるイエローが、ただ微ほほ笑えましかった。

◇

アルティメギル基地の大ホールは、何とも言えぬ雰囲気に支配されていた。
僅わずか数日で、すでに三五体ものエレメリアンを撃破されている。
生前の彼らの戦闘と比べれば、憂慮すべきハイペースだ。
そして明らかに戦力を絞り、余力を残して戦うツインテイルズの意図に、何体かのエレメリアンは気づき始めていた。ドラグギルディもその一体だ。
「数度の対戦を経て、初期戦力しか知らなかった我われらドラグギルディ部隊も、十二分にツインテイルズの現戦力を理解できた。この辺りで、本格的な作戦行動に移りたい」
大ホールの登壇台に立ち、ネオアルティメギル、そして少数の残存部隊兵士へと向け語るドラグギルディ。
自身のツインテール属性を受け継いだテイルイエローが脱ぎ散らかしながら戦う様を、ついにリアルタイムで見てしまったためか、こころなしかその貌かおにも疲れが見える。
「ヴァルキリアギルディは侵攻にどれだけ時間をかけてもよいと言っていたが……ツインテイルズ……いや、テイルレッドは、追いつめられた時の爆発力は恐ろしいものがあるからな」
そんなドラグギルディの演説を聴きながら、面白くなさそうに立ったまま貧乏揺すりをするティラノギルディ。
あの登壇台には、常に帝王が立つべきなのだ。
「ドラグギルディよ、テイルレッドのことを知ったふうな口を利いているが、そのテイルレッドをもっとも追いつめたのは、この俺なのだが？　んー？」
周囲の戦士たちは、また始まった、と呆あきれる。

「そうか、凄すごいな」
「えっ」
　ドラグギルディに大人の対応であしらわれ、ティラノギルディはいよいよ子供じみた対抗意識を燃やし始めた。
「あ……そ、そうだ！　俺は貴様も知らぬ、テイルレッドのすごい秘密を知っておるぞ！　聞きたかろう！　まあ、そんな態度のままでは教えんがなー!!」
　その秘密とは、テイルレッドの正体が男であること。
　フェニックスギルディ以外で初めてその秘密を知ったのが、ティラノギルディだ。
　それを優越感に浸ひたる材料にしているのが、ひどく危うい。
　しかし、そこはさすがドラグギルディ。大人の対応でやり過ごす。
「我われはテイルレッドの秘密ならば、いかなるものであろうと驚かずに受け容いれるつもりだ。それでは貴様もつまらなかろう、ティラノギルディ」
「ぐぬぬ──ぬぬぬぬぬぬ……！」
　太古の覇者の歯ぎしりが止まらない。
　組織内の立場は上でありながら、ティラノギルディは明らかに器の大きさで負けていた。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンたちが、ティラノギルディへと申し訳なさそうに進言する。
「ティラノギルディ様、テイルレッドの秘密なら我らも知っておりますが……」
　テイルレッドの正体が男だという秘密は、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの最終決戦に参加した戦士の何体かは目撃してしまっている。ティラノギルディだけの切り札ではないのだ。
「言うなよ！　絶対言うなよ！　言ったら許さぬぞ!!」

　言われなくても口外はしませんよ、と、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちは肩を落とした。
「頃ころ合いだ。世界の人間たちへと向け、ネオアルティメギルの威光を示そうと思う」
　ドラグギルディの宣言に、戦士たちはわっと湧き上がった。
「待てい！　でしゃばるなドラグギルディ、ネオアルティメギルのリーダーは俺だ！　世界への決意表明は、この帝王にこそ相応ふさわしいであろうが!!」
　淡々とリーダーシップを発揮するドラグギルディに、しつこく噛かみつくティラノギルディ。
　帝王の肩書きの後ろに（笑）が固定されるのも、そう遠くなさそうだ。
「ティラノギルディ様がまとめ役だったのですか!?　俺はてっきりドラグギルディ殿かと」
　お漏らし属性ピーイングのコックロチギルディが、本心までお漏もらししてしまう。
「ぬおお！　よりによって死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのお前がドラグギルディ推しとは、何たる不敬!!」
　このままでは駄々をこねて床を転がり回りかねないので、ユグドラシルギルディが前に進み出て、優しくフォローする。
「帝王はどっしりと構えていればいいじゃないですか、ティラノギルディちゃん！　ドラグギルディちゃんがやりたがってるんですから、気持ちよく譲るのが上の立場の人ですよ!!」
　さすがは教師属性テイーチヤー、駄々っ子を諭さとすのはお手のもの。小声での感嘆があちこちで聞こえる。
「むう、確かにそうだな。俺は広報もこなせる多才な隊長だが、そのような些さ末まつ事、格下の隊長に任せるとしようか！　わーっはっはっ

は!!」
　かくして、手綱の取りやすさをその辺を歩いている幼児にすら笑われるレベルの帝王は、高笑いと共に登壇台から離れていった。
「……あ、あれが首領直属軍……」
　他部隊の戦士たちは、呆あきれも失望もせず、ただ困惑をまとった視線で帝王を見送る。
　そしてその視線は、彼の部下である死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちへと移動した。
「やめてくれ！　そんな目で見ないでくれ！　隊長と俺たちは無関係だ!!」
　いよいよ窮きわまった死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちは、それまでの自分たちを否定する覚悟で保身を試みるのだった。

◇

　俺たちツインテイルズとネオアルティメギルとの戦闘が始まってから、数日が経過した。
　懸念の一つだった、倒したエレメリアンのさらなる再復活は、今のところまだない。
　今日は慧え理り那なは生徒会の用事、イースナは仕事ということなので、ツインテール部も早めに切り上げ、愛あい香かとトゥアールと一緒に学校を後にしたのだが……愛香の足取りが重く見える。
「愛香。まだ疲れが抜けないのか？」
「そんなことないって、もう全快!!」
　万全をアピールしているが……ツインテールは未いまだに乱れたままなのが、心配だ。

『この世界に住まう、全ての人類に告ぐ!!』

　勇ましい声が響き、俺たちは同時に空を見上げた。
　空に超巨大なスクリーン映像が浮かび上がっている。
「そーじ……！」
「総そう二じ様!!」
「ああ、ドラグギルディだ……!!」
　あれは、初めてテイルレッドに変身した翌日だった。あの時もこうして、学校からの帰り道で全世界同時映像ジャック……アルティメギルの宣戦布告を聴いたんだ。
『我われらは一度ツインテイルズに敗れ──そして今再び蘇よみがえった！　異世界を超え、黄よ泉みの国をも超え、死を超越した我らは、神の師団！　ネオアルティメギル!!』
　かつてあいつは、自分たちを神の使徒と喩たとえていた。
　ネオアルティメギルは、その神と同等の存在になったと言いたいのか……！
『もはや挑んで来いとは言わぬ！　今度は我らが、総力を以もつてツインテイルズに挑む!!』
　その後も饒じよう舌ぜつに、ツインテイルズへの雪辱と、人類への降伏勧告を語り──ドラグギルディの映像は消えた。
　背景で不敵に腕組みしているティラノギルディが右に左にちょこまか移動して自己主張していたので、気が散って仕方なかったが……。
　侵略者ではなく、挑戦者として、か。宣戦布告、確かに受け取った。
「……エレメリアンの反応です！」
　今までのパターンからして、演説の後には必ずやって来るだろうとは思っていたが……やはりトゥアールが、エレメリアンの出現を探知した。三人で基地へと急ぐ。

　このツインテールの疼うずき……因縁のある相手の予感がする。今日は、俺が出撃を希望した。

　　◇

　トゥアールに指示され向かったのは、建設途中の高層ビルだ。
　骨組みの鉄骨が剥むき出しで、かろうじて足場が敷設された屋上に、エレメリアンがいた。
「お前は……アラクネギルディ!!」
　美の四心ビー・テイフル・ハート副隊長……アラクネギルディ。その左右には、ワームギルディとスネイルギルディがいる。俺が女の身体からだから元に戻れなくなった時に戦った、強敵たちだ。
「お前ら、男おとこの娘こ好きだっただろ！　こんな場所に何の用だ!!」
　俺の問いかけに、眼下の建物を指差すアラクネギルディ。
　大きな県民体育館だ。トゥアールの通信によると今、大人数アイドルユニットとファンの交流会のようなものが開催されているらしい。
「あの会場にいるアイドルユニットの中に二人、男の娘がいるのでござる──」
　渋い声で、芸能週刊誌が泡を吹くようなとんでもない情報をリークするアラクネギルディ。
　…………しかも待て、今二人って言わなかったか!?　何だその危険なアソート率は!?
「再戦の前に……一句」
　アラクネギルディは筆と句札を取り出し、天高く詠い上げる。

　上と下

脈打つ血潮
ビクンビクン

（訳：命が蘇よみがえって、股間にもあれが蘇っていたわ。
それを見てほっとしてしまう私は、やっぱりどこまでも男の娘なのね。）

なんて物悲しい句なんだ。
奴やつは、かつて俺との戦いの前に一句認したためたが……それは、凜り々りしさと気け高だかさを併せ持った強い心の発露だった。
それがどうだろう。今の句からは、戸惑いと、どこか寂しさのようなものを感じてしまう。
「俺は、蘇ったお前たちを脅威だとしか思っていなかったが……お前たち自身も、今の状況に惑っているのかもしれないな」
「剣の道とは迷い道。惑い、心乱れることもまた、立派な修行でござる」
フォースリヴォンを叩たたき、抜き放ったブレイザーブレイドを胸の前で構えると同時。
アラクネギルディが、腰に帯おびた刀の柄つかに手をかけた。
「されど、一度戦場に身を置き、剣を抜いたその時は──己が心の迷いすらも切り捨てるが男おとこの娘この生き様!!」
霞のような妖あやしい光芒を空に揺らめかせ、妖刀・男の娘の棒アマノムラクモが猛々しく天にそそり立つ。
「今再び！　参るッ!!」
一足飛びで距離を詰めた剣客の鋭い唐から竹たけ割わりを、すんでの所で受け止めた。
「行くぞワームギルディ！　雪辱を果たす時だ!!」

「うん、スネイルギルディ君!!」
　さらに、左右から追撃が。スネイルギルディがボウガンを撃ち込み、ワームギルディが腕を伸ばして捉えようとしてくる。
　俺は階下の鉄骨に飛び降り、進化装備エヴオルブアームズ・プログレスバレッターを出現させる。
「形態変化チエインカスタム！　フォーラーッ!!」
　ツインテールを下結びに変え、高速機動形態へとチェンジ。鉄骨と鉄骨の間を抜けて再び屋上に飛び出し、勢いそのままに腰に装着された六基の全方位斬撃装備サテライトソードを射出した。
「飛べ！　セイバ─────────────ッ!!」
　右腰の三本がアラクネギルディに、左腰の三本がワームギルディたち目掛けて飛ひ翔しようする。
「わ───っ!?」
「はっ……ワームギルディ！　うぬおおおおおおおお!!」
　上体をボヨンボヨンさせて逃げ惑うワームギルディの前に立ちはだかり、殻の中に身を隠して防御態勢を取るスネイルギルディ。
　殻に直撃し傷こそつけたが、曲面で勢いを殺されたセイバーは滑るように空を旋回した。
「知ってのとおり、私のこの鎧よろいは美の四心ビー・テイフル・ハートで最強の防御能力を誇る！　先の戦いではテイルイエローの脱衣の覚悟に共感し、私も勢いで脱いでしまって倒されたが……今回は絶対にこの殻を脱がん！　いいか、絶対にだ!!」
　……なるほど、復活エレメリアンを一度倒した相手だからと侮あなどるのは危ういな。
　傍はたから見れば楽勝だった戦いも、実は偶然や幸運に助けられていたこともあるのだから。
　しかし、これが本来の戦い方なのだろう。殻に身を隠して仲間の前に

強力な盾たてとして立ち塞ふさがるこいつは、まさに移動式の城壁だ……！
『総そう二じ様！　味方の増援が向かっていますので、しばらく持ち堪こたえてください!!』
　トゥアールからの通信を受けながら、ライザーチェインにチェンジ。アラクネギルディと斬きり結ぶ。
　確かにアラクネギルディだけでもとんでもない強さなのに、さらに門下生が脇わきを固めるこの状況はピンチだが……愛あい香かは不調だし、誰だれが来るんだ？
「うおおおおおおっ!!」
「鋭ッ!!」
　刀剣を恃たのむエレメリアンは大勢いるが……やはり、その中でもアラクネギルディは別格だ。
　一ひと方かたならぬ道である男おとこの娘こを極めたサムライは、その太た刀ち筋もしなやかにして精妙。
　何十何百と斬きり結びを重ね、互いに焦じれたように撃ち合わせた剣で鍔つば迫ぜり合いを始める。
　目の前の刀に集中する俺の意識の死角から、奴やつの背中の蜘蛛足が一斉に飛び出してきた。
　間一髪で飛び退のいた俺に、絶妙のタイミングでワームギルディとスネイルギルディの攻撃が迫る。
　瞬間、空から機銃掃射が降り注ぎ、追撃する二体の足元に弾着した。
「お待たせや、レッドちゃん！　メンテしゅーりょーやで!!」
「メガ・ネ!?」
　トゥアールが言ってた増援って、整備中のメガ・ネだったのか!!
　戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネがワームギルディたちを牽けん制せいするように眼前を飛ひ翔しようし、空でトンボ返り。爆走機形

態メガネストライカーに変形し、俺目掛けて落下してきた。
　意図を察した俺は、跳躍して空中でメガ・ネのシートに乗り移る。レッドの小さな身体からだには大きすぎるバイクだが、逆に包まれるような安心感をもたらしてくれた。
　三体のエレメリアンはメガ・ネの機動を封殺するべく、階下に移動。鉄骨だけの不安定な足場に待ち構える。
「頼むぞ、メガ・ネ!!」
「よっしゃ！　飛ばすでーっ!!」
　タイヤの幅よりも遥はるかに細い鉄骨の上を、唸うなりを上げて爆走するメガ・ネ。
　ワームギルディの前で、スネイルギルディが防御態勢を取る。
「レッドちゃん！　あれじゃ、ただ体当たりするだけやとあかんっぽいで！」
「もう一手必要か──わかった！」
　属性玉変換機構エレメリーションが得意じゃない俺でも、髪型の属性なら何とか使える！
「カメレオギルディ！　お前の髪の色ちから、使わせてもらうぜ！　属性玉エレメーラオーブ──赤髪属性レツドヘアー!!」
　バイクのハンドルを握ったまま、左腕の属性玉変換機構エレメリーションを起動。
　俺の身体と爆走機形態メガネストライカーが激しい火炎に包まれ、巨大な火の玉となり唸りを上げて猛走する。
　ツインテイルズのパーソナルカラーに対応する火・水・雷・闇やみの力を瞬間的に付加できる……これが髪の色の属性力エレメーラの能力だ!!
「うっ……おああああああああああ!!」
　炎をまとったバイクでの体当たりに苦く悶もんするスネイルギル

ディ。衝撃が内部へと突き抜ける上に、この高熱──スネイルギルディはたまらず殻を脱ぎ捨てた。
　衝突の反動で鉄骨から落ちながらも、メガ・ネは空中で戦闘機形態メガネウインガーに変形する。
「属性玉エレメーラオーブ──金髪属性ゴールドヘアー‼」
　俺の発動した金髪属性ゴールドヘアーの力で眩まばゆい雷をまとい、猛然と飛行するメガ・ネ。
　雷とともに放たれる衝撃波ソニツクブームが、ワームギルディとスネイルギルディを吹き飛ばした。
「わあああ、せ、師せん範せい───ッ！」
「……ご武運を‼」
　門下生を助けようと駆けつけたアラクネギルディだが、一歩遅い。手を伸ばしたその先で、二体のエレメリアンは揃そろって爆発した。
「──ワームギルディ、スネイルギルディ‼」
　アラクネギルディが、悲痛な表情を浮かべる──が、あの放心は……。
　ビルを飛び出して錐きりもみしながら上昇し、屋上へ急降下するメガ・ネ。搭乗シートから弾丸のように撃ち放たれた俺は、勢いそのままにライザーチェインにチェンジ。
　ブレイザーブレイドツインを左右二刀構え、背中のバックパックを最終噴射ファイナルブーストさせた。
「ライジング！　ブレイザ────────ッ‼」
「むおおおおおおおお……‼」
　同時のＸ字斬ぎりな通常とは太た刀ち筋を異にする、左右時間差の十字斬り。
　見事アラクネギルディの剣けん閃せんをかい潜くぐり、その身体からだに炎の斬ざん痕こんを刻んだ。
「俺のツインテール道も、あれから随分と迷いを重ねたが……それ以上

に成長したぜ。お前たちが何度蘇よみがえってこようと、俺のツインテールは負けない!!」
「フッ……研けん鑽さんを弛たゆまぬツインテール、見事！　此こ度たびも拙者の負けにござる……!!」
　全身を放電させながら鉄骨の上に正座をすると、アラクネギルディは爆散した。
「サンキュー、メガ・ネ！　助かったぜ!!」
「ふふ、レッドちゃんめっちゃ軽くて、最初にイースナちゃん乗せた頃ころを思い出したわあ」
　母性も完全復活したメガ・ネとともに、基地へと戻る。
　しかし、俺には一つ気になることがあった。
　ワームギルディ、スネイルギルディを倒した時にアラクネギルディが見せた表情。
　あれは、部下を失って悲しんでいたのではない。
　おそらくは、悲しいはずなのに、悲しくなければいけないのに……今、自分は悲しくないと気づいてしまった──戸惑いだ。
　人間もエレメリアンも、生命は一つ。
　何度でも蘇ることのできる〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟となってしまったことで、逆に生命の尊とうとさを見失っている。
　たった一つの命を懸けて信念に殉じながら、再び蘇り、戦いを強いられるあいつらは……魂たましいを磨り減らしているのではないだろうか。

第三章　龍神の神型ツインテール。

「――――私自ら対戦したことで、テイルレッドの脅威を認識し……」
　神秘の空間、アルティメギル首領の間に響く、凜りりしき女性の声。
　聖布ヴエールで隠された首領の玉座の前に、現状の報告をするヴァルキリアギルディとマーメイドギルディの姿があった。
「――顕けん現げんした〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちが、ツインテイルズを追いつめております」
「今回は私も協力しましたー♪」
　マーメイドギルディを睨にらみ付けるヴァルキリアギルディ。そのとおりなのだが、自分が報告している横からわざわざ主張しなくてもいいだろうに。
「後はツインテイルズがじわじわと絶望に染まり、心砕け、倒れるのを待つばかりです」
「ほう、じわじわと、か……。つまりツインテイルズらが心折れて力尽きるまで、余は待ちぼうけか……それは何とも、退屈なことよな」
　常に余裕を湛たたえていた戦いくさ女め神がみが、首領の小さな落胆に初めて狼ろう狽ばいを見せる。
「じ、時間はかかりません。もちろん、究極のツインテールは必ず奪取いたします」
「本当にそお？　まだまだ元気いっぱいって感じよ、レッドちゃんたち」
「口を慎つつしめ、マーメイドギルディ!!」

　平静を取り戻し、ヴァルキリアギルディは続けた。
「究極のツインテール、テイルレッドの懐ふところ刀とでもいうべき戦士……テイルブルーには、格別の痛手を負わせております。あれのツインテールは翳かげりきり、もはや十全には戦えませぬ」
「ふうむ……？」
　聖布ヴエールの奥で揺れる首領の影が、天を指差した。
　不意に天井の空間が歪ゆがみ、宇宙空間が映し出される。
　立体映像ではない。もはや、この空間そのものが宇宙に転移したと錯覚するほどに、リアルな光景だった。
「見よ。宇宙てんのツインテール座がかつてないほど輝いておる」
　見よと言われても、あの星々の中のどれがそうなのか、どこがどうツインテールなのか、全く判然としない。
「ペテルギウス……シリウス……デネヴ……アルデバラン……しかし、ツインテールなのだ」
「ちょっとよくわかりませんね」
　明け透けに感想を述べるマーメイドギルディ。
「口を慎つつしめ、マーメイドギルディ‼」
　無論、ヴァルキリアギルディもちょっとよくわかっていない。
「究極のツインテールとは、全宇宙を照らす極星。そのツインテール座の周りを飛ぶ星々を翳かげらせること、容易ではないぞ」
「！　……ははっ……‼」
　首領のいつもどおりの謎なぞポエムを、自身の傲ごう慢まんへの勅ちょく言げんなのだと極限の好意的な解釈をし、襟えりを正すヴァルキリアギルディ。
「そこまでかしこまらんでよい。余は、此こ度たびのお前の働きを高く評価しておる。むしろ、褒ほう美びの一つも取らせてやるに吝やぶさかではない、申せ。タロット、チェス、ピアノ、何でも良いぞ」

首領が散々部下たちをポカーンとさせてきた中二グッズ、使い終わったガラクタをご褒美にあげると言われ、マーメイドギルディはげんなりする。
「それは……どのようなものでも……」
「余の心は全異世界を合わせたより広大な迷図メイズ。何なりと申すがよい」
ヴァルキリアギルディは、意を決し、毅き然ぜんとした面おも持もちで願いを言葉にした。
「それでは、恐れながら……。アルティメギルの悲願、究極のツインテール。首領様の御お希望のぞみを果たしたあかつきには……この私に、首領様の御尊顔を拝謁させていただきたく」
聖布ヴエールの奥の首領のシルエットが、こみ上げる怒りを抑えきれぬとばかりに震ふるえ出す。
御機嫌を損そこねてしまったと、平伏するヴァルキリアギルディだったが──
「フッ……ハハハハハ！　よい、面白いぞヴァルキリアギルディ！　よかろう……テイルレッドのツインテール属性を見事奪ってみせたならば、我わが素顔をしかと晒さらそうではないか！」
聖布ヴエールの奥の首領は、愉快そうに肩を揺らしているだけだった。
首領が笑った──。彫像めいて固まっていたヴァルキリアギルディの無貌が、それを見て少女の笑顔のように華やいだ。
「はっ！　ありがたき幸せ!!」
「……もっとも、そんな愉快な願いを請われては──余は尚なおのこと、退屈は堪こたえるぞ？」
「無論、早急に作戦を完かん遂すい致します。この次は、吉報とともに御おん前まえへ」

　しかし、その笑顔も一瞬のこと。表情を引き締め、颯さつ爽そうと去って行くヴァルキリアギルディを見送りながら、マーメイドギルディは匙さじを投げるように両腕を鉤かぎ曲まげた。
「いいんですかぁ？　あんな約束しちゃって」
「余に素顔を見せろなどと息巻いた戦士は初めてだ。面白いではないか、あの野心」
「野心、ですか……フフ」
　聖布ヴエールに秘ひ匿とくされたシルエットへと一礼し、マーメイドギルディも首領の間を後にした。
「ヴァルちゃんの乙おと女めなお願いを野心って思えちゃうあたり、首領様もカワイイものね」
　不敬の極みを微笑と零こぼし、科学者は己が秘めし本当の野心に胸高鳴らせる──。

◇

『総そう二じ様……』
　深夜二時──自室のベッドで寝ている俺を、呼ぶ声が聞こえた。
『総二様、総二様……』
「ん……えっ……トゥアール……？」
　ベッドの枕元のトゥアルフォンから、トゥアールの囁ささやき声が流れてきているのだ。
『エレメリアンが出現しました。場所は──イギリス、ロンドンです』
　思わず目覚まし時計を再確認した。何度見ようと、夜中の二時だ。
　どうりで、トゥアールの声も眠気交じりに聞こえるわけだ。
「なんでこんな時間に⁉　……って、時差か……」
『はい。ロンドンは今、夕方の五時ですから』

あいつらが海外を襲撃することは、決して少なくはないんだが……それが連戦に組み込まれると、格別にキツさが増すぜ。
カーテンを少し開けて、向かいの家の部屋を窺うかがい見る。愛あい香かは、起きてないな……。
「ありがとう。これからも夜中に出現を探知した時は、俺だけに教えてくれ。トゥアールも後は休んで、通信は大丈夫だから」
『わ、わかりました……お気をつけて』
真夜中に戦うなんて、女の子にはさせられない。
俺は頬ほおを叩たたいて眠気を飛ばすと、地下基地へと降りていった。

……疲れた……。
その日の放課後、ツインテール部部室で俺は必死に欠伸あくびを噛かみ殺していた。
今日も部室にいるのは俺と愛香、トゥアールだけ。
学期末は、生徒会長の慧え理り那なも忙しいようだ。
今朝──いや体感的には昨夜ゆうべだ──のエレメリアンそのものは、名前も覚えていないぐらい印象の薄い奴やつらだったんで、あっさり倒せたんだが……。
時差の何が恐ろしいって、こっちが寝起きでしんどくても、現地の人たちはハイテンションで駆け寄ってきたりするんだよな。
ツインテールに国境はない。応援してくれる人たちを、邪険にするわけにもいかないし……そのテンションに交じって帰って来る頃ころには、寝直すどころじゃなくなっている。
不意に背後から、首から肩にかけて、吸い付くような柔らかさが包み込んできた。
「そのまま振り返らずにリラックスなさってください総二様、特製の

ネックピローです」
「いやトゥアールの胸だろ!?」
　頭を引き抜き、椅い子すごと横滑りする。やはり、俺の後ろにはトゥアールが立っていた。
「聞きましたか愛あい香かさん！　総そう二じ様がノールックで私のおっぱいだと看かん破ぱされましたよ！　これも出現アラートに、総二様の『トゥアールのおっぱい』を延々使い続けた成果ですね!!」
「サブリミナルだったのかよ、あれ!?」
「目的達成したならアラート変えなさいよ、意外と恥ずかしいのよ聞いてて……」
「ッフゥ……愛香さん、あまり私を失望させないでください、何ですかその論点のずれたツッコミは。しかも言葉だけで、手が出ない!!」
　手が出ないツッコミがはびこった方が、世界は平和だと思うが……。
「うん……」
　愛香のアンニュイな吐と息いきがはっきりと聞こえた。トゥアールは口から出かけた魂たましいを強引に手で押し戻し、叫んだ。
「愛香さん！　あなたがテンション低いままなら、こちらにも考えがあります！　総二様に私のおっぱいをエンドレスで触ってもらいます！　何なら生ナマ乳に粘着剤で手の平くっつけてもらいますよ！　剥はがす時のこと考えるとドキドキしますね!!」
　愛香を元気にさせたいというトゥアールの心遣いだ。恥ずかしいが、俺も乗っかろう。
「お……おう！　すげえ触っちゃうぞ!!」
「え……ほほほほ本当ですか？　わぁ……」
　トゥアールは半笑いで自分の身体からだを掻かき抱いだいた。俺が悪人みたいじゃないか!?
「はぁ……」

　頬ほお杖づえをつき、溜ため息いきを重ねる愛香。
「総二様がおっぱい触るとまで言ってるのにこの覇気の無さ……あれはもう愛香さんじゃありません、ただ生きるだけの知性なきまな板、リビング貧乳チツパです!!」
「……っていうか愛香、またゆるくなってるぞ」
　テーブルの向かいに座る愛香に歩み寄り、俺はリボンを締めるべく手を伸ばした。
「っ……だ、大丈夫、あたしが締めるから！　そーじは何もしなくていいから!!」
　愛香はツインテールを庇かばうように抱き、いそいそと自分でリボンを締め直していた。
「どんなにテンション低くても潜在的なエロさが言葉に滲にじみ出てるんですよ愛香さんは!!」
　トゥアールみたいに元気よく向かっていくのが、一番いいんだろうな。
　俺は徹夜テンションも相まって、愛香に組み手じみた攻防を申し出る。
「よし愛香……だったら自力で躲かわしてみろ、俺の手を！」
　やはり、愛香はツインテールを触られまいと、俺の手を避けて身をよじった。
「どうした愛香、ちゃんと躲してみせろ！　俺はどんどんお前のツインテールを触るぞ!!」
「え……えー？　ちょっと、やめてよ……」
「半笑いで何ほざいてるんですかこの蛮族!?　肉体はじゅんじゅんさせてるくせに口先だけの拒否っ気は出しておく……そんな薄汚い駆け引きをあなたから見たくないんですけど!?」
「わーかったわよもう！　これで満足ッ!?」

「惰だ性せいで人間を吹っ飛ばす怪獣ッッ」
　おっ……トゥアールが愛あい香かの攻撃で壁に飛ばされたぞ。よしよし。
　……この納得はいくら何でも慣れすぎだな、すまん、トゥアール。
「そ、そーじ……触るなら、ツインテール以外にしない？　その方が、あたしも訓練になるし……」
「いいやツインテールだ!!」
　ここで妥協して甘やかしては、壁画になったトゥアールに申し訳が立たない。俺も鬼になるぞ、愛香!!
「えっと……あはは……」
　苦笑いを浮かべ、ひらりと身を躱かわす愛香。
「……もしかして愛香……本気で嫌なのか？　ツインテールを触られるの……」
　勝手な言い分だが、半身を失ったような空虚な寂しさが胸に去来した。
「違うの！　だから──」
　先ほど話題になった、トゥアールのおっぱいアラートが部室に鳴り響く。
　俺は、はっと意識を引き戻された。
「エレメリアン、出現ですね」
　壁に叩たたきつけられて、落下しざまにシリアスにスイッチできるトゥアールはすごいな……。
「イースナはもうすぐ来ますが、どうします？」
「それじゃあ、今日はあたしが行くわ。最近戦ってなくて、身体からだがなまってるから」
　愛香が名乗り出て、準備運動に肩を回した。

◇

「ついてこなくて大丈夫って言ったでしょ」
「愛香は久しぶりの戦闘だろ、念のためだよ」
　俺は結局、愛香の出撃に半ば強引に随行した。
　大丈夫とは言うが、いつものように髪紐属性リボンの翼を発動せず、跳躍でビルの屋上を飛び移って現場に向かうのを見ても、ブルーが未いまだに不調なのは明らかだ。ただ寝不足なだけの俺より、よほどコンディションが悪く見える。
　かつて戦った敵と再び顔を合わせる毎日なせいか、妙に懐古的な思いにひたらせる。
　昔もこんな風に、ブルーやイエローだけで出撃するのが心配で、俺も無理矢理ついて行くことがよくあったな……。
　エレメリアンが出現したのはフィットネスジム──その室内プールだ。
　俺とブルーは、独特の塩素の匂いと温い湿度に包まれた、室内プールの中にお邪魔する。
　おそらく高校の水泳部がジムのプールを使っているのだろうか、スクール水着姿の女子たちがプールサイドにたくさんいる。
「あー、テイルレッドちゃんだー!!」
「一緒に更衣室いこ？　ね？」
　エレメリアンを視認するより先に、水着の女子たちが俺に殺到してきた。さらに、一番背の高い子が俺を力一杯抱き締める。水着の独得の肌触りと頬ほおに当たる胸の感触に戸惑っている隙すきに、そのままプールサイドをずんずんと引きずられていく。
「わ────助けて────!!」
「フッフッフ、俺も賛成だ。テイルレッドをスク水にお着替えさせるのだ!!」

一列に並んで俺の前後を挟み、更衣室に連れて行こうとする部員の中に──虎とら面づらの怪人が嬉き々きとして参加していた。

「女子水泳部にしれっと入部してんじゃねー!!」

「我わが名はタイガギルディ！」

俺の蹴けりを食らって吹っ飛びながら、器用に自己紹介するタイガギルディ。

言われなくても覚えてるっての、ドラグギルディと互角の力とか威張っておいてメチャクチャ弱かったし……!!

でも幹部戦士が相手なら俺たちも複数人で出撃する約束だから、今回は結果オーライだな。

「屋外プールの方が俺は好みだ……が、仕方ない！　今は冬！　スク水をまとう者たちに幸あれ!!」

学校水着属性スクールスイムのタイガギルディが冬に復活して狙ねらったのが、室内プールだったわけだ。

女子部員たちを避難させたところで、違和感に気付く。

振り返ると……ブルーがおとなしい。

いつもなら、ギャラリーの女の子が俺に詰め寄ってくると率先して散らそうとするのに。

「んん？　フハハハハハ、平たいものがあるからカードリーダーかと思えば、テイルブルーの胸ではないか！　うっかりオサイフケータイをかざしそうになってしまったわ!!」

生前のお前はブルーを煽あおって瞬殺されたのに、何な故ぜ来世でも同じことを繰り返す!?

「……」

ブルーはむすっとした顔で睨にらみ付けるが、鼻先に鉄拳も鳩尾みぞおちに剛拳も顎あごにアッパーも食らわせずにその場に棒立ちしていた。

　俺とタイガギルディが、同時に驚く。
「むむむ、コンマ数秒で殴なぐりかかってくるのを覚悟しての挑発が、まさかのスルーだと!?」
　タイガギルディはどこからともなく小さなスク水を取り出し、スキップをしながら俺に近寄ってきた。プロレスラー体型の巨漢とは実にミスマッチな仕草だ……。
「テイルブルーがおとなしい今がチャンスだ！　テイルレッドよ、このスク水を着て、俺の腹で平泳ぎをしてくれい!!」
「ッ……いい加減にしなさいよ！　オーラピラー!!」
　さすがにブルーも黙っていない。ウェイブランスから射出された水球がタイガギルディの眼前で弾はじけ、円柱の結界となって拘束バインドする。
「エグゼキュートウェイブ!!」
　水流をまとって投とう擲てきされた三みつ叉またの槍やり。
　しかしそれは、タイガギルディの腹筋にあっさりと弾かれて宙を舞い、プールサイドに突き立ってしまった。
　決定的だ。やっぱりブルーは今、テイルギアの力を使いこなせていない。
　心が不安定になった時、イエローが何度か陥おちいった状況と同じだ!!
「夢でも見ているのか。テイルブルーの攻撃がとんと効かぬ……いや、どうやら俺が強くなりすぎてしまったようだな!!」
　自信家のタイガギルディは好都つ合ごうな勘違いをしてくれたが、このままじゃ敵にもブルーの不調が伝わりかねない。
　俺は、速すみやかに必殺剣をブチかました。
「グランドブレイザ――――ッ!!」
「ぐあああああああああああレッドの攻撃は普通に効いた

————————ッ!!」
　タイガギルディは倒したが、たったあれだけの戦いでブルーの息が乱れていることに気づく。俺はブルーの手を引いて、プールを飛び出した。

　薄暗い路地裏に二人で入り、変身を解除する。
「……ちょ、ちょっといきなりどうしたのよ、こんな人ひと気けのない場所に連れ込んで……これじゃ、大声出しても誰だれにも聞こえないじゃない……」
「だから連れてきたんだよ」
「っ!?」
　愛あい香かがいやに挙動不審だ。決まりだな、やはりまだ体調が悪いんだろう。
　俺が手を伸ばすと、やはり愛香は拒こばもうとして身をよじる。緊急事態ということで許してくれ……多少強引に詰め寄り、おでこを触る要領で愛香のツインテールに平手を添えた。
「愛香……ツインテールが、すごい熱だ!!」
「……はい？　髪に体温あるはずないでしょ……!?」
「俺にはわかるんだ！」
　戦闘の疲労やダメージだけで、ツインテールがこんな状態になるはずがない。
　妙に落胆したように俺をジト目で睨にらんでくることといい、いったい、愛あい香かに何が起こっているんだ……!?
「相変わらず、ツインテールに関しちゃ名医顔負けね、そーじは……」
　ツインテールのお医者さんか。いつか日本に、ツインテール医師国家試験が新設された時は、その合格者第一号でありたいと思っているが……今は、目の前の患者の容態が全てだ。

「このままじゃネオアルティメギルに、お前の不調が知られてしまう。そうしたら……」
「あいつらのこと散々ボコボコにしてきたから、こぞって仕返しされるかもね……」
　戦闘スタイルが災いして、ブルーを恨んでいる奴やつは多いはずだからな。
「ヴァルキリアギルディの能力を属性玉完全解放ブレイクエレメリーズしたことが原因だな？　あの後、いったい何が起こったんだ」
　愛香は、観念したように俯うつむき……震ふるえる声で告白した。

「……ツインテールが……思うように結べないの……」

「な、何だって!?」
　驚きと同時に、ここ数日の違和感がやっと腑に落ちた。
　疎おろそかにしているのではなく、普段していることが、できなくなっていたのか……。
「そーじの言うとおり、戦いのダメージでちょっと精神こころがまいっちゃってるのかもしれないけど……それは必ず治すわ。今日はそーじに甘えちゃったけど、次はちゃんと戦う」
「駄目だ、しばらく休むんだ。厳しいことを言うようだけど、タイガギルディ程度の奴に攻撃が通用しないのに、無理に出撃したって他のエレメリアンとはまともに戦えすらしないぞ」
「そーじは、ツインテール属性を失っても諦あきらめずに戦ったんだよ……？　それに比べればちゃんとツインテールがある今のあたしが、どれだけ幸せか。自分で何とかするから……信じて」
　何かしていないと不安で仕方がない……愛香の気持ちが、痛いほどわかってしまう。

「……わかった。その代わり、これからは常に俺がフォローするから、ちゃんと合わせろ。俺の前でだけは無理するな、いいな？」
「うん……ありがと、そーじ」
　愛香がツインテールを結べなくなるなんて……天地がひっくり返ってもないと思っていた。俺にとってはそのぐらい有り得ないことを、敵はいとも簡単にやってのける。
　ヴァルキリアギルディは、ツインテールを諦めろと断じた。
　ツインテイルズの完全殲せん滅めつを掲げて降臨し、ネオアルティメギルという無限戦力まで手にしながら、その後の追い込みが思ったよりも小規模だと油断してしまっていたが。
　ツインテイルズを破滅させる絶望の種は、すでに撒まかれているのだとしたら──。

◇

　深夜。俺は一人、喫茶店の奥からエレベーターに乗り、地下基地へと降りた。
　夜通しコンソールルームで作業してるトゥアールに会いに行ったことはあっても、トゥアールの部屋を訪ねるのは初めてだから、少し緊張する。
　ちょっと気が引けるが……愛あい香かに内緒でトゥアールと話をしようと思ったら、こういう方法しか思いつかない。
　以前案内された時の記憶を頼りに基地内を進み、トゥアールの部屋へ。時間を考慮して、控え目に何度かノックする。
　ややあってドアがスライドし、中から気け怠だるげなトゥアールが出迎えた。
「んもう、何時だと思ってるんですか……あなたはコンソールルームと

転送ゲート以外に入っちゃ駄目だってあれ程言ったでしょうイース………………ナ……？」

「夜遅くに悪い、トゥアール」

　俺は軽く手を挙げて挨あい拶さつする。

「うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおじさま!?」

「……嘘うそ叔お父じ様さま……？」

「すみませんすみません、だってこんな夜中にここに来るなんてイースナぐらいしか可能性を考慮できなくてやばいどうしようテンパって愛香さんの物真ま似ねショー始めそうです!!」

　個人的にそれはすごい見てみたいが、あまりトゥアールを困らせるわけにもいかない。

「ごめん、トゥアールも愛香も慧え理り那なもイースナもみんな当たり前のように俺の部屋にいるから、ちょっと感覚が麻痺してた。こんな時間に来るのは非常識だったな……明日にするよ」

「させるかああああトゥアールエマージェンシーウォール!!」

　トゥアールは、壁に設置されている非常ボタンのカバーを握り拳こぶしで割って作動させた。

　背後で、次々と重厚な落下音が響き、ドップラー効果で遠ざかっていく。

「ふ、ふ、ふへへへへ……この基地の緊急隔壁を全て下ろしました……これで二度とこの基地からは脱出できませんよ。さあどうぞ部屋の中へ……やがて私の中へ」

「お、お邪魔します……」

　何気なく、トゥアールの服装に目がいった。夜や早朝に会う時は露出度の高い格好のことが多いが、今はシンプルな白いパジャマだ。

　俺の視線に気づいたのか、トゥアールは恥ずかしそうに身をよじっ

た。
「ち、違いますからね!?　いつもはスケスケのエロエロネグリジェで寝てますから！　こんなギガ地味パジャマ、寝ぼけて着替えちゃっただけですから!!」
「そうか？　似合ってると思うけど……」
「………………あ、ありがとうございます……」
　さらに挙動不審になりながら、トゥアールは壁にある別のボタンを押した。部屋の中央あたりの床に穴が開いて、テーブルがせり出してくる。色んなボタンがあるなあ……。
　科学者というイメージから連想する実験器具などで満載の部屋とは真逆に、トゥアールの部屋は女の子っぽい小物やインテリアでまとめられた可か愛わいらしい部屋だ。
　テーブルの上にはすでに、ココアだろうか、飲み物の注がれたマグカップが二つ。
　わざわざクッションを用意してもらったので、俺はそこに座った。
「あ、ど、どうしよ……なんでいきなり……ねえトゥアールおっぱいちゃん、これって千載一遇のチャンスですよね!?」
『ウンソウダヨ、ファイトダヨ、トゥアールホンタイチャン』
　裏声を駆使して自分の胸と会話し始めたぞ……。寝ぼけるぐらいぐっすり寝てたなら、起こして悪いことしたなあ。
「す、すみませんキョドって……総そう二じ様が一人で私の部屋に来るなんて、現実感がなさ過ぎて舌が乾いて回らな……あわわわ下はもうちょっとで潤ってくると思うので少々お待ちを!!」
　眼球がビリヤードのブレイク並みの激しい跳弾移動をし始めるトゥアール。
「しょしょしょれで総二様どんな体位をお望みでこの部屋にっ……」
　あまり話を先延ばしにできる雰囲気じゃないな……早々に用件を伝え

よう。
「その……実は、愛あい香かのことで相談があってさ」
「…………」
　花が萎しぼむようにおとなしくなっていくトゥアール。
「あ、あは、あはは……そ、そーですよね――っ！　最近蛮族が胸と同じくらいテンション薄くてー、こっちまでテンション低くなっちゃいますよもう!!」
　何か無理して笑っているように見えるが、それだけトゥアールも愛香のことを心配してくれていたのだろうか？
「……っ……この程度で凹へこんでられますか……総二様にアタックし始めてから早八か月で、ようやく訪れた処女喪失のチャンス、むしろここまで総二様を運んでくれてありがとう蛮族ぐらい、ポジティブに考えるんです!!」
　トゥアールは小声で何か言った後、壁に掛けてあった白衣を掴つかみ、パジャマの上から勢いよく袖そでを通した。まるで、スイッチを切り替えるように。
「というわけでお悩み相談は五分で解決します」
「えっ……あ、ああ」
「私はツインテールの善し悪しは判別できませんから、あくまで愛香さんの体調でしか判断できませんが……この数日、精神的な疲労は蓄積される一方のようですね」
「やっぱりか……。すまないトゥアール、個別で出撃ローテを組むようにしたのは、愛香を労いたわってのことだろ？」
「………………そういうところだけは察しが良いんですから……かっこいいですねえもう!!」
　小声で何か呟つぶやくと、頬ほおを両手で押さえて小刻みに視線を投げてくる。

「ですが、それで限界です。ストレートに戦うなと言えば、かえって意固地になって無理をするに決まっていますよ、あの戦闘生命は」
「ああ、俺もそう思って強く言えなくてさ……。何せ、自分がそうだったんだから」
　不調になると、無理をしていないと不安になるんだ。
「それに原因がはっきりしない以上、愛あい香かさんは根性で何とかしやがろうとするはずです」
　冷やかすような口調なのに、愛香への強い信頼が感じられる。
「今の忙せわしない戦いが少し落ち着けば、愛香も元気出ると思うんだけどな……」
「すみません……一つ、私の読み違いがありました。ネオアルティメギルに快勝を重ねても、ヴァルキリアギルディが戦場に出てくる気配は一向にありません……」
「そりゃあ、あいつはもう奥に引っ込んで戦いを静観してるだけでいいわけだからな。それはまだまだ、これからの話さ」
　復活能力の効果に時間制限があったり、作戦に期限を設けてたりすれば、話は別だけど。
「……そこで考えたんですが……どんなにスカしていても、ヴァルキリアギルディだってエレメリアン、自分の趣味嗜し好こうには逆らえないのが道理です」
「それはそうだな。戦闘中もすげー熱く無毛について語ってたし」
「だから、私が…………頭をつるつるにして、あいつをおびき寄せようかなって」
　またいつもの冗談を……と苦笑して受け流そうとした俺は──トゥアールが痛ましい笑顔で、本気で震ふるえているのを見て愕がく然ぜんとした。
「わ、私、こういうことでしか皆さんの戦いの役に立てませんし……そ

れに、髪はまた伸びますから！　それまでは高性能なトゥアールウィッグを使えばいいですし!!」
　戦果を焦あせるにはまだ時じ期き尚しよう早そうだと、トゥアールもわかっているはずだ。
　すでにここまで追い込まれるほど、愛香の苦しみを見ていられないんだろう……。
「駄目だ」
　トゥアールの肩を掴つかみ、俺は自分の心をぶつけるように彼女の碧眼を真まっ直すぐに射抜く。
「……そんなに思い詰めるまで、気づいてあげられなくてすまない。けど、それだけは絶対に……駄目だ」
「総そう二じ様……」
「俺はツインテール馬ば鹿かだけど……ツインテールじゃない髪にだって敬意を失わないよう、自分を戒いましめてきた。本当の馬鹿にだけはなりたくないからな」
　女の子が生命と同じくらい自分の髪を大切にしていることを、俺は色々な人たちに教えられてきた。属性力エレメーラだけじゃなく、女の子の生命を守れなくて、何がツインテールの戦士だ。
「トゥアールのツインテールは、ちゃんとトゥアールの中にある。それがいつも俺たちを勇気づけてくれているんだ。何もできないなんて言わないでくれ」
「中ってどこにですか？」
「心にだ」
「ここですね」
「そうさツインテール」
　小気味いい会話のリズムに流され、俺はトゥアールに導かれるがままにその豊満な胸に右手の平を差し出していた。

　この世のものとは思えない柔らかな感触。手の平で包むどころか手の平が包まれていることにも気づかず、ヒートアップした俺は捲まくし立てた。
「そんな作戦、俺が許さない。……そこまで愛あい香かのことを大切に思ってくれている、それだけで十分だ。トゥアールは、立派に俺たちを助けてくれているよ」
「すごいです……女のおっぱい触りながらそんなかっこいい顔できるの、全宇宙で総そう二じ様だけだと思います……」
「だからトゥアールは、しばらく愛香の日常をフォローしてくれないか。がさつな男の俺じゃ、それは難しい。戦いは俺がフォローするからさ」
　会話があまり噛かみ合っていない気がするが、伝えるべきことは伝えた。
　勇気を出して、ここに来てよかった……。何か手の平が柔らかいな。
「マジですか？　ここまでしてるのに邪魔が来ない⁉　マジで蛮族来日中止なんですか⁉　……深夜……男女二人きり……パイタッチ……ここまで来ればもう──イケる……‼」
「でも、属性力エレメーラに訴えるってのはいい作戦だと思う。活路が見えてきた……頑張ろうぜ」
　ようやくトゥアールの胸を触っていることを自覚してぎょっとした俺は、シリアスな雰囲気に任せて誤ご魔ま化かすように手を離す。
　しかしその離した俺の手を両手で包み、トゥアールは微ほほ笑えんだ。
「……総二様は人と触れ合うのを恥ずかしがられますが……やっぱり、不安な時は触れてもらったり、抱き締めてもらうのが一番落ち着くんです。生き物の本能ですね」
「……トゥアール……」

「だから、どこかで怯おびえている野生動物を見つけたら、抱きしめてあげてください。抱き心地ごこちの悪い身体からだかも知れませんが……そこはそれ、殿方の甲か斐い性です」
　誰だれのことを言っているのかは明白だ。俺は、無言で頷うなずく。
　感謝の気持ちに溢あふれてトゥアールを見ると……またもや挙動不審になり始めていた。
「キョウハモウオソイデスカやべっ間違えました……今日はもう遅いですから、どうぞここで休んでいってください、総二様！」
「俺ん家ここの上にあるぞ」
　先だってトゥアールおっぱいちゃんの声が聞こえた気がするが……トゥアールは目をぐるぐるに回しながら、顔を真まっ赤かにして白衣を放り捨てた。
「いいから！　とりあえず服を脱ぎましょう！　せーのーで！　ね!?　せー……」
　その時、唐突に背後でドアの開閉音が響いた。
「！　あーもう！　せっかくあと一歩のところで邪魔してくれちゃってこの蛮族はーっ!!」
　心なしかほっとしたように見えるのは、気のせいだろうか……？
　俺とトゥアールは、同時に部屋の出入り口を振り返る。



「ウチやー」
　シュタッと挙手してきたのは、メガ・ネだった。
　メンテナンスが終わった後もちょくちょく基地に出入りしてるみたいだったが、今日も基地にいたのか。
「ごめんなぁ、突然隔壁が閉まりだして何やと思って基地を歩いてたら、トゥアールはんの部屋が騒がしいから、心配で覗のぞいてもうた。ウチ、すぐにイースナちゃんの家に帰るから」
「ああああああああちょっと待ってメガ・ネさん！　まだ行かないで！　後で後悔するかも知れませんがもー限界です！　今日はここまでしか無理です！　私をゲラゲラの雰囲気じゃなきゃエロれなくチューニングしやがった蛮族が何もかも悪いんですよおおおおおおおおお!!」
　トゥアールは膝ひざ立ちでメガ・ネに縋すがり付き、魂たましいを振り絞るような叫びをぶつけた。
　よくわからないが、要約すると愛あい香かが心配ということで間違いないだろう。
「んもう……あと少しなのに……トゥアールちゃん可か愛わいいんだからっ」
「……!?」
　今、母さんの声が……いや、幻聴だよな。
　隔壁全部閉めたって言ってたのに、ここに母さんがいるはずがない。俺と同じタイミングでこの基地に降りてきて、ここまでこっそりついて来でもしない限り……。

◇

　登校中も、昼休みも、放課後の今も……今日はトゥアールが、やけに近い。

長机の席につく俺の背後で前屈かがみに立つトゥアールが、頬ほおを指でつんつん突いてきた。
「総そう二じ様のほっぺ、ぷるぷるですね～。私のおっぱいはもっとぷるぷるです！」
部室で愛あい香かとトゥアールと三人、他のメンバーを待っている最中だが……トゥアールがいつも以上にハイテンションなのは、何かいいことでもあったんだろうか。
「……トゥアール！　いい加減にしなさい!!」
愛香が、肩で風を切りながらこちらに迫ってきた。
っていうか今日の愛香はもう、どうしてツインテールに結べてるか不思議なぐらい、リボンの結びがゆるくて不安定だな……。逆に物理法則を無視しているような気がするぞ。
「愛香さぁん、気安く触らないでもらえますかぁ？　処女が感染うつりますぅ」
自分の肩を掴つかんできた愛香の手を、トゥアールはにやけ顔で払いのけた。
「!?　トゥアール、あんたまさか……とうとうしたの!?　………………イースナと」
「何でそこでイースナが出てくるんですかああああああああああああああああ!!」
トゥアールを俺から引き剥はがした反動で、愛香のツインテールが不安定に揺れる。どういう力学で形状を保ってるんだ。中学生の時だったら、自由研究の対象にしたかったぐらいだ。
「じゃあ何よ、どうせ妄想でしょ？」
「えへへー、どうしましょうかねー、言っちゃおっかなー？　でも愛香さんの胸がこれ以上凹へこんだら、時空が歪ゆがんで虚数次元が生まれそうですしい」

「骨格歪ませるわよ」
「まあ、何て言うんでしょうね、あそこまでいったら実質ロストバージンしたみたいなものですし？　もう愛香さんごときとは違う世界の住人になっちゃったのかなあと思うと――」
「鬱うつ陶とうしいわね結論を言いなさい！」
「はははははははははは聞こえませんよ下界人！　天上に住まうトゥアールちゃんに声が届くようにもっと元気よく言ってくださーい‼」
　唸うなりを上げるアッパーで、天井に引っ越しするトゥアールちゃん。
　しかし愛香は、たった一発で息を荒らげ、床に膝ひざをついてしまう。
　残された力を振り絞ってまで、義務感でトゥアールに突っ込まなくても……。

　ドアが開き、桜さくら川がわ先生と慧え理り那なが部室に入ってくる。二人は、首から下だけが天井から生えたトゥアールを見て、安あん堵どの笑みを浮かべた。
「おお、久しぶりに見たな、トゥアールのそれ」
　天井から落下したトゥアールは、年上組の理不尽な反応に抗議する。
「皆さんこの悲劇に慣れすぎですよ⁉　頭ず蓋がい骨こつでコンクリブチ抜くっていうバイオレンスをほのぼの四コマ漫画みたいな雰囲気でスルーしないでくれませんか⁉」
　いつも四コマ漫画みたいな綺き麗れいな起承転結でブッ飛んでるからな、仕方ないな。
「でも今朝の職員会議で議題になっていたぞ、最近トゥアールが校舎の壁に埋まるのを見ないが、津つ辺べに何かあったのではないかと」
「何ですかその教育委員会解体不可避な闇やみの職員会議は⁉　何かあ

りすぎている私を心配すべきでしょう聖職者なら!!」
　最近校舎の中がどこか寂しく感じたのは、そのせいだったのか……。
「それと……ニュースで報道されていましたが、世間の方々の不安が大きくなっていることが問題視されているようですわ。エレメリアンの出現頻ひん度どが増す一方で、テイルレッドはなかなか現れず、テイルブルーは……その、元気がないように見える、と」
　愛あい香かの方を窺うかがい、言葉を選んで報告する慧理那。
「それは考えが及びませんでした。レッドちゃんの可か愛わいさとブルーの凶暴さ、治安維持に重要な二つの要素が同時に少なくなれば、民衆の不安を煽あおりますね……」
　上う手まくいかないものだな……普段どおりの行動が、何事においてもベストだってことなんだろう。敵戦力にかかわらず必ず全員で出撃していた今までが、実は一番無駄がなかったんだ。
「こんにちイースナ！　アンドメガ・ネ!!」
　愉快な挨あい拶さつとともに、転送ロッカーの中からイースナとメガ・ネがやって来る。
「トゥアール！　昨日もメガ・ネのメンテ、さんきゅーじゃ！　ちゅーしてやるぞ!!」
「んふふー、普段ならムキになっていりませんと叫ぶところですが、今日の私はひと味違います。あなたみたいなお子ちゃまとはレベルの差が開きすぎて、余裕が売るほどあります!!」
「ふむ？　それじゃ」
　イースナはトゥアールの頬ほお……ではなく、その隣の俺の頬に唇くちびるを触れさせた。
　温かく、柔らかな不意打ちに、俺は思わず飛び退のいた。
「何してるんですかイースナああああああああああああああああああああああああ!!」

「おいイースナ、気軽にこういうことしたら駄目だって！」
「総そう二じは古いのじゃ。このぐらい、この世界でも外国なら挨拶代わりではないか」
「そ、そりゃそうだけど……」
　そこを突かれると痛い。自分の感性が人と多少違うと、散々自覚してきたつもりなんだが。
「ひあいずじゃぱーん！　ですわイースナさん!!」
　顔を真まっ赤かにして抗議する慧え理り那な。
「えーと、そうじゃ慧理那。わらわたちの世界では、ほっぺにちゅーはポピュラーで……」
「お待ちなさいイースナ！　〝私の世界ではネタ〟は、私が虚無の思考時間シークタイム＝ゼロで散々作成しています！　ただ設定を盛りすぎると、『トゥアールの世界って簡単にキスするビッチばっかなんだな』と思われる危険性があったため、没にしただけです!!」
　……設定って言わなかったか、今。
　歯ぎしりが聞こえると思って振り返ると、愛あい香かが目を逆三角にしてイースナに歩み寄っているところだった。
　しかしイースナは慌あわてず逃げず、俺にとんでもない無茶振りをしてきた。
「総そう二じも貧乳のほっぺにちゅーぐらいしてやればいいじゃろう。こいつ最近、何か元気がないからのう。わらわは懐ふところの広い彼女じゃから、そのくらいは許すぞ」
「イ、イースナ……あたし前からあんたの歌、すごく素敵だって思ってたの。善いい沙すな闇あん子このファンクラブに入るわ」
　愛香は態度を急変させ、突然推しメンになったイースナに握手会を願い出た。すげーちらちらこっち見てくるけど、普通は気軽にそんなことされたら女の子は嫌だろ？

　……そう思いながらも、昨夜ゆうべのトゥアールの言葉が頭を過よぎった。
　不安な時は、人の温ぬくもりが必要だ──と。
「むう……」
　教師でもある桜さくら川がわ先生の、非難するような視線が痛い。
「！　おおっと、エレメリアンですよ皆さんー!!」
　タイムセールの開催を告知する家電量販店の店員のようなテンションで、エレメリアン出現を告げるトゥアール。
　が、続く情報でさすがにトーンを落とした。
「しかも、別々の場所に同時に出現しています……」
　内心、来やがったか……と毒づいてしまった。
　警戒していた同時侵攻だ。もっとも、このために今日まで個別出撃を重ねていた俺たちは、予行演習も万端ってわけだ。
「両方とも結構な数が来ています。全員で、二手に別れて出撃した方が良いかと」
「ではお嬢様、今日もお気をつけて……。私は帰りの支し度たくをしておきます」
　いつもどおり慧理那を見送ろうとする桜川先生に、トゥアールが意外な申し出をした。
「──尊みことさん。ネオアルティメギルとの戦いが終結するまで、また愛香さんと交代でアナザーテイルブルーとして戦ってくれませんか？」
「ん？」
　唐突な要請に不思議がる桜さくら川がわ先生。
「今は一人でも多くの戦力が必要です。大半は一般エレメリアン、力押しでやり合えば強化形態を持たないアナザーテイルブルーでも互角以上にやり合えるはずです」
「津つ辺べさえよければ、私は構わんが……」

「俺からもお願いするよ、桜川先生」
　桜川先生に負担をかけたくはないが、それ以上に愛あい香かを労いたわる方が先決だ。
　本当ならしばらく完全に戦いを休めと言いたいところだが、そうしてどんどん自信を失っていくことはむしろ、今の愛香の精神にはかえって悪影響を及ぼすだろう。
　それをわかっているからこその、トゥアールの提案なんだ。
　だったら桜川先生とローテーションしてもらって、少しでも出撃回数を減らす方が得策だ。
「……ぁ……うん……よろしくお願いします、桜川先生」
　納得したとはいえ、愛香は明らかに別の言葉を言いかけ、呑のみ込んでいた。テイルブレスを外し、桜川先生へと手渡す。
　やはり大人だ、桜川先生も愛香の僅わずかな逡しゆん巡じゆんに何かを感じ取ったようだが……黙ってブレスを受け取り、自分の右手首に塡はめた。
「じゃあ……テイルオン！」
　紡つむがれる変身機構起動略語スタートアツプワード。メイド服姿のまま、蒼あおい光の繭まゆに包まれる桜川先生。
　光を周囲に爆裂させ、全身に装そう甲こうをまとった戦士へと変わる。
　変身が完了したアナザーテイルブルーに注がれる愛香の視線には、正体を隠そうとして代理を頼んだ以前よりも複雑な思いが去来しているようだ。
　何とか、愛香を元気にする方法を見つけなきゃな。
　俺と桜川先生。そしてイースナとメガ・ネ、慧え理り那なのチームで、出撃することになった。

◇

　ネオアルティメギルが合流し、とてつもなく人口密度が増した基地大ホール内。リヴァイアギルディとクラーケギルディが、険しさを面に貼り付けてモニターを凝視していた。
　映し出されているのは先日のタイガギルディとテイルレッド、ブルーの戦いだ。
　さすがの貫禄、テイルレッドは可か愛わいい。自らのお腹なかの上で平泳ぎして欲しいと懇願するタイガギルディに、何の罪があろうか。
　問題は、テイルブルーだ。
　巨乳の雄・リヴァイアギルディの眼めが、カッと見開かれる。
「バカな、テイルブルーの胸が━全く成長していない」
　わなわなと戦慄わななきながら、依然として貧乳なテイルブルーに驚きよう愕がくを捧げる。
「俺が戦線を退いて、半年以上……。成長期の少女の胸が、半年の時を経て一ミリも変わることがないとは……」
　巨乳の頂点を極めたリヴァイアギルディは、年とし頃ごろの女の子の胸の成長に敏感だ。
　平均的に見てどのぐらいの年代がもっとも胸の成長著しい時期かも、心得ている。
　おそらくテイルブルーは、十五～十八歳ほどだろう。
　この年頃ならば、半年前に貧乳だった女の子が大化けする可能性は十二分に有り得る。
　━有り得たはずなのだが……有り得なかった。
　これは、そんな小さな胸の物語だ。
「聞けばテイルブルー、永遠のツインテールの極意に到達し、エターナルチェインなる強化を果たしたとのこと。ゆえに、その貧乳も永遠の理

ことわりに縛られ……」
　手にした資料を見ながら補足したのは、リヴァイアギルディの部下、巨乳属性ラージバストのバッファローギルディだ。
　彼は、テイルブルーが一番貧乳に対してデリケートになっている時期に出撃したのが災いし、巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブを取るためだけに瞬殺された、悲劇の戦士でもある。
「悲しきは闘神……。強さの代償に、胸の小ささまで永遠に縛られたということか……」
　リヴァイアギルディは腕組みを解き、憐あわれみながら総括する。
「何を嘆く！　永遠に貧乳でいられるのならば、これほど嬉うれしいことはあるまい!!」
　それに食ってかかるのは誰だれあろう、高潔なる貧乳の騎士・クラーケギルディだ。
「一度死してもまだ治らぬか！　貴様の蜘蛛の巣の張った原始時代の貧乳信仰は!!」
「ああ治らぬな！　生命ある限り、正しき生き方をするのは当然なのだから！　邪道巨乳に取り憑かれたお前こそ、死ぬ前から死人だったとしか思えぬ!!」
　高尚なおっぱい論で火花を散らす両雄。部下たちははらはらとそれを見守り、貴の三葉ノー・ブル・クラブの腐女傑たちはニヤニヤとしながら観賞している。
　一触即発の大ホールに、慌あわてて飛び込んでくる一般兵。
「たった今出撃した戦士と、テイルブルーが交戦開始したとのこと……映像を回します!!」
　おおおおお……、と戦士たちのどよめきがホールを支配する。
　スタイル抜群のテイルブルーが、エレメリアンの前に立ちはだかっているではないか。

　切れ長の目になり、何より全体的に大人びてしまっている気がするが、それは胸が大きくなったこととの等価交換なのだろう。
　リヴァイアギルディたちは知る由も無いが、それは愛あい香かが戦えない時の頼れる代打。
　桜さくら川がわ尊みことが変身したアナザーテイルブルーだった。
　アナザーブルーを知る戦士たちは、面白がっているのか真実を言わずに黙っている。
「おお、テイルブルーの胸が、成長した！　やはり成長期の少女は侮あなどれぬものよ!!」
　歓喜するリヴァイアギルディだが、クラーケギルディは大切なものを汚されたとばかりに憤怒の形相で食ってかかる。
「貴様の目は節穴か！　よく見るがいいリヴァイアギルディ、胸以外も成長してしまっている！　あれは姫ではない……毒りんごを持って現れた、邪悪なる魔女だ!!」
「乳が小さきお姫様よりも、乳が大きい魔女が正義だ！　童話を書き直しておけい!!」
　もはや部下の戦いよりも、どちらのテイルブルーがいいかで口論を再開する二人だった。

　一時期侵攻部隊の名物だったらしき巨乳貧乳戦争をしばらく傍そばで見届けた後、ホールを離れたドラグギルディは、そのまま自室へと向かった。
　基地に戻ってきてから、この部屋にも何度となく入りはしたが、まだ戸惑いが勝る。
　彼の死後、この部屋にはその人望を象徴するかのように多くの餞はなむけが送られていた。
　何か意図があってか。ドラグギルディは、未いまだにそれらを片づけ

ずにいる。
　背後に気配を感じ、振り返る。同期の桜にして別部隊の将しよう、リヴァイアギルディが部屋の中に踏み込んできた。
「……死後の餞を生きて見るというのは、何とも無粋なものだな。リヴァイアギルディ」
「全くだ。俺のとっておきのおっぱいマウスパッドが、よもや手た向むけた当人に見られるとは。いい赤っ恥よ」
　照れくさいのはリヴァイアギルディも同じだろう。
　亡きドラグギルディの部屋を訪れ、おっぱいマウスパッドを手向けたのが、まるで昨日のことのようだ。
「辛気臭い顔をしおって。まだ死人の時の癖くせが抜けぬと見えるな、ドラグギルディ」
「この顔は元々だ」
「お前はテイルレッドとの尋常の勝負で悔いなく散れただろうが、俺は未練のある決着だったのでな。テイルブルーに一泡吹かせてやるまでは、地獄の釜に戻るつもりはない」
　リヴァイアギルディの言うとおり。神の一剣ゴー・デイア・ソードの作戦行動の一環として黄よ泉み返がえったに過ぎない自分たち亡者にも、心がある。心があればそれは、未練を呼ぶ。
「我われとて、悔いがないわけではないさ」
　ドラグギルディは穏やかに頷うなずき返し、リヴァイアギルディと別れる。
　ホールに戻ろうと、基地の廊下を歩く途中。ドラグギルディは、白いローブをまとったエレメリアンと遭遇した。
　フードを下ろして露あらわになる、神こう々ごうしき容貌。戦いくさ女め神がみ、ヴァルキリアギルディだ。
「栄えある戦女神が、このようなむさ苦しい基地に何の御用かな？」

「……頃ころ合いだ。お前の真価を見せてもらうぞ、ドラグギルディ」
　ヴァルキリアギルディは、前置きもそこそこにドラグギルディに勅命を下した。
　心なしか、その美しき面めん貌ぼうには焦しよう燥そうが化粧されて見える。
「首領様は早々の戦果をお望みである。誉ほまれなど捨てよ。今のお前は、もはや多くの兵の憧どう憬けいを集めた名将ではない。ひと山いくらの一兵であるということを、努ゆめ々ゆめ忘れるな」
　ヴァルキリアギルディが転送ゲートに消えた後、剛竜の戦士は静かに闘気を燃やす。
　固く握り締めた拳こぶしには、何者の追随をも許さぬ烈はげしき気迫が漲みなぎっていた。

「──我われはとっくにただの一兵だとも。テイルレッドとツインテールを交えた、あの日からな」

　◇

「うわあああああああああああテイルブルーの胸が、胸が大きい!!」
　蘇よみがえった死者たちが、幽霊でも見るかのような驚きよう愕がくで遇する。
　戦場に駆けつけた俺と桜さくら川がわ先生──アナザーテイルブルー。
　ある意味正しくブルーのテイルギアのポテンシャルを引き出すその大人びたスタイルを目にし、エレメリアンたちは腰を抜かさんばかりの有様だった。
「……そんなに大きいか？　今まで生きてきて、胸の大きさなんて意識したことないぞ」

　胸を確かめるように両手で触れるアナザーブルー。
「どう思う？　大きいのか？」
「お、俺に聞かないでください」
　返答に困っていると、エレメリアンたちが怒りを燃やし始めていた。
「おのれ……幼きテイルレッドに胸を自慢するとは、何という大人げなさ！　もはや乳の大きさなどどうでもよい、かつて無惨に倒された恨みを晴らしてくれるぞ!!」
　これまででもっとも再生怪人〝らしい〟口上を吐はき捨て、かかってくるエレメリアンたち。
　確かこいつら、ダークグラスパーへの怒りで暴走していた頃ころのブルーに倒された連中だ。
　アナザーブルーはゆとりを崩さず、俺に質問してきた。
「なあ、観みつ──」
「レッド！　テイルレッドですよ!!」
「おお、そうだったレッド、武器ってどうやって出すんだったっけ、忘れたぞ」
「フォースリヴォンに触れてイメージを集中させるんです！　基本、テイルギアは使用方法とか求めれば全部頭の中に浮かぶ仕様ですから!!」
　言われるがままフォースリヴォンに触れ、箒ほうき型の打突武器メイスを発動。忘れていたとは思えない見事な旋回で動きを慣らした後に、迎撃の構えを取った。
「よし、やるかっ」
　さながらメイドが住まいを掃除するかのような、優雅にして可か憐れんな立ち回り。
　アナザーテイルブルーの振るうウェイブメイスが、次々にエレメリアンたちを蹴け散らす。
『今度はもうっ……！　総そう二じ様、すぐ近くに新たなエレメリアン

の反応です！』
　慌あわただしく通信してくるトゥアール。
「もう一箇所エレメリアンが出現したんで、俺はそっちに行きます！　ここは任せました!!」
「うむ、行ってこい！　私も、勘を取り戻してきたぞ!!」
　頼もしい言葉に送られ、俺はトゥアールの通信で指示された場所へと急いだ。
　いつも細かな移動はブルーの使う髪紐属性リボンに頼っていたので、少しモタついてしまう。

　通信で指示された高架下の川辺に着き、周囲を確認する。
「トゥアール、現場に着いたけどエレメリアンが見当たら──」
　既視感。
　さすがに三度目ともなれば、予兆に任せて身体からだも動く。
　果たして見上げた天空から舞い降りてくる、黒い巨きよ躯く。
　俺は抜き放ったブレイザーブレイドで、放たれた豪剣を受け止めていた。
「いい加減、不意打ちなんかで試し合う間柄じゃねえだろう！」
　刃やいばの腹に手を添え、力任せに弾はじき上げる。
「──ドラグギルディ!!」
　轟ごう音おんを響かせて着地した龍の戦士に、苛いら立だちをぶつける。
「今日とて、本当は我われが真っ先に飛び出したかったとも。しかし我は、ティラノギルディに執しつ拗ようにマークされていてな。内密に出撃せねば、こうしてお前と会うこともままならん」
「……あいつは……」
　俺は呆あきれて、額ひたいを手で押さえた。ティラノギルディが不条

理に絡んでくる様子が、目に浮かぶ。
　だが、事態がまずい方に動いてしまっている。
　こいつらは、目当ての相手と戦うためには、すでに戦闘中のツインテイルズのところへ行くのが手っ取り早いと考えるようになってしまったみたいだ。
　俺たちは万一の連戦に備えて余力を残していたはずが、逆に不要な連戦を招く結果になってしまったのか……。
「くたびれているようだな……テイルレッド」
「おかげ様で最近、ろくすっぽツインテールを休ませる暇ひまがないんでな!!」
「フッ……ただ甘やかすだけでは、ツインテールも耀かがようまい！」
　大剣を放り捨てて両腕を交差させ、闘気を立ち上らせるドラグギルディ。
「！　まさか!!」
　両の側頭部から生命の光条が疾はしり、ツインテールの形となって顕けん現げん。天に地に、その美しさを誇示する。
「いきなり最終闘体……ツインテールの竜翼陣はばたきか……!!」
　俺は腕を顔にかざし、吹き荒すさぶ威圧感に耐える。
　く……やはり、こいつのツインテールはすげえ……!!
「さあ、約束の刻ときだテイルレッド……。見せてもらおう、〝お前の〟究極のツインテールを!!」
　元から、こいつ相手に余力を残して戦えるなんて思っちゃいない。
　今の俺が結べる、最高のツインテールで迎え撃つ!!
「ああ、見せてやるぜ……」
　顔にかざした腕を下ろし、胸の前で握り締める。左手首に現れる俺の魂たましいの結晶──ツインテイルブレス。
　奇くしくも奴やつの最終闘体変身と同じ両腕交差の構えで、俺は叫ん

だ。
「ツインテイルオン!!」
　全身が灼しやく熱ねつの炎に包まれ、テイルギアに黄金のラインが走っていく。
　巨大な翼を背に拡ひろげ、紅あかき粒子を全身から放ち、ツインテールが真の輝きに脈動した。

「これが俺の究極のツインテール！　アルティメットチェインだ!!」
「おおお……！」
　俺は右拳こぶしを力一杯握り締めると、感嘆するドラグギルディへと迫撃。
　合わせ撃ってきた奴の左拳とぶつけ、激しいスパークが周囲の砂利を切り刻んだ。
　行き場を失ったエネルギーは大地を砕くだけでは飽き足らず、天を衝ついて雲を散らし、戦いの舞台には不相応な青空を頭上に輝かせる。
　その青空に、俺は己のツインテールを実体化させた。
「テイルレガリア――――――――ッ!!」
　輝光をまとって飛来する、ツインテール属性の紋章を形取った双房戦闘支援機ツインテールアーマー――テイルレガリア。
「むっ……ツインテールを召喚するとは！　成長したな、テイルレッド!!」
　テイルレガリアの放つ光弾から身を躱かわすドラグギルディ。
「ドラグギルディ……俺はあの時の、未熟なツインテールじゃない！　ただツインテールを好きだとはしゃぐだけじゃなく……頼もしい仲間として信頼できるようになったんだ!!」
「どうやら、己の中のツインテールとの対話が済んだと見えるな……!!」

「わかるのか!?」
「いずれ全ての人類が、ツインテールと対話する日が来るかも知れない……お前はそれに魁さきがけた、進化した存在なのだ!!」
　再び乱みだれ刃ばの大剣を手にしたドラグギルディの前で、俺はテイルレガリアをブレイザーブレイドに合体。
　究極双房剣テイルカリバーを完成させ、素振りで星を宙に散らした。
「ゆくぞ!!」
「ああ!!」
　剣と剣がぶつかり合う。かつての戦いの再現のように、ただがむしゃらに刃やいばを撃ちつけ合う俺たち。
　ツインテールとツインテールの戦いは、磨いた技や力を誇示し合うのではない。
　不器用な、愛の語り合いだ。
「うおおおおおおおおおおお!!」
「ぐぬううう……!!」
　テイルカリバーの渾こん身しんの一いち斬ざんが、ついに乱れ刃の大剣を砕き割る。
　その反動でドラグギルディは吹っ飛び、地面を陥没させて巨大なクレーターを作り上げた。
　あの時は、こいつをここまで力任せに吹っ飛ばすなんて、一度もできなかった。俺のツインテールは、確かに成長している!!
「……見事だ、テイルレッド！　そのツインテールを見ることができただけでも、地獄から這はい出てきた甲か斐いがあるというもの!!」
　ボロボロになったマントを放り捨てながら立ち上がり、ドラグギルディは満足げな微ほほ笑えみを浮かべた。
「しかし我われも……ただ復活したわけではないぞ！」
　両腕を交差させた……精神集中の構えだ。

何をする気だ？　奴やつはすでに、最終闘体になっているのに……!?
「我を、ただの未練がましき亡者と思うな。お前との戦いを通し、二つのツインテール属性が共鳴することで……我の中にも、新たな力が芽生えていたのだ!!」
　奴の最終闘体──ツインテールの竜翼陣はばたき。
　光のツインテールを頭に宿したドラグギルディは──そのツインテールの光を、さらに全身へと及ばせていった。
　そしてその闘気は、ツインテールは、新たなる息吹に躍動していた。
「お前の神の髪──神型を見て、我は初めて超えるべき目標を得た……。羨うらやましい。美しい。そのツインテールに追いつき、追い越したいと……！」
　心の中でいつも敬意を払っていた宿敵から不意に送られた賛辞に、ツインテールが熱く高鳴る。
　俺の究極のツインテールへの返礼だとばかり、自らのツインテールを存分に見せつけ、全身を眩まばゆく輝かせていくドラグギルディ。
「エレメリアンは機械ではない。精神生命、生物だ」
　肩当てが鋭く隆起し、全身の鎧よろいがさらに棘とげ張っていく。そして額ひたいの角つのが、神の冠のように先鋭化。
　その雄大な背には、ツインテールとは別の神こう々ごうしき翼を拡ひろげた。
「生物とは進化するもの。錬磨し、競い合い、壁を超えてゆくもの。……我われにとっての壁は、お前だったのだ……テイルレッド!!」
　人智勇を兼ね備えたエレメリアンは今、新たなるツインテールに猛たける。
　復活しただけでは満足せず、更なる高みへと飛翔はばたいたのだ……!!

「今の我は、神型へと到達した存在！　ゴッドドラグギルディだ!!」

　いわば、エレメリアンの最強変身チエインエヴオルブ……最終闘体を超えた姿!!
「……ゴッドドラグギルディ……！　それがお前の新たなツインテール!!」
「そうだ。死を超えた先に、たなびくツインテールもある!!」

　究極アルテイメットと神域ゴッド──二つの最強のツインテールが今、邂かい逅こうする──。

キャラクター名鑑 037

ゴッドドラグギルディ



DATA

身長：361㎝
体重：352㎏
属性力：ツインテール属性

ドラグギルディが最終闘体を超え、ツインテイルズの最強変身（チェインエヴォルブ）と同等の進化をした姿。かつてテイルレッドが大きく戦闘力に開きがあるドラグギルディにツインテール属性を共鳴させることで辛勝したように、ツインテール属性の戦士の中にはごく稀に相手との共鳴による独自進化の特性を持つ者がいるようだ。最強の戦士がさらに進化して手がつけられない強さになってしまったが、その強化には代償もあった……。

第四章　今、始まりの日を超えて。

　進化したドラグギルディのツインテールは、以前よりも遥はるかに威圧感を増した。
　互いのツインテールとツインテールで、手四つに組み合っているかのようだ。
　睨にらみ合っているだけで属性力エレメーラが弾はじけ合い、周囲に存在する岩を塵ちり芥あくたと砕いていく。
「ぬううううう……はあっ!!」
　ゴッドドラグギルディは砕けて柄つかだけとなった大剣を掲げ、属性力エレメーラを集束させ始めた。
　柄つかから溢あふれた膨大な光が石化するかのように押し固められ、新たな刃やいばが顕けん現げんする。
　刃渡り、重厚さ、全てが格段に大きいが──刃がツインテールのごとく二叉に割れた様は、完全解放ブレイクレリーズした俺のブレイザーブレイドにそっくりだ。
「かつて、我われの生命を絶ち斬きったお前の炎の剣……新たなる生命にて握るのは、これを置いて他にあるまい！」
　大地を捲めくり上げる峻しゅん烈れつな疾走──ゴッドドラグギルディの斬ざん撃げきが迫る。
「見事受けてみせるか、テイルレッド！　我わが神剣、ツインテールの竜神剣きらめきの冴さえを!!」
　斬り上げるテイルカリバー、振り下ろすツインテールの竜神剣。刃と刃の撃ち合いが、その度たびに巨大な爆発を大気に生み出し、互いのツ

インテールを激しくはためかせる。
　なんてパワーだ。単純な戦闘力なら、あのヴァルキリアギルディよりも上だ……!!
「ツインテールの戦士の末路は……悲劇だ！　世界の命運を双肩に背負うがゆえ、愛が霞かすむ。ツインテールへの愛に生きられず、潰れてしまうのだ!!」
「何を……他ひ人と事ごとみてぇに……!!」
　テイルカリバーもレッドの身体からだからすればかなりの大型剣だが、ドラグギルディがその巨体で振るう剣は、それさえも比べものにならないぐらい大きい。
　剣でありながら、丸太で殴なぐられているような衝撃が身体を突き抜ける。
「だがお前は実にのびのびとツインテールを愛している。そこまでの強さを体得した今でも変わらず……いや、むしろ遥かにツインテールへの愛を増して!!」
　応戦する俺から飛びすさるゴッドドラグギルディ。わずか一呼吸のインターバルを挟んで、すぐに剣撃が再開される。
「それがたまらなく嬉うれしい……そして、我がことのように誇らしいぞ、テイルレッドよ!!」
　ドラグギルディが饒じよう舌ぜつになればなるほど、俺はかける言葉を失っていく。
　今返せるのは──この刃ツインテールだけだ!!
「テイルカリバー！　無限装填アンリミテツドモード!!」
　俺が到達したツインテールの真理を力と変え、数あま多たの力を発動するテイルカリバー。
　かつてドラグギルディとの戦いで見み出いだした真実──全ての始まりを告げる無限の理ことわりを奏でたテイルカリバーは、柄つかを鉤かぎ

曲まげて展開変形。振り放つ剣速を加速させる。
「むうっ……これは⁉」
　豪快に剣を振り回し、俺の放った無数の紅あかき剣けん閃せんと斬き
り結ぶゴッドドラグギルディ。
　撃墜しきれず数発を被弾しながらも天高く跳躍。驚嘆の返礼とばかり
に背の翼を拡ひろげて逆手に剣を構えると、己の身体からだもろとも一
本の刃やいばと化すかのごとく、猛然と急墜してきた。
「――覚悟装填レゾリユードモード‼」
　覚悟とは、すなわち耐久力かくご。
　テイルギアの防御の要かなめ・フォトンアブソーバーが、テイルカリ
バーを通して最大化する。
　頭上に構えた瞬間防御特化の斬剣が、ゴッドドラグギルディの魂こん
魄ぱくの一撃を弾はじき返した。
　不器用でがむしゃらな戦い方……こいつは何も変わってない。
　無茶な着地で地面に足を沈めるゴッドドラグギルディへ、胸の裡うち
をぶつけた。
「他の奴やつには聞いてもだんまりだったけど……お前なら答えられる
はずだ。どうしてヴァルキリアギルディなんかに従う！」
「再び生を得られるとあらば、藁わらにも縋すがろう」
「嘘うそだ！　少なくともお前は、藁には縋っても邪道には染まらない
戦士だったはずだ‼」
　背の翼を羽ばたかせ、突風を巻き起こすゴッドドラグギルディ。
　疾風かぜに乗って加速する離れ業わざ、そこから繰り出される一いつ
閃せん。
　一体何度剣を撃ち合わせたか……互いのツインテールは、全くの互
角。
　乱れる呼吸までもが、等しく同じリズムを刻み始めた。

「──髪は永久に伸ばし続けることはできん。いつかは切らねば、ツインテールは地に堕してしまう。伸びすぎたツインテールは、切らねばならぬのだ……！」
　憂うれうようなその呟つぶやきの真意を、俺が捉え倦あぐねていると──
「ぬ、ぐ……おおおおおお……!!」
　突とつ如じよとして、ゴッドドラグギルディの肩が爆発した……！　舞い上がる自らの身体の欠片かけらを浴びながら、全身から紫し電でんを放ち始めている!!
「ど、どうしたドラグギルディ……」
「ぐ、ううううう……」
　この苦しみよう……俺のフォーライザーチェインと同じだ。限界を超えた負荷をかけたことで、ツインテールが悲鳴を上げている!!
「お前まさか、身体をブッ壊しかねない無茶な変身を!?」
「まだまだ、これからではないか!!」
「やめろ！　俺も一度、そうして自分のツインテールを傷つけたからわかる！　力任せに強くきつく結んだツインテールは、滅びを招くだけだ!!」
「我われは滅びを、死を超えたと言ったはずだ!!」
　自壊していく身体からだを一いつ顧こだにせず、猛突進してくる。
　俺はテイルカリバーを地面に突き立てると、だらりと両腕を下ろした。それを見るや地面を踏み砕いてブレーキをかけ、困惑の眼まな差ざしを向けてくるゴッドドラグギルディ。
「どうした、剣を取れ!!」
「もう、お前とは戦えない……!!」
「──何だと」
「これ以上自分のツインテールをいじめるな！　属性玉エレメーラオー

ブ無しで生き返ったってことは、今のお前たちなら人の心を奪わなくても生きていけるんじゃないのか⁉　今まで滅ぼしてきた世界に悔いて、これからは──」
「思い上がるな、幼女‼」
　困惑は憤怒に変わり、咆ほう哮こうが響きわたる。
　ゴッドドラグギルディは頭上にかざした手の平に巨大な輪を出現させ、俺目掛けて投げてきた。
　それが属性力エレメーラを奪取するリングと認識した瞬間。俺は咄とつ嗟さに地面に突き立つテイルカリバーを抜き放ち、両断した。
「我は言ったはずだ……人間とエレメリアンは、決して相あい容いれぬ存在だと。たとえ一度決着の着いた今でも、それは変わらぬ」
　怒りと悲しみ。二つの感情をツインテールと揺らし、ゴッドドラグギルディは激げつ昂こうを言葉に託した。
「そしてこうも言った。人間からの恨み言など、とうに受け慣れたと。生きるために喰らったことを、何な故ぜ悔いねばならぬ！　それは生物にとって、最大の侮辱ぞ‼」
「新たな生命を歩んで欲しいと願うことは、そんなにいけないことか！　生き方が相容れなくたって、戦友としてならわかり合えるはずだろう‼」
「どれだけ佳よき闘いを経ようと、我らは戦友になることはできぬ。奪い奪われる者同士──言葉などでわかり合えるはずもない」
「□□□□□□！」
「だからこそ我らは剣を交えるのだろう！　ツインテールを見せ合うのであろう‼」
　激情でツインテールが乱れてしまったのか。ゴッドドラグギルディへの変身が解け、元のドラグギルディの姿へと戻った。
「……とはいえ、無様を晒さらした我にも一角の責はある。言わずとも

よいことをお前に言わせてしまった」
「違う、俺は──」
　戦友になることができるって、本気で思っているんだ……!!
「今日のところはこれで引き下がる……素晴らしきツインテールを見せてもらった礼だ」
　よろめく身体からだに鞭むち打ち、背後に転送ゲートを出現させるドラグギルディ。
「だが……守護者の貴様が斯か様ようように煮え切らぬ態度のままであれば、この世界のツインテールは消えてなくなると知れ!!」
　頬ほおを張るような厳しい言葉を残した後……ドラグギルディはゲートの中へと消えていく。
　伸びすぎたツインテールは、切らなければいけない。
　その言葉に込められた意味を思い、俺はいつまでもその場に立ち尽くしていた。

　　◇

　総そう二じがゴッドドラグギルディとの再戦を繰り広げたその日の夜。
　地下基地のコンソールルームで、愛あい香かはトゥアールと二人きりで向き合っていた。
　トゥアールに相談しようと地下基地を訪れたのだが、以前のように奥にあるトゥアールの部屋ではなく、ここに案内されたのだ。
「……何でここなのよ、あんたの部屋で話させてよ」
　女の子の部屋で相談し合う……思春期女子の華が、場所が変わるだけで会議じみた無機質さを帯おびる。
　もう、愛香のツインテールはツインテールの体ていを為していない。

髪の毛にギリギリでリボンが引っかかっているだけ、という形容が正しい。八割方解ほどけている状態だった。
「すみません、総二様の匂いをずっと私の部屋に残しておきたくて……♡」
「は!?　そーじがあんたの部屋に行ったの!?」
　最近トゥアールが妙に浮かれていた理由を知り、軽い苛いら立だちと、少しの嫉しつ妬とを覚える愛香。
　大おお仰ぎように溜ため息いきを突く愛香の前に、白い小箱が置かれた。
「まずは、これを差し上げます」
　中を開けてみると、パッドに電極の付いたマッサージ機のような形をした発明品だ。
「アンチアイカシステム一三号、アイカタギラセールです」
「タギラ……え、滾たぎらせる？」
「逆転の発想です。私が研究を進めつつある愛香さんの生態に基づき発見した蛮族中枢アイカチヤクラに特殊なパルス波を流すことで愛香さんの蛮性を過度に活性化させ、自滅に追い込むためのシステムですが……今の弱々しい愛香さんになら逆に普通の効果が出るかもしれません」
「あんた、こんな時によくあたしを倒す機械なんて発明する余裕あるわね……」
「マッサージ機能もついていますが、妙な用途に使わないでくださいね。防水性には難有りですので」
「使わないわよ!!」
　このような余興では、ろくに場のあたためにもなりはしない。
　トゥアールは椅い子すを揺らしながら、ストレートに本題を言い当てた。
「怖いですか。ヴァルキリアギルディと戦うのが……ツインテール属性

を奪われるのが」
　肩を震ふるわせる愛あい香か。
「わかっていたことでしょう。ツインテールの戦士は、負ければ真っ先にツインテール属性を奪われるんですよ。二度とツインテールは結べないんです」
「……うん、わかってた。はずだった……」
「ツインテールではいられなくなるんです。あなたは今まで一度も、そのヴィジョンを思い描かなかったんですか？　自分がツインテールにできなくなった姿を」
「そこまで自信家じゃないわよ。……それに、そーじがツインテールを奪われるところを見てるのよ。当然、自分も……って思うでしょ」
　愛香は自分の髪を掬すくい取る。
「エレメリアンに勝てないって、初めて思ったの……。すごく強い奴やつが相手で……しかもそいつはツインテールの天敵で……。初めて、本気でツインテールを盗られるって思った」
　エレメリアンに畏い怖ふされ続けてきた戦士テイルブルー、愛香。
　彼女は初めて……戦いが怖いという、当たり前の感情に囚われてしまっていた。
「そうよ、怖いの……。ずっと、戦女神あいつとまた戦うことになったらどうしようって、そればっかり考えてる！　あたし、ツインテールじゃなくなったら、他に何も取り柄えないから……」
　愛香が手に掬すくったそれは、失敗したツインテールなのか、それとももはや別の何かなのか。
　二つに結ぶという単純作業さえできなくなった、努力の結晶のなれの果てだ。
「そしたら……結べなくなってたの。十年もの間、毎日皆勤賞、何千回も結んできたツインテールが……たったそれっぽっちの恐怖で、上う手

まく結べなくなっちゃってた……」
　今度は、トゥアールが自じ嘲ちようを返す番だった。
　コンソールルームの奥出口、自分の部屋に続く通路を見つめながら。
「私ね、総そう二じ様に言ったんですよ。頭つるつるにして、ヴァルキリアギルディ誘おびき出すって……。めっちゃ怒られました。……真剣に、怒ってくれました」
「トゥアール──」
　何もできない、役に立てないという不安は、等しく誰だれにでもある。
　それに任せて先走っても、ただ相手を傷つけるだけだ。
「いい加減、あなたも総二様に甘えたらどうですか。戦いなんて、いつやめたっていいんです。愛香さんには、何の責任もありません」
「──！　なんでよ、あたしだってツインテイルズでしょ!!」
　弱気になれば、厳しく叱咤してもらえると思ったのだろう。それが欲しかったのだろう。
　トゥアールの想像以上に優しい言葉に、愛あい香かは動揺する。
「あなたに責任があるとしたら、最後までツインテール属性を失わないことです。ツインテールであること……ツインテールを愛すること。それを守るのは、あなたにテイルブレスを託した私の責任でも……願いでもあります」
　尊みことにブレスの管理を任せきりの、寂しくなった右腕を見て──愛香は、深く項うな垂だれた。
「今は無理に戦わず、ゆっくり休んでください、愛香さん。これ以上苦しむあなたを見たら、それこそ総そう二じ様が先に心折れてしまいます。この世界は──それで終わりです」
　言外に足手まといだと告げるのも、トゥアールの思いやりだったが……今の愛香には、格別に堪こたえた。

　コンソールルームから地上に出て、どうやって帰ったか覚えていない。
　気がついたら自分の部屋にいて、それを自覚した瞬間、愛香はぐにゃりと揺らいでいく視界によろめいた。
　額ひたいを触ると、ひどく熱い。ツインテールに熱があると言っていた、総二の診断もあながち嘘うそではなかったようだ。
　熱病のように身体からだを蝕むしばんでいく不安に襲おそわれながら、愛香はベッドに倒れ込んだ。
「──あたし……これからどうすればいいの……？」
　か細い問いに答える者は……誰だれもいない。

　　◇

　今朝は、いつまで待っても愛香が俺の家に来なかった。
　不思議に思って愛香の家に迎えに行くと、玄関で姉の恋れん香かさんに出迎えられた。そして、愛香は未いまだに部屋で眠っていると説明される。
「えっ……愛香、学校休むんですか!?」
「ごめんね総くん。愛香、熱が出ちゃったみたい。本人が休みたいって言ってるの」
　お姉さんに無理に止められたならともかく、愛香が自分から学校を休むって言ったのか。
　ちょっとした風か邪ぜすら滅多に引かないぐらい、ずっと健康だった愛香が……。
「もしよかったら、帰りにお見舞いに寄ってくれると嬉うれしいわ」
「もちろんです」
　今日は件くだんのイースナのライブだが、終わったら見舞いに立ち寄

ろう。
「私、今日帰りが遅くなるの。未み春はるおば様にうちの合鍵かぎを渡してあるから、玄関のインターホンを鳴らさずに鍵を開けて入ってちょうだい。もちろん、愛香の部屋にもノックしないで入ってね、病人だから」
「え、でも……」
　インターホンを鳴らさないのは、愛香をわざわざ二階から降りて来させないためだというのはわかるが、さすがに部屋のドアぐらいはノックすべきじゃないだろうか……。
「私たちは家族みたいなものなんだから、気にしないで。ね？　約束よ総そうくん、ノックはしないでね」
「わかりました」
　朗ほがらかな微ほほ笑えみを浮かべているのに、妙に迫力があるな。それだけ愛あい香かが心配なんだろう。

　そういうわけで、今朝はトゥアールと二人で登校することに。
　しかしトゥアールは、幽鬼のように覚おぼ束つかない足取りだ。
「だ、大丈夫か、トゥアール」
「え、何がですか？　にっくき蛮ばん族ぞくがとうとう病魔に倒れて、〝Ｂ．Ｂ．〟が終わるんですよ？　今日から始まる〝Ａ．Ｂ．〟を楽しみましょう！」
　トゥアール的には昨日までがＢｅｆｏｒｅＢＡＮＺＯＫＵ、今日からはＡｆｔｅｒＢＡＮＺＯＫＵらしい。
　強がってはいるが、声に覇気がないところを見るとやはり愛香が心配なようだ。
「……それはともかく、愛香さんもそうですが、総そう二じ様も無理をなさらないでください。いくら心を持って再生したからといって、ネオ

アルティメギルはみんなヴァルキリアギルディの傀かい儡らいです。感情移入しても、総二様が傷つくだけですから」
　……昨日ドラグギルディと話したこと、やっぱりトゥアールには筒抜けだったか……。
　トゥアールは歩きながら俺に肩を寄せ、流し目で囁ささやいてくる。
「……えへへ。こうして二人きりで歩いていると、噂されちゃうかもしれま……」
「おはようございますわ、観み束つか君！」
　朝空に響く清せい澄ちような声に、トゥアールは勢いよく振り返った。
　慧え理り那なと桜さくら川がわ先生、お伴のメイドさんたちがこちらへと歩いてくる。
「……二人っきりになるのって、こんなに高難易度クエストでしたっけ……」
　再び幽鬼のような足取りに戻り、トゥアールは新西暦〝Ａ．Ｂ．〟の朝を歩み始める。

　　◇

　その日は放課後のツインテール部部室にいるのも、俺とトゥアール、慧理那に桜川先生……それに理事長と、少し変わった組み合わせだった。
「いいか慧理那、今日ばかりは何も気にしなくていいからな。たとえエレメリアンが現れても、構わずライブを楽しんできてくれ」
「はい、ありがとうございます、観束君」
　何な故ぜ急に理事長が部室を訪ねてきたのかが、いまいちよくわからないが……俺がその話題を出した途端、理事長は湯飲みをテーブルに置

いて尋ねてきた。
「婿むこ殿。最近、エレメリアンとやらの活動が活発になっているとのことですが……ツインテイルズの皆様は、無理をなさっていませんか？」
「それはもちろん、大丈夫です。出撃の頻ひん度どは上がっていますけど、俺たちも強くなっていますから。出撃にローテーションを組んだり、工夫してます」
　この期ごに及んで理事長に嘘うそをつくわけにもいかないが、エンドレスゲームに巻き込まれている最中だとまでは言えない。
「お母様、ツインテイルズの戦いが大詰めになってきていますの。今はどうか、見守っていていただけませんでしょうか……」
　慧え理り那なは申し訳なさそうに頼むが、今の理事長はちゃんとツインテイルズの活動を理解してくれている。
「もちろん、戦いについて母が口を出すなど差し出がましい真ま似ねはいたしませんわ。今日は、お願いがあって参りましたの」
「何ですか？」
　俺が尋ねると、
「この目で、大きなテイルブルーが見たいですわ」
　思わず、急須を取り落としそうになる桜さくら川がわ先生。
「ひどいですわ、尊みこと。変身して戦っているのなら、何な故ぜわたくしに教えてくれませんの？」
　ツインテイルズのことを知っている理事長がアナザーテイルブルーをテレビで見たら、認識撹乱装置イマジンチヤフも効果はないか。すぐに桜川先生だとわかっちゃったんだな。
「え!?　あ、それは……いえ、私のようないい大人があんな派手な格好をして人前に出ているところなど、奥様にお見せするわけにはと……」
「ひどいですわひどいですわ！　あなたの晴れ姿、真っ先に教えて欲し

かったですわ！」
　子供のように拗すねる理事長の姿が、見ていて微ほほ笑えましい。
「『子供のように拗ねる理事長が、見ていて微笑ましい』などと総そう二じ様が心の中でフォローしてくださっていそうな痛ましい仕草は慎つつしんでくれませんか、熟女の慧え夢むさん!!」
　トゥアールに詰め寄られ、広げた扇子で口くち許もとを隠して笑う理事長。
「まあいやですわ婿殿、子供のように若いだなんて。婿殿さえよろしければ、わたくしが身を以もつて指南を──」
　恥ずかしがる桜川先生、トゥアールとじゃれ合う理事長。
　みんなを微笑ましく見守る慧理那だが、思い出したように壁の時計に視線をやった。
「転送ゲートで会場の近くまで行くんだから、まだまだ余裕はあるぞ？」
　時間には几帳面な慧理那だから、十分ゆとりを持って移動しようとしているのだろうか？
「……いえ、その前にお買い物をしようかと」
「買い物？　花束とかか？」
「善いい沙すな闇あん子こさんのライブに行くとクラスのお友達に話したら、眼鏡めがね型のサイリウムを持っていった方がいいよ、と言われまして……。一番近くで売っているのはアニメショップという場所らしいのですが、観み束つか君はご存じですか？」
「行ったことはないけど、そういうアニメグッズとかを扱ってる店があるのは知ってるな」
　眼鏡型の応援グッズだったら会場の物販で売ってると思うけど、ああいうとこって開演前は死ぬほど混雑するからな。予あらかじめ用意して行けるなら、それに越したことはないだろう。

「なので、わたくし、アニメショップに行こうと思いまして……」
「婿むこ殿。不肖の娘、エスコートしてやってくださいまし。アニメショップなる魔境、ナイトの加護あらねば踏破することは困難でしょう」
　唐突に会話に入ってくる理事長。アニメショップって、魔境……なのか!?　この世代の人には、アニメって未いまだにそういう認識なのかなあ。
「えっ、お嬢様の買い物ならば私がお伴いたしますが……」
　アナザーテイルブルーの変身を解いた桜さくら川がわ先生が名乗り出る。本職は慧え理り那なの護衛なのだ、当然のことだが。
「尊みことはここで戦闘待機ですわ」
「奥様がそんな専門用語を!?」
「馬ば鹿かにしたものではありません、こう見えても学生時代はご主人様に放課後から夜中まで戦闘待機おすわりを命じられていたこともありますのよ。経験豊富ですわ」
　ご主人様って母さんのことだよな。いつもすんません……。
「わかりました。じゃあ一緒に行こうか、慧理那」
　ぱあっと顔を綻ほころばせる慧理那。
　ふと見ると、何な故ぜか桜川先生がトゥアールを後ろから羽交い締めにしていた。
　やっぱり愛あい香かがいないと、いつもどおりの日常も何か違うように感じてしまうな。
　俺の胸には、ピースの欠けたパズルを見つめるような寂しさが去来していた。

◇

善沙闇子のライブが行われるのは、俺たちの住んでいる地域からは遠く離れた東京都心だ。

現在時刻はおよそ三時半。転送ゲートを使って現地に行くとはいえ、開場時間が五時なことを考えると、あまりのんびりもしていられないな。

アニメショップまでの道すがら。慧理那は遠えん慮りよがちに俺を見上げ、柔和に微ほほ笑えんだ。

「ふ、二人でお買い物……なつこみ以来ですわね」

「桜川先生もいたぞ⁉」

あの時、本人もしきりにそれをアピールしてたんだけど……。

でも、慧え理り那なの言うとおりだ。特殊なイベント事の中じゃなく普通にこうして二人で買い物をするなんて、不思議な感じがする。

「津つ辺べさんの誕生日パーティーの時、わたくしの誕生日はまだまだ先だと思っていましたけれど……早いものですわ。わたくし、一七歳になるんですのね」

「もう一個お姉さんになるな」

俺は二月生まれだから、慧理那とはしばらく二歳差になる。

「一六歳からお婿むこさんを探して、一七歳になる頃ころにはその方と寄り添い過ごし──一八歳で結婚をする。神しん堂どう家の掟に従い生きてきましたが……」

「俺の無茶のせいで、神堂家の掟を破ることになっちゃったんだよな……」

ツインテールを守るためとは言え、お家問題に首を突っ込んでしまったんだ。

慧理那の縁談話を壊すために理事長室に乗り込んだのを、まるで昨日のことのように思い出せる。

「……いいえ。結局、ちゃんと守っていますのよ」

大切なものを胸にそっと抱き締めるように、慧理那が何かを囁ささやいた。
温かい気持ちになりながら、思い出話に花を咲かせて歩く俺たち。
不意に、俺の目の前に半裸の男子二人が出現した。よく見ると、イラストだ。いつの間にかアニメショップに着いていたのだ。
軒先に、めっちゃ胸襟を開いた男子二人が濃厚に見つめ合うポスターが貼ってある。
慧理那は子犬のように店内に駆け入ると、入り口すぐの新刊コーナーで目を留とめた。
嬉き々きとして、フィルム包装された冊子を手に取る慧理那。
縁側でうたた寝をする男の側そばで、やはり男が微ほほ笑えんでいる表紙だ。……友情、だよな。
「観み束つか君！　うすいですわ！　この本うすいですわ！　うすい本ですわ!!」
「そうだな薄いな!!」
店内で注目を集めてしまう。女の子の客が多いな……アニメ専門店って、男の方が多いイメージだった。
俺たちが「薄い本」の存在を知ったのは、さっき慧理那が言っていた夏コミにエレメリアン対策で参加した時のことだ。その時の楽しい思い出が蘇よみがえったんだろう。
「ごえええええええええええええええええ神堂さんンンンンンンン⁉」
そうそう、こういうアニメキャラじみた大おお袈げ裟さなリアクションをする人のサークルスペースで……ん？
「まあ、牧もく須す先輩!!」
陽よう月げつ学園高等部の元生徒会長、牧須豊と美み得えさんがそこにいた。
一年の時点で生徒会長になった慧理那からすると二つ上の先輩で、現

在は大学生だ。
　夏コミでは、サークル参加していた彼女に会った。ウェーブがかったふわっとしたツインテールと、拡声器を通すような大きな声が印象に残っている。
　思いがけない再会だな。牧もく須す先輩は、こういう店にはよく来るのかも。
「おおー、何々、カレシ君とデート⁉　ちょーっとやるじゃん神しん堂どうさーん！」
「えへへ……」
　ウェーイウェーイとテンション高く肘ひじで慧え理り那なを小突く牧須先輩。
　相変わらずこの人は、俺と慧理那のことを誤解しているんだな……。
　しかし、いいツインテールだ。そちらも相変わらずで何よりだ。
「お久しぶりです、牧須先輩」
「わ、君も私のこと覚えててくれたんだー！」
「はい、一度会ったツインテールは二度と忘れません」
　牧須先輩は、バレリーナのような足取りで慧理那に近づいていった。
「……神堂さんのカレシ君、変わってるね……」
「けれど、とっても頼りになる、素敵な人ですのよ」
「にゃー‼」
　自分を抱き締め、身み悶もだえする牧須先輩。
「今日は何しにここに来たの？　あたしはまあ、週三で来てる地縛霊みたいなもんだけど」
「これから善いい沙すな闇あん子こさんのライブに行きますの。それで、応援グッズを買おうと……」
「わお、神堂さんがライブ⁉　しかも闇子ちゃんかー！　神堂さんがハマっちゃうって、さっすが国民的アイドル闇子ちゃんだねー！」

　その国民的アイドルが自分たちの親友だと言ったら、どんなリアクションをするだろう？
　そんなことを考えているのだろうか、悪戯いたずらっぽく含み笑いをする慧理那。普段の重責から解放された、年相応の女の子に見えて微ほほ笑えましかった。
　勝手知ったるという感じで、アイドルの応援グッズなどを売っているフロアへは牧須先輩が案内してくれた。
　陽よう月げつ学園の新旧生徒会長の楽しげな語らいを、一歩離れて見守る。
　俺もお役御免かな。そう思っていると、タイミングを見計らったかのようにポケットの中でトゥアルフォンが震ふるえた。
『総そう二じ様、エレメリアンが出現しました。尊みことさんに向かってもらったのですが……間の悪いことに、続けてもう一箇所に出現してしまいました……しかも、場所が海外です』
「サンキュー、トゥアール。すぐに行くぜ、もちろん俺一人で」
　牧須先輩が、ぎょっとしながらこちらを見ている。
「……神堂さんのカレシ君、やっぱ変わってるね……さっきからめっちゃツインテールツインテール連呼してるけど、大丈夫？」
　しまった、トゥアルフォンのリアルタイム暗号化機能の弊へい害がいだ。
　俺の通話は、傍はたからは古代ツインテール語に聞こえるんだった……。
「慧え理り那な、エレメリアンが出た。俺の分まで、イースナのライブを楽しんできてくれ」
　そっと慧理那に耳打ちする。
「すみません……」
　俺は慧理那から離れ、ニコニコこっちを見ていた牧もく須す先輩に挨

あい拶さつをする。
「牧須先輩。俺ちょっと用事できたんで、後は二人で楽しんでください！」
「えっ、帰っちゃうの？　神しん堂どうさん置いて⁉　もっとお話聞きたいのにー‼」
　放課後のナイトの役目はここまでだ。
　また今度ゆっくり買い物しようぜ、慧理那。

　　◇

　無事応援グッズも買い、豊と美み得えと一緒に店を後にする慧理那。
　ビルのオーロラビジョンに、テイルレッド速報が映し出される。道ゆく人たちが足を止め、テイルレッドの可か愛わいさに見入っている。
　たった今出撃した総そう二じを思い、慧理那の顔に影が落ちる。
　逆に豊美得は笑顔一色になりながら、頭の後ろで手を組んだ。
「いんやー、最近エレメリアンが元気で困ったもんよねー。この前も別のアニメショップの帰りにさ、エレメリアンに会っちったよ」
「え……えぇ⁉　お怪け我がはありませんでしたの⁉」
「すぐいなくなったもん。テイルレッドたんに会えると思って期待したんだけどさー。何かね、おっぱいあって女の子みたいなエレメリアンだったよ。白衣着てるみたいな見た目でさー」
　女性型エレメリアン……復活した貴の三葉ノー・ブル・クラブの戦士だろうか。
　やはり、一般人にとってはエレメリアンは脅威というより、遭遇すればツインテイルズ……いや、テイルレッドに会える、程度の存在なのだろう。
「牧須先輩は、エレメリアンを恐れない、勇敢な方ですのね！」

「冬コミ原稿の締切も近いし、ビクビクオドオド暮らしてらんないっしょ！」
「ふゆこみに参加されますのね！　そこでまたお会いできますわ!!」
「あ、あははは……無理しないでね、あたし三日目に配置されてるから……神堂さん、大おお晦日みそかは家族と過ごすでしょ？　っていうか、冬コミの存在は聞いてたんだね」
　さすがにエレメリアンから教えられたとは言えない。
「でもさー、ホントに変わったよね、神堂さん。あたしが陽よう月げつにいた頃ころはどこ歩くにしても後ろにメイドさん連れて、ザ・お嬢様……って感じで、ちょい近づきがたかったかな？」
「そうですか……」
「今はね、普通の女の子ってカンジ。絶対今の方がいいよ、神しん堂どうさん」
　自分をそうしてくれたのは、他ならぬ総そう二じだ。そして慧え理り那な自身も、今の自分の方が断然気に入っている。
　ライブ会場へは転送ゲートを通って行くので、名残惜しいがそろそろ豊と美み得えとは別れなければいけない。
「それでは、ふゆこみ……牧もく須す先輩のさーくるに、必ず伺いますわ！」
「んー……よし、あたしも腹括るさー！　おいでおいで、またカレシ君と一緒に!!」
　夏コミの時にはリアルの知り合いに自分の本を買われることをひどく恐れていた豊美得だが、今日の慧理那とのやりとりを通して、態度が軟化したようだ。
　慧理那が豊美得に別れを告げていると、周囲がにわかにざわめき出した。
「なんだこのいかがわしい本はー！　日も高いうちから乙おと女めが

よってたかって男の裸を読み漁あさるとは嘆かわしい！　私の詩集を読んで清らかな心を取り戻せ!!」
　フクロウ型の怪人が、先ほどまでいたアニメショップの近くで騒いでいる。
　慧理那はアーカイブ映像で見ただけだが、それはかつてテイルレッドと戦いを繰り広げた戦士。文学に一家言ある昔気質のエレメリアン、オウルギルディだ。
　オウルギルディの後ろからは、黒ずくめの戦闘員アルテイロイド。
……だけではない。貴の三葉ノー・ブル・クラブ擁する赤い戦闘員アルテイロイドまで大挙して行進している。
「モケッ」
「モキュー」
「モッケッケ」
「モッキュッキュー」
　甲かん高だかい赤い戦闘員アルテイロイドの声も交ざり、何とも奇妙な赤と黒のコントラストができ上がってしまっている。
　総二はすでに出撃している……つまりこれは、同時侵攻だ。
「おお～、またエレメリアンだ。でも赤いモケーは初めて見るねー。レアキャラ？」
　いいのか悪いのか……豊美得は完全にエレメリアンに慣れてしまっている。
　だが彼女が傍そばにいる以上、ここで変身して戦うわけにはいかない。戦闘待機している尊みことを救援に呼ぶべきだろう。
　最善策を模索する慧理那の前に、戦闘員アルテイロイドたちを掻かき分け、長身の怪人が姿を現す。
　その姿を見た瞬間──慧理那は、トラウマを呼び起こされて身を強こわ張ばらせた。

「ふはははははは！　今度こそ、この世界の生きとし生ける全てのツインテールを我われらの手にするのだ────っ‼」

　忘れもしない銅ど鑼ら声。慧え理り那なの視線の先に立っていたのは、リザドギルディだった。

　　◇

　久々のライブ。善いい沙すな闇あん子こは、舞台袖そでから客席を眺め見た。
　会場は二階席まで満員だ。それはいつものことなのだが、友達が観に来るというだけで、そわそわする。
「慧理那は招待者席におるはずじゃが……一度場所を見つけたらそこばかり見てしまいそうじゃ。確認せずにおくぞ、メガ・ネ」
　サメの着ぐるみマスコット・メガネドンになったメガ・ネも、やる気十分だ。
「りょーかい。総そう二じ君たちは来れそうなんか？」
「残念じゃが……トゥアールから連絡があってな、さっきエレメリアンが出現したそうじゃ。総二は約束通り、一人でそれを倒しに向かってくれた。頼れる彼氏じゃ」
　このライブを慧理那に捧げたら、また戦い漬けの日々だ。
　まずは、今日のこのライブに全力を尽くそう。
　開始時間だ。善沙闇子は颯さつ爽そうと歩みを進め、昇降機の搭乗口へと向かった。

　光線の演出で派手やかに彩いろどられる会場。

　ステージの中央がポップアップし、善沙闇子の登場に沸き立つ観客たち。
　メガネドンが得意のダンスパフォーマンスで一気に会場を温める中、闇子はオープニングトークをスタートさせる。その締めは、もちろんこれだ。
『もうすぐ、私の親友の女の子が誕生日なの！　だから今日は、その子のためにもいーっぱい眼鏡めがねっちゃうね!!』
　本当はこのステージに本人を呼びたいところだが、慧理那はこういう雰囲気は初めてだろうし、立場ある人間だ。円盤発売用に撮影もしている中でそれは、難易度が高いだろう。
　この会場のどこかで観てくれている。イースナにはそれで十分だった。
『それじゃー最初の曲いっくよー！　「もう逃がさない」っ!!』
　セットリストの一曲目を飾るのは、イースナがツインテイルズになってから初めてリリースした思い出の曲。
　これは総二に贈った（重すぎる）ラブソングなのだが、鈍い総二は気付いていないだろう。
　同じ男を愛する親友に捧げる最初の歌として、これほど相応ふさわしい曲もない。
　疾走感のある前奏で会場のテンションがＭＡＸになった、その時。
「はっはー！　拳こぶしが元気！　見える腋わき！　冬は厚着！　だけどライブは熱くてう・す・ぎ！　メガネウラギルディ参上!!」
　一階席のドアが乱暴に開けられ、エレメリアンが会場内に入ってきた。口上がラップ調なのが、ＴＰＯを考慮しているようで逆にイラッとさせる。
　腋属性アームピットのメガネウラギルディに続き、何体かのエレメリアンや、無数の戦闘員アルテイロイドが次々に満員の観客席に押し寄せ

る。
「……んなっ……同時侵攻かぁ!?　トゥアールめ、居眠りでもしておるのか！　なんで会場ここにエレメリアンが辿たどり着くまでに迎撃させんのじゃ！」
　闇あん子こは小声で毒づくと、メガネドンに観客の先導を託す。
『みんなー、一旦休憩だよー！　メガネドンの後についてエントランスに移動してねー！』
　闇子は避難して、逃げて、など不安を煽あおる言葉を選ばず、明るく観客に呼びかけた。
　観客もライブが中断された落胆こそあれ、エレメリアンに怯おびえてパニックになったりはしていない。ひとえに、日頃ごろのツインテイルズの努力の積み重ねだ。
【三列縦隊でついてきてね】
　メガネドンがスケッチブックに書いたその文字は、見やすくステージのスクリーンにも投影される。踊るようにコミカルな動きで先導して、観客を移動させていく。
　その際、道を塞ふさぐ戦闘員アルティロイドをメガネドンがヒレでパワフルにブッ飛ばしたのも功を奏した。この怪人の突然の襲来がステージイベントじみたものに思え、安心感をもたらしたのだろう。
　闇子は神眼鏡ゴッドめがねの蔓をさすり、周囲のサーチ結果をレンズに投影した。
　観客、スタッフともに、退避が完了したのを確認する。
　声のトーンを落とす必要もなくなり、トゥアールに通信を繋つないで不満をぶつけた。
「……トゥアール！　何をしておるのじゃ、年とし増まブルーの方も出撃させてくれ！　このライブのために今まで出撃シフト入れまくったのじゃ、約束じゃったろう!!」

すでに会場内への侵入を許してしまった以上、すぐにでもアナザーブルーがここに来て、エレメリアンを外に誘導して戦ってもらうのが確実……なのだが。

『……落ち着いて、よく聞いてください……イースナ』

焦しょう燥そうを帯おびたトゥアールの声に、胸騒ぎを覚える闇子。

『増援は送れません。総そう二じ様も、尊みことさんも、みんな戦っています……！　同時に四か所にエレメリアンが出現しているんです!!』

「よ、四か所同時じゃと!?　何な故ぜじゃ！　どうして、今日に限って!!」

ネオアルティメギルの侵攻が始まってから二週間以上に及ぶ連日連戦、ここに来ての一挙投入数の増大に、作為的なものを感じずにはいられない。

「……待て、四か所……？　みんな戦ってる……じゃと!?　それでは……」

『慧え理り那なさんはその会場にいません……彼女の近くにもエレメリアンがいるんです……』

「慧理那まで──お、おのれネオアルティメギル……!!」

怒りに震ふるえる指で、神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを持ち上げる闇あん子こ。

「ッ……グラスオン!!」

煌きらびやかなアイドル衣装に代わり小さな身体からだを包んでいく、黒き戦闘装衣。

闇やみ色の波光を爆裂させながらマントを翻ひるがえし、テイルブラックへの変身が完了する。

悔しさに歯を食いしばりながら、エントランスにいるメガ・ネに通信を送った。

「メガ・ネ！　トゥアールの通信に従って慧え理り那なの元へ向かって

くれ！　ここはわらわが五分で片付ける、少し早いライブの休憩時間インターバルじゃ!!」
　が、返ってくるメガ・ネの音声の後ろが、やけに騒がしい。
『こっちにもエレメリアンがおった……エントランスじゃ危険や！　観客のみんなは、もっと遠くに避難させな!!』
「ば、馬ば鹿かな……」
　こちらの焦しよう燥そうを読み切ったかのような布陣。悪意がじわじわとにじり寄ってくる。
「あらぁ？　ファンが思うように増えなくてアタシに泣きついた子が、今は一丁前にライブの流れも組み立てているのかしら？」
　狼ろう狽ばいするブラックの立つステージに、足音を響かせて巨漢が近づいてきた。
「むう！　貴様は⁉」
　アイドル・善いい沙すな闇子をプロデュースした、アルティメギルーの演出家。
　三つ編み属性トライブライドに殉じた戦士、ケルベロスギルディだ。
　三つの首を備える冥界の番犬──死人の軍隊がこれほど似合う者もいない。
「ダーちゃん……ううん、今はテイルブラックだから……ブーちゃんかしら？」
「こんな美少女を捕まえて、何じゃその子ブタさんじみたあだ名は!!」
　観客席を縫ぬい、エレメリアンと戦闘員アルテイロイドが次々とステージに集まってくる。
　この数をまともに相手にしていては、ライブの再開は遠い。ブラックは知った仲であるケルベロスギルディに交渉を試みた。
「ケルベロスギルディよ、貴様も来ていたのなら話は早い！　いずれ必ず勝負はする、しかし今日のところはわらわの眼鏡に免じて引き下がっ

てくれ！　お前とわらわの仲じゃろう!!」

　幾度とタッグを組んだケルベロスギルディならば、話が通じるはず……そう思ったのだが。

「ダーメ」

　返ってきたのは、差し出した手をはたき落とすような、完かん膚ぷ無きまでの拒絶だった。

「今日に限ってやたらめったら侵攻してきおって！　こんな悪い偶然で、大切なライブを潰したくないのじゃ！　貴様とてライブを愛する者、それは本意ではなかろう!!」

「……まだわからないの？　偶然じゃないわ。アタシ、あなたが今日ライブするって知って、狙ねらって同時侵攻したのよ。他のコに声をかけて誘ってね」

「な、何な故ぜ……！　そんな、ひどい……ことを……」

「――決まってるでしょ？　アイドル善いい沙すな闇あん子こに引いん導どうを渡してあげるためよ」

「……!!」

　三つ首の獣けものの六つの瞳ひとみ、その全てに、不気味な青白い炎が揺らめいて見える。

「アタシはアルティメギルを引退して、安らかに余生を過ごしていた……それを引っ張り出したのはあなたでしょう？　この世界を征服するために、アタシのプロデュースと力を合わせてのし上がった！　ええ、そこまではいいの！　戦いで死んでも、後悔はなかったわ!!」

　オネエじみたねっとりとした口調と裏腹、怨えん嗟さの波動が全身から立ち昇っている。

「それが生き返ってみたら、あなたはツインテイルズに寝返って、しか

もアイドルを何食わぬ顔で続けている……アルティメギルのことも、アタシとの仕事も、何もかもなかったことにして！　許せると思う⁉」
「っ……そ、それは……」
　ケルベロスギルディは大きく空気を吸い込むと、口から火球を撃ち出した。
　ブラックを攻撃するためのものではなく、会場を破壊するための暴虐だ。
「！　やめろ……やめろ――っ‼」
「今日のライブをエキサイティングに演出してあげる。お礼はいらないわよ、あなたとアタシの仲じゃない……ブーちゃん！」
　あの穏やかで優しかったプロデューサーが、復ふく讐しゆう鬼と化して自分の前に現れた。
　振り払っても振り払っても、過去が追いかけてくる。
　悪に荷担し、人間に敵対した、忌むべき日々が。
「あ……ぁ……」
　火球がステージの暗幕に燃え移り、立ち昇る炎がささやかな夢を呑み込んでいく。
　視界が歪ゆがみ、ステージの上でよろめくブラックは――
『イースナ、しっかりしなさい！』
　凛りんと響く声に、すんでのところで踏み堪えた。
『あなたはもう、立派なツインテイルズです。自分の大切なものを守るために戦えるはず……落ち着いて、一つずつ対処していきなさい。あなたなら絶対に大丈夫です‼』
「……トゥアール……」
　ブラックの心に呼応するように、神眼鏡ゴッドめがねのレンズには光の漣さざなみが流れていった。
　手にしたダークネスグレイブの斬ざん閃せんが黒き疾風を巻き起こ

し、周囲の炎を吹き飛ばす。
『イースナちゃんどないしよ、ウチらどうすれば……!!』
　自分の動揺が伝わったせいだろう、メガ・ネも状況に翻ほん弄ろうされ続けていた。
　ブラックは先ほどのトゥアールに倣ならうように、毅き然ぜんと一喝する。
「落ち着けい、メガ・ネ！　観客をもっと遠くに避難させた判断は正しい！　まずは、そこにいるエレメリアンを殲せん滅めつしてくれ！　わらわたち二人のどちらか、戦闘が早く終わった方に合流！　そうしてここを全て片付けたら、慧え理り那なの元へ行く！　よいな!?」
『……うん、わかった！　ごめんなイースナちゃん、ウチ、速攻片付けたる!!』
　この先の手を誤らず、最短最速でエレメリアンを撃滅すれば、今日中にライブを再開することも可能なはずだ。
　希望に縋すがるのではなく、自ら希望を作り出す。
　それが、総そう二じに教えられたツインテイルズとしての信念だ。
「わらわがこれからもアイドル活動を続けるのであれば……これしきの状況、わらわたちだけの力で切り抜けねば！　守らねばならん!!」
「うふ、続けるつもりなのね……アイドル」
　真ん中の顔の口くち許もとに指を寄せ、しなを作るケルベロスギルディ。
「貴様への躾しつけに手心を加えたのが過ちであったな……おかげで今では、随分キャンキャン吠ほえよるようになったわ」
　悪逆への返礼とばかり、猛然とダークネスグレイブを振るうブラック。
　ケルベロスギルディの左右に帯同していたエレメリアンが二体、一気に爆散した。

「今度こそ完かん璧ぺきに服従させてくれるぞ！　かかってくるがよい、駄犬!!」

◇

「うーん、険しい顔の唇くちびるはいまいちですねぇ……」
　俺の放ったブーメランモードのプログレスバレッターの直撃を受け、のほほんとした断末魔の声を上げるパピヨンギルディ。
　手元に戻ってきたバレッターを収納し、基本中結形態ノーマルチエインに戻った俺は、乱れた呼吸を整えた。誰だれのおかげでしかめっ面になってると思ってやがる……。
　しかもまた海外だ、こっちに来たらいきなり夜だぞ！
「はあ、はあ、はあ……何だよ、この数……」
　倒しても、倒しても……途切れることなくエレメリアンや戦闘員アルテイロイドが現れる。
　俺の周囲を円状に敵が囲んでおり、一体倒すごとに次の相手が補充されてくる。
　終わりの見えない勝ち抜き戦。さながら、闘技場に放り込まれた剣闘士だ。
「……いいさ。今日は、てめえらが飽きるまで戦ってやる……!!」
　今頃ごろ笑顔でライブを楽しんでいる慧理那やイースナのことを思えば、闘志なんていくらでも湧いてくる！
　そんな突っ張りも虚むなしく。程なく俺は、四か所同時侵攻のことを、通信で聞かされた──。

◇

「……やれやれ、本当に引っ切りなしにやって来るな、お前たちは」
　現場の中学校のグラウンドに到着した瞬間に、アナザーブルーは十数体の戦闘員アルテイロイドを吹っ飛ばし、埃ほこりを払うように手を打つ。再びのツインテイルズとしての戦いも慣れたものだ。
　しかし、よほどテイルブルーの青が一般人の恐怖の対象なのだろう。生徒たちは、アナザーブルーを見た瞬間一目散に逃げてしまった。
　グラウンドに足音を響かせ、新たに近づいてくる怪人。
「テイルブルーの胸が大きくなった真相、様々な憶測を呼んでいるが……こうして実際に見る限り、代替わりしたという線が濃厚か」
「代替わりじゃない、代打だ」
　横を向きながら訂正したアナザーブルーが見たものは、カニのような容貌のエレメリアン──クラブギルディだった。
　うなじ好きのこのエレメリアンのこと、部活中の女子のうなじを狙ねらったのだろう。
「そんなことはどうでもいい。重要なのは、今テイルブルーである貴様が、見るからに前よりも年上なことだ！　瑞みずみずしかったあのうなじが、かくも年老いてしまったことが許せん‼」
「馬ば鹿か者。休んでる方のブルーと二、三歳しか違わないぞ」
　相手が真実を知らぬのをいいことに、閻魔大王の舌が逆に抜けるレベルの大嘘うそを繰り出すアナザーブルー。
「無理をするな、貴様のような年とし増まに戦いはきついだろう。帰ってリンパストレッチにでも躍起になるがいい‼」
　両手のハサミを小気味よくチョッキンチョッキンさせるクラブギルディ。
　その煽あおり文句が、アナザーブルーの記憶を数か月前まで立ち戻らせた。
　まだツインテイルズの正体を知らなかった時、執しつ拗ようにを慧え理

り那なに絡んできた怪人──幼い頃ころから慧理那を警護してきた尊みことが、正面切って戦いを挑み、手も足も出なかった。
　初めて決定的な敗北感を味わった不埒者だ。
「──そうだ、思い出したぞ貴様……私に暴言を吐いたカニだ!!」
『のー！　正体がバレるような言動は慎つつしんでください、尊さん!!』
「すまんすまん……しかし、そうとわかれば借りは返さなければなるまい」
　トゥアールの制止に悪びれつつも、アナザーブルーは不敵な笑みとともに指を鳴らした。
　主人の警護者ではなく、慧理那と肩を並べる仲間として。桜さくら川がわ尊は、この仕事たたかいに挑む。
「ツインテイルズとして──私が成敗してくれる!!」

　　◇

「トゥアールさん！　確認できていますか、こちらにエレメリアンがいるのです……！　わたくし今はとても変身できる状況ではありませんわ、救援をよろしくお願いします!!」
『ごめんなさい……レッドもアナザーブルーも……みんな、交戦中なんです！　この場は逃げてください、慧え理り那なさん!!』
「尊みこともすでに出撃しているんですの!?」
「ひぇ、どうしたの神しん堂どうさん……めっちゃ痴ち女じよみたいなこと口走ってたけど!?」
　先ほどの総そう二じと同じく、トゥアルフォンを使ったことで誤解されてしまったようだ。
　救援を望めないとなると、一旦豊と美み得えと逃げて、別れた後で戦

いに戻ってくるしかない。
「牧もく須す先輩、早く逃げましょう！」
「ほえ？　うん」
　いまいち危機感の足りない豊美得の手を引いて、走り出す慧理那。
「……あー！　そこ行く君は、エロ本を買っていた文学少女！　よく覚えているぞ!!」
「っ……！」
　包囲網を突破できず、慧理那の眼前に滑り込むようにして丸っこいフクロウのエレメリアンが行く手を塞ふさいでくる。まずいことに、オウルギルディが慧理那に目をつけてしまった。
「えっ……神堂さんがエロ本!?」
「すみません、一身上の都つ合ごうでえろほんを買いに行った時がありまして……」
「い、色々あるんだね、神堂さんも……」
　トゥアールのナビゲートを受けて路地裏に飛び込もうとするが、運動の苦手な慧理那では総二たちのように颯さつ爽そうと駆け抜けることなどできない。
「モケー！」
　戦闘員アルテイロイドに行く手を塞がれ、道の壁伝いにどんどん追いつめられていく。
「う、うう……」
　ブレスが可視化されていない右手に、思わず視線を送る慧理那。
　人前で変身することだけは、断じてできない。
　多少軟化してきたとはいえ、世間のテイルイエローへの認識は、変質者。
　まして、自分のことを自慢の後輩だと誇ってくれる先輩には……絶対に見せられない。

「おお！　そこな女史、ふわふわのよいツインテールをしておるな！」
　僅わずかな逡しゅん巡じゅんが致命的となり、とうとうリザドギルディまで近づいてきた。
　しかも、豊美得のツインテールに目をつけてしまっている。
　ついに蟻ありの子一匹入り込めないほどに二体のエレメリアンと無数の戦闘員アルテイロイドに囲まれ、退路を断たれる慧理那。
　中途半端に逃げて大通りを外れたせいで、もう周りには人っ子一人見当たらない。
　自分が囮おとりになり、せめて豊美得だけでも逃がせないか──と、最後の手段が頭をちらつく。
　せめて、イースナは無事にライブをできていますように……。
「□□□□□□！」
　白光となって脳裏を過よぎる、先ほどのトゥアールの通信。
　レッドと、アナザーブルーと、みんな、と言った。みんな……二人以外も、と。
　トゥアールは自分を案じて口にできなかったのだろうが……戦っているのだ。
　テイルブラック、善いい沙すな闇あん子こも。
　今日のライブのことを笑顔で何度も嬉うれしそうに語ってくれたイースナが……親友が、悲痛な面おも持もちで戦っている姿を思い描き……慧え理り那なは、きつく歯を食いしばった。
　……ああ。自分はなんて、覚悟が足りなかったのだろう──。
「君は改心できる！　私のポエム集を読めば、二度とエロ本などという魔道に魂たましいを引かれることもない!!」
　気がつけば、オウルギルディが自分にノートを差し出している。
　そしてリザドギルディは、属性力エレメーラ奪取のリングを豊と美み得えへと向けている。

「わーっ！　私のツインテールは趣味と同じで腐ってるから！　食べても美お味いしくないよ⁉」
　慧理那はオウルギルディを突き飛ばし、豊美得の前に立ちはだかった。
　両手を拡ひろげ、リザドギルディを睨にらみ付ける。
「――そうはさせませんわ」
「ほほおう、なかなかの幼な子！　しかも、どうやらお嬢様のようだな！　お嬢様ツインテールとは、まさしく完全体に、近……い……？」
　慧理那のツインテールを見るにつれ、リザドギルディの歓喜はやがて困惑を帯おび始めた。
「少女よ、お前とはどこかで―」
「『腕白な幼女には、子猫のぬいぐるみがよく似合う』―そう言って、わたくしを攫さらいましたわね、リザドギルディ」
「俺の名を⁉　しかもその言葉は……はっ⁉」
　そして困惑は確信に変わる。
「そうだ、そのツインテールは！　俺がこの世界に降り立ち、最初に究極のツインテールと見定めた少女ではないか！」
　リザドギルディもまた、目の前の少女に因縁があることを悟ったのだ。
「しかし何な故ぜだ、俺が奪った属性力エレメーラは、俺が倒されたことで持ち主に還かえったはず……今のお前からは、全くツインテール属性を感じない！」
　当然だ。ツインテール属性は、ブレスの能力によって秘め隠されているのだから。
　その心のツインテールを、慧理那は―。
「あの時、あなたに捕まって……わたくし、本当は怖くて泣きそうでしたわ」

「泣いてもよいのだぞ……涙はぬいぐるみが拭ぬぐってくれよう！」
「いいえ泣きません！　今のわたくしには、その恐怖と涙から、人々を守る力があるのですから!!」
　決然と胸の前に構えた右腕。
　そこには、鮮烈な雷光黄イエローに彩いろどられたテイルブレスが輝いていた。
「し、神しん堂どうさん……それ……」
　ご主人様に、総そう二じに、本当の自分を見て欲しいと希こいねがい、戦い続けてきた少女。
　彼女は今、本当の自分を「見ないで」と祈る。
　しかし、そんな心の中でのか弱い願いとは裏腹。
　現実で邪悪と相対する慧え理り那なは、眩まばゆいばかりの光を双そう眸ぼうに宿していた。
「――――テイル！　オン!!」
　人々にどれだけ蔑さげすまれようとも、己の心弱さ故ゆえに何度見失いかけても、決して手放さなかったもの――ツインテールという名の正義をまとう。
「お、おおお……!!」
　リザドギルディが、オウルギルディが、そして豊と美み得えが、雷に撃たれたように戦慄わななく。
　光を爆裂させて現れる、ツインテイルズ一の重じゅう装そう甲こう戦士――テイルイエロー。

「ぬいぐるみは無要ですわ！　わたくしはもう、腕白な子供ではありませんもの!!」

属性玉 －設定資料－ 01

エレメリアンから獲得した属性玉（エレメーラオーブ）は、
テイルギアに搭載されている
属性玉変換機構（エレメリーション）に装填することによって
様々な特殊能力を発動し、
ツインテイルズの戦闘を補助する。
ここではその効果を紹介していく。

01 ツインテール属性

持ち主 ドラグギルディなど

テイルギアを生成するテイルブレスの核として使用される。ツインテイルズが現在所持しているツインテール属性の属性玉は全てテイルギアに使用されているが、もし新たに獲得しても、同属性の二重起動は非常に危険なため属性玉変換機構で使用することはできない。総二はアルティメットチェインになる際、自らのツインテール属性をツインテイルブレスに可逆変化させている。

02 人形属性（ドール）

持ち主 リザドギルディ

人形やフィギュアなどを簡易操作することができるようになる。テイルブルーはフォクスギルディの操るフィギュアをこの能力で「停止」させることで動きを封殺した。操作できるのは人形、ぬいぐるみなど可動する物に限られ、石像など形が固定されたものは操作することができない。愛香は自宅でブルーに変身し、この属性玉を使って何かの練習をしたことがあるようだ。総二の顔写真とぬいぐるみが使われたらしいが……？

03 体操服属性（ブルマ）

持ち主 タトルギルディ

単純な重力制御を可能とする属性玉。プラス、マイナス両方向の制御が可能で、重力を軽くすることで巨大な岩を風船のように持ち上げたり、逆に重力を加積すれば投擲した武器を敵の眼前で再加速させることができるなど、扱いは難しいが戦いの幅が広がる能力。テイルギアは元々身体能力を強化する装甲なので、そこにさらに強化能力を重ねて扱うには戦闘センスが必要とされる。

第五章　結ばれたツインテール。

　クラブギルディはアナザーブルーの攻撃を躱かわし、得意の高速移動で背後に回り込む。
「研けん鑽さんを積み重ね、うなじを見るために磨き抜いたこの速度！　貴様には追いつけぬ!!」
　しかし、確かにうなじを捉えたはずのクラブギルディの目に飛び込んできたのは、不敵に口くち端はを吊つり上げるアナザーブルーの顔だった。
「何ッ……真正面!?　俺に知覚できぬ高速で振り返っただと!!」
「研鑽なら、私も常日頃ごろから積んでいる。婚こん姻いん届とどけを渡す研鑽をな」
　泡を食って疾走し、すぐにアナザーブルーの後ろを取り返す。その頃にはアナザーブルーは、決然とクラブギルディを見据すえている。
　体術の粋すいを尽くし、間合いを取っても、アナザーブルーが追いすがってくる。
　どこまで逃げても婚姻届を渡してくる女傑──クラブギルディは身体からだを赤熱化させてまで背後を取ろうと爆走する。
　青の残像と赤の残像が宙に尾を引き絡み合い、鮮やかなストライプを描く。
「私は相手がどれだけ逃げようと、婚姻届を渡し続けてきた。正々堂々と真っ正面からな！　こそこそと後ろに回り込まなければ何も伝えられぬ、貴様などに負けるものか!!」
「こ、これが追い込まれた年とし増まの力……迸ほとばしる執念、恐る

べし!!」
　追いつめられたクラブギルディは、ついに自分の鍛きたえた速度以外に恃たのみを置いてしまった。
「……強戦闘員メガアルテイロイド!!」
　強戦闘員メガアルテイロイド──戦闘力強化を施ほどこされた戦闘員アルテイロイドが二人、クラブギルディの合図で飛び出してくる。アナザーブルーの左右の腕をそれぞれ羽交い締めにした強戦闘員メガアルテイロイドは、力任せに一八〇度回れ右をさせ、クラブギルディにうなじを差し出そうとしてきた。
「こ、これで貴様のうなじを見てやれる……観念せよ!!」
「……馬ば鹿かめ。せっかく追いかけっこにつき合ってやったのに、あっさりとリタイアしたな」
　アナザーブルーの左腕が発光し、属性玉変換機構エレメリーションが発動する。
「この属性だけは、得意なんでな！」
〈属性玉エレメーラオーブ──母属性マザー〉
　さらなる超高速を身に宿し、その場から消え去るアナザーブルー。遅れて大気が破裂し、強戦闘員メガアルテイロイドが吹き飛ばされて空中で爆発した。
「完全解放ブレイクレリーズ……！　だったよな？」
　フォースリヴォンから実体化させて即座に、ウェイブメイスを完全解放ブレイクレリーズする。メイスの先端の箒ほうきが、笠が開くように展開した。
　蒼あおく光り輝く棍こんを投げつけ、クラブギルディの背中に直撃させる。
「はああああああああああああっ!!」
　そのメイスへと、アナザーブルーは駄目押しの回し蹴げりを撃ち込み

威力を加重させた。
　かつてこのクラブギルディへ蹴りを放った時は、微動もさせられなかった。
　慧え理り那なの警護役としてのプライドを打ち砕かれた、苦い記憶。
　それが今、岩礁に砕ける波のように微み塵じんと消えていく。
「ぐわああああああああああああ……!!」
　奇策なく真っ向からの回り込み勝負で敗北し、倒れ伏すクラブギルディ。
　皮肉にも、地に倒れたことで初めて、アナザーブルーのうなじをしっかりと見上げることができた。
「……貴様のうなじ……。くたびれた妙齢の悲哀を想像したが……」
「む。まだ言うか、こいつ」
「まるで瑞みずみずしい、恋する乙おと女めのうなじだ……。なるほど、そのうなじを見るには、俺はまだまだ未熟だったか……」
　ロマンチックな賛辞にも、アナザーブルーはあっさりと返す。
「恋？　知らんな。おそらく、たゆまぬ婚活の賜たまものだろう」
　殿方に渡すは、ラブレターではなく婚こん姻いん届とどけ。恋を超越し、婚活に邁まい進しんしてきた。
　匂い立つような大人の余裕と共にツインテールをかき上げるアナザーテイルブルーの背後で──クラブギルディは爆散した。
　ふう、と大きく息をつき、空を見上げる。
「確かに、持久力が落ちてきたのは感じるな……。私はまだまだ若いが……」
　そろそろ──元のランナーにバトンを渡す頃ころ合いだ。

◇

「嘘うそ……神しん堂どうさんが、テイルイエロー⁉　めっちゃ成長しちゃってるじゃん⁉」
　ヴォルティックブラスターの雷弾が、豊と美み得えを囲む戦闘員アルテイロイドへと的確に命中する。
「逃げてください、牧もく須す先輩‼」
　後ろ髪引かれるように何度も振り返りながら、豊美得は走り去っていく。
　迷いを断ち切るように豊美得から視線を切り、エレメリアンたちを見据すえると、オウルギルディは生まれたての子鹿のように足を震ふるわせていた。
「理想の文学少女が……エロ本を買う、それだけで身を裂さくほどの衝撃だったというのに！　この上、その正体が痴ち女じよテイルイエローだっただと⁉　がああああああああああああああ俺を殺せ、もう世界の全てが信じられんーっ‼」
　死者に鞭むち打つとは、まさにこのことか。イエローを見て二度目の精神的致命傷を負うオウルギルディ。
「文学とは、文学とはいったいなんなのだ……」
　虚うつろな目で体育座りをし、ぶつぶつと独り言を言い始める。
「失望したのは俺も同じよ……！　敬愛するドラグギルディ隊長の魂たましいを受け継いだのが、変質者……そればかりか、あの時の少女だったとは……‼」
　リザドギルディも拳こぶしを握り締め、憤ふん懣まん遣る方ないと身を打ち震ふるわせている。
「ひどい言われようですわ……」
「鮮やかに舞うが本懐のツインテールの戦士でありながら、重く装そう甲こうを着込むなど、無粋！　我われらが負けてなるものかよ‼」
「わたくしが重い装備を着込んでいるのは、仲間たちが思う存分舞える

ようにですわ!!」
　右腕のレーザーバルカンを斉射するイエロー。リザドギルディは辛うじて回避するも、背後にいる赤い戦闘員アルテイロイドを吹き飛ばす。
　巻き上がった黒煙を目隠し代わりに、イエローに白い球体が撃ち込まれた。着弾した瞬間、全身に強力な粘着質の物体が絡みつく。
「こ、これは……トリモチですわっ!?」
「ただでさえ鈍重な貴様だ、全身の武装を絡め取られれば手も足も出まい!!」
　トリモチ攻撃で勝機を確信したオウルギルディは、肩のバズーカを構えてイエローに突とつ貫かんする。
　だが、オウルギルディの目には、奇妙な光景が映し出されていた。
　イエローに近づくにつれ、着衣が少なくなっていくような。
　果たして、オウルギルディが間合いに入る頃ころには、イエローはトリモチもろとも綺き麗れいさっぱり全身の装甲を脱衣パージしていた。
「えっ……ちょっ……それは貴様の頼みの武器であろう、何な故ぜあっさり脱ぎ捨てる!?」
　豊満な胸をたゆんと揺らし、身軽になったイエローはしれっと反論した。
「汚れた服は脱ぐ！　当然ではありませんか!!」
「天下の往来で、服が汚れたからと元気よく脱衣する女性がいてたまるか!!」
　半泣きでバズーカを発射するオウルギルディ。
「だが、武装を脱ぎ去った今のお前など、カバーを取り外した文庫本のようなもの!!」
「──中身で勝負しろ、ということですわね！　承知しましたわ!!」
　イエローは残る左腕の装備・属性玉変換機構エレメリーションに、男の娘属性ガールズボーイの属性玉エレメーラオーブを装そう填てんす

る。
「発動！　属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨン!!」
　トリモチに絡め取られた武装は、合体させることはできない。ならば二重装填を可能とした切り札へ、必殺を託すのみ。
　脚属性レツグと兎耳属性ラビツトの同時発動で右足装そう甲こうに出現した収納部マウンターへ、ヴォルティックブラスターを填はめ込む。
「ボルティック！　ジャッジメント！　クレセント────────ッ!!」
　跳躍より放たれる麗美なる回し蹴げりが、オウルギルディへと炸さく裂れつする。
「エロ本、ＢＬ本──文学の世界は……いつまで死に続けるのだあああああああああ!!」
　またしても無念を虚空に投げかけ、爆散するオウルギルディ。
　残されたリザドギルディの貌かおからは、もはや一片の油断も消え去っていた。
「俺はドラグギルディ部隊の斬きり込み隊長であり、ドラグギルディ隊長の不肖の弟子！　隊長の遺産を貴様のような痴ち女じよが使うなど、断じて認めん!!」
　武装を全て捨てて丸裸も同然のイエローへ、リザドギルディは雄お々おしく突とつ貫かんする。
　リザドギルディの言うように、このテイルギアはドラグギルディの力を使っている。そしてその製作技術は、大元を辿たどればアルティメギルに与えられた力。
　しかしイエローは、与えられたものだけに甘えて今日まで痴態を晒さらしてきたわけではない。
　痴の果てに辿りついたツインテール……自分の力で手にした力が、眩まばゆい輝きをまとって実体化する。
「絶対服従首輪アブソリユートリング!!」

黄金に輝く首輪を装着し、迸ほとばしる属性力エレメーラで大気を鳴動させるイエロー。
「何っ!?　服を脱いで、首輪を着けて……俺は今、新人類と相対しているのか!?」
脱ぎ散らかした身体からだを覆おおう、新たなる装甲。テイルイエロー・アブソリュートチェイン。
極限重武装の要塞戦士が、斬り込み隊長を迎え撃つ。
「ぬうううう……だが、そこまでの重装甲、もはやこの攻撃は躱かわせまい!!」
リザドギルディの背中にある無数のヒレが身体から発射され、空高く飛び上がった。
有線誘導のように薄い光の帯で背中と繋つながったヒレは、一つ一つが意思を持ったように飛ひ翔しようし、イエローへと殺到する。
まるで自動人形オートマタのように空を踊り、変幻自在な軌道で飛来する無数の針弾。
「たあああああああああああああっ!!」
ボルティックブラスターフォートレスの斉射が、そのことごとくを撃ち落としていく。
躱せないのではない。躱す必要がないのだ。
しかし、アブソリュートチェインの強大な火力は市街地にあっては諸もろ刃はの剣つるぎ。イエローは未練なく装甲を脱ぎ捨てた。
「やっと着込んだ服を……また脱ぐだと!?」
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
ツインテールを撥ば条ねに飛び上がるイエロー。合体した装甲、超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンを背にする。
「何と雄お々おしき形……もはや戦艦！　ぬいぐるみの似合う少女が、ここまで可か憐れんに背を向けた武装を振るうとは……！　ならば俺

も、全力で挑むのみ!!」
　両りよう掌しように練り上げた光球を、イエロー目掛けて撃ち放つ。
「食らえ―――い!!」
　超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンの波光を背に──テイルイエローが鮮せん墜ついする。
「コズミックジャッジメント―――――――――――――ッ!!」
　蹴けり足が光球に激突し、水風船を破裂させるがごとく易やすゝやすと貫通する。
　渾こん身しんの蹴しゆう撃げきがはそのまま真まっ直すぐ過あやまたず、リザドギルディをも貫いた。
　踵かかととツインテールでアスファルトを砕きながらブレーキをかけ、背後で全身から放電するリザドギルディへと振り返る。
「仲間たちを舞わせるために、鈍重に構えたとはよく言ったもの……。君も華麗に舞えるではないか……。竜の魂たましいを受け継ぐに相応ふさわしき、見事な飛ひ翔しようだった!!」
「舞いたくなったら、脱ぎますの」
　女性の脱衣の難解さに苦笑するリザドギルディ。
「……あの時の少女が、ツインテイルズとなって戦っていたとは……。この世界で真っ先に君に目をつけた俺の審美眼は、確かなものだったようだ」
　その審美眼で見抜かれたツインテールが、平和を脅おびやかす怪人を打ち倒した。
　少女は今、あの日の自分と決別したのだ。
「さらばだ―――――――――ッ!!」
　爆散したリザドギルディの傍かたわらに、子猫のぬいぐるみが転がる。
　変身を解いた慧え理り那なは柔らかに微ほほ笑えむと、そのぬいぐる

みを優しく抱き締めた。
　乾いた風が虚むなしく吹き、ツインテールを小さく揺らす。
　踵きびすを返して歩き出すも、疲労でよろけて歩道の壁にもたれかかる慧理那。
　その角から、ひょっこりと顔を出す少女。
「も、牧もく須す先輩……逃げてくださいと……」
「だって神しん堂どうさん、正体見られっぱなしであたしが消えたら、モヤモヤするっしょ？」
「それは……」
　これ以上誰だれかに正体を見られないよう、周囲に人がいないかは確認した。
　一度遠くに退避していながら、豊と美み得えはわざわざここへ戻ってきたのだ。
「……すみません、お見苦しいものを」
　消沈する慧理那を励ますように、豊美得は明るい声で応こたえる。
「まあ、めっちゃ嬉うれしそうに脱いでんのはびっくりしたけどさー。これがあの神堂さんかーって。憧あこがれてたヒーローになれたんならさ、細かいことはどうでもいいって！」
「え……？」
「神しん堂どうさんは無理に戦ってるんじゃない、やりたくてツインテイルズやってるんでしょ？」
「も、もちろん……自分の意思で決めたことですわ」
「だったらいいじゃん！　私だって同じだよ。ＢＬ本なんて、万人に誇れるものじゃないけど、自分で楽しいから描いてるんだもん!!」
「楽しい……ええ、そうですわね。辛つらいことや悲しいことも多いですけれど……仲間と一緒に戦う日々は、確かに充実していますわ」
「あたしたちこれで、秘密を知り合った仲だねぇーい！」

慧え理り那なの肩を陽気に叩たたく豊と美み得え。決して等価の秘密ではないが、こうして共有し合うことで、慧理那に正体を知られたことへの不安を懐いだかないようにと気遣っているのだろう。

「ってか神堂さん、今ならまだライブに間に合うんじゃない？」

「……そうですわね、ダッシュですわ!!」

改めて別れを告げ、走っていく慧理那を見つめる豊美得。

生き真ま面じ目めで人を寄せ付けない孤高さがあった、彼女の知る慧理那とは違う。

瞬まばたきで切り取られる豊美得の視界の中で、慧理那の姿がテイルイエローに変わり──その横をテイルレッドが並んで走る。

信頼できる友達に囲まれる、今の彼女を象徴するようだ。

その時豊美得は、思わず自分の目を擦こすった。

テイルレッドと重なるように、一人の少年の姿が見えたのだ。

「…………もしかして、神堂さんのカレシ君……」

慧理那が、素敵で頼りになる人だ、と惚のろ気けた、小柄な少年が──。

「いやいや、ないない！」

自分の妄想癖に苦笑しながらも、豊美得は慧理那の後ろ姿をいつまでも見送っていた。

◇

本来であれば、少女の清らかな歌声が響くはずだったライブ会場。

そこには、爆発と破壊の音だけが虚むなしく木こ霊だましていた。

「ダークネスバニッシャ────────────ッ!!」

魔ま鎌れんの一いっ閃せんが、腋わきを狙ねらって飛ひ翔しようする古代トンボを捉える。

「よかった今回は筋肉出す技じゃなくて────────っ!!」
　かつてブラックの放つ幻影筋肉の渦うずに呑のみ込まれたことのあるメガネウラギルディは、スケールの小さい安あん堵どに包まれながら爆散していった。
　ブラックがどれだけ会場を傷つけないよう立ち回っても、エレメリアンたちはお構いなしに暴れ回る。
　椅い子すが砕け、壁が崩れ、照明が割れていく中、ブラックは懸命にエレメリアンを倒し散らしていく。
　戦闘員アルテイロイドを吹き飛ばした一瞬の隙すきを突き、ケルベロスギルディが背後から飛びかかってきた。
「ブーちゃん……アイドルは諦あきらめなさい！」
「黙れ！」
　迫り来る爪つめを、すんでの所で斬きり払うブラック。
「あなたがアイドルをやってこれたのは、アルティメギルだったから……侵略する側だからよ！　侵略される側についた時点で、あなたのアイドル活動は終わっていたの!!」
「黙れ黙れ!!」
　ケルベロスギルディが空中で三体に分身した。
　頭の数だけ、同等の力を持つ戦士に分身できる驚異の能力……ツインテイルズを苦しめた切り札だ。
　この形態の厄介なところは、戦闘力ではない。三体同時に倒さなければ、何度でも復活再生するところにある。まるで今の絶望的な戦いの縮図だった。
「確かに戦闘力じゃ、アタシの方がかなり下だわ。けど、自分の特性を最大限に活いかせば、互角に戦うことだってできる！」
　三分身したケルベロスギルディの連係攻撃に翻ほん弄ろうされていくブラック。

その立体的な機動の攻撃をダークネスグレイブで防ぎきれなくなり、爪や牙きばの攻撃がグラスギアを掠かすめていく。
「しがない地下アイドルだって、演出次第では大人数のアイドルユニットよりも輝くことだってできるわ。わかる？　戦力差だけが、戦いの決め手じゃないの‼」
まるで何かを諭さとすように、回りくどい言い回しをするケルベロスギルディ。
焦あせるブラックはそれに何の疑問も懐いだかず、がむしゃらに鎌かまを振り回し始めた。
と、その時、一階席の出入り口ドアが勢いよく開け放たれた。
「ブラックちゃん！　お待たせや！　こっちは片付けてきたでっ‼」
駆けつけたメガ・ネだが──会場の惨状を見て、悔しげに拳こぶしを振るわせる。
「ライブが……こ、こんな……許さへんっ‼」
指のバルカン砲を一体のケルベロスギルディへと斉射。すかさず戦闘機形態メガネウインガーに変形し、強烈な体当たりを見舞った。
しかし、一体だけでは無意味だ。すぐに再生を果たしてしまう。
ケルベロスギルディは飛ひ翔しようするメガ・ネを追いつめるように火球を乱射。逸それた火球が会場の天井を蜂の巣にしていく。
細かく降り注ぐ太陽の光に照らされながら、ブラックは決然と叫んだ。
「っメガ・ネえええええ！　インフィニットコンバインじゃっ‼」
「あらあ、合体するのぉ⁉　いくら強くなっても、三対一に戻ったら結局不利になるわよ‼」
強化パーツに分割したメガ・ネが、ブラックの周囲を飛旋し、足に腕にと勢いよく装着されていく。
白銀の鎧よろいを重ねまとったブラックは、神眼鏡ゴッドめがねのレ

ンズに三体のケルベロスギルディを捕捉する。
「同じ土俵で争うなど、二流アイドルの窮策！　わらわほどのスーパーアイドルは、徹底して自分を貫き通せば、他者のいかなる搦からめ手てにも負けはせぬ!!」
　三体同時に撃破しなければならないというのなら、一人でそれを成せばいい。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　ダークネスグレイブメビウスを十字弓へと変形させ、真っ正面のケルベロスギルディへと一直線に突とつ貫かんする。弾はじき上げられたケルベロスギルディを置き去りに、大きく距離を取っている二体目へと超絶機動で猛追、一体目のいる方へと蹴けり飛ばす。
　同じように三体目を弓把で斬裂した瞬間、ブラックは手にした弓に光の矢を引き絞った。
「インフィニットオオオオオオオオオオオオオッ！　バニッシャ――――――――ッ!!」
　放たれたのは一いつ矢しでありながら、∞の聖せい痕こんが直線上に並べられた三体のケルベロスギルディをことごとく貫いていた。
　生存本能ですらタイムラグを感じ取れないほどの超高速が、三体同時撃破を成し遂げる。
「人気ではテイルレッドに敵かなわんかもしれん！　しかしわらわは、アイドルとしてこの世界の人々に笑顔を与えたい……そう願い、歌い続けてきたのじゃ!!」
　一体に戻り、客席に落下するケルベロスギルディ。
　合体解除し、善いい沙すな闇あん子このアイドル衣装に戻ると、無言で歩み寄るイースナ。力無く全身を放電させるかつての協力者を見下ろすその眼鏡には、様々な感情が彷徨さまよい見えた。
「せかせかしちゃって……ちゃんとお休み取ってる？」

　超高速のステージパフォーマンスに不器用な賛辞を送り、ケルベロスギルディは三つ編あみのほどけたイースナのツインテールに手を伸ばした。
「髪のお手入れ……ちゃんとできるようになったのね。キューティクルもバッチリよ」
　引きこもりで髪のケアを全くしていなかったイースナは、よくケルベロスギルディに小言を言われていた。
　メガ・ネがおかんならば、ケルベロスギルディはオネエ言葉のおとんだったのだ。
「……好きな男の子でもできたかしら？」
「うむ、できたぞ！　とびきりのいい男じゃ‼」
　穏やかなプロデューサーに戻ったケルベロスギルディに向け、かつての担当アイドルは胸を張って交際を宣言する。
「だから、わらわは……戦うのじゃ……。そいつと、ずっと一緒にいたいから……絶対に、泣いたりせぬからな……」
「……意地悪しちゃって、ごめんね。でも、今日の悔しさと、それを乗り越えた強さを忘れないで。そうすればイーちゃんは……どんな敵にだって負けたりしないわ」
　ケルベロスギルディは三つの頭で優しく笑うと、イースナを庇かばうように静かに爆発した。
　しかし、会場はもはや見る影もない。一階席の椅い子すはことごとく吹き飛び、天井にはもう落ちてくる瓦が礫れきもないほど綺き麗れいな大穴が空あいている。
「……わらわ、友達の誕生日をお祝いするの、初めてだから……頑張ったんじゃ」
　今日だけの特別な演出なども、自分で率先して考えた。それが全て、水泡に帰した。

「こんなんばっかりじゃ。いつもそうじゃった……やる気を出すと、空回りするんじゃ。エレメリアンと仲良くしようとしても、そうじゃったよな……」
　たまたま今日こうなってしまっただけで、今まで無い方がおかしいぐらいだったのだ。
　アルティメギルに正体を知られている自分が、もっとも無防備なところを狙ねらわれるのは。
「……潮時……なのかのう。メガ・ネ。戦士が……アイドルなんて……」
　震ふるえるイースナの肩に触れようとした手を、宙で流離わせるメガ・ネ。
　イースナの日常をずっと守ってきた彼女もまた、大きな無力感に苛さいなまされていた。
「っ……う、ひぐっ……うう、ぅ……」
　様々な思い出が綯ない交まぜになり、ついにイースナの糸が切れてしまう。
　嗚咽おえつが悲しく木こ霊だまする空が、夕焼けに染まり始めた、その時。
「おおー！　闇あん子こちゃん！　よかった、戻ってきてたんだー!!」
　ハッピを来た青年が、一階の観客席に駆け込んできた。
「えっ……あっ……」
　慌あわてて涙を拭ぬぐう闇子。
　若い女性が、壮年の男が、あどけない子供が、次々に会場の中に入ってくる。
「よし、みんなで片付けようぜ!!」
　手にした軍手は、物販で売っているメガネドン軍手。丈夫で長持ち、サメのヒレの形をした逸品だ。

「瓦礫に気をつけろよ、リレーして外に掻かき出すぞ‼」
　観客が瓦礫を拾い上げ、隣り合った観客に渡し……リレーで除去作業を始める。
　しばらく呆ぼう然ぜんとその流れ作業を見ていたイースナだが……我われに返ってステージに転がっていたマイクを拾い、電源をＯＮにした。
『みんな、どうしてここに……？』
「エレメリアンなんて、ツインテイルズがやっつけてくれると思ったからさ！　俺らみんな、避難してからも待ってたんだ！」
　未いまだに困惑の抜けないイースナに、神眼鏡ゴツドめがねを通じてトゥアールからの通信が入る。
『聞こえますか、イースナ。……こちらでそのドームの破損状況をスキャンしました。観客の安全を脅おびやかすような点は何もありません。片付ければ、ライブは問題なく続行できます。……主役がしゃんとすれば、ですが』
　……そうだ。
　怪人は、ツインテイルズがやっつけた。
　どれだけ装飾がボロボロになっても、歌う人間と、観客さえいれば……そこは、ライブ会場なのだ。
「うおっ！　メガネドンすげー！　俺たちも負けられねーぞ‼」
　気がつけば、再びメガネドンの着ぐるみを着直したメガ・ネが、陣頭指揮を取って凄すさまじい勢いで瓦が礫れきを撤去している。
　スタッフも機材を確認。使えるものを整備し、使えないものは予備に取り替え始めた。
『……みんな、お待たせしてごめんねー！　そうなの！　怪人は、ツインテイルズがやっつけてくれたよー‼』
　ならばイースナは、ＭＣでその献身に応こたえるまでだ。

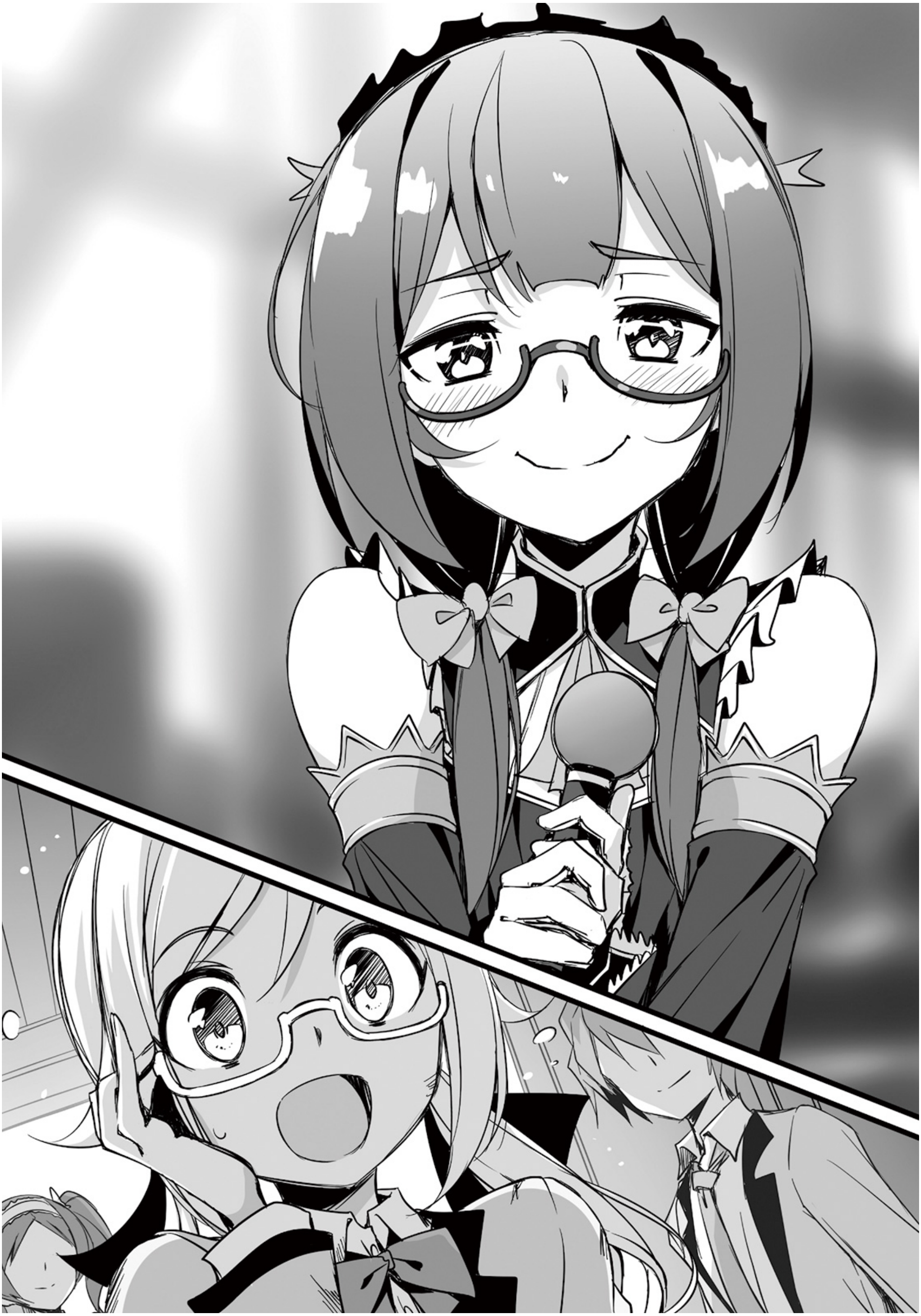
　会場からのレスポンスにかき消されかねない小さな音量で、トゥアールの通信が届く。
『私もここで見てます。ちゃんと歌いなさい、イースナ』
　照れ隠しなのか、もごもごと尻しりすぼみに励ますトゥアール。
「……うん‼」
　イースナは元気よく返すと、ステージ狭しと動き回り、会場への端はしから端まで呼びかける。
『よーし！　仕切り直しだから、いっぱい歌っちゃうからね！　みんな、眼鏡めがねはかけたー？』

「かけましたわっ！」

　さんざめく歓声の中、イースナはたった一つのレスポンスを確かに聞き取った。
　神眼鏡ゴツドめがねに頼ることなく、弾はじかれるように視線を向けた先に、彼女はいた。
『……えり、な……』
　制服が煤すすで汚れている。彼女もまた、死闘を終え、その足で駆けつけてくれたのだ。
　その後ろから、同じく総そう二じと尊みこともひょっこりと姿を見せる。
　イースナは満面の笑顔で手を突き上げると、観客たちの心と一体になり、途切れたままの前奏をスタートさせる。
　ファンに向け、自分が怪人を倒したのだ、倒しているのだ、と胸を張る日は、永遠に訪れなくていい。
　かつては、世界の眼鏡属性グラスを守ってやっているという無意識の奢おごりがあった。ファンに対しても、どこか上から目線だった。

　しかし、愛を、趣味嗜し好こうを語り合える友達ができて、イースナは成長することができた。
　眼鏡めがねへの思いを分かち合うファンたちと過ごすこの時間こそ、トップアイドルであるイースナの誇り。胸を張るべき宝なのだ。
　そんな彼女だからこそ、これだけ多くの人が応こたえてくれたのだろう。

　ドームの天井が消え、期せずして野外となったライブ会場。
　善いい沙すな闇あん子このアンコールは、今までで最高の歓声に包まれながら、空に響き渡った。



◇

　アルティメギル基地の大ホールでは、ネオアルティメギルと残存軍が、モニターに表示されるツインテイルズの奮戦に敬服めいた眼まな差ざしを送っていた。
　ドラグギルディも、今まであれだけ困惑していたテイルイエローの信念の戦いを見るや、賞嘆に目許を和らげている。
　皆の注目が、ツインテイルズの他の面々に集中しているのが幸いした。慧え理り那ながテイルイエローになった瞬間を含めた映像データを、即座に消去するドラグギルディ。
　ドラグギルディが操作端末から離れてすぐのこと。白ローブをまとった戦いくさ女め神がみヴァルキリアギルディが、穏やかならざる形相でホール内に踏み込んできた。
「どうした戦いくさ女め神がみ、とうとうこのようなむさ苦しさの極みたる場所にやって来るとは」
　ドラグギルディが尋ねると、ヴァルキリアギルディは不機嫌そうに問いで返した。
「──此こ度たびの出征、全滅と聞いたぞ。返り討ちに遭ったというのか」
「貴女が提言した作戦は完かん遂すいした。それがこの結果なのだ、仕方あるまい」
　ホール内の談笑が止やんでいく中、淡々と事実を述べるドラグギルディ。
　唯一プライベートがアルティメギル全体に露見しているテイルブラック。彼女の生き甲が斐いでもあるアイドル活動を崩壊させて追いつめ、ツインテイルズを瓦が解かいさせよ。ヴァルキリアギルディが、ドラグ

ギルディに伝えた作戦だ。
　無論、その作戦の中核にケルベロスギルディがあえて志願した思惑など、彼女は知る由もないだろうが。
「ツインテイルズは四か所同時でも切り抜けおったぞ。次はどうする戦女神。八か所、一六か所同時侵攻と、倍々にでも増やしていくか？　ん？」
　生前の組織内での立場的に堂々と意見できるためか、ティラノギルディの皮肉には遠えん慮りよがない。かつて、望まぬ卑劣な作戦を行った己への自じ嘲ちようもまれているように感じられた。
「……テイルブラック以外の者の弱みを知る者はいないのか。どんな日常を送っているか……武装する前は女学生であろう、いかなる少女か……あるいはその居場所でもよい」
　ヴァルキリアギルディは声に苛いら立だちを孕はらませ、静寂に包まれたホールを見渡した。
　ティラノギルディやトリケラトップギルディなど、ツインテイルズの正体を知る者がこの中には何体かいるのだが──ティラノギルディは、当然のようにとぼけて見せた。
「フッ……知らぬな」
「そもそもティラノギルディ、何な故ぜ君たち隊長級の戦士は出撃しない！」
「その隊長級の戦士が全力で暴れれば貴様への負担が大きいと、全員集合した先の戦いで知ったからだ。俺はテイルレッドとの戦いに未練はないのでな。今はまだ静観でよかろう」
　追い打ちをかけるように笑うティラノギルディ。怒りに震ふるえだしたヴァルキリアギルディを落ち着かせるべく、トリケラトップギルディは穏やかに割って入った。
「曲がりなりにも、我われらは貴女あなたの力によって再生した生命。

貴女の意志を尊重し、月日をかけてツインテイルズを攻め落とすべく、作戦を進めてきた。何故急に、功を焦あせられるか？」
　唐突に卑劣な作戦を言い渡され、ネオアルティメギルの戦意の低下を招いていることを、ヴァルキリアギルディも気づいているはずなのだ。
　そんな焦しよう燥そうに曇る戦女神の返答には、彼女の行動原理の全てが集約されていた。
「──首領様のためだ」
　アットホームな雰囲気のネオアルティメギル。彼らと住む世界を自ら隔絶するかのようにローブのフードを目深に下ろし、ヴァルキリアギルディはホールを去っていった。

◇

　俺は恋れん香かさんとの約束通り、ライブが終わって帰宅した夜、愛あい香かの家を訪ねた。
　立派な和風の家。インターホンを押そうとして、恋香さんとの約束を思い出す。
『っひょー！　ひょひょーん！　ひょー‼』
　合鍵かぎをもらう時、母さんがこんなふうに奇声を発しながらとてつもなく笑顔で何度も肩パンしてきたのが気になるが……とにかく、音を立てないようにゆっくりと玄関を解錠し、引き戸を開けた。
　愛香の家は廊下の常夜灯が仄ほのかに点いているだけで、後は居間も台所も、全部電気が消えているようだ。家全体が真っ暗になっている。
　そっと靴を脱いで三た和た土きを上がり、二階への階段に足をかけた。
　軋きしみ音が立たないように板の端はしを踏みながら、二階へと上がっていく。勝手知ったる……とまではいかないが、昔はよく来ていた

家だ。愛香の部屋へは、迷わず辿たどり着いた。
　条件反射でノックしようとして、握り拳こぶしを止める。恋香さんには、ノックもしちゃ駄目だって言われていたんだった。
　玄関と同じく引き戸になっている愛香の部屋のドアを、静かに開ける。
　寝ているのかと思いきや、ベッドの上に愛香は座っていた。
　――――上半身裸で。
　腕を濡ぬれタオルで拭きながら固まり、目を丸くしてこちらを見ている。
「な、な、な、ななななななななななななななあっ!!」
「……悪い!!」
　顔を真まっ赤かにして身体からだを掻かき抱いだく愛香。
「ち、ち、ちょっと待って！　そのまま！　後ろ向いてて!!」
　俺は気をつけをして出入り口に立ち、愛香が着替え終わるのを待つ。
　愛香やトゥアールも俺の部屋に来るのにノックなんてしないから慣れきってたけど、やっぱりノックは必要なんじゃないか恋香さん!?
「……いいわよ、こっち向いて」
　ベッドの上で上体を起こし、胸まで掛け布ぶ団とんをかけている。
「来るなら来るってメールでも何でもしてよ……いや、あたしもいつも同じことしてるからあんま強く言えないけどさ……」
「すまん、恋香さんに、愛香は寝込んでるからノックするなって言われて……」
「！　まさかお姉ちゃん、さっき電話で着替えたらって言ってきたのって……!!」
　恋香さんに言われて身体を拭いてたのか、何とも間が悪かったな……。
「……で、そーじはあたしのお見舞いに来てくれたってわけ？」

「うん……」
　俺の視線が頭に集中しているのを察したのか、愛あい香かは口くち端はをひくつかせた。
「人の裸見たよりも、ツインテールにしてない方を深刻そうにするんじゃないわよ!!」
　すまん、デリカシーが足りないかもしれないが、俺にとってはそっちの方が重大なんだ。
　ツインテールじゃないな……。
「それにしても、久しぶりだなあ。愛香の部屋に来るのも」
　懐かしさも相まって、俺はじっくりと愛香の部屋を見渡した。
　カーテンやクッション、布ふ団とんなどほとんどが水色を基調としたもので、統一感がある。
　もちろん、ダンベルやバーベルなどは常設されていない、普通の女の子の部屋だ。
「……高校に入ってから、全然来なくなったもんね、そーじ」
「高校に入ってすぐ、ツインテイルズになったからな。結局、基地がある俺の家に集まるのが手っ取り早くなったからだろ」
「………………普通、幼馴染おさななじみの家に来なくなるのってもっとこう、甘酸っぱい……」
　頭痛に耐えるようにこめかみを押さえる愛香。
　ツインテールじゃないな……。
　あまり愛香の頭を見過ぎないよう、何気なく壁の本棚に視線を送る。
『豊胸技ありテクニック集 一〇九（増強改訂版）』
『今日から始める！　体幹矯正でバストアップ』
『ゴリラに学ぶ、楽しい巨乳メソッド　～実は、揉もむより叩たたくだった～』
　並んだ本のタイトルが鉄拳と化して、俺の網膜を滅ぼしにかかってき

た。
　果てまで並ぶ、ある特定ジャンルの教本やムック本の数々。
　あ、あれ、目が潤うるんできちゃった。どうして？　おかしいな、悲しくなんてないはずなのに、えへへ……。
「色々変わっちゃったよね。そーじの部屋、今じゃ女の子の溜まり場になっちゃってさ……」
　成長に従って、色々変わっていくものなんだろう。お前の部屋の本棚も、どんどん成長しているようにな……。
「今日のイースナのライブ、どうだったの？」
「そのライブのことだけど……今日は、色々あったんだ……」
　俺は、今日のことを愛香に説明して聞かせた。
　同時侵攻、そして明らかにイースナのライブが標的にされていたこと……。
　トゥアールは気を遣ってすぐ俺に言わなかったが、ライブが標的だと知った瞬間は俺も怒りで我われを失いそうになった。駆けつけた時見たイースナの笑顔に、どれだけ救われたか。
「……あたし、情けない。みんなが頑張って戦っている時に、一人だけ役立たずで……。桜さくら川がわ先生まで、必死に戦ってくれてるのに……」
　そっと髪の毛を撫なでる愛あい香か。
　ベッドの枕元には、リボンが置いてある。寝込んでいるような時でも、何度も結ぼうとしたんだろう。
「まだ、上う手まく結べないか？　ツインテール」
「うん……」
「自転車の乗り方でさえ、一度覚えたら一生忘れない。ましてこんなにツインテールを結び続けてきた愛香の身体からだには、ツインテールが遺伝子レベルで刻まれているはずなんだ」

「それはそーじぐらいしか無理よ……」
　なんて慎つつしみ深いんだ。謙遜にも程があるぜ、愛香。
「……よし！」
　俺は意を決して立ち上がり、ベッドに歩み寄った。
「……逃げないでくれよ、愛香」
　そして、愛香の肩を両手でそっと押さえる。
「ひゃいっ⁉　嘘うそ、いや、こんな無防備なあたしが悪いんだけどでもその──」
　最近ツインテールに触ろうとすると回避しようとするから、逃げないで我慢して欲しい、と言ったんだが……何な故ぜか、愛香は目線をあっちこっちに彷徨さまよわせて挙動不審になった。
　こう言ったら愛香は怒るかも知れないが、トゥアールにそっくりだった。
「ツインテール。俺に結ばせてくれ」
　真剣な眼まな差ざしで頼む俺とは裏腹、愛香は眉間に皺を寄せて睨にらんできた。
「そりゃそうよね…………って、駄目、あんま近づかないで！　今日、シャワー浴びてないからっ……」
「ちゃんとシャンプーの匂いするって。相変わらず匂いのこと気にしすぎだろ」
「嗅がないでよぉ‼」
　シャワー浴びてないのなんて、俺も同じだし。
　さっき身体を拭いてたのに、女の子って本当に神経質なんだなあ。
　愛香の長い髪を手に掬すくい取ると、俺はリボンを手に取る。
　神経を研とぎ澄まし、バランスを見極めて髪を括っていく。よく愛香がやっているように、リボンを軽く唇くちびるで挟んで持つわけにはいかないので、手首に引っかけながら。

借りてきた猫のようにおとなしくなりながら、愛香は黙って終わるのを待っていた。
「どうだ！」
これまでに培つちかってきた全ての技術を駆使して、愛香のツインテールを結ぶ。
会心の出来だ。以前、性格交換のハプニングでみんなのツインテールを結んだ時よりも、さらに練度を増した自負がある。
「すごいね、そーじ。ホントにツインテールの結び方、上手くなったよ」
「ホントか！　愛あい香かに褒ほめられるってことは、かなり自信を持っていいよな!!」
壁の時計を見ると、二二時。けっこういい時間になったな。
「……それじゃあ、俺はそろそろお暇いとまするよ。ゆっくり休んでくれ、愛香」
「ま、待って！」
掛け布ぶ団とんを除けてベッドから身体からだを乗りだし、愛香が俺の腕を掴つかんできた。
「行かないで」
か細い吐と息いきのような声で……愛香は、俺に言った。

「……今日は、ずっとここにいて」

「？　わかった、じゃあいるよ」
「何で無感情に即答すんのよおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
何で怒る!?
病人だし、一晩中看る人は必要だろ!?　恋れん香かさんはまだ帰って

こないし……。
「もー！　何であたしだけいつもいつもこんなモヤモヤしないといけないのよ!!」
　何で暴れる!?
「会長とかイースナとか、何だったらトゥアールも！　みんな甘やかすくせに、あたしには全然優しくしてくれない！　そーじの馬ば鹿か！　ツインテール馬鹿!!」
　そのとおりだから反論できないぞ!?
「あたし……怖いのに！　ちょっと強がったらすぐ大丈夫だって思うんだから！　嘘うそよ、自分でどうにかするなんて嘘！　あたし──」
　俺は愛香の肩を引き──そっと、抱きしめた。ツインテールだけではなく、愛香の身体を。
「……左右じゃなくて、真ん中。これで合ってるか？」
「あたし、シャワー浴びてない……」
　俺の肩に頬ほおを寄せながら、まだこんなことを気にしている。
　愛香を抱きしめる腕に、力を込める。もっと深く、温ぬくもりが伝わるように願って。
「強がってるだけだってんなら、全部言っちまえ。怖い時ぐらい、俺を頼ってくれよ。いつもいつも、お前に助けられてるんだから」
　愛香って、こんなに華きゃ奢しやだったんだな。
　腕ごと、ツインテールごと抱き締めても、摺すり抜けてしまいそうなほどに、儚はかない。
　普通の女の子なんだ、愛香も。
「ヴァルキリアギルディと戦ってから、鏡の前に立つ度たびにツインテールが解ほどけてく……」
　震ふるえながら、愛香は心の裡うちを吐と露ろした。
「あいつに負けた自分が……ツインテールじゃなくなった自分が見える

の……。何度結んでも解ほどけるから、怖くてツインテールが結べない……」
　……そういうことだったのか。
　初めて勝てないと感じた、最強のエレメリアン。ツインテールを奪われた自分をリアルに感じて……愛あい香かは、ずっと恐怖に縛られていたんだ。
　髪に触れられるのを避けていたのも、ツインテールを奪われることを連想して……。
「怖い。ツインテールを奪われることが……ツインテールじゃなくなることが、怖い……」
「──大丈夫。愛香は、俺が守る」
　だから俺も、偽いつわらざる心の裡うちを明かした。
「……そーじ……」
「……愛香さ。結構あっさりテイルブルーになっちまったから、当たり前のように一緒に守る側の立場になってたけど……お前だって、俺の守りたいツインテールの一人なんだぜ」
　いや、テイルブルーになるその前から。
　幼馴染おさななじみの俺たちはいつも競い合っていたから、守るっていう思いが希薄だった。
　一緒に戦っているだけで、俺は本当の意味で愛香のツインテールを守ってなかった。
　俺は今、このか弱く震ふるえる女の子を守りたいって……心の底から感じている。
「愛香のツインテールを奪わせはしない。もし奪われても、俺が絶対に取り返してやる。だから安心して、ツインテールを結んでくれ。愛香のツインテールは、絶対に解けたりしない」
「……うん……うん……」

　俺の胸に顔を埋め、愛香は何度も何度も頷うなずいた。
「……そーじ。しばらくこうしてて。何か、落ち着くから……」
　言われたとおり、俺は愛香を抱きしめ続けた。
　かなりしばらく、そうしていた。
　気がつくと愛香は、俺に流し目をしたり、唇くちびるを小刻みに尖とがらせたりしている。
「……今……今よ。ここでしょ、キ、キスー」
　ブツブツ何かを言っている。意図がわからず、俺が首を傾かしげると、
「～～～～～～～～～～～～おやすみっ!!」
　愛香は俺を軽く突き飛ばし、髪を解いてベッドに潜り込んでしまった。
　俺の結んだツインテール……。しょうがないか、寝る時は解くってみんな言ってるし。
　俺が足音を立てずに部屋を立ち去ろうとすると、愛香はおもむろに起き上がった。
「何帰ろうとしてんのよ！　あんたも寝るの!!」
「え、ここで!?」
「イ、イースナが！　怖くて眠れない時、そーじに一緒に寝てもらってたでしょ！　……あたしも同じことしてもらったら、安眠できるかなって……」
「でもイースナはあれで子供だからいいけど、さすがに愛香とは……」
「あたしは気にしない！　熱を出して不安な時、人は誰だれでも子供になるのよ!!」
　格言が飛び出す。結構元気だなって、安心してきたところだったんだけどなあ。
　寝間着代わりのハーフパンツ持ってきてないし、上着だけ脱いで寝る

しかないか。
　なるべく身体からだが触れないようにベッドに入るが、さすがに小さい。
　布ふ団とんの中は、ほんのりと熱気が籠こもっていた。

　　◇

　仄ほの暗い闇やみの中で、温ぬくもりを分け合う男女。
　総そう二じと背中合わせになりながら触れ合わない背中のもどかしさに、愛あい香かは身をよじる。
　やはり、一緒に寝ても駄目か。裸を見て、部屋に入って、抱きしめて、それでも普通におやすみなさいして帰ろうとする男なのだから。
　先日、トゥアールが負け惜しみのように「実質した」「実質した」と連呼していたのを思い出す。多分、何かあって二人きりになったが、結局最後の最後で踏み込めなかったのだろう。
　今の自分のように……。
　そう言えば、今さらながらにここまでトゥアールの邪魔がなかったことに驚く。
　トゥアールも、いつ自分が乱入してくるのかと戦々恐々としていたのかもしれない。
　幼馴染おさななじみ……近すぎる関係は、損なのか、得なのか。
「……!?」
　総二の手が自分の頬ほおに触れ、愛香は身を固くした。
　言った側そばから……!?　総二の中の雄を、見くびりすぎていたのか……!?
　後悔と期待に胸高鳴らせる愛香。
　総二の手が、荒々しく髪に触れ──愛香が甘い吐と息いきを漏もらした

瞬間。

「くー……」

　可か愛わいらしい寝息が聞こえてきた。

　ぎょっとして振り返った愛香が見たものは、自らは熟睡しながら、隣に寝る女の髪をツインテールに結び始める男の姿だった。

　左右の房を結び終えると、総二は満足したように腕を下ろし、再び寝息を立て始めた。

「…………ぷっ……あはははは……」

　総二を起こさないように、小声で笑う愛香。おかしくて、涙が出てきた。

　ツインテール馬ば鹿かを極めると、ここまですごいことになるのか。

「……あんたが隣にいるのに……あたしのツインテールが消えるはずがないわよね」

　笑って気づいた。あれだけ心を蝕むしばみ続けた恐怖が……いつの間にか消えている。

　今すぐ洗面台に行って、気が済むまでこのツインテールを見てやりたい。

　しかしその前に……寝ながら髪に悪戯いたずらしてきたのだ、自分にも悪戯をする権利がある。

　一緒に寝る以外にもう一つ、イースナで思い出したことがあったのだ。

「……あたしが元気ないから……あたしのほっぺに、ちゅーしてくれるんでしょ？」

　総そう二じが寝ているのだから……逆に、自分がするしかない。最後まで、言い訳を重ねる。

　愛あい香かは総二の頬ほおに手を添えると──唇くちびるのほんの僅わずか隣に、自分の唇を触れ合わせた。



　ここも、ぎりぎりほっぺのはずだ。
　もうそこまでいったら唇にすればいいだろ、と心の中の自分が叫んでいる。
　が、意地がある。そこは起きている時にするのだ。譲れない部分だ。
「今日は、これで勘弁してあげる」
　愛香は口を尖とがらせて独りごちると、総二を後ろから抱き締めた。
　広い背中から、温ぬくもりが伝わってくる。
　小柄だと思っていたが、総二もちゃんと男の身体からだになってきているのだ。
　総二は、自分を抱きしめた時、女を感じてくれただろうか……？
　ようやく思い出した。別に自分は、今までも戦いを恐れていなかったわけではない。
　変態たちとの戦いに何度も恐怖し、時に挫くじけそうにもなった。
　それでも戦い続けてきたのは……大好きな男の子が、ツインテールを大好きでいられるよう……守りたいと願ったからだ。彼が……総二が自分を、守ると言ってくれたように。
　この温ぬくもりに守られている限り……自分もまた、この温もりのために戦える。
　総そう二じの背中に頬ほおを寄せながら……吹っ切れたような優しい声こわ音ねで、愛あい香かは囁ささやいた。
「──ツインテールをありがと、そーじ。もう、怖くないよ──」

　　◇

『皆さんもご存じの通り、このところエレメリアンの出現が活発化しています。あくまで彼らは侵略者、人智及ばぬ怪人です。どうか、遭遇したらすぐ避難してください。そして──』

　二学期の終業式──体育館に並ぶ全校生徒に向け、生徒会長の慧え理り那なが注意喚起を行う。
　学期を締めくくるにしては、穏やかではないスピーチだ。
　並んでそれを聞く俺の、隣の女子の列には、愛香の姿がある。
　朝起きたら、俺だけベッドに寝ていて。いつの間にか帰宅していたらしい恋れん香かさんに無言の笑顔で見送られ、自分の家に帰った。
　学校に来たら、普通に愛香がいたので、とりあえずほっと一安心。
　ツインテールは元気になったようだが、教室でも口数少なだったのが心配だ。妙に俺の方をちらちらと見てきたことといい、まだ不安は拭ぬぐいきれていないのかもしれない。
　昨日の同時多発エレメリアン出現が決定打となり、世間の警戒は一層強まっている。
　体育館から帰り、二学期最後のホームルームが始まるが……そこでも、エレメリアンに遭遇した時の対応をまとめたプリントが配られる徹底ぶりだ。
「ツインテイルズも最近頼りにならないですからー、みんなちゃんと逃げてくださいねー」
　担任の樽たる井い先生が、いつもどおりかったるそうに補足する。
　言ってくれるぜ……。まあ、このぐらいの方が、みんな用心してくれるだろう。
　一つの学期が終了した、開放的な放課後。クラスの男子たちは何人かで固まり、タブレットで動画を見たりしていた。
「レッドちゃん大丈夫かな～」
「この前なんて、すげえ数のエレメリアンと戦ってたみたいだしな」
　いつもどおりの光景だが、レッドの調子を心配する会話をしているのが、気がかりだ。
「……やっぱ、幻滅するか？　エレメリアンに押されっぱなしのツイン

テイルズなんて……」
　俺はつい、側そばにいた男子に問いかけてしまった。
「こんだけしょっちゅうエレメリアンが出たら、疲れて当然じゃねえか」
　変な質問をする俺に、意外にも迷わずに答えを返す男子。俺はなおも質問する。
「……戦いが見られなくて、残念じゃないのか？」
「俺たちは、テイルレッドたんに戦いをして欲しいんじゃねーぜ。いつも笑顔で、ツインテールを見せてほしいんだよ」
　そう言って男子が見せてきたタブレットに映っていたのは、必死に戦うレッドの姿ではなく──いつの戦いを切り取ったのだろう、笑顔で拳こぶしを空に掲げるテイルレッドだった。
「……サンキュ」
　自然に口をついた感謝。
　失言かと内心焦あせったが、特に追及されることはなかった。
「おい、『いつでもテイルレッドたん』が大型バージョンアップ来てるぞ!!」
「めちゃくちゃサイズ重いじゃねーか、どっかにＷｉ-Ｆｉ掴つかみに行こうぜ！」
　一目散に走っていく男子たち。テイルレッド関連のアプリがあまりにも多すぎて、耳にする度たびに別のタイトルのような気がするが……。
　こうやって、エレメリアンの影なんかに怯おびえず、笑顔で毎日を生きていく。
　みんな、それぞれに心の強さがあるんだ。
　期待に応こたえる、なんて気負いはしないけど……それが、何よりも心強い。
「総そう二じ様～、部室に参りましょう～」

　トゥアールに手招きされるが、教室にはすでに愛あい香かの姿はなかった。
「愛香は……一人で帰っちゃったのか。元気になったように見えたんだけどな……」
「ええ、見た感じ、何な故ぜか急に吹っ切れてはいるみたいです。ただ、まだ少し迷ってもいるみたいで……。私に考えがありますので、後は任せてください」
　頼もしい言葉とともに、胸を揺らすように叩たたくトゥアール。
　程なく、エレメリアンが出現。
　俺は先ほどの男子の言葉を思い出し、どこか晴れがましい気持ちで出撃した。

◇

「他の場所には、まだエレメリアンは現れていないんだな？」
　現場でエレメリアンと向き合いながらも、俺はトゥアールと密に通信を取り合う。
『大丈夫です、あまり神経を張り詰めないでくださいね、総二様』
　幸い、今日はまだ他の場所には現れていないようだ。
　終業式であると同時に、慧え理り那なの誕生日である本日。俺たちとは後日、クリスマスイヴに合わせてパーティーをする予定だが……やはり慧理那はお嬢様。桜さくら川がわ先生の話だと、誕生日当日は家の付き合いのパーティーがあって忙しいそうだ。
　とにかく、今日という今日は絶対に慧理那が出撃しなくてもいいようにしないとな。
　思案を巡らせる俺に、エレメリアンたちが悠々と近づいてくる。
「どうしたテイルレッド、生き真ま面じ目めな表情をしおって……可か

愛わいいぞ!!」
　ホッパーギルディにマンティスギルディ、その他。美の四心ビー・テイフル・ハートの復活昆虫戦士か。
　ツインテイルズのみんな……俺は今日、考えに考えた作戦を実行し、鬼になる。
　同時多発侵攻なんてせずにみんな俺のところに来るよう、注意を引きつけるんだ!!
　俺は決然と目を見開き、やおら頬ほおを緩め──
「エ、エレメリアンのみんな～、いろんなところに行かないで、こっちにおいでよー!!」
　撮影をしているっぽい戦闘員アルテイロイドに向けて、ぶんぶんと手を振ってみる。
「モケ～」
　戦闘員アルテイロイドが手を振り返してきた。違う。違うんだ。
　頬をひくつかせながら、俺はエレメリアンが喜びそうな仕草を考える。
　可か愛わいさなんて意識したことないからわかんねえ、他の女の子を参考にしよう!!
　トゥアール──お前の力、貸してもらうぜ!!
「レ、レッドちゃんのおっぱいっ」
　トゥアールがよくやってる、胸を突き出してジャンプするポーズをやってみる。
　──どうだ⁉
　エレメリアンは……絶句してこっちを見てるだけだ。当然か、胸ないもんな、俺。
「こてん…………です、わ……」
　今度は慧え理り那ながたまにやっている、お尻しりを強調して転がる

ポーズ。
　やっぱり反応が薄い……というより、困ってる。罠だと思われているのかもしれない。
　じゃあ、イースナがいつもやってるようにパンツを脱いで……って、それは駄目だ。
　つうか、何を迷走しているんだ。俺が誇れるものといったら、これしかないだろう!!

「みんな……レッドのツインテール、いっぱい見て？」

　俺はツインテールの左右の左右を摘まんで持ち上げ、はにかんで微ほほ笑えんだ。
　これが……今の俺にできる、全力だ!!
　とうとう、ホッパーギルディやマンティスギルディが全力のストライドで突っ走ってきた。
　それだけでは終わらず──その後ろに、次々と転送ゲートが出現している!!
「クッソ可愛いぞテイルレッドオオオオオオオオオオオ!!」
「生き返ってよかったあああああああああああああ!!」
「そしてここが俺の死に場所だ!!」
「モケー！　モケモケ！　モケモケアアアアアアアアアアアアアアア!!」（大興奮）
　エレメリアンや戦闘員アルテイロイドが、目を血走らせて大挙して押し寄せてきた!!
「わ────────────めっちゃ来た──────────っ!!」
　でも、これでいいんだ……俺一人が、エレメリアンを引きつければ!!
　もしかしてだが……来る予定がなかった奴やつまで呼んでしまったか

もしれないが──!!

◇

心を鬼にしたのは、テイルレッドだけではない。
未いまだ迷いを抱かかえているのであろう愛あい香かへ、トゥアールは荒療治を敢行した。
苦戦しているテイルレッドの映像を、愛香のトゥアルフォンへと転送したのだ。
地下基地のコンソールルームで、テイルレッドの戦いを見守るトゥアール。
彼女は、確信めいた微ほほ笑えみを湛たたえながら、椅い子すを回転させて入り口へと向き直った。
「……はあ、はあ……ッ──そーじ……!!」
入り口のドアがスライドする。息を切らしながら入ってきたのは、愛香だ。モニターに映るレッドと無数のエレメリアンの戦いを見て、拳こぶしを震ふるわせながら歯は噛がみする。
「───来ましたね、愛香さん」
愛香のツインテールがすでに万全になっていることは、総そう二じが見抜いている。
戦えないのは、もうしなくてもいい足踏みをしてしまっているだけ。
背中を押してあげるのは……再びテイルギアを託すのは、自分の役目だ。
テイルレッドの可か愛わいらしい叫びを背後に、トゥアールは愛香と対たい峙じする。
ブルーのテイルブレスを、自分の胸の前に持ち上げるトゥアール。
「……この蒼あおき輝きが……総二様を救える力です」

「ちょっと！　そーじが危ないじゃない……あたし戦うから！　はい、ブレス！」
　愛香が手を差し出しているのにも関わらず、トゥアールはやたら自分に酔った振る舞いで、虚空へと憂うれいを帯おびた眼まな差ざしを向ける。
「……思い出しましたか愛香さん、あなたが、どうして戦い始めたか。これでもまだ、ツインテールが消える恐怖に怯おびえて足を止めるのですか？　心を翳かげらせるのですか？」
「いや、行くからブレスちょうだい」
「あなたは総二様を助けるためにテイルブルーになった。どれだけ恐怖心に支配されようと、総二様が助けを求める声を聞けばあなたは立ち上がります。立ち上がってしまうんです」
「早くブレス貸してって」
「愛香さん……今一度問いましょう。このブレスをつけたら、今度こそあなたは後もど──」

「決心したって言ってんでしょうがブレスよこせ────────────ッ!!」
「アタ──────────────────────────────マ!!」

　トゥアールを受け身不可の状態で頭から床にブチ込み、愛香はブレスをもぎ取った。
「ごめん、時間ないからこれ持ってく！　あとでメールするねー」
　クソ適当な言こと伝づてをぺぺっと残し、転送ゲートへと突っ走っていく。
　ヒーローって何？
　強い力を持ちながらも時に悩み、時に涙する、心優しき戦士さ。

心が優しいんだよね。
　復活する時を信じてめっちゃかっこいいシチュと台詞せりふを義母の将軍と一緒に考えていたか弱いオペレーターを、時間がないからって血祭りにしていくのは優しくないよね。

　ヒーローって何？
　またもや頭の埋まった床下に哲学を投げかけながら、トゥアールの胸の鼓動は止まろうとしている。
　しかし、今回は『ごめん』があった分、まだいいかなと思えてしまっていた。
　そんな自分が、少し可か愛わいかった。

◇

　俺はエレメリアンに完全に取り囲まれ、悪夢のリクエストに追い込まれていた。
「「「もー一回！　もー一回!!」」」
「二度とやるかチクショオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
　叫びながら何体かのエレメリアンを倒しても、全くひるむことなく近づいてくる。
　もしや、こいつらの余計なスイッチをＯＮにしてしまったのでは──!?
　鎌かまじみた手を揺らしながら、俺ににじり寄って来るマンティスギルディ。
　その肩が、背後から軽快に叩たたかれた。
「何だいい時に…………ぬう、突とつ如じよとして私の背後に壁が建設

された⁉」
　二度見で振り返ったマンティスギルディの背後にいたのは──
「……テイルブルー……⁉」
　その驚き声は、俺と怪人たち、どちらの方が早かったか。
「──お待たせ、レッドっ！」
　にっこりと微ほほ笑えんだテイルブルーは──間欠泉のように地から天へ衝つき上がるアッパーをマンティスギルディに見舞った。
「ぐああああああああああああああ壁が殴なぐったああああああああああああああ！」
　驚きよう愕がくを抱かかえたままに空高く吹き飛び、爆散するマンティスギルディ。
「テイルレッドの可愛さに惹ひかれてやってきたら……テイルブルーが出てきただと⁉」
「ひどすぎる……法で取り締まらなければいけないレベルの悪あく辣らつな美人局つつもたせではないか‼」
　狼狽うろたえるエレメリアンたちを一いつ顧こだにせず、ブルーは大きく伸びをした。
「すっ────────────っっっっっっっっごく、さっぱりした気分なのよ。久しぶり、ツインテールがこんなに軽く感じるのは」
　迷いなくたなびくは、蒼あおき波濤のツインテール。
　気負いなく引き結ばれた唇くちびる、凛りんとした双そう眸ぼうには、歴戦の勇者の闘志が漲みなぎっている。
　アルティメギルが恐れるテイルブルー──愛あい香かが完全復活し、戦場に立ったのだ。

「────今なら、エレメリアンが何百体来ようが負ける気がしないわ」

　ネオアルティメギルの戦士たちに、寄せる波のように動揺が広がっていく。
「馬ば鹿かな!?　テイルブルーが往年の威圧感を完かん璧ぺきにまといこなしている!?」
「どこに行ってしまったのだ、しおらしきテイルブルーよ!!」
　不敵に口くち端はを吊つり上げ、ブルーは事も無げに言い放った。
「死んだわ」
「「えええええええええええええええええ!?」」
　ブルーは俺に振り返ると、ウインクしながらサムズアップしてきた。
「やっぱりレッドには――あたしがついててあげなきゃ、駄目よね!!」
　ツインテールが立ち直ってくれたのは嬉うれしいんだが、その後ろで無数のエレメリアンがお前のギアの色みたいに青ざめて死ぬ覚悟してしまってるんだが……。
「行くわよ！」
　徒手空拳、体術、属性玉エレメーラオーブの特殊能力─溜まっていた鬱うつ憤ぷんを晴らすかのように走り回り、大暴れするテイルブルー。
「エグゼキュ――――ト！　ウェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエイブ!!」
　そして完全復活を宣言するように放たれた槍そう撃げきが、無数のエレメリアンにトドメを刺した。
　爆炎にツインテールを揺らめかせながら、満足げに頷うなずくブルー。
　場所がオフィス街に近い公園なためか、すっかり報道陣に囲まれてしまっている。
「レッド～！」
「わっ……ちょ、ちょっと！」
　ブルーはむしろカメラの前で見せつけるかのように、俺を抱き締めて

きた。
「……ありがと。あたし、もう大丈夫よ」
　吐と息いきのような囁ささやきが、口付けをするように優しく耳じ朶だに響く。
「……そっか。嬉しいぜ、元気になってくれて」
　俺に抱きついたまま、ブルーは報道陣に対してＶサインを向けた。
「地球のみんな！　あたしたちは元気だから、安心して！　エレメリアンなんて怖くない!!」
　このブルーの言葉は、きっと多くの人の心の支ささえになってくれるだろう──
　と、考えたのは甘かった。翌朝のニュースでどんな報道をされたのかは、言うまでもない。
【冬眠から醒さめた悪魔、レッドちゃんにセクハラ】
　その前に、エレメリアンをブチのめしまくる映像がたっぷり提供されていたからな……。

◇

『レ、レッドちゃんのおっぱいっ』
　ぐっひょおおおおおおお……と、野太い感嘆がホールに木こ霊だまする。
「ふむううう、ただひたすら可か愛わいい……いてもたってもいられぬわ!!」
　鼻息を荒らげる戦士たち。戦いくさ女め神がみのパワハラじみた作戦強要などもあり、テンションが落ち気味だったアルティメギル基地に、久方ぶりの快笑が響きわたっていた。
　無論テイルブルーの復活は超怖いが、今回はレッドの可愛さがそれを

打ち消してくれる。
　しかし、またもやホールにやって来ていたヴァルキリアギルディだけは、ブルーの勇姿を見て愕がく然ぜんとしていた。
「馬ば鹿かな、何な故ぜあのテイルブルーが復活している……⁉　彼女は、心のツインテールが無毛と化して戦えなくなったはずだ‼」
　彼女の狼ろう狽ばいを見たビートルギルディが、穏やかな口調で説明する。
「一度挫くじけても最後には必ず立ち上がってくる……ツインテイルズとはそのような者たちだ。私もテイルイエローを前に、同じ驚きよう愕がくを経験をしている」
「くだらぬ……！　テイルレッドのあんな稚拙な挑発に乗る、君たちが未熟なのだ‼」
　忌いま忌ましげに拳こぶしを握るヴァルキリアギルディへ、ティラノギルディは得意げに言った。
「あのテイルレッドの面白さが理解できぬか……生き真ま面じ目めすぎて退屈な奴やつよな、お前は！」
「ッ────！」
　ティラノギルディは単にヴァルキリアギルディに反発したくて適当にそう言っただけだが、その負け惜しみが殊ことの外ほか彼女の心の琴きん線せんに触れてしまったことに気づいていない。
　よろめくように後あと退ずさるヴァルキリアギルディ。
　ホールに木霊する笑いから逃げるようにして、彼女は走りだした。
　戦士たちの談笑が届かなくなった廊下で、ヴァルキリアギルディは拳を壁に叩たたきつける。
「おのれっ……何の責任もない亡者どもめ、いつもいつも楽しそうに笑いおって……‼」
　何がおっぱいだ──。鉄面皮に守られていた戦女神の感情が、決壊して

いく。
「真面目に任務を遂行して何が悪い……効率を求めて何が悪い！　私は間違っていない!!」
　いかなる強戦士と相対しても眉まゆ一つ動かさず任務を遂行してきた彼女が、ツインテイルズと出会って以来、次第に余裕を失いつつある。感情を露あらわにしつつある。
　恐怖を乗り越え吹っ切れたテイルブルーとは、完全に真逆の状況だった。
「やっほーヴァルちゃん、調子はどう？」
　背後から陽気に声をかけてきたのは、マーメイドギルディだ。
「さっき首領様のところに行ってきたんだけど、また急せかされちゃったわよ。ヴァルキリアギルディはどうしてる、作戦はどうなった、って」
「あ、さ、作戦……は……ツインテイルズ……は……」
　マーメイドギルディのいつもの冗談めいた報告に、気の毒なほど身体からだを震ふるわせるヴァルキリアギルディ。作戦は……何も進んでいない。それどころか、後退しているフシすらある。
　よりにもよって、彼女が首領の前で打倒したことを得意げに語ったテイルブルーが復活してきたタイミングでこの言こと伝づては、最悪の追い込みになってしまった。
「？　あんま根詰めちゃ駄目よー。あの人面白がってるだけなんだから」
「私で楽しんでいただけているのなら……僥ぎよう倖こうだ」
　ヴァルキリアギルディは震えを抑え込み、マーメイドギルディを正視した。
「マーメイドギルディ。君が私を使って研究をしようとしていることはわかっている……好きにしろ。その代わり、私が究極のツインテールを

手にするまでは……力になってもらうぞ」

「……もちろん私は、ヴァルちゃんの味方よ」

　首領の戯たわむれな一言が、生き真ま面じ目めで完かん璧ぺきなる守護者の心の均衡を崩してしまった。

　追いつめられた戦いくさ女め神がみは、ツインテイルズを打倒する最後の作戦へと動き出す──。

第六章　不滅ＶＳ不屈。

　クリスマスの昼下がり。
　観み束つか家地下の基地は、壁を赤と緑のリボンや雪のシールで飾られ、クリスマスツリーが設置された聖夜仕様に装いを変えている。
　今日は、慧え理り那なの誕生日祝いも兼ねたクリスマスパーティーだ。
　もっとも、昨日のイヴも前夜祭と称して、うちの喫茶店で騒いだのだが。
　一般人にもエレメリアンへの危機感が強まっている昨今だが、それでも喫茶店に来るお客さんたちがいつもどおり中二を楽しんでいるのを見て、俺は報むくわれたような気持ちになった。
「メリクリックリです！　トゥアールちゃんプレゼントフォー総そう二じ様!!」
「プレゼント交換の時間はまだよッ!!」
　俺に飛びかかってきたトゥアールの腹部に、愛あい香かがジャンピング頭突きをぶちかました。
　クリスマスだというのにこの地下基地でだけ、除夜の鐘が鳴り響いている。
　愛香とトゥアールのやりとりも完全復活だぜ。
　トゥアールも愛あい香かも、そして慧え理り那なもイースナも桜さくら川がわ先生も、それぞれ自分流にアレンジしたお洒しゃ落れなサンタ服でおめかししている。
　俺？　俺はトナカイ……。

　メガ・ネは雪だるまの着ぐるみで、頭だけ出している。
「フフ、果たしてトナカイに乗るのは、どのサンタかしら──」
　サンタが乗るのは、トナカイじゃなくてトナカイが引くソリだろ……？
　母さんは、いつもの黒い女幹部服じゃなくて赤い色替え版だ。本人曰く、「敵役は予算をあまり割いてもらえず衣装チェンジは大体色替えで済まされるから」──それの再現らしい。
「貧乳お前、厚あっついケープじゃのう、そんなに胸隠したいか？」
　イースナが愛香の胸元をみてニヤニヤと笑っている。
「可か愛わいいでしょ！　イースナこそフリフリマシマシであざといのよ！　アイドルにでもなったつもり⁉」
「なっておるわ、大おお晦日みそかに無事ライブ開催決定じゃ！　年齢的にカウントダウンライブにはできなかったがな！　いやあ、若いと色々制限がキツいわ、のうトゥアール？」
「よい子の総そう二じ様にトゥアールちゃんの若さをクリスマスプレゼントです！　一緒に靴下に入りましょう‼」
　谷間の強調されたミニスカサンタ服で、トゥアールが身体からだいっぱい元気いっぱい飛び跳ねて盛り上がりを煽あおる。
「観み束つか君、ハッピーバースデーですわ！　わたくし、もう結婚できる年齢です！　脱いでもワンちゃんになっても怒られない年齢ですわ‼」
「法的には去年からできてたでしょう会長！　あたしもできるし！　あと後半のは年取るほど駄目なやつでしょ‼」
　愛香に注意された慧理那だが、その衣装は犬耳じみたサンタ帽が可愛らしい。それを見守る桜川先生は、メイド服を基調としたサンタ衣装だ。
「慧理那！　あらためて、誕生日おめでとうなのじゃー‼」

元気よくクラッカーを鳴らすイースナ。俺たちもクラッカーを持ち、それに続く。
「ありがとうございますわ、イースナさん!!」
「なんて素敵な日や……イースナちゃんが、友達の誕生日会にお呼ばれされとる!!」
　感無量の雪だるまメガ・ネが、転がりかけて慌あわてて持ち直していた。
　最近戦い漬けだった反動か、みんなめっちゃ元気だ。
　ネオアルティメギルが侵攻を開始して以来、初めてエレメリアンの出現が止まった。今日で三日目──これが嵐の前の静けさだとしても、一時の平和を満喫したい。
『レッドちゃんのおっぱいっ』
　感傷に浸ひたる俺の耳じ朶だを、ミサイル爆撃級のサウンドが直撃する。
「ぎゃーやめろ見るなああああああああああああああ!!」
　まるで親戚にホームビデオを見せるようなノリで、モニターに映るレッドを微ほほ笑えましく見守るみんな。トゥアールだけは、目を血走らせて口くち端はによだれが滲にじんでいる。
　一生の不覚だ……テンパったからって、何で俺はトゥアールの真ま似ねしちまったんだ!!
　イースナ、慧え理り那な、トゥアールが次々に俺ににじり寄ってくる。
「大丈夫か総そう二じ……わらわのおっぱい揉もんでいいぞ？」
「あ、わたくしも！　よろしければイエローに変身しますわ!!」
「総二様、今後もあのような囮おとり戦法をされるなら、実物おっぱいをしっかりと理解しておくことが必要不可欠！　暗い夜道で役に立つトナカイさんの真まっ赤かな下のお鼻を私の胸に──」

「もうやらねえよあんな作戦!!」
　そうさ、トナカイはいっつもみんなの笑い者さ……。
　愛あい香かが胸元のケープを摘まんで、溜ため息いきをついているように見える。
　早くもワインを呷あおってほろ酔いの母さんは、トゥアールにくねくねと絡んでいった。
「ねえトゥアールちゃん、温泉旅行の時にみんなで飲んだトゥアールジュースはもうないの？　せっかくの祝いの席だし、ハジけちゃいましょ！」
「すみません未み春はる将軍、あれを使うと私が蛮族に貞操を奪われる危険性があります……!!」
「観み束つかー、クリスマスだしもう籍入れよう。婚こん姻いん届とどけじゃあいつも渡してて、プレゼントにならんからなー」
　そして桜さくら川がわ先生が、シラフで凄すさまじいトナカイ殺しを放ってくる。
「あーもう性なる夜が待ちきれません!!」
　何度も俺に飛びかかってきては、愛香に迎撃されるトゥアール。これも、最近愛香が元気が無かった反動だろうか。
「全くどういうことですか！　蛮族は、気がついたら立ち直ってるんですから！　何がきっかけか知らないですが単純ですね、気にかけて損しました!!」
　どうも、テイルブルーが復活した時にまた一ひと悶もん着ちやく……いや一撃必殺あったらしい。
「……まあ、元気出ること……あったし……」
　何やらもじもじしている愛香。
「何で顔ツヤッツヤさせてるんです!?　まさか、総二様と何かあったとか言うんじゃないでしょうね!?　……って、聞いた私が馬ば鹿かでし

た、愛香さんに限ってそんなことあるはず……」
「な、何もっ！　…………なかったわよ……」
「あ、ああ……いや――――――――愛香さんにロストバージンで先を越されるぐらいなら私が愛香さんの純潔を奪った方がマシですぅあああああああああああああ!!」
「命奪われたいのあんた!?　飛びかかってこないでよ、お子ちゃまが感う染つるでしょ!!」
　サンタＶＳサンタ。突とつ如じよとして年末大作スペクタクル映画が上映され始めた。
「あやつらはサンタトーナメントから脱落する、わらわとトナカイ争奪戦じゃ、慧え理り那な!!」
「よくわかりませんが、観み束つか君に乗るのはわたくしが一番得意なはずですわ!!」
　イースナと慧理那が、俺の背中にしがみついてくる。サンタごっこかこれ!?
「……まあ、テイルブルーとしての戦力が戻ったのは喜ぶべきですね。これで愛あい香かさんを、遠えん慮りよなくネオアルティメギルにぶつける鉄砲玉にできますから」
「あんたのくれたタギラセルだか何だか使って、程よく肩こりが取れたからかもね」
「その程度で済んだなら失敗作です。次は、感度が一〇〇倍くらいになるよう改良します」
　しばらくじゃれ合った後。愛香とトゥアールは息を荒らげながら、ハイタッチとも、手を払いのけるようにも見える仕草で、互いの手を打ち合わせた。
　憎まれ口を叩たたきつつも、二人は通じ合っているんだ。
　笑顔のイースナと慧理那に左右からケーキをフォークで口に突っ込ま

れながら、俺は二人を微ほほ笑えましく見守る。
　戦い漬けの日々を取り返すかのように、俺たちはパーティーを楽しんだ──。

◇

　一時の平穏は、アルティメギル基地にも訪れていた。
　テイルレッドお宝映像集に夢中な戦士たちで溢あふれる、基地大ホール。
　そこに、ヴァルキリアギルディの冷ややかな声での通信が割り入ってきた。
『──ネオアルティメギル諸君、私から話がある。搬入口に集結せよ』
　あっという間に静寂が訪れるホール。
「むわ、ご機嫌斜めのようだな。ちとからかい過ぎたか……説教は面倒だ」
　生き真ま面じ目めな戦いくさ女め神がみの小言を想像し、バツが悪そうに頭を掻かくティラノギルディ。
「自じ業ごう自じ得とくだな……行こう、皆の者。残存部隊戦士は、引き続きここで待機するように」
　トリケラトップギルディの号令で、ネオアルティメギルの面々も揃そろってホールを後にする。
　参謀スパロウギルディは、最後にホールを出ていくドラグギルディと不意に目と目が逢あったことに、言いようのない不安を感じるのだった。

　ネオアルティメギルの戦士たちが、速すみやかに搬入口に到着する。
　搬入口の最端には、ヴァルキリアギルディがローブもまとわず独りで

立ち尽くしていた。
　誉ほまれ高き戦女神とは思えないほどに、哀愁を帯おびながら。
　その雰囲気を見て、説教が始まるかと、繕つくろいもせずげんなりするティラノギルディ。
「ティラノギルディ。君たち幹部戦士が随分と心配をしてくれたように、確かに強大な力を持つエレメリアンの戦闘や再生は、術者である私に莫大な負担がかかる。それは認めよう」
　しかし、戦いくさ女め神がみが語ったのは──最終戦への覚悟だった。
「だがもう、その懸念は不要だ。この戦いで……全てを終わらせる」
　戦士たちの前で神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟を掲げ、戦女神は酷薄な最さい後ご通つう牒ちようを下した。
「皆、私に気を遣う必要などない。遠えん慮りよなく暴れたまえ。遠慮なく死に、遠慮なく生き返りたまえ。……ただし、撤退だけは二度と許さぬ」
　エレメリアンたちの身体からだが、神槍に導かれるかのように淡い光に包まれていく。
「私は死してでも勝利を掴つかむ覚悟を決めた。君たちにも──死なぬ覚悟をしてもらう」

　　◇

　クリスマスパーティー開始から、数時間。メインイベントの一つであるプレゼント交換の時間を迎えたその時──無情にも、アラートが鳴った。
　トゥアールは操作端末に駆け寄ると、メインモニターに映像を出力する。
「……大変です、これを見てください」

　どこかの広域地図が表示された。標高線からして、山のようだ。
　そこに、アメーバのように不定形に広がっていく強調色が重ねられる。雨雲移動図に似ているが、それが何を示しているかがわからない。
「……この場所の上空に、粒子状の属性力エレメーラが散布されています。皆さんは、ロリちゃんの世界でこれを見ているはずです」
「！　ユグドラシルグギルディの切り札──〝撒死舞霧マキシマム〟か!!」
　花粉のように大気に拡散させた自らの属性力エレメーラで、その場にいる人々の属性力エレメーラを一瞬にして奪ってしまう最終兵器。
　属性力エレメーラを奪取するリングの特性を超広範囲に広げた、恐るべき能力だ。
「場所は、最初にネオアルティメギルと遭遇した岩場です。この世界でユグドラシルギルディが〝砲台〟の役目を果たすとすれば、あのぐらい広くなければ無理ですからね」
「何てことですの……突然、こんな手段に訴えてくるなんて……」
　この能力の恐ろしさを知っている慧え理り那なは、顔面を蒼白にさせた。トゥアールが落ち着いた口調で補足する。
「発見が早かったので、まだ〝撒死舞霧マキシマム〟は住宅圏まで到達していません。え──」
　しかしその落ち着きも、続き表示されたさらなる驚きよう愕がくの事実に崩されてしまった。
「現場に……ヴァ、ヴァルキリアギルディの反応があります!!」
「嘘うそでしょ、あいつ来たの!?　どうして急に!?」
　高みの見物をしているだけで優位に立てるはずのヴァルキリアギルディが、わざわざ姿を現したということは──必勝を確信したからに外ほかならない。
　しかし奴やつの最終侵攻は、俺たちが耐えに耐えて待ち続けた、逆転

のチャンスでもある。
「……パーティーの続きは、帰ってきてからだな」
　俺は観念し、トナカイ服を脱ぎながら言った。
「プレゼント交換楽しみにしておるんじゃからな。わらわのとっておきのエロゲーを受け取った者の感想を、早く聞きたいのじゃ」
　中身言ったら駄目だろイースナ……あとそれ慧え理り那なに渡ったらどうするつもりだ……!?
　トナカイの服を脱いだ俺が振り返ると、同じくサンタ服から着替え終わった愛あい香かたちがそれぞれ、準備完了を告げるように頷うなずいた。
「今日はクリスマスですもの……。わたくしたちで、奇跡を起こしましょう!!」
　もちろんさ、慧理那。俺たちはプレゼントを届けるサンタではなく……平和を届けるツインテイルズだ！
「行くぞ、みんな。決戦だ!!」
　トゥアール、桜さくら川がわ先生、母さんの見守る前で、俺たちは決然と並び立つ。
「テイルオン!!」
「テイルオン!!」
「テイルオン!!」
「グラスオン!!」



　世界中で、赤と緑の彩いろどりに人々が優しい気持ちになる聖夜。
　この基地では赤と青、黄色、黒の四色の光が、互いを支ささえ合うようように爆裂する。
　明日もその先も、優しい気持ちが世界に溢あふれるように。
　メガ・ネが並び、五人揃そろった俺たちツインテイルズは、転送ゲートへと走った──。

　　◇

　因縁の地に到着した俺たちが目にしたのは、噎むせ返りそうなほどの一面の赤だった。
　以前こいつらと戦った岩場が、〝撒死舞霧マキシマム〟で大気が紅あかく染まってしまった今は、全くの別世界。生命無き、死の星の地平を思わせた。
「久しいな、ツインテイルズ諸君。ここまで心を無毛にせず耐えてきたこと、まずは賞賛しておこう」
　五人のツインテイルズは、崖がけの上に戦いくさ女め神がみを臨のぞむ。
「……ヴァルキリアギルディ……!!」
　神の眼めを射返す俺たちのツインテールに、もはや一分の迷いもない。
「随分と飾り気のないクリスマスツリーじゃな。愛しき者と聖夜を過ごせぬ戦女神は、寂しくぼっちパーティーか？」
　ブラックは天を衝つく巨大樹、ユグドラシルギルディを見やり、その根元に立つヴァルキリアギルディを皮肉る。
「───だっ……！　黙れえ────っ!!」
　ヴァルキリアギルディの突然の激げつ昂こう。こいつが感情を露あら

わにするのは、初めて見た。
「な、何で急にこんなキレとるんじゃこいつ⁉」
　困惑するブラック。ヴァルキリアギルディはすぐに冷静さを取り戻し、
「……ッ……業腹極まりないとも。死人どもは使えぬ。君たちは存外しぶとい。気長に待つつもりだったが……いささか飽きたのだ」
　本当にそうなのか……？　こんなに早く痺しびれを切らすぐらいなら、最初の戦いの時点で撤退しなければそれで全てが終わっていた。
　何かがあったんだ……こいつが、これまでのやり方を覆くつがえしてまで、勝ちを急ぐ何かが。
「だから──ここで、全てを終わらせてくれるぞ」
　神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟を天に掲げるヴァルキリアギルディ。
　その神こう々ごうしき光が、紅く染まった大地に新たな生命を芽吹かせる。
　転送ゲートのような極彩色の光が固まり、人間大の形を取り……次々と、エレメリアンの姿へと変わっていく。
　崖の上には、先日の総力戦の焼き直しのように、全てのエレメリアンが集結していた。
　当然、今日までに倒したエレメリアンも、当たり前のように再復活している。
　だが、俺たちはそれを目まの当たりにしても、もう怖じ気づいたりはしない。
　強がりなどではない、確かな闘志が俺たちに宿っていることを察知したからだろう。
　ヴァルキリアギルディは、苛いら立だたしげに肩を震ふるわせた。
「何な故ぜだ……何故君たちは絶望しない！　心が折れない！　見よ、

この不滅の亡者たちを！　今日までの戦いは再び無意味なものとなった！　戦いは永久に繰り返されるのだぞ!!」
　俺は、信念を込めて睨にらみ返した。
「無毛好きのお前には想像しにくいことかもしれないな……」
　最初はみんな、強がりだった。
　居並ぶこいつらの姿に、不安に押し潰されそうだった。俺は、何度も夢にうなされた。
　だけど……イースナが、侵略と悪意に負けず気け高だかく歌っていた！
　慧え理り那なは、先輩に正体が知られても彼女を護まもり、戦い抜いたと聞いた！
　トゥアールは、笑顔で俺たちを励まし続けてくれた！
　愛あい香かは……とてつもない恐怖を乗り越えて、再びツインテールを結んだ！
　平和に生きる普通の人たちが、強く生きる心を示してくれた……！
　そんなみんなの姿を見て、俺も勇気が湧いてきた!!

「ツインテールは……髪の毛は、たなびくものだ……折れたりはしない！　だから俺たちの心も、決して折れないんだ!!」
「──なるほど。心ツインテールを折れと命を下したのが、そもそもの過ちであったか。やはりツインテールは……剃そらねばならぬようだな!!」

　ヴァルキリアギルディが、戦士たちへ攻撃命令を下すように、神しん槍そうを振るった。
「属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」
　戦いくさ女め神がみの宣戦布告への返答に、俺は三つ編み属性トライ

ブライドの属性玉エレメーラオーブを発動。
　ブルー、イエローとともに三武装合体の巨砲、フュージョニックバスターを構える。
「ヴァルキリアギルディ！　〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟！　今度は俺たちがお前らを諦あきらめさせる番だ！　ツインテイルズの底力、見せてやるぜ!!」
　俺は咆ほう哮こうと共にトリガーを引いた。フュージョニックバスターから放たれた三色の螺ら旋せん波光が、数体のエレメリアンを呑のみ込んでいく。
　地平高らかに──開戦の狼煙のろしが上がった。
　しかし、最初の総力戦に比べて、俺たちの邂かい逅こうの何と無機質なことか。
　あの合戦を思わせる信念の昂たかぶりが、今日のこの戦いにはほとんど感じられない。
　我われこそはと愛を吠ほえながら向かってきたエレメリアンたちは、今やただ足音と叫びを響かせながら向かってくるのみだ。
　リヴァイアギルディの股間の槍やりとクラーケギルディの触手が、ブルーとイエローに迫る。
　僅わずかな目配せで意図を悟り合い、ブルーが貧乳属性スモールバストを、イエローが巨乳属性ラージバストを発動。
　弾性を備えた強力な防御膜を、二人の前面に展開する。
「「リフレクション・バースト!!」」
「「ぐわああああああ────────っ!!」」
　自分たちの属性が生み出した合体技でカウンターを受け、リヴァイアギルディとクラーケギルディは吹き飛んでいく。
「ゆくぞメガ・ネ！　カッ飛ばせ!!」
「しっかり掴つかまってててな、ブラックちゃん!!」

　メガ・ネの爆走機形態メガネストライカーで、向かってくるアメーバギルディを前方に立つアンモナギルディに叩たたきつけるように跳ね飛ばすブラック。
　味方同士をもつれ合わせ、一度に襲おそいかかってくる数を制限しているのだろう。
　数で勝るのは、決して有利なだけではない。ブラックは、少数だからこその戦闘方法を考えて立ち回っている。まるで誰だれかから受け継いだかのように、地に足のついた戦法だ。
　俺はいつの間にか近寄ってきていたティラノギルディの攻撃を、フォーラーチェインにチェンジして回避。ブレイザーセイバーを射出し、眼下のマンモギルディを爆散させたのだが……着地した俺の目の前で、ヴァルキリアギルディが不吉な笑みを浮かべている。
「今度こそ、力尽き滅びるその時まで〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちと戦い続けるがいい!!」
　彼女が天高く掲げた〝頭頂照らす神光ラグナロク〟が、閃せん光こうを放射した瞬間──ついさっき倒したばかりのマンモギルディが、巻き戻し映像のように爆発した場所に再生を果たしていた。
「!?　瞬時に再生しましたわ!!」
　イエローも横目で確認して驚いている。瞬間再生はできないんじゃなかったのか!?
「もう、この先のことは考えん……。いくらでも亡者どもを倒すがいい、ツインテイルズよ……私もまた、いくらでも蘇よみがえらせてくれるぞ!!」
『ヴァルキリアギルディの持つ〝頭頂照らす神光ラグナロク〟に、異常なほど属性力エレメーラが活性化しています！　やはり今までは、能力行使を抑えていたのでしょう……』
　トゥアールが訝いぶかしみながら探知結果を通信してきた。

『後先を考えないという言葉が比喩でなければ、ヴァルキリアギルディはリミッターを解除しています。自身の負担も顧みず、瞬間再生させてくるということです……!!』
　イエローやブラックが倒したエレメリアンたちも続々と再生を果たし、彼ひ我がの戦力差は全く埋まらぬままに時間が刻一刻と流れていく。
『いけない……！　みなさん、撤死舞霧マキシマムが防衛ラインを突破しかけています！　どうか急いで、ユグドラシルギルディの攻撃を止めてください!!』
　トゥアールの通信に、全員が表情を険しくする。
『私は仮面をつけて一般人の避難誘導に向かいます！　……尊みことさんも手伝ってください！』
『おお、久しぶりの仮面ツインテール二号か……任せろ！』
　桜さくら川がわ先生の声も聞こえる。基地には母さんに待機してもらい、二人は現地でのサポートに回るようだ。
　異世界からの侵略者、異形の怪人と戦ってきながら──避難誘導という言葉がひどく遠い世界の出来事に聞こえる。それだけの規模の戦いを繰り広げているのだと、実感する。
　無理はしないでくれよ、トゥアール、桜川先生……!!
　時間がない。このままこいつらの無限復活につき合っていたら、俺たちの体力が尽きる前にユグドラシルギルディの能力で人々の属性力エレメーラが奪われ始めてしまう。
　ヴァルキリアギルディを倒すべく一直線に駆ける俺の前に、ドラグギルディが乱みだれ刃ばの大剣を構えて猛然と突っ込んできた。
「……ドラグギルディ！」
「戦いくさ女め神がみは討ち取らせぬぞ!!」
　自分を打倒せしめない限り、この戦いは終わらないと、その剣けん閃

せんが強烈に訴えかけてくる。
「テイルレッドを抑えよ、ドラグギルディ！　その究極のツインテール……私が奪う!!」
　その隙すきに、ヴァルキリアギルディが俺の背後に立ち塞ふさがった。
「随分熱くなってるじゃないか、ヴァルキリアギルディ……俺の究極のツインテールになんて拘こう泥でいしないって、お前自身が言ってたことだろう!!」
「……今は違う……テイルレッド、君が欲しい！　首領様の御希望おのぞみのために──!!」
　魔のプロポーズとともに俺目掛けて突き出されたヴァルキリアギルディの手を、横合いから身を躍らせてきたブルーが飛び蹴げりで払い墜とした。
「レッド！　ドラグギルディをお願い！　こっちはあたしたちに任せて!!」
「大丈夫なんだな、ブルー！」
「……もし、あたしのツインテールが奪われたら……ちゃんと取り返してよね」
「ああ。約束だ！」
　拳こぶしを合わせ、ブルーを送り出す。不思議だ。ヴァルキリアギルディへ単身向かっていくブルーを止めなければ、という不安が一片も湧いてこない。
　ドラグギルディもまた、ブルーのツインテールを頼もしげに見送った。
「テイルレッド！　青の戦士はお膳立てを整えてくれたようだ……よもやこれでもまだ、我われと戦えぬなどとほざきはすまいな!!」
「……もう、迷いはしないさ……。決着を着けるぞ、ドラグギル

ディ!!」
　みんなをこの戦いに巻き込まないよう、乱戦の中心からできる限り距離を取っていく。
　遠く聞こえる戦いの調べを背に、俺たちは最後の邂かい逅こうを迎える──。

◇

　ドラグギルディとともに離れて行くレッドを、苦笑しながら見送るブルー。
　レッドは……総そう二じは、男の戦いをするのだ。
「イエロー、ブラック！　ヴァルキリアギルディはあたしが引きつける！　二人は先に何とか、ユグドラシルギルディを止めて!!」
　ユグドラシルギルディの花粉がどんどん拡散していく──焦あせるトゥアールの通信を受け、ブルーは優先順位を判断。イエローとブラックに、ユグドラシルギルディを託した。
「簡単に言ってくれおって、このエンドレス変態どもを突破するのは骨じゃぞ!!」
「行きましょう、ブラック!!」
　イエロー、ブラックは呼吸を合わせて天高く跳躍すると──
「「シンフォニックスマッシュ───!!」」
　同時蹴げりで再生エレメリアンの只ただ中なかに飛び込み、ブルーの背後で爆発音と地鳴りが連なり始めた。
　神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟を振りかざし、ブルーに歩み寄るヴァルキリアギルディ。
「聞き間違いであろうな……この戦いくさ女め神がみを、君ごときが引きつけるなどという妄もう言げん！」

「そうね、言い間違ったわ──あんたはあたしが倒す!!」
　ヴァルキリアギルディ自ら戦う以上、自然とその周囲からはエレメリアンが離れていく。
　ブルーがタイマンをするこの相手は、これまでで最大最強の戦女神。
　ネオアルティメギルとの戦いの日々では仲間に負担をかけた分、この難敵だけは自分が倒さなければならない。
　戦女神の力は熟知している。通常形態ではこちらの武器が易やす々やすと破壊される戦闘力だ。
「エターナルパッド!!」
　ならばこその、最初から全身全霊。アンダースーツの隙すき間まから進化装備エヴォルブアームズをスロットインし、ブルーの全身が鮮烈な蒼光に包まれる。
　全身にブレードを備えた、光さえも斬きり裂さく最強装そう甲こう──エターナルチェイン。
　属性玉エレメーラオーブの瞬間発動が可能なこの形態の特性を全開し、ブルーは脚属性レツグの脚力強化を施ほどこした疾走で戦女神へと疾しつ駆くした。
「さあ行くわよ！　あたしの心を追いつめてくれた借り、返させてもらうわ!!」
　兎耳属性ラビツト、涎属性スロバー──身体からだや武装強化の属性を、次々に発動していく。
　ウェイブランスエクシードと〝頭頂照らす神光ラグナロク〟。
　それぞれの槍やりは、交わす声を突き抜けてぶつかり合う。
　数合の槍の撃ち合いを経て、ヴァルキリアギルディはブルーの変化に気づいた。
「むうっ……この、力は……!!」
　前回の戦いとは、まるで勢いが違う。〝死して尚変態ヴアルハラ〟の

維持に莫大な力を費やしているとはいえ、自分と互角に斬きり結び始めたブルーの底力に、焦しよう燥そうを募つのらせ始める。
「何な故ぜだ……つい先日まで、あれほどツインテールが消える恐怖に無様に怯おびえていた君が……何故これほどの力を！　いったい何が、君をこれほど強くした!!」
「…………………………愛、かな…………あ、ちょっと恥ずかしい……」
「愛だとっ!?」
　不可解な力に僅わずかながら畏おそれを見せる戦いくさ女め神がみ。生き真ま面じ目めな女性の限界がそこにあった。
「あんたこそ、さっきブラックが言ったことにやたら反応してたけど……もしかして、好きなんじゃないの？　首領って奴やつのこと……」
　ヴァルキリアギルディは、意外なほどの狼ろう狽ばいを見せた。
「ち、違う！　愛するなどと畏れ多い……！　私は首領様を心から尊敬しているだけだ!!」
　自ら愛すると言い直したことで、ブルーの疑問は確信に変わる。
「ようやくわかった……あたしがなんで、あんたのことが怖くてたまらなかったのか！　あんたも、好きな奴のために戦ってるからよ!!」
　両者は槍やりと槍を絡め合わせ、火花を散らしながら互いを押し込む。
「そうだ、怖かろう！　断じて首領様を御お守まもりするという私の信念、他のエレメリアンたちとは強さが違う!!」
「わかってる……好きな奴を守るために、どれほど強くなれるか！　あたしが誰だれよりもよくわかってる！　だから初めて同じ思いで戦ってくる女ヤツが、恐ろしくてたまらなかった!!」
　映し鏡の囁ささやく言葉は、己おのが内面より響く言葉。

　それはつまり、初めからブルーを気にかけていたヴァルキリアギルディもまた、同じ。
「ならばその恐怖とともに！　今一度滅べ、毛根よ!!」
　神しん槍そうの威光が、ブルーのテイルギア、装そう甲こう無き胸を直撃する。
　ブルーはよろめきながらも、ランスを構え直した。
「……無毛になる恐怖が……もはや通じぬのか……!!」
「根性で我慢してんのよ!!」
　防御能力系の属性玉エレメーラオーブを複数発動させて身体硬化能力を付加しているとはいえ、ヴァルキリアギルディの攻撃を凌しのぐには全く足りない。誇張ではなく、根性だけで凌いでいるのだ。
　ブルーが狙ねらったのは〝頭頂照らす神光ラグナロク〟の穂先。円の動きで左腕のブレードを打ちつけて刺し突とつの勢いを殺し、そのまま柄えにブレードを滑らせて槍の半ばを強引に握り掴つかむ。
　流麗な「柔術」の体捌さばきで敵の槍術を封殺したかと思えば、間かん髪はつ容いれずの飛び膝ひざ蹴げりで、今度は右膝装甲に装着されたブレードを敵の腹部へと叩たたき込んだ。
　腹部から火花を散らして後あと退ずさるヴァルキリアギルディの襟えり元を、ブルーは右手で鷲わし掴づかみにして引き寄せる。そしてこともあろうに、その神こう々ごうしき鼻び梁りようの先に頭突きをかました。
「ぐっ……ぐぁ……な、何を……自棄やけになったか、テイルブルーッ!!」
「あんたの方が圧倒的に強いんだから……見てくれ気にして戦ってらんないっての!!」
「見てくれ悪さどころではない、君自身も破滅していくのを覚悟の戦い方ではないか！　自らツインテールを滅ぼす気か!!」

ブルーの鬼気迫る猛襲に、戦いくさ女め神がみは怯おびえるように空手の左拳こぶしを振り回す。
殴なぐりつけられる装そう甲こうから噴き出す火花を自ら浴びながらも、ブルーは荒々しい攻撃の手を休めない。
「あたしのツインテールは滅びほどけない……大切な人が結んでくれたものだから!!」
テイルブルーのツインテールは今、これまでのどんな戦いよりも遥はるかに限りなく輝きを増している。決して解ほどけぬこのツインテールこそが、二度と折れぬ心の証あかしだった。
「あんたが、首領を守ろうとしているのと同じにね!!」
「っ……く、違う！　甘えが許される君と私は、決定的に違うのだ!!」
ヴァルキリアギルディの攻撃は、さらに勢いを増していく。
「君は！　自分でツインテールを捧げることができるではないか！　愛する者に、自分のツインテールを見せてあげることができるではないか!!」
神しん槍そうの衝撃波が、ブルーを大地深く埋めていく。
「私は違う……どれだけ首領様がツインテールを御希望おのぞみになられても、私自身がお見せすることはできない！　戦い、倒し、奪うことでしか！　私はツインテールを見せて差しあげることができぬのだあああああああああ!!」
無毛──生来持つ愛に縛られ、やがて生まれた女としての愛に生きられぬ、悲しき戦女神。
それは、彼女がおそらくは生涯初めて振り絞る、心の神槍やりだった。
「甘えていれば良かったのだ……怖いと怯え、戦士としてのツインテールを放棄すればよかったのだ！　恵まれた幸せ者が、私の……首領様の前に立ちはだかるなっ!!」

「そうよ！　戦えなくなってたのは、あたしが甘えてただけ！　十分幸せ補充したから、今は戦えちゃうのよ！　単純で……自分が嫌になるわよ!!」
　それに立ち向かうブルーもまた、生涯で振り絞り続けてきた思いを武器に、大地を爆裂させて飛ひ翔しようする。
「その幸せを享受していればいいものを！　女の幸せを捨ててまで、私と戦う理由は何だ!!」
「──守られて気づいたからよ！　守るために戦うのが、あたしの幸せだったんだって!!」
　イエローの完全脱衣形態フルブラストモードの極光が、遥か視線の先で彩いろどり乱れている。
　ブラックとメガ・ネの阿あ吽うんの呼吸で放たれる攻撃が、幾多のエレメリアンを封殺している。
　仲間は皆、それぞれの思いを懸けて戦いに挑んでいる。
　自分も譲れない信念おもいがあるから、立ち上がることができた。
「ずっと……ずっと、ツインテールが好きなあいつの心を守ってきた……！」
「ぬっ……ぐううっ……！」
　乱舞する極限槍檄。交こう錯さくする無む窮きゅう閃せん光こう。
「他の女の子とイチャイチャしたっていい！　他のツインテールにデレデレしたっていい!!」
　愛と愛が──一歩も譲らずに激突する。

「けど、あいつを守る役だけは……他の誰だれにも渡さない!!」

　やがてそれは、有り得るはずのない光景に変貌を遂げる。
　不敗の戦士が……不滅の戦いくさ女め神がみが、徐々に、しかし確実

に後退を強しいられていく。
　ちっぽけな人間の心──不屈の魂たましいに。
「なるほど、戦うことが……守ることが、君の愛か！　君の強さの源だったということか!!」
　そしてその心を理解したその時。戦女神もまた、自らの力の根源を悟った。
「ならば私も認めよう、自らの愛を！　首領様を御お守まもりする役目……それだけは、誰にも譲ることはできんのだあああああああああ!!」
　激情とともに頭上にかざした〝頭頂照らす神光ラグナロク〟に、ヴァルキリアギルディの……戦女神の全ての力が集束していく。
　空を喰らうほどに膨ふくれ上がった破壊の光は、天に唾つばする人間への裁きを思わせた。
　あれを止めるためには、ブルーも己の全てを懸けなければならない。
　エターナルチェインの全身に装備された七つの属性玉変換機構エレメリーションが、魂の蒼光を放射する。
「このままおっかなびっくり一個ずつ増やしてくのは性に合わない！　限界が七つ同時発動なら、一気にそこまでやってやるわ!!」
　これまで三つの属性玉エレメーラオーブ同時発動ですら疲ひ弊へいしていたブルーが今、禁断の七つ同時発動に天高く猛たける。
　髪紐属性リボン。体操服属性ブルマ。学校水着属性スクールスイム。貧乳属性スモールバスト。項後属性ネープ。
　もはや、属性の相乗効果など考慮して重ねられる次元ではない。
　自分がこれまで幾度となく引き出した力を、端はしから次々と発動していく。
　ブルーのテイルギアが放電し、血管が破裂したかと幻視するような猛烈な勢いで、属性力エレメーラが身体からだ中から飛び散っていく。

「まだまだ……！　重なれええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」
　幼馴染属性チヤイルドフツド──そして匂い属性フレグランス。
　七つの重ね掛けは、すなわち命懸け。
　最後に付加した二つは、命預けるに足る信頼を寄せる力。
　ブルーが一歩踏み出すきっかけとなった難敵、そして最も熱く心通い合わせた強敵の属性玉エレメーラオーブだった。
　匂い属性フレグランスは、属性玉変換機構エレメリーシヨンで単独発動させても、それそのものではさしたる恩恵はない。ラフレシアギルディらしい、気合いを入れる程度の些さ細さいな全身強化能力だった。
　しかし、この少女が最後の一押しを、僅わずかな背中の支ささえを必要としたその時──神にも肉薄する極限の助力……〝根性〟となる。
　時空の果てを彷徨さまよう生身の愛あい香かを守り抜いた時のように。今、六属性の荒れ狂う力の奔ほん流りゆうをねじ込み、押さえつけ、包み込む。
　全身の蒼光がウェイブランスエクシードに集束し、極大の属性力エレメーラが解き放たれる。
「完全ブレイクッ！　解放レリーズッッ!!」
　ウェイブランスエクシードが魔方陣にも似た七芒星を描いて、ヴァルキリアギルディを取り囲む。
　必殺であるがゆえに一撃であるべき槍檄を、同時七連撃に昇華する荒技。
「エクストリームウェイブ……スターダスト──────────────ッ!!」



どれを回避すれば──などという逡しゆん巡じゆんすら、この愛の槍やりの前では許されない。
いかに戦いくさ女め神がみといえども、時空を超越した星の瀑ばく布ふを振り払うことは叶かなわず。
アルティメギル神話の象徴たる神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟の威光は、ただ一人の少女の思いの強さによって瓦が解かいした。
「うあああああああああああああああああああああああああああああああっ!!」
空中に舞い上がった後、二度、三度と全身を貫いた衝撃を連鎖破裂させ……七度目の爆裂とともに、ヴァルキリアギルディは大地に叩たたきつけられた。
戦いくさ女め神がみ、墜つ──。
「はあ、はあ……あぐっ……!!」
ブルーのテイルギアが放電し、エターナルチェインが強制解除される。
かろうじて変身を維持しているだけの、満まん身しん創そう痍いながら……堂々たる勝利者の風格だった。
「……全てのエレメリアンの魂たましいを従えるこの私に、エレメリアンの魂で挑んでくるとは……」
掠かすれた声で、どこか可お笑かしそうに呟つぶやくヴァルキリアギルディ。
「魂なんて知らないっての。あたしは使える力を使ってるだけ。エレメリアンと魂を繋つなぐなんて……そんな奇跡みたいな真ま似ねができるとしたら、一人しかいないわ」
ブルーは……今、男の戦いをしているであろう少年に思いを馳はせるように、空を見つめる。

「残念だ……。私の想いが…………あ、愛……が、君に一歩及ばなかったのだな……」
「あたしはほら……ライバル多いから、頑張んなきゃだし。その分の差かな……」
　満身創痍でありながら、粋な笑いを浮かべるブルー。
「思えば、心を持つ死人を蘇よみがえらせた時、私の敗北は運命づけられていたのかもしれん……」
　無む垢くな少女のような瞳ひとみで、ヴァルキリアギルディはいまだ戦い続ける使徒たちに憧どう憬けいを馳せる。
「……こんなことならば、奴やつらの馬ば鹿か騒ぎに交ざればよかった……。すごく、楽しそうだったのでな……。私の無毛好きは、どうだろうか……妙な顔をされるのだろうな……」
「あんだけヘンタイばっかの集まりで、何を遠えん慮りよしてんのよ。あんたは間違ってない。友達を増やすより……好きな人を選んだんでしょ」
　気やすい慰なぐさめではない。自分を追いつめた強敵だからこそ。
　同じ信念に生きた女だからこそ……ブルーは本心からの優しさを贈ったのだ。
「……絶対に不可能だろうが……もし、君たちツインテイルズが首領様のお膝ひざ元へと辿たどり着くことができたなら……。首領様のお顔を、見てはくれないか。私の代わりにな──」
「そうね、見てやるわ。あんたがそこまでして守りたかった奴が、どんな顔してんのか」
「……さらばだ、テイルブルー。愛の戦士よ」
　誇り高き鉄面皮に戻り、握り締めた神しん槍そうもろとも極彩色の光の中に消えていくヴァルキリアギルディ。
　それを見届けたブルーは、満足げな表情で地面に倒れ込んだ。

愛をぶつけ合った死闘は、悔いなく決着した──はずだった。

◇

ドラグギルディとの再戦は、熾し烈れつを極めていた。
ヴァルキリアギルディが全力を出している副次効果なのか、それとも彼女を守るという戦士の矜きよう恃じがそうさせているのか……ゴッドドラグギルディに最強変身チエインエヴオルブしても、先の戦いのように苦痛に足を止めることはない。
「形態変化チエインカスタム──ライザー!!」
俺はライザーチェインの攻撃力強化とフォーラーチェインの機動力強化を駆使し、真価を発揮したゴッドドラグギルディへと挑む。
ブレイザーブレイドツイン、そして背中の装そう甲こうに搭載された短剣ブレイザーエッジを抜き放ち、切れ目なく斬ざん撃げきを繰り出していく。
激しい攻防の中、ドラグギルディの目は、剣ではなく上に下にと目まぐるしく結び直しを繰り返す、俺のツインテールに注がれていた。
「……上結びに下結び……洒しや落れっ気を覚えたなテイルレッド！　そうだ、それでいい！　全てのツインテールで挑んで来い!!」
フォーラーチェインの高速移動にすら追いすがってくるゴッドドラグギルディ。
射出したブレイザーセイバーを難なく叩たたき落とし、返す刀で強烈な斬撃を見舞ってくる。
一度間合いを取り、ともに初期形態へと戻ると、俺たちは乱れる呼吸いきを整えた。
「ツインテールは、いいものだな……テイルレッド！」

「こんな時に何を……当たり前じゃねえか！」
　言われるまでもないし、言うまでもない。
「だって……だから俺は、戦ってきたんだ!!」
　再び対たい峙じし、歩みを進め合い、そして走り出す。
　俺はライザーチェインへ、そしてアルティメットチェインへ。
　ドラグギルディはツインテールの竜翼陣はばたきへ、そしてゴッドドラグギルディへ。
　互いのツインテールの軌跡を駆け抜け、俺たちは真っ向から激突した。
　テイルカリバーと〝ツインテールの竜神剣きらめき〟、ただ一つの武器を引っさげて。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
「ぬうううううううううううううううううん!!」
　剣と剣が、今再び──ツインテールの形に結び合う。
　どんな動きをすればいい。
　どんな特殊能力なら有利に立てる。
　戦術も駆け引きも斬きり結ぶ度たびに零こぼれ落ち、全ての思考がクリアになっていく。
　俺たちはただ──ツインテールだった。

　静かだ。
　刃やいばと刃を打ち合わせる音だけが、清せい澄ちょうに鳴り響く。
　心に、ツインテールに響く音色。
　吐と息いきのように切なく。
　怒声のように烈はげしく。
　俺のツインテールとドラグギルディのツインテールは、手を取り合うように舞い踊る。

いつまでもこうしていたい。
それは許されない。
是と非を一いち斬ざんごとに転回させ、ツインテールの形に紡つむがれる剣けん閃せん。
刃から間断無く振り散る火花は、さながらツインテールの涙だった。
同時に飛びすさり間合いを取った俺たちは、言葉なく最終決着を了解する。
「完全解放ブレイクレリーズ！　究極装填アルテイメツトモード!!」
テイルカリバーの紅あかき刀身が、全てを超越した黄金の輝きに包まれてゆく。
ゴッドドラグギルディの手にする〝ツインテールの竜神剣きらめき〟もまた、灼しやく熱ねつの光波剣を刀身にまとわせていった。
「ファイナルブレイザ――――――――――――――――――――ッ!!」
「……むおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
その先の全てを捨て去った、渾こん身しんの振り抜き。
俺たちの最終剣は互いのちょうど中間でぶつかり、一歩も退かずに拮きつ抗こうする。
行き場を失った破壊光が凝縮し、小型の太陽となって周囲を灼やき尽くす。
熱い……ツインテールが熱いぜ。なあ、ドラグギルディ……。
初めてツインテールを語り合った、俺の宿敵。
止とめ処どなく湧き上がるこの力、この魂たましいの全てを――もう一度受け取れ！
俺の！　俺のツインテールは！

「俺のツインテールは！　無限だああああああああああああああああ

ああああああああ!!」

　次元が軋きしみ、全てが白滅していく最さ中なか。
　剣が砕け、光に呑のみ込まれていくゴッドドラグギルディが見えた──。

　　◇

「コズミックジャッジメント──────────────ッ!!」
「インフィニットバニッシャ──────────────ッ!!」
　無数のエレメリアンたちの包囲を突破し、テイルイエロー・アブソリュートチェインとテイルブラック・インフィニティチェインの二人が、ついにユグドラシルギルディへと到達した。
　黒と黄の光が螺ら旋せんに絡み合い、唸うなりを上げてそびえ立つ神樹へと突き進む。
「あ───れ────」
　気の抜けた声を上げながら、頭部の砲台を爆発させるユグドラシルギルディ。
　イエローとブラックの攻撃に対して防御行動を取らなかったのは、ユグドラシルギルディ自身、この花粉技を禁忌のものと嫌っているからかも知れない。
　ともあれ撒死舞霧マキシマムの市街地への拡散は止まり、ひとまず一般人への被害は食い止められた。
　しかし、二人にとっての地獄はまさにここから始まると言ってもいい。
「よし、折り返しじゃぞイエロー……こいつらを再度突破しなければならん!!」

「ええ、急いでブルーを助けに向かいましょう!!」
　着地しざま、互いを鼓舞しながら振り返ると──自分たちを追いつめていた〝無毛で勇まエインヘしき者リアル〟たちが皆、戦意を喪失したかのように立ち尽くしている。
「────もう、戦う必要はない」
　その答えは、ブラックたちが問い返す前にビートルギルディの口から続けられた。
「ヴァルキリアギルディが倒れたようだ……。私たちが実体を維持できるのも、そう長くはあるまい。お前たちツインテイルズの勝利だ」
　あまりにもあっさりとした敗北宣言に、イエローもブラックも、しばらく状況を受け容いれられずにいた。
　しかし、完全に戦闘意志を消失させているエレメリアンたちを見て、ようやくそれは実感へと変わっていく。
「ブルーが、やってくれましたのね！」
　すでにかなり離れてしまい、その姿を窺うかがい見ることはできないが、ブルーは戦いくさ女め神がみへと雪辱を果たしたようだ。ほっと胸を撫なで下ろすイエロー。
「ええい貧乳め、もう少し決着が早ければ、わらわたちも楽できたものを」
　余裕ができて早速、ささやかな悪態をつくブラック。
「おい、テイルブラックよ。あの白衣の仮面女、此こ度たびは来ぬのか」
　ついさっきまで死闘を繰り広げていたのに、消えるとわかってか完全にまったりモードになっているティラノギルディ。非戦闘員のトゥアールのことを気にかけている。
「あやつも別の場所で戦っておるわ。撒死舞霧マキシマムの脅威から一般人を避難させるためにな」

　軽くむっとしながら、ブラックは投げやりな口調で教えた。
「……そうか、避難誘導か……。今回こそ言っておくことがあったのだが……」
　ぶつぶつと独りごちるティラノギルディ。ブラックももう、構うつもりはないようだ。
「あなたたちは……命令で、仕方がなく戦っていたのですか？」
　どうしても聞かずにはいられず、イエローがエレメリアンたちを見渡す。
　消えるとわかった今最後の抵抗を、と向かってくるエレメリアンすら、一体もいないのだ。
「復活してからの日々、それなりに悪くはなかったが……さりとてこの時間が永遠に続くとは、最初から誰だれも思ってはいまいよ。仮初めの生命で、何を為すかだったのだが──」
　トリケラトップギルディが、儚はかない時間を回顧するように天を振り仰ぐ。
「私たちは皆、生前のお前たちとの戦いで、満足し過ぎたのだ。戦いくさ女め神がみ殿もさぞや不服だっただろう、望みは怨おん執しゆう極まる亡者だったであろうに、皆楽しく第二の生を謳歌していてはな」
　戦士たちはその意見を受け、ある者は首しゆ肯こうし、ある者は苦笑した。
「ふーんじゃ。わらわたちも、貴様たちの存在は不服極まりなかったわ。今さら懺悔ざんげなど聞かぬぞ、とっとと消え失せい」
　まさに虫を払うように、軽く手を振るブラックだったが──図ったかのようなタイミングで、〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちの身体からだが、極彩色の光に包まれて消えていく。
「あ、消えるみたいですねー」
　砲台以外はほぼ無傷のユグドラシルギルディが、のんびりと最期を告

げる。
　基地に退却するような気軽さで……戦士たちは、次々と消えていく。
　まるで、最初から全てが夢だったかのように、そこには何も残らなかった。
　確かに消えろとは言ったが、本当にあっさり消えられてしまい、ブラックも複雑な表情を浮かべる。
「簡単に消滅を受け容いれおって……この二〇日あまり、どれだけ貴様らに苦労させられたと思っておる！　呪じゅ縛ばくから解き放たれたなら、茶飲み話くらいつき合ってから逝ゆかぬか!!」
　それでもブラックは、ようやく全てから解放されたように地面に倒れ込んだのだが──
「……ブラック。本当に、終わったのでしょうか……」
　赤い粒子が消え始めた空に、イエローは更なる不穏を感じ取っていた。

　　◇

「……はあ、はあ……」
　ツインテールの一騎討ちは──俺が制した。
　全力を出しきったことで、限界を迎えたアルティメットチェインの装そう甲こうが宙そらに解ほどけていく。
　ゴッドドラグギルディもまた最強変身チエインエヴオルブが解除され、ツインテールを広げながら大の字に倒れていった。全身から紫し電でんを散らしながらも、穏やかな声で語りかけてくる。
「……感謝するぞ……テイルレッド。いい勝負だった」
「根限り……戦えたか？」
「ああ、悔いはない。今度こそ、我われのツインテールは完全燃焼し

た」
　その晴れやかな表情を見て、俺もまた完全燃焼したのだと思いなす。
「ヴァルキリアギルディが斃たおれたようだ。おそらくは青の戦士か、さすがだ……」
　胸を押さえるドラグギルディ。
　身体からだの変調で、ヴァルキリアギルディの最期を悟ったらしい。
　そうか、ブルーがやってくれたのか……。
「〝死して尚変態ヴアルハラ〟の術理は消滅した。全ての〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟は消え去る……お前たちの完全勝利だ」
　やがて、ドラグギルディの全身は極彩色の光に包まれ始めた。
「さらばだ、テイルレッド……ツインテールに輝きあれ!!」
　澄んだ別れの言葉とともに、粒子となって綻ほころび出したドラグギルディの身体は──何な故ぜか発光が止まり、元の鎧よろいのような黒くろ鉄がね色に戻ってしまう。
「間違いなく、生命いのちが消えていく感覚があった……何故、我われはまだ生きている？」
　立ち上がり、自分の手の平を確認するように見て戸惑うドラグギルディ。
　その答えは、不意に周囲に響きわたった声によって告げられた。
『──〝死して尚変態ヴアルハラ〟の術理がまだ生きているから……以外に考えられないでしょう？』
　俺たちの前で空間が奇妙なうねりを見せ、極彩色のゲートが出現。
　中から、先ほどの声の主、一体のエレメリアンが歩み出て来る。
　花冠のような頭部に、余裕を湛たたえた口くち許もと。細くしなやかな身体と、それを包む白衣のようなパーツ。……こいつも、女性型のエレメリアンだ。
　その見た目から科学者を連想した俺は、続く彼女の名乗りに驚きよう

愕がくした。
「初めましてぇ、テイルレッドちゃん。私はマーメイドギルディよ」
「マーメイドギルディ……⁉」
『混こん成せい残ざん存ぞん軍ぐんに出張ってきて、滅茶苦茶やってるヤツがいやがるんだ……。最高科学者マーメイドギルディ……この名前を覚えときな』
「前にフェニックスギルディが言ってた、アルティメギルの科学者か！」
「まー彼ったら、どんな素敵な紹介をしてくれたのかしら？」
　こいつはエレメリアンを実験材料と思っている、危険な奴やつって話だったが……戦いが決着したこの場にやって来て、何をする気だ。まさか、俺たちと戦うつもりか？
「やめてね、私ってば戦いはからっきしだから。ただ、友達との約束を果たしに来たの」
　マーメイドギルディが横を向くと、そこに周囲の光が集束するようにして球体ができあがった。その光球が割れて、中から姿を現したのは──
「ヴァ、ヴァルキリアギルディ⁉」
　俺は目を疑う。ドラグギルディが最期を悟ったはずの、ヴァルキリアギルディだった。
　全身ボロボロの状態だが、握り締めた神しん槍そうだけが、変わらぬ輝きを携たずさえている。
「ブルーに倒される前に、こっちに転移してきたのか！」
「いいえ、もうヴァルちゃんは戦えないわ。だから私が約束を果たすのよ。彼女の希望──死して尚なお、首領様のために究極のツインテールを手にするため戦うと──‼」
　マーメイドギルディは憐あわれむように言うと、ヴァルキリアギルディが握っていた〝頭頂照らラグナす神光ロク〟を自ら手にする。その

瞬間。
　ヴァルキリアギルディの鎧よろいのように神こう々ごうしき身体からだから艶つやが失われ、灰色に石化していった。
　徐々に巨大化しながら浮遊していき、その過程で両脚が崩れ落ち、両腕が膨ふくれ上がる。
　細った身体と肥大した頭部──鳥の骨のように歪いびつな翼。
　まさに、神話の世界の大だい地ち母ぼ神しんそのもの異様だった。

〈私は、ガイアギルディ──この世界を終しゆう焉えんに導き、究極のツインテールを手にする者〉

　誇り高き戦いくさ女め神がみの名を捨てた最終闘体──それは、全てをかなぐり捨てた大地母神。
　その無機質な声こわ音ねが、大気を震ふるわせて響き聞こえる。
〈……究極の……ツインテール……首領様に……〉
　それは執念と呼ぶには、あまりにも透き通った感情で。
　戦女神が最後に捧げたのは、愛する首領への誓いだった。
　それきり、ガイアギルディは口を閉ざしてしまった。まるで、残されていた自我も完全に消失してしまったかのように。
「ヴァルキリアギルディは自ら死を受け容いれた……そして〝死して尚変態ヴアルハラ〟の力を過剰暴走させ、自分自身が〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟と化してしまったのだ……!!」
　俺に女神の終焉を語るドラグギルディに、無力感が滲にじんでいる。
　まるで、この結末を知っていたかのように。
　ツインテールを愛する組織にあって、つるつるの頭を愛した戦女神。
　異端者を受け容れてくれた首領のために戦うことが、彼女の誇りであり力だった。

それが今は、無毛への愛すら捨て去って、首領のために殉じようとしている。
ゆっくりと、その巨大な両りよう掌しようを大地へ向けるガイアギルディ。
「……まだ、戦うつもりなのかよ……生命を失ってまで、お前は──!!」
死した魂たましいを操り、幾多の世界を滅ぼしてきた戦女神の末路が……自ら生ける死者と成り果てて戦い続けることだなんて……因果応報と呼ぶには、あまりにも悲しすぎる。
「このガイアギルディを倒さない限り、俺たちの戦いは終わらないっていうのか!!」
悲壮な願いだとはいえ、俺はこいつの信念を絶ち斬きらなければいけない。
機を窺うかがっているのか、今はまだ空中で静止するだけのガイアギルディに向け、俺がブレイザーブレイドを構えた途端。
神しん槍そう〝頭頂照らす神光ラグナロク〟を握り締め、天高く掲げるマーメイドギルディ。
それに呼応するようにして、上空のガイアギルディの両りよう掌しようから、コールタールのような黒い粘体がとろけ落ちていく。
粘体は地面に落ちた後、次々と人の形を取り始めた。リヴァイアギルディにクラーケギルディ……皆、これまでに対戦したエレメリアンたちと同じ姿をしている。
それはまるで、漆しつ黒こくの〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟──。
周囲に居並んでいく黒いエレメリアンたちを、マーメイドギルディは誇らしげに紹介する。
「……戦いくさ女め神がみはこれからも、世界終しゆう焉えんの神話を紡つむぎ続けるわ。首領様の望む『究極のツインテール』を手にするま

で……彼女はこの、心無き戦士を産み出し続ける」
「亡者よりも虚うつろなる戦士、いわばホロウエレメリアンというわけか……!!」
　憎にくゞにくしげに睨ねめ据すえるドラグギルディ。
　ホロウエレメリアンたちは、不気味なまでに微動もしない。
　まるでマシンガンの弾倉に詰められた弾丸のように、大人しく整列している。
　マーメイドギルディの合図か、ヴァルキリアギルディの嘆きか。
　いずれにしてもこいつらは何かのきっかけで一斉に散開し、人々を狙ねらい出すのだろう。
　ヴァルキリアギルディ自身までが〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟になったというのなら、それを維持しているのは──マーメイドギルディの持っている、あの神しん槍そうか!!
「なら、あれを破壊すれば……」
　俺の視線に気づいたのか、マーメイドギルディは軽やかに飛びすさった。
「これは壊させないわよ。自分の意思を失っているヴァルちゃんを制御できるのは、この神槍だけ……ガイアギルディと化した生命を維持できるのもね」
　そう言われたら、余計に壊さないわけにはいかないだろう。
「まだまだ元気いっぱいなのね、テイルレッドちゃん。だったら、この子たちと遊ぶ？」
　マーメイドギルディの背後に複数のゲートが出現し、中から白いローブの戦士が現れる。
「……その白ローブは……ゴ、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士……!!」
　背中に剣の紋章を刻んだ白ローブをまとう、最強軍団の戦士たち。

ヴァルキリアギルディが活動し始めてから沈黙を守っていた神の一剣ゴー・デイア・ソードが、よりにもよってマーメイドギルディの伏兵として現れた。
全部で四体いるのは、ツインテイルズを足止めするための布陣だったのだろう。
「…………」
しかも、ブツブツと何かを呟つぶやいているが、自我がほとんど無いように見える。尻属性ヒツプのグリフォギルディと戦った時に一緒にいた、ヒドラギルディのような妖あやしい雰囲気の奴やつらだ。
今まで、神の一剣ゴー・デイア・ソードは謎なぞだらけの軍団だった。
倒しても属性玉エレメーラオーブが出現せず、今回の〝死して尚変態ヴアルハラ〟でも蘇よみがえっていない。
それらの謎はもしや、このマーメイドギルディという科学者に集約されるのでは──。
俺が覚悟を決め、神の一剣ゴー・デイア・ソードの四戦士に挑もうとした、その瞬間。

『──元気いっぱいなのが、ここにもいるぜ。遊んでもらおうじゃねえか!!』

俺たちの目の前で空間そのものにヒビが入り、中から熱波が噴き出してきた。
『テイルオン!!』
「ッ……な、何事!?」
ついに巨大な業ごう火かが空間を貫き、鳳凰のシルエットが浮かび上がる。

「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士、フェニックスギルディ見参！　……あ、今は結いわ翼ばね唯ゆ乃のな!!」
　忙せわしなく言い直し、自慢のポニーテールを荒々しく掻かき上げる。
　紫し光こうの輝きを放つ、不死鳥の装そう甲こう。
　テイルギア・ＴＹＰＥ□Ｐをまとった結翼唯乃が、炎を背負って歩を進めてきた。
　俺が奴やつの無事を喜ぶのに先んじて、マーメイドギルディが驚嘆の声を上げる。
「フェニックスギルディ君……!?　どうやってあの拘束を破ったの!?」
　唯乃はサムズアップして自分を指し示すと、八や重え歯ばを輝かせて得意げに語った。
「力を加えるほど硬くなる枷かせったって、限界はあるに決まってんだろ！　フルパワーで砕けねえなら、めっっっっちゃ力を溜めて、フルパワーのフルパワーで砕くだけだぜ!!」
「呆あきれた脳筋ね……失敗したわ。その装甲もちゃんと研究させてもらえばよかった」
　あのマーメイドギルディが、頭を抱かかえている。
　何があったかわからないけど、あいつまた無茶苦茶やったみたいだな……。
「お前は……フェニックスギルディ、なのか」
　普通の人間の女の子である唯乃を、しげしげと見つめるドラグギルディ。
「久しぶりだな、ドラグギルディ！　このとおりちっとばかし変わっちまったが、俺様だってわかったか!!」
「ふむ、ポニーテールの少女……それがお前の到達した頂いただきか」
　ちっとばかしって、エレメリアンから人間の女の子になってるんだ

が……ドラグギルディは、あまり気にしている様子がない。
　唯乃は拳こぶしを鳴らしながら、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちを射い竦すくめる。
「さあて。俺様の能力をかっぱらわれたせいで、テイルレッドたちに余計な苦労かけちまった……その分の落とし前はつけねえとな!!」

　ツインテイルズとエレメリアン──双方の最大戦力が入り乱れる大戦に今、最後の戦士が名乗りを上げた。

第七章　奇跡のツインテール。

「フェニックスギルディ君……ツインテイルズの味方をするつもり？」
　自信満々に腰に手を当て、欠片かけらも迷いの無い笑顔で宣言する唯ゆ乃の。
「教えてやるぜ……俺様は誰だれの味方でもねえ！　正義の味方だ!!」
　マーメイドギルディへと歩み寄る唯乃の前に、白ローブを着た神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンたちが立ち塞ふさがった。
　唯乃は焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターを手に握る。
　炎が凝縮された巨大な刃やいばを一振り、二振り──構え慣らしですら、空を焼き斬きる超高熱。
「俺様のォ！　完全解放ブレイクレリーズッッッ!!」
　テイルギアＴＹＰＥ□Ｐの背に広がる不死鳥の翼が分離し、炎をまとって飛ひ翔しようする。
　怒りの炎は瞬く間に神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちを三体も同時に拘束バインドし、大神殿を思わせるような無数の火柱がそびえ立っていく。
　フェニックスラッシューターの刀身にある銃口が開き、銃剣二形態の特性を合わせ持った変形を果たす。
「バーニングッ！　フォース！　フィニィ──────────ッシュ!!」
　銃口から伸びた巨大な炎の刃が、一気に振り下ろされる。
　神の一剣ゴー・デイア・ソードの強者たちが、瞬く間に蹴け散らされ

ていく。相変わらず、常識外れな強さだ。
　いつものように属性について熱く語り合うこともせず、最初から全力攻撃とは。
　あいつ、相当鬱うつ憤ぷんが溜まってたみたいだな……。
　だが同時に、ここに来る前に何かあったのか……かなり疲ひ弊へいしてもいたようだ。技を放ってすぐにテイルギアの変身を解除し、さらにフェニックスギルディの姿へと戻った。
「さあマーメイドギルディ、てめえの切り札はこれですっからかんだぜ!!」
　理由があって、あえて攻撃を外したのだろうか。フェニックスギルディは一体だけ残った神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士の白ローブを掴つかみ、一気に引き裂さいた。
　露あらわになったエレメリアンの姿に、俺は度肝を抜かれた。
　スワンギルディ──ドラグギルディの部下だったという、看護服属性ナースのエレメリアンだ。
「そうだ、〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟が勢揃ぞろいした中に、誰かが足りないような気がしてたんだ！　スワンギルディ！　俺に一対一の勝負を挑んできた、こいつがいなかったんだ!!」
　欠けたピースを頭の中ではめた俺に、ドラグギルディも追随する。
「やはりか。我われも彼奴きやつつの姿が見えず、部下に行方を探ってもらっていたのだが……よもや、マーメイドギルディの手中に陥おちいっていたとは……!!」
　スワンギルディは俺との果たし合いの後でブルーにトドメを刺されてしまったのだが、その時属性玉エレメーラオーブが出現しなかったので少し気になってはいたんだ。
　生きていたとしても不思議はないが、何な故ぜこいつが神の一剣ゴー・デイア・ソードの尖せん兵ぺいになっている!?　言っては悪い

が、そこまでの戦闘力は持っていなかったはずだ。俺と戦ってからの数か月で、こいつに一体何があったんだ⁉
「この科学者はこういう奴やつなんだよ。監禁・洗脳・催眠、なんでもござれだ。てめえの欲望のためならエレメリアンだっていくらでも利用するのさ！　スワンギルディの奴も、手駒みてえにされちまってるってわけよ！　ちなみに、俺様もすげー騙だまされた‼」
　そんな、胸張って報告しなくても……。
「この気色悪ィ真っ黒けなエレメリアンを生み出すのが、てめえの真の目的ってわけか‼」
　フェニックスギルディに追及され、むしろ嬉うれしそうにマーメイドギルディは説明を始めた。
「ドラグギルディ君。私がヴァルちゃんを強化して、あなたたち〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟が心を持って誕生するように導いたのは……何も、生前オリジナルと同じ強さを求めたからっていうだけじゃない。その先に、完かん璧ぺきな大量複製品を生み出すためだったの」
「「！」」
　俺とドラグギルディは、ともに言葉を失った。
「私の実験には、多くの属性力エレメーラが必要なの。でも、エレメリアンって、みーんな武人肌で不必要な戦いを避ける傾向にあるから……時間をかけて世界を滅ぼす段階になるまで、なかなか属性力エレメーラが余らなくて……それが、いつも困りものだったのよね」
　フェニックスギルディもその告白を聞きながら、怒りで拳こぶしを震ふるわせている。
「そこで考えたのが、このホロウエレメリアン。ユグちゃんの撒死舞霧マキシマムをそのまま生き物に変えたようなもの、って言ったらわかりやすいかしら？」
　これらは最凶最悪の存在だ、と、事も無げに打ち明けられ、俺はさら

に絶句する。
「ドラグギルディ君たちオリジナルの存在がいる限り、無尽蔵に生み出され、命令すれば勝手に出撃して、勝手に属性力エレメーラを奪ってきてくれる……組織に革命をもたらす存在なのよ！」
　自動車の自動運転化の技術を語る程度の気軽さで、おぞましい野望を白日の元に晒さらすマーメイドギルディ。
「楽ちんでしょ？　これからは、自分で戦わなくてもこの子たちが属性力エレメーラを取ってきてくれる！　アルティメギルのエレメリアンは、みんな楽しくニート暮らしができるのよ～!!」
　こいつ……小馬ば鹿かにして言ってるんじゃない、目が本気だ。こんな悪魔じみた自分の研究の成果で、ドラグギルディたちが幸せになると本気で思ってる──。
　フェニックスギルディはマーメイドギルディに向かって舌打ちし、司令官が命令を下すような仰ぎようゞぎようしいポーズで俺に言った。
「テイルレッド！　ガイアギルディはもう、マーメイドギルディの操り人形にされちまってる！　あいつが後生大事に持ってる槍やりをブッ壊せば、その魂たましいを解放してやれるぜ!!」
　やはりあれが鍵かぎだったか。すぐ様行動に移そうとしたが──。
「その代わり、ドラグギルディ君たちは消えるわ。今のままなら、永遠に生きられるのに」
　悪魔の囁ささやきが、俺の足を止めた。
　マーメイドギルディは、ドラグギルディたち全てを人質に取るようなことを言い放った。
「あなたには壊せないでしょ、テイルレッドちゃん。この槍を破壊すること……それは、戦って倒すんじゃない、ただ生命を奪うだけの行為ですもの。生命維持装置のスイッチを切ることは、優しいあなたにはできない」

俺の心を見透かすように、挑発的な視線を送ってくるマーメイドギルディ。
「術の支配下にあるドラグギルディ君は当然、この槍には干渉できないし……フェニックスギルディ君にも無理よ。君はヴァルちゃんに力を与えたことで〝死して尚変態ヴアルハラ〟のシステムの一部として認識されているんだから」
「んだとぉ……！」
腕まくりをするような仕草で詰め寄るフェニックスギルディだが、マーメイドギルディは余裕の態度を崩さない。
……迷っている時間は無い。あの神しん槍そうを破壊することが、生命をただ奪うだけの行為だとしても……彷徨さまよう魂を解放し、世界のツインテールを守るためなら、俺は──
「諦あきらめなさい。この場にはもう、この槍を破壊できるエレメリアンはいないわ」
「────ここにおります」
「……え」
驚きの声を漏もらしたのは、俺たちの誰だれでもない。
この場でもっとも優位に立っていたはずの、マーメイドギルディだ。
「〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟ではない私ならば、この槍を破壊できます!!」
マーメイドギルディの手から神槍をもぎ取ったのは──意識虚うつろに立ち尽くしていたはずの、スワンギルディだった。
もはや、瞳ひとみに虚ろな翳かげりは一片もない。ドラグギルディの弔い合戦をしたいと俺に正々堂々の勝負を挑んできた時の、真まっ直すぐな純粋さが戻っている。

「ドラグギルディ様ァァァァァ！　スワンギルディにございます

――――――――ッ!!」

それは、心震ふるわせる魂の咆ほう哮こうだった。マーメイドギルディは理解及ばず、驚きよう愕がくしている。
「まさか、ドラグギルディ君の姿を見ただけで洗脳が解けたの……何故ぜ!?」
何故も何も、自分で答えを言ったじゃないか。
科学者にも色々いるんだな……マーメイドギルディは、トゥアールのような柔軟性がない。
「そいつはドラグギルディの背中を追いかけて今まで鍛たん錬れんし続けてきたんだ……これ以上の気付けはねえだろうぜ!!」
フェニックスギルディが、まるでこうなることがわかっていたように快こころよい笑いを浮かべる。どうやらこいつも、スワンギルディとは浅からぬ因縁があるようだ。
「テイルレッドがわざわざ背負う業ごうではありません……エレメリアンの問題は、エレメリアンの手で決着を着けなければ」
スワンギルディが、神しん槍そうの柄えに両手をかけた。
「やめなさいスワンギルディ君！　それさえあれば、あなたの大切な人たちが不死身のままでいられるのよ!?」
「ッ……不死身とは……あの心無き怪物たちを産み出す苗なえ床どことしてですか!?　そして全ての異世界にはびこるのでしょう……流れ作業で人間の属性力エレメーラを奪う怪魔たちが！　それは許されません……心を求める資格があるのは、同じく心を懸けて戦う者のみ!!」
スワンギルディの覚悟を目まの当たりにし、ドラグギルディは迷わず後押しをする。
「よく言った……我われらの思いは同じだ！　やれ！　スワンギルディ!!」

「ドラグギルディ様！　そして全ての戦士方！　どうかこのスワンギルディを、地獄で気の済むまでお殴なぐりください!!」
　スワンギルディは槍やりを両手で掴つかみ、躊躇ためらわずに渾こん身しんの力で圧おし曲げていく。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　追いつめられても優雅さを漂わせていた、まさに白鳥のような戦士だったあいつが……血を吐くような雄叫びを上げている。
　一瞬、スワンギルディの背中に白く大きな翼が見えた。
　それはあたかも、呪のろわれた魂たましいを癒す、白衣の天使──。
　ついに神槍は砕け折れ、力無く風化していった。
「……〝頭頂照らす神光ラグナロク〟が……!!」
　忌いま忌ましげに声を上げるマーメイドギルディ。
「これでドラグギルディたちも晴れて自由の身だ。よくやった、スワンギルディ!!」
　再会を促うながすように、スワンギルディの背を叩たたいて送り出すフェニックスギルディ。
「……ド、ドラグギルディ様……」
　よく見ると、スワンギルディは俺と戦ったよりも全身の傷跡が増えている。
　憧あこがれた隊長に、増えた傷の数だけ近づけると信じて精進していたのだろう。
「何を話したものか……とても、とても言葉が見つかりませぬ……!!」
「言葉などいらぬ。──男の顔になったな、スワンギルディ」
「□□!!」
　感極まり、肩を震ふるわせるスワンギルディ。
「テイルレッドにもう一度会えたのも嬉うれしかったが……お前のその

たくましく成長した姿を見れたことも、同じぐらい喜ばしいぞ」
　再会の喜びも束つかの間ま。俺、フェニックスギルディ、ドラグギルディ、スワンギルディは一斉に向き直り──首謀者であるマーメイドギルディと相対する。
　二対の戦士に形勢逆転を受けた科学者は、不気味な笑いを浮かべた。
「腐腐腐……まあいいわ、あなたたちのそのやりとりを見ていたら、許せてきちゃった♪」
　組織もろとも巻き込んだ自分の大作戦が今、灰かい燼じんに帰したというのに……ちょっと落ち込んだだけで、あっさり立ち直りやがった。
　マーメイドギルディ……何なんだ、こいつは。不気味という感情をも超えた悪お寒かんを覚える。
　今までのエレメリアンとは、決定的に何かが違う。
「確かにこの戦いは、私の負けよ。槍やりを折られた以上、〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟はそのうち消える──ガイアギルディも例外じゃないわ。でもね、ちょっと悪手だったんじゃない？」
「□□□□□□!!」
　ホロウエレメリアンが、一斉に電源を入れられたように蠢うごめき出す。
「もう私じゃ、ガイアギルディを制御できない……消えるまでの時間が僅わずかでも、世界が滅びるには十分すぎる。この子たちも制御されず、解放されてしまうのだから」
　それだけではなかった。ガイアギルディの両りよう掌しようから、蛇口の詮が壊れたような勢いで大量にホロウエレメリアンが放出され始めたのだ。
　その数が尋常ではない上に、これまででは考えられない現象まで付加されていた。
「リザドギルディが、二体……三体……。タトルギルディもだ！　何体

も出てきてるぞ!?」
　一体として同型がいないというエレメリアンのルールから外れ、こいつらは同一個体が何体もいる。
「……こ、こいつら……一体どこまで増えるんだ……!?」
　俺の疑問を余よ所そに、黒き怪魔が視界を埋め尽くしていく。
　〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちとは、脅威の程が全くの別物だ。
　生命の尊厳を抹殺する、夥おびただしい数の暴力。どこまでもどこまでも増殖する暗黒。
　こいつらは、存在そのものが青天の霹靂。戦士ではなく、災害だ。
　真なる冥府の戦士たちによって埋め尽くされたこの大地は、完全なる死界と化した。
「このホロウエレメリアンは、あなたたちが疲れているからって撤退はしないわ。世界のツインテール属性を、全ての属性力エレメーラを奪い尽くすまで、決して止まらない」
　マーメイドギルディが、自分の作品の完成度に邪悪な笑みを浮かべる。
「組織が肥大化する一方、カリスマを持った部隊や戦士が消えていけば、こうして野心ある者の暗躍を容易に許してしまう！　伸びすぎたツインテールは、切らなければならぬのだ!!」
　俺たちを嘲あざ笑わらう邪悪を睨にらみ付けるドラグギルディ。
　その言葉……あの時、ドラグギルディが俺に言ったのは……組織が巨大化しすぎた故ゆえに生まれた暗部を、自分の手で正すという覚悟のことだったのか。
　アルティメギルも一枚岩ではない。エレメリアン同士の確執があるらしい。
　マーメイドギルディのやり方は、誇りと信念を重んじるエレメリアン

たちからすれば、度し難いものだろう。
「それじゃあね、みんな。この世界がヴァルちゃんの愛で埋め尽くされたその時、また様子を見に来るわ」
　これから始まるであろう戦いに巻き込まれるのを避けるためか、マーメイドギルディは転送ゲートの中に消えていった。
　増殖し続けるホロウエレメリアンの数は、数百……いや、もはや数千にも届こうか。
　……やばい。この数はやばい。見ているだけで、膝ひざに力が入らなくなる。
　俺たちの積み重ねてきた奮起など笑って踏み潰すかのような、際限を超えた暴虐。
　ダムが決壊したかのように、一斉に動き出すホロウエレメリアンたち。
　全く無軌道だ。俺やドラグギルディ、フェニックスギルディを通り過ぎ、見る見るうちに四方八方へと広がっていく。
「こいつら……このままじゃ、ブルーたちの方に行っちまう！」
　仲間を案ずる俺に、フェニックスギルディがさらに絶望的な予測を伝える。
「それどころじゃねーぞ！　あれじゃあっという間に人間がいるとこにも行っちまう！　早く蹴け散らさねえと、取り返しのつかねえことになるぞ!!」
　近くにいたホロウエレメリアンを、フェニックスラッシューターで叩たたき斬きるフェニックスギルディ。
　すると、今まで俺たちに全くの無反応だった他のホロウエレメリアンたちまで、何十体も群れを為してこちらに襲おそいかかってきた。
　ドラグギルディが、スワンギルディが、かつての同僚たちの形をした黒い悪夢と戦いを始める。

……考えるな。規模を見るな。数を数えるな。ただ、目の前の敵と戦うんだ。

俺は挫くじけかける心を自ら鼓舞し、ホロウエレメリアンに立ち向かう。

そんなか細い発奮を豪快に笑い飛ばす、胸のすくような突風が吹き抜けた。

黒いエレメリアンたちの行く手を阻むかのように、極彩色の光が降り注ぎ、人型となって立ちはだかる。

「────な……」

一度目は、驚きよう愕がくと絶望を覚えた。二度目は、逆に闘志をぶつけ返した。

都つ合ごう三度目のその光景は──いかつい聖夜の贈り物。

心持った戦士たちが集結し、ホロウエレメリアンのまえに立ちはだかっている。

俺たちが戦ってきた、全てのエレメリアンたちが……ホロウエレメリアンという名の怪異に待ったをかけるべく、威風堂々と立ち並んでいた。

「ふん、テイルレッドに俺のツインテールを見せびらかしに来たら……先客がおったわ!!」

ホロウエレメリアンにはできない最終闘体である真白きツインテールを存分に見せつけながら──ティラノギルディが不敵に笑う。

エレメリアンたちがそのツインテールの元に集うように、居並んでいた。

俺が圧倒された、エレメリアンの真の力──心の輝きを存分に放ちながら。

「お、お前たち……何な故ぜここへ!?」

驚きよう愕がくするドラグギルディにしてやったりと、ティラノギル

ディは豪笑を続ける。
「つまらぬ戦いの果てに消えたと思ったら、黄泉路への道程半ばにまた現世へ引き戻される始末！　今度は一体何が起こったかと見て回れば、こんな悪鬼どもがでしゃばっておる!!」
　そうか……ティラノギルディたちも、ギリギリのところで消えずに残っていたんだ！
「このような化け物どもが、漁夫の利でツインテイルズの心の輝きを奪う──何とも小こ癪しやくだと思わぬかドラグギルディ。思い知らせてやらねばなるまい、我われらが生きた証あかしを!!」
　ティラノギルディのツインテールの輝きが、ドラグギルディの双そう眸ぼうを照らす。
「……なるほど……一理ある!!」
　心が晴れるのに呼応したかのごとく、ドラグギルディの剣けん閃せんが鋭さを取り戻した。
「────集え、勇者たちよ！　今こそ再び名乗ろう、我らは誇り高きアルティメギルに巣くう悪鬼を浄化する者！　ネオアルティメギル!!」
　それに応こたえ、高らかに名乗りを上げるドラグギルディ。戦士たちの士気が、爆発的に高まっていく。
　エレメリアンたちが、心持った戦士たちが、自らの生きた証を刻もうと、世界脅おびやかす怪魔に向かっていく。
　凍いてついた俺の胸に、ツインテールに、熱き炎が滾たぎっていくのを感じる。
「ぐあっ!!」
　神しん槍そうによる制御の軛くびきから解き放たれたガイアギルディが、その巨腕を突き出し、俺の身体からだを握り掴つかんでしまった。制御不能になってなお、存在理由に殉じるつもりか……！
　俺は最後に一つだけ、ドラグギルディの持論へ反論した。

「ドラグギルディ！　組織の暗部を、伸びすぎたツインテールなんて喩たとえるな！　髪が伸びることは、成長の証！　嬉うれしいことだ！　切り捨てるべき邪悪じゃないだろう!!」
「テイルレッド……」
「だから俺は戦うぞ！　侵略者にはびこる野望を切り捨てるためじゃなく、この世界のツインテールを守るために!!」
　ガイアギルディは俺を掴つかんだままドラグギルディたちへと背を向け、残された時間で世界中にホロウエレメリアンを振りまこうと飛び立った。
　消えゆくエレメリアンたちさえもが奮起してくれた今、恐れるものは何もない。
　俺はガイアギルディの手の平の中で、残された全ての力を燃やす──。

　　◇

　空の果てに飛び去ったガイアギルディとレッドから視線を切り──ドラグギルディは、ホロウエレメリアンと戦おうとするスワンギルディを諌いさめ、その肩を力強く抱いた。
「よいかスワンギルディよ、この戦場……必ず生き残れ。そしてお前は、基地に帰るのだ」
「！　し、しかし……」
「スパロウギルディに伝えて欲しいのだ。呪のろい縛る言葉になってしまうやもしれぬが、あえて言わせてほしい……〝生きろ〟と。生きて、エレメリアンたちを導いてほしい。若き者、惑う者、全てのエレメリアンを導いて欲しい……とな!!」
　面と向かっては言えなかった感謝。
　基地に戻ったあの時、スパロウギルディの顔を見れたことが、どれだ

け嬉うれしかったか、と。

「……それに、お前にはまだ戦いが残っている……こんな亡者との戯たわむれではない、真の戦いがな！　生きろ……スワンギルディ!!」

　若き神童を旅立たせるドラグギルディの瞳ひとみの、何と優しきことか。

「相変わらず、厳しいお方だ……貴方あなたに生きろと言われて、死ねるはずがありましょうか」

　ドラグギルディは、安あん堵どの笑顔で頷うなずいた。

「フェニックスギルディ……スワンギルディを頼むぞ！　全てが終わってまだぐずついておったら、基地へと放り投げてきてやってくれ!!」

「お前さんには俺様の親友ダチが世話になった……その借りは返しとかねえとな！」

　修行を重ねたとはいえ、スワンギルディはまだ幹部級の力を備えているわけではない。強力な用心棒が必要だ。フェニックスギルディはそれを、快こころよく引き受けた。

「……あばよ、ドラグギルディ！　達者でな!!」

　あっさりとした別れの言葉こそが、ドラグギルディへの敬意を偲しのばせた。愛弟子をフェニックスギルディに託し、ドラグギルディは胸の前で両腕を交差させる。

　もはや後先など無用、蝋ろう燭そくに灯ともった生命の炎を最期の一瞬に燃やし尽くすように──神かみ型がたのツインテール、ゴッドドラグギルディへと変身する。

　しかしホロウエレメリアンたちは、しぶとく行く手を阻む。

「ぬう……！」

　一刻も早くレッドを、ガイアギルディを追いたいという焦しよう燥そうが、ドラグギルディをして剣を鈍らせていた。

　不ふ甲が斐いなさを嗤わらうように閃ひらめいたティラノギルディの

大剣が、ドラグギルディの隣にいるホロウエレメリアンを豪快に両断する。
「お前はどうしても、我われを追いかけて離してはくれぬようだな」
「抜かせ、帝王の行く先にいちいち貴様がいるだけのこと!!」
　最終闘体にツインテールを持つ者同士、背合わせに剣を構える両雄。
　それぞれのツインテールが、誇り合うように輝きを増した。
「おおっ……！　ドラグギルディ殿とティラノギルディ様！　アルティメギルの誇る二大ツインツインテールが、揃そろい踏みなされた！」
　戦士たちはその頼もしき並び立ちを、歓喜の声で讃たたえる。
　そしてツインテールへの賞賛の念を贈るのは、当人たちも同じだった。
「見事なり、ティラノギルディ！　雄お々おしき帝王のツインテール……このドラグギルディ、確かに見た!!」
「貴様こそ、さすがアルティメギルにドラグギルディありと謳うたわれたツインテールの美しさよ……この俺の次に美しいと、胸を張って誇るがいい!!」
　伊だ達てな笑いを浮かべる両雄。
　互いの背中で押し合って反動をつけ、一足飛びに疾しつ駆く。それぞれの豪剣で、立ちはだかる魔獣を斬きり払う。
「……テイルレッドの元へ向かえ！　ドラグギルディよ！」
「よいのか？」
「ふん、俺は貴様よりも長くテイルレッドを愛めでた！　今いま際わの一目くらいは譲ってやるわ!!」
　その傲ごう岸がんにして豪放な心意気に、ドラグギルディは信頼を感謝と返し、颯さつ爽そうと飛び立つ。
「さあて。かく言う俺も、征ゆくべき戦場ばしよがあるのだが──」
　一心地ごこちつく間もなく、ティラノギルディの眼前を漆しつ黒こく

の兵士が取り囲んでいく。
「……久々の大おお戦いくさだ。今しばし、我わが聖剣〝輪廻の百合受攻アロンダイト〟の脂落としをしておくか！」
　蠢うごめく魔獣。群れなす邪悪を前に、聖剣が輝きを誇示する。
　間合いなど関係ない。誇りに泥を塗る全ての下郎が、帝王の刃じん圏けん。
「ディユリャ――――――――――――――――――ッッッ!!」
　古代の覇者の咆ほう哮こうは、卑ひ賎せんな企たくらみを噛かみ砕かんと高らかに響きわたった。

◇

　敵は、作戦を一体何段構えにすれば気が済むのか。
　ようやくヴァルキリアギルディを倒したとブルーが安あん堵どした矢先、トゥアールに通信で告げられた、カタストロフの訪れ。
　ヴァルキリアギルディの最期の能力なのか、黒いエレメリアンが大量に生まれ、跋ばつ扈こしだした――と。
　その通信から程なく、ブルーは視界の先からヌーの大移動のように押し寄せてくるホロウエレメリアンたちを実際に目まの当たりにし、目め眩まいで足を揺らつかせていた。
「ネオアルティメギルとの戦いはずっと、みんなに任せっきりだったんだから……。あたし一人、こんなとこでくつろいでらんないっての……」
　ウェイブランスを杖代わりに立たなければ、崩れ落ちそうなほどの疲労。
　エターナルチェインの肉体への反動は甚大だ。それに加えて、ヴァルキリアギルディとの戦いで限界を超えた属性玉エレメーラオーブ使用に

打って出たのが決定打となった。
　明日からの筋肉痛を思うと気が滅め入いるが……その前にブルーは、目の前の窮地をこの精根果てた五体で切り抜けなければならなかった。
「体力落ちてきたのかな……もっとみっちり稽古しとかないとね……」
　トゥアールの寿命が縮まりそうな決心とともに、乾いた笑いを浮かべるブルー。
「ッ――来る……!!」
　地響きを立てながら迫ってくる、ホロウエレメリアンの大群。
　しかしその地響きが、あっさりとかき消された。
　まるで小さな漣さざなみが、大きな津波に呑のみ込まれるかのように。
　群れた〝量〟を呑み込む、たった一つの巨大な〝個〟は――
「あ、どうもーちょっと通りまーす」
　神しん樹じゆユグドラシルギルディ。
　天衝つく巨木が何の冗談か、大地を砕き割りながら向かってきた。
　ぽかんと口を開けて、歩く天変地異を見つめるブルー。
　ちょっと通りますレベルのゆるさでも、彼女の巨体であれば話は別だ。
　虫が獅子に潰されるがごとく、進行方向上のホロウエレメリアンはただただ為す術すべ無く爆散していく。
　さらにその神樹の枝から、一体の戦士が特攻服をはためかせて跳躍した。
「いぃやっほ――――――――――――う!!」
「……ラフレシアギルディ！」
　貴の三葉ノー・ブル・クラブの特攻隊長、ラフレシアギルディだ。
　鉄パイプ状の武器でホロウエレメリアンを殴なぐりつけ、ケンカキックで地面に転がす。

「ヴァルキリアギルディの姐あねさんと喧嘩しやりあつたんだろ？　少し休んでな、テイルブルー!!」
「あんたら、なんで仲間割れしてんのよ!?　その黒いの、一応仲間でしょ!?」
「バーカ。あたいらは先生の愉快な生徒チームだ、あんなつまんねー奴やつら仲間じゃねーよ!!」
　ノリで行動しているのかと脱力するブルーだが、その直後、ラフレシアギルディは侘わびしげな表情を垣かい間ま見みせた。
「それに……あたいら、今度こそもうすぐ消えるんでよ」
「え……」
「つうわけで、最後に一番やりたいことをやっかー、ってな!!」
　愉快な生徒たちが、木製のバギーやバイクに乗って駆けつける。
　ホロウエレメリアンの奏でる不気味な地響きとは真逆に、女傑レディースたちのふかすエンジン音は小気味よく大地を揺らした。
「あはぁーんいいわぁ、好きなだけ踏むのよぉーん」
　マンドラゴラギルディは進んでホロウエレメリアンたちの足あし蹴げになっているが、一応戦うつもりではあるのだろう。
「あ、あたしより他のとこにいるみんなを助けてあげて……!!」
　仲間のことを案じるブルーに、これ以上ないほどに頼もしい言葉が返ってくる。
「心配すんな。今頃ごろ他の物好きな旦那たちが、別のツインテイルズのとこに行ってンぜ。そりゃもう、錚そう々そうたる肩書き背負った超強え物好きがさぁ!!」
　これまでに戦ってきた強敵たちを思い浮かべ、安あん堵どの笑顔を浮かべるブルー。
「てめえも運がねえなァ、こうして肩を並べるのがあたいみてえな格落ちでよ！」

「……あたしは、あんたとの戦闘ケンカが一番楽しかったし」
　恥ずかしそうに吐と露ろするブルーの首筋に、顔を寄せるラフレシアギルディ。
「くんくん」
「何嗅いでんのよ！」
「いやー……おめえ、しばらく会わねえうちにずっとメス臭くなったぜ」
「嫌な言い方しないでよ！　あんたエレメリアンらしからぬロマンチックな言い回ししてたじゃない、あれにしてよ……ほら、愛の……香りって……」
「え？　あたい、んなこと言ったか？」
「忘れてんじゃない！　何が完全復活よ、あんたら全員不完全よ!!」
　叫んでいるうちに、不思議とブルーも力が漲みなぎってくるのを感じていた。
　ウェイブランスを振るい、近くにいた細長なホロウエレメリアンを撃退する。
　ラフレシアギルディは屋根に御輿を取り付けた車の上に乗り、鉄パイプを振り回す。
「テメーら！　腹から声出してけヨ！　今日は祭りだ！　突因帝龍頭ツインテイルズと悩舞流苦羅武ノーブルクラブ、合同でツッ爆走ぱしっぞー!!」
「「「うっす、姐あねさん!!」」」
「はーい、先生も行きますよー」
　敵の励ましで立ち上がり、敵と肩を並べて戦う。
　どれだけ傷つこうともエレメリアンと心通わせ、共に生きようと手を差し伸べてきた、総そう二じ。図らずして彼が夢見たような状況になっていると気づき、ブルーは微ほほ笑えんだ。

「……あんたにはもう、何度も助けられたわ……ありがとね」
「礼なんざいらねーよ、照れくせえだろ!!」
　自分は今……好きな人と一緒の夢を見ているのだろう。この、気のいい喧けん嘩か仲間とともに。

　　◇

『わーどーしよ！　みんな頑張って！　黒いエレメリアンがあっちにもこっちにも……と、止め切れてない箇所があるのよ～！　場所だけ送るから……お願い!!』
　トゥアールの代わりに地下基地で状況を通信している未み春はるだが、いかに中二シチュエーションが大好きな彼女でも、この情報量ではほどなくパニックに陥おちいり、抽象的な伝達をするのが精一杯となっていた。
　メガ・ネはその通信の中に、突破を許したルートがあると辛うじて聞き取った。
「ブラックちゃん、将軍はんから通信や！　この真っ黒け、市街地に到達してもうてる！　何とかそっちに行かへんと──」
　視界の先で戦っているブラックへと通信し、一緒に向かおうと促うながすメガ・ネ。すぐさまそちらへと向かおうとするが、巨体のホロウエレメリアンに行く手を阻まれた。
　身構えるメガ・ネ。だがそのホロウエレメリアンの横ばいから首長竜の首のようにしなやかなアームが飛来し、ダルマ落としのように吹き飛ばしてしまう。
　姿を見せたのは、方言属性デイアレクトのブラキオギルディだった。
「ブラキオギルディはんやないの……」
「ここはおらだずがやっからあ。メガ・ネさんだずはそっつ行ってけ

ろ」
「ん！　あんがとね！」
　戦闘機形態メガネウインガーに変形し飛んでいくメガ・ネを、弛緩した顔で見送るブラキオギルディ。
「やっぱあ、メガ・ネさんの方言はかわいがなあ～」
　ホロウエレメリアンが僅わずかに途切れたその間に、彼方かなたの空を見つめる戦士がいた。
「……太陽の炎ですら、いつかは消えるというのに……。不屈のツインテール……やはり、あの時の少年は」
　お転婆属性トムボーイのロンギスギルディ……誠実な戦士はその眼まな差ざしも澄み切っている。黒雲に支配された空に猛たける炎に、既視感を懐いだく。
　生身で自分に挑んできた、世界一愚かで強き少年の瞳ひとみに宿っていた、紅あかき炎と重なった。
「どうすだ、ロンギスギルディ？」
　ブラキオギルディに声をかけられて我われに返り、再び沸き始めたホロウエレメリアンたちと相対する。
「いや、今生最期の疑問が晴れただけだ。もはや、何の憂うれいもない!!」
「んだば、やるべ!!」
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちも、最後の奮戦を見せる━。

　メガ・ネが一直線に迎えに来ている間。
　イエローと二手に別れていたブラックは、プテラギルディと束つかの間まの共闘を果たしていた。
　黒き鎌かまと翼竜の翼。揃そろって放たれた斬ざん閃せんが、ホロウ

エレメリアンを一刀両断にする。
「馬ば鹿か者。いつまで経たっても貴様が出撃してこんから、寝坊でもしておるのかと思ったわ」
　言外に「逢あいたかった」とこぼすブラック。
　プテラギルディは静かに頭を下げ、
「……私はもう、あなたとの戦いで全ての憂いは晴れております故ゆえ」
「そうじゃな。むしろ、これ以上貴様の顔を見ておると、こちらの覚悟の方が鈍りそうじゃ。……迎えが来る、わらわは別のところへゆくぞ」
　夢を見終わる覚悟。甘く優しい時間から自ら旅立とうとするブラックの姿は、プテラギルディの知る少女からもっと大人に成長したに外ほかならない。
「さらばプテラギルディ……たとえ泡うた沫かたの幻でも、もう一度貴様と話せてよかった」
「はっ。私も、さらに母性の増したあなたの姿を見ることができて、幸せにございます」
　母が子にするように、ブラックはプテラギルディの鋭く長い頭をいい子いい子と撫なでる。
　それを別れの挨あい拶さつに、ブラックはメガ・ネに搭乗。別の箇所からのホロウエレメリアンの侵攻を食い止めるべく、飛び去っていった。
　プテラギルディは闘気を溜めるように身体からだを固め、
「*んんんんん*～～～～～～～～っ！　ママ──────────────ッ!!」
　裂れつ帛ぱくの咆ほう哮こうと共に翼を大きく広げた。
　存分に母性をチャージした余裕からか、傍かたわらで戦う盟友に意地の悪い質問を投げかける。

「隊長殿の元へ行かぬのか、トリケラトップギルディ」
「ティラノギルディ殿の言葉でネオアルティメギル全戦士がここに集った──待望のリーダーシップを発揮できたのだ。私の小言はもう必要あるまい」
　喜びと寂しさが同居したような、トリケラトップギルディの横顔。
　手のかかる幼馴染の隊長が成長し、自分を必要としなくなったことが複雑なのだろう。
「……素直ではないな。幼馴染おさななじみをこじらせると、面倒なものだ」
「全くだ。その点貴殿のマザコンはわかりやすくて羨うらやましいぞ、プテラギルディ」
　軽口に戯たわむれる間に、ホロウエレメリアンは二人を取り囲んでいた。
　トリケラトップギルディの腹部に、ホロウエレメリアンの黒き爪つめが突き込まれる。
　瞬間。時間操作によってトリケラトップギルディの身体からだはかき消え、ホロウエレメリアンの背後に現れていた。振り下ろされた棍こん棒ぼうで叩たたき潰され、爆散するホロウエレメリアン。
　その間に、プテラギルディは刃やいばと化した翼で別の一体を真っ二つに斬きり裂さいていた。
　肩慣らしは終わったとばかり、プテラギルディは翼を羽ばたかせる。
「いい機会だ。どちらがより大将に首級を捧げられる副将か、数比べといこうか」
「私は別にティラノギルディ殿に贈り物をするつもりなどないが……最後だ。貴殿と競ってみるのは吝やぶさかではない」
　今度は、同時に姿をかき消す二人。あとはただ、弾はじき飛ばされていくホロウエレメリアンを見ることでしか、彼らを確認する術すべはな

かった。
　何者の追随も許さぬ超音速の戦士、右牙の副将ライトフアングプテラギルディ。
　時を操り速度の理ことわりから解放された重闘士、左牙の副将レフトフアングトリケラトップギルディ。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスを支ささえた左右の牙きばは今一つに噛かみ合い、最後の忠誠を競う。
　敬愛する最高の愚か者が、悔いなく散れるよう願いながら。

　　◇

　黒く蠢うごめく魔獣に立ち向かうイエローの元へは、美の四心ビー・テイフル・ハートの隊長ビートルギルディ、そしてスタッグギルディが駆けつけていた。
「あ、あの、何な故ぜわたくしたちを助けてくださる……のですか……？」
「完かん璧ぺきと言い張る模写がその実、あまりにも低クオリティでは、元の絵の出来も疑われようというもの。……我われらのつまらぬ意地だ、気にする必要はない」
　ビートルギルディはＵＳＢメモリを取り出し、テイルイエローへと手渡した。
「蘇よみがえってから今までの間に、我らが冬コミのために描き上げた同人誌原稿のデータが入っている。これをお前に託す」
「ファイルのレイヤーは統合していないから、気をつけてね。本文は１２００ｄｐｉのグレースケールだから、マシンパワーが足りないと固まるかもしれない。それと──」
　スタッグギルディも諸注意を続けるが、イエローは目を回しそうに

なった。
「？　？　せ、専門用語が多すぎて……」
　しかし、あと一週間足らずで訪れる〝ふゆこみ〟の原稿を託されたことで、イエローは悟る。
　彼らは、ここで消える覚悟を決めているのだと。
「ところでテイルイエロー……想い人とはその後、どうなった？　進展はしたのかな？」
「そうさ。兄さんも僕も、それだけが心残りだったんだ」
　唐突なコイバナ。血生臭い戦場には似合わない、甘い語らい。
　それこそが、恋愛属性ラブを持つ彼らの最後の望みだった。
「……進展……してますわっ」
　赤面を誤ご魔ま化かすように、背中の陽電子砲を発射するイエロー。
「あの時よりずっと、好きになりました。毎日、〝好き〟が大きくなっています。だから、きっとそれは……〝進展〟だと思うのです」
「ぃよし！　それだけ聞ければ満足だ!!」
　何な故ぜかビートルギルディとスタッグギルディがハイタッチを交わす。
　嬉うれしくてたまらないとばかり、穏やかな闘法を好む彼らにしては珍しく粗野に拳足を用いた攻撃で、ホロウエレメリアンを叩たたき返していく。
「よいかテイルイエロー……恋愛こいという最大の戦いに比べれば、この程度の世界終しゆう焉えんなど前ぜん哨しよう戦せんも同然！　見事切り抜け、己が真の戦いに邁まい進しんせよ!!」
「……ええ！　もちろんですわ!!」
　ビートルギルディとスタッグギルディが固く握手を交わし、その身体からだを溶け合わせていく。
「行こう、兄さん！　今度は、僕たちの意思で！」

「よくぞ言った、我わが弟よ!!」
　甲虫の義兄弟は今再び、神話の巨神・ヘラクレスへと融合を果たす。
「「さあ乗れテイルイエロー、我われらがお前の車輪となろうぞ!!」」
　ヘラクレスギルディの背に搭乗した、テイルイエロー・アブソリュートチェイン。
　ツインテールを空に穿うがって固定するまでもなく、この頼もしき騎馬戦車が、イエローを支さささえてくれる。
　絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードで武装を大解放し、機銃掃射の光が彼らというイラストの背景を彩いろどる。
「「乗れとは言ったが、我らの背中で脱げとは言っておらぬぞ!!」」
「いいえっ！　もう思いっきりやっちゃいますわ――――――――――っ!!」
　宇宙最強の爆撃機関が、津波もかくやと押し寄せるホロウエレメリアンたちを芥け子し粒つぶに還かえしていく。
　黒い邪悪が滅び去った地平の先に。彼らの冬コミが、開催を待ちわびている。

　そんなイエローたちの奮戦を遥はるか背後に臨のぞみながら、リヴァイアギルディ、クラーケギルディもまた、部下たちを従えてホロウエレメリアンに挑んでいた。
「巨ォォォォォォッ!!」
「貧ッッ!!」
　股間の槍やりが轟とどろき、貧乳の剣が閃ひらめく。
　敵は、乳の何たるかも理解できぬ木で偶くの坊ぼう。
　自分たちが誇りを以もつて侵攻したこの世界を、我がもの顔で歩かれるのは我慢がならない。
　爆散したホロウエレメリアンの起こした風にマントを揺らしながら、

クラーケギルディは天高く剣を掲げる。
「テイルブルー！　我わが愛いとしの姫よ！　最期に今一度、この貧乳の剣を貴女あなたに捧ぐ!!」
　騎士の誓いは、姫の元へと届いただろうか。
　かつては一笑に伏していたこの騎士かぶれを微ほほ笑えましく見つめながら、リヴァイアギルディは全ての憂うれいを払い飛ばすかのように股間の槍やりをいきり立たせた。
「姫、か……テイルブルーめ。しおらしくなったかと思えばすぐに立ち直って戦いくさ女め神がみを墜とすとは……もはやその蛮勇、神域のもの。この俺も、貧乳を認めぬわけにはいかぬな」
「フッ……。その知恵の回りかねる総身にも、ようやく貧乳の素晴らしさが染みたと見えるな、リヴァイアギルディ」
　そう言うクラーケギルディも、遠く戦うテイルイエローを見て、これまで巨乳に向けていた嫌悪の眼まな差ざしが優しくなっている。
「美しい……心もろとも乳が跳ね揺れている。あれが、巨乳の本当の在あり方というものか」
「ほほう。お前こそ、痩せっぽっちで頭に栄養が届いていなかったようだな。巨乳の偉大さを知るまでに随分とかかったではないか、クラーケギルディよ!!」
　巨乳好きが貧乳を、貧乳好きが巨乳を認め合う。
　頑固な将しようが雪解けを見せたことで、巨乳部隊、貧乳部隊の戦士たちも笑顔になる。
「おお……それではお二方は、乳ならば大きくとも……」
「小さくとも、等しく愛されると!!」
　バッファローギルディとブルギルディが飛び跳ねんばかりに喜ぶが、
「「馬ば鹿か者!!」」
　返ってきたのは、つれぬ一喝だった。

「それとこれとは話が別だ！」
「一番は──」
　二人の将は互いを見やって笑い合うと、黒き怪魔へと肩を並べて走り出した。

「巨乳だ!!」
「貧乳だ!!」

　大きい胸が好きだった者がいた。
　小さい胸が好きだった者がいた。
　乳の御旗に集い、戦った戦士たちがいた。
　この地球は、永遠にその勇姿を歴史に刻み続けるだろう。
　おっぱいこそ正義と奮ふるい立ち、勇猛に戦った漢たちがいたことを──。

◇

　尊みことと二手に別れた仮面ツインテールは、逃げ遅れた人々の誘導を続けていた。
　粒子の範囲から離脱すればいいだけの〝撒死舞霧マキシマム〟と違い、属性力エレメーラを狙ねらって無差別に人間を襲おそうホロウエレメリアンは、比べ物にならないほどの脅威だ。
　市街地を抜けて雑木林に入り、尊と通信で連絡を交わす。そして、侵攻状況をサーチした。
　瞬間移動用の転送ペンを取り出し、次のポイントへ瞬間移動をしようと準備する。
　だがその時、ガイアギルディの攻撃の余波だろうか、激しい揺れに襲

われてペンを落としてしまう。

　慌あわてて仮面ツインテールが地面に手を伸ばすと、黒い足がペンを踏み砕いた。

「！」

　漆しつ黒こくの無む貌ぼう、ホロウエレメリアンが、目の前にまで迫ってきていた。

　後あと退ずさって背が当たった木の幹、そこに身を隠そうと回り込んだ、さらにその先にもホロウエレメリアンの姿が。

（ツインテール属性を最優先で奪おうとする傀かい儡らいなのに、どうして私を狙うんですか──!?）

　疑問に思っている端はしから、次から次に数が増えていく。

　周囲を囲まれたトゥアールは、幹に背を預けてへたり込んだ。

　咄とつ嗟さに仮面を外し、携行状態に変形させてブーメランのように投げつけるが、いともあっさりと割り落とされる。ホロウエレメリアンの闇やみ色の腕が、ゆっくりと伸ばされた。

「……私なんか狙ったって、何もありませんよ……」

　ツインテール属性は、もう持っていないのだから。

　あるいはこの黒き怪魔たちは、生命すらも奪おうというのか。

　こんな自分の意志も持たぬ獣けものにさえ、今の自分は抗あらがう力を持たない。

　恐怖ではなく、無力感で涙が零こぼれた。

「……っ……総そう二じ様ぁっ……」

　せめて最後に、愛する者の名を呼ぶ。

　覆くつがえせぬ絶望も悲劇も、自分は知っているから。

　ツインテールを失った自分に……奇跡を起こすことはできないのだから。

　トゥアールは、運命を受け容いれる。抗いがたき、滅びの運命を。

　しかし、定められし運命を呑のん気きに無視する、身勝手な輩がたまにいるのだ。
　神も呆あきれるであろう。空気を読めない奴だ、と。
　トゥアールに伸ばされた漆黒の腕が、突とつ如じょとして爆はぜ飛ぶ。よろめき後退るホロウエレメリアンの頭頂から足先までが、一直線に潰れて裂さけた。
　その爆撃めいた攻撃が剣けん閃せんだなどと、誰だれが信じるであろう。
　うっすらと開かれたトゥアールの視界に、鮮やかなモノクロームの輝きが飛び込んでくる。
　凛りんとたなびく黒いマント。
　それに重なり舞い踊る、真白きツインテール。
　忘れもしない、かつてもっともツインテイルズを苦しめた強敵の背中が、そこにあった。
「……ティラノ……ギルディ……!?」
「ようやく見つけたぞ、百ゆ合りコスモの女よ」
　呆あつ気けに取られるトゥアールの前で、ティラノギルディは聖剣の切っ先を静かに持ち上げた。
　一斉に飛びかかっていくホロウエレメリアンたち。
「ぬんっ!!」
　剛剣一いつ閃せん。
　強さだけならオリジナルのエレメリアンと同等のはずのホロウエレメリアンたちを、まるで枝から落ちた木の葉も同然に空へ舞い上げていく。
「誰だれの断りを得て俺の部下たちと同じ貌かたちをしておる、悪鬼どもが!!」
　圧倒的なまでの強さを見せつけ、傲ごう然ぜんと佇たたずむティラノ

ギルディ。
　かと思えば、へたり込むトゥアールに、何か言いたそうな目でチラッチラッと見てくる。
　童貞くさいモーションに痺しびれを切らしたトゥアールが、声を張り上げた。
「何ですかもう！　そういう仕草が可か愛わいいのは総そう二じ様だけです！　言いたいことがあるのならとっとと言ってください!!」
　ティラノギルディは人差し指を突き合わせながらもじもじしていたが、やがて意を決したようにその大きな頭を下げた。
「その…………死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの最終決戦たたかいでは………………泣かせてしまってすまなかった!!」
「………………ッ──ハア!?　何いきなり謝ってるんです!?　まさかそんなことを言いに、私を捜していたんですか!?」
「だ、黙れ！　よいか、俺が最後に奪うのは属性力エレメーラではない……今その頬ほおを落ちる涙よ！　それが……かつて貴様を涙させた俺の、俺たちの、せめてもの償いだ!!」
　憂うれいが晴れて満足げなティラノギルディとは裏腹。
　エレメリアンという憎むべき存在に助けられたことが、トゥアールの心の古傷を抉えぐった。
「何かっこつけてるんですか……償いだなんて、冗談じゃないです!!」
　塞せき止められない激情を、止とめ処どなく吐き出していくトゥアール。
「あなたたちは毎日、仲間同士で楽しく語り合っていたんでしょう……何が好きだ、何が可愛いって！　私の世界では、そんなことはもう二度とできないんですよ！　あなたたちアルティメギルに滅ぼされた、私の世界では!!」
　無理に立ち上がろうとしたトゥアールは、足の痛みに顔を顰めて再び

尻しり餅もちをついた。
　それでもなお、涙を振り散らしながら自分の前に立つ背中を睨にらみ付ける。
「あなたが誇らしそうにたなびかせているそのツインテールも、私にはもう二度と結べない！　落ち込んで泣いている友達に、結んであげることもできない!!」
「□□□□□□」
「今ここで奪われなくたって！　私の笑顔はとっくにあなたたちに奪われてる！　あなたに助けられるぐらいなら、消えた方がマシです!!」
　ティラノギルディは怒気に眼めを光らせて振り返り、トゥアール目掛けて斬きりつけた。
　咄とつ嗟さに死を覚悟し、固く瞳ひとみを閉じるトゥアール。しかし、痛みは訪れなかった。
　代わりに、彼女の背に立つ巨木に横一文字の光条が走る。
　一刀両断にされた幹が、枝葉を軋きしませながら倒れていく。その後ろで、ホロウエレメリアンが一体崩れ落ちていった。
「……嘘うそをつくな。笑顔は取り戻してくれたのであろう、あの少年……ソウジがな」
「っ──!!」
　よりにもよって、エレメリアンに諭さとされるなんて。
　やるせなさと悔しさ──そして少しの嬉うれしさが綯ない交まぜになり、再び溢あふれる涙。
「安請け合いをしてしまったわ！　貴様の涙消えるまで戦うと誓ったが故ゆえ……今またそうして泣かれれば、いつまでもここで剣を振るわねばならぬではないか!!」
　増え続けるホロウエレメリアンに、ティラノギルディは徐々に攻撃を受け始める。

　自分を庇かばってさえいなければ、もっと楽に蹴け散らせる相手のはずだ。
　肉の盾たてとなって泥くさく戦う帝王に罪悪感を覚え、トゥアールは突き放すように言った。
「もしかしてまだ勘違いしてるんですか、私は百ゆ合りじゃありません！　あなたが助ける価値なんてないでしょう!!」
「この帝王を見くびるでないわ！」
　無用な気遣いもろとも、また一体ホロウエレメリアンを斬り滅ぼす。
　その一喝はトゥアールにも、目の前の邪悪どもにも向けられたものに思えた。
「男に惚ほれたからといって、百合でないとはいえぬ！」
　さらに一体、そしてまた一体。言葉の昂たかぶりとともに、剣けん閃せんの熱量も増していく。
「どれだけ脇わき目めを振ろうと、寄り道をしようと……いや、百合そのものが寄り道であろうと！　その百合が輝いておれば、それでいいのだ!!」
　誇り高き百合の在ありようを熱弁され、トゥアールは毒気を抜かれる。
「……レッドちゃんがドラグギルディにぞっこんだから、私をナンパですか？」
「わはははは、冗談ではない！　痩せても枯れても百合の伝道師、自ら女を口説くなどご免被るわ！　それで貴様、名前は!!」
　否定した側そばからナンパじみた真ま似ねをする、この天然。
　トゥアールは、苛いら立だち交じりの声こわ音ねで名乗り捨てた。
「トゥアール……です」
「トゥアールよ！　お前の百ゆ合りは輝いておる。俺が太たい鼓こ判ばんを押してやる!!」

「それは太鼓判じゃなくて烙らく印いんっていうんですよ！　嬉うれしくないんですけど⁉」

　僅わずかな会話の暇いとまにも、ホロウエレメリアンは攻撃を続ける。

　ついに、ティラノギルディの肩へと黒い矢が突き刺さった。

　思わず顔を背けるトゥアール。

　だがティラノギルディは、苦痛に顔を歪ゆがめるどころか、晴れ晴れと笑顔を浮かべていた。

「心失った亡者どもよ、存分に来るがよい！　そして、失った心にしかとこの名を刻め‼」

　恐るべし、百合の聖剣の冴さえ。

　群がる猛者たちを、猛々しき剣けん閃せんが斬きり散らしていく。

「俺はティラノギルディ！　アルティメギル四し頂ちよう軍ぐん・死の二菱ダー・イノ・ランヴアス隊長にして、偉大なる百合の帝王だ‼」

◇

　全身から炎を放ち、俺はガイアギルディの掌しよう撃げきから脱出する。しかし両腕が空あいたことで、ガイアギルディは再びホロウエレメリアンの放出を再開しだした。

　巨大な上半身と腕、そして翼という神の異様から、黒の兵士が産み落とされ続ける。

　俺はフォーラーチェインの高速飛ひ翔しようの衝撃波でホロウエレメリアンたちを爆散させながら、ガイアギルディの巨大な脳天に、炎の斬剣を振り下ろした。

「ライジングブレイザ――――――――――――――――ッ‼」

　ガイアギルディの周囲はバリアのような強力な力場が張り巡らされて

おり、斬り抜けることができない。力の限り剣を振り下ろし続け、バリアもろともガイアギルディを強引に空から地面へと叩たたきつける。
　落下の衝撃などものともせず、砂すな埃ぼこりを突風のように巻き上げてガイアギルディは浮遊した。
　俺を敵性戦力として認めたことで、ホロウエレメリアンの産出が停止する。
「永ながい悪夢だった……けど、それはここで終わる！　俺が終わらせる!!」
　ガイアギルディが石像じみた瞳ひとみを発光させ、神しん光こうを撃ち放ってくる。
　それはもはや、高密度のレーザー光線。神しん槍そうから放っていた時よりも桁けた違いに強力となった神光が触れた地面は、一文字に深い溝跡を残して蒸発する。
　間合いを取り、剣を構え直した俺の眼前に、ガイアギルディが突とつ如じよとして瞬間移動してきた。
「何ッ!?」
　ガイアギルディは右腕を振り下ろし、地面に叩きつける。間一髪飛び退のいた俺が見たのは、大型の重機で何十回も掘削したかのように深々と抉えぐられた地面だった。
　その巨体からは想像もできないほどの高速。そして、高機動。
　変幻自在の動きに神しん光こうと両腕での攻撃を織り交ぜられ、俺は防戦を強しいられる。
　その剛腕の射程圏に囚われ、ついに剣で受け止める覚悟を決めた瞬間──快音が響いた。
「──不ふ甲が斐いない……お前は相手がツインテールでなければ、のびのびと戦えぬのか！」
　横薙なぎに振るわれた巨腕が、俺の防御に先んじて大剣で弾はじき上

げられたのだ。
　光のツインテールをたなびかせた戦士が──威風堂々と俺の眼前に立つ。
　ゴッドドラグギルディが、この最後の戦いの場へと現れた。
「……ドラグギルディ。俺と戦友にはなれないんじゃなかったのか？」
「無論。我われは最後に、戦いくさ女め神がみの魂たましいを解放するために戦うだけだ……。もっとも、たまたまお前が同じ相手に剣を振っているので、しめたものだと思っていたところだがな」
「じゃあ俺も、得しただけって思うことにするぜ、この場にツインテールが増えてな!!」
　俺たちのツインテールが……握手を交わすように、風に舞った。
「いくぜ!!」
「応おう!!」
　ガイアギルディに向かって並走する、俺とゴッドドラグギルディ。振り下ろされた腕を回避し、俺は右腕に、ゴッドドラグギルディは左腕に、それぞれの剣を叩たたき込む。
　呼吸を合わせて転回し……もう一いち斬ざん。
「「はあああああああああああああっ!!」」
　互いにそのまま足を振り上げ──同時に蹴けり飛ばす!!
　火花が噴き上がり、後退するガイアギルディ。
　斬きり、回避し、互いの動きに重なり合う。
　まるで幾多の死線を乗り越えた相棒バデイのように、俺たちは呼吸を合わせて剣を振るった。
　剣を撃ち合わせるしかなかった二人がついに、肩を並べて戦っているのだ。
　しかし、ガイアギルディはダメージを受けても瞬時に回復し、反撃してくる。

「こやつを倒すには、再生力を上回るほどのパワーで一気に吹き飛ばすしかないぞ!!」
「こんだけの巨体にそれは、なかなか骨が折れそうだな……!!」
　俺たちが二手に別れて攻撃をし始めると、ガイアギルディも攻撃を広範囲に変化させた。
　瞳ひとみから放射された一条の神光が空中で無数に分裂し、驟しゅう雨うのごとく降り注ぐ。
　ブレイザーブレイドで切り散らしていくも間に合わず、そのうちの一発が左のフォースリヴォンに直撃する。絶望的なほどに鮮やかに宙を舞う、装そう甲こうの破片。
「フォースリヴォンが、砕かれた……!!」
　ツインテールが解ほどければ、俺の変身は強制解除される。
　俺は咄とっ嗟さに房の根を掴つかみ、指の輪で束ねて辛うじてツインテールを維持した。
　だがこれでは、左腕を封殺されたも同然だ。
　体勢を立て直した時には、すでに致命的なまでの眼前に神しん光こうが迫撃している。
「しまっ――」
　横合いから突っ込んできた黒い影が、俺の肩を突き飛ばした。
　バランスを崩して倒れ込みながら、俺を庇かばったゴッドドラグギルディが神光に胸を貫かれる様が、スローモーションのように視界に飛び込んできた。
「ドラグギルディ――ッ!!」
　貫かれた胸から激しく属性力エレメーラを放電させながら、ツインテールの竜翼陣はばたきへと戻ったドラグギルディ。力無く崩れ落ち、地に片膝ひざをついた。
「ぬ、う……！」

ドラグギルディが、リボン無き髪の房を掴つかんでいる俺の左腕に自分の手を添えた。

直接属性力エレメーラが注ぎ込まれるような感覚。自分の属性力エレメーラを使って、俺の左のツインテールを結ぼうとしてくれているのか……!?

「すまない……けどもう無茶するな、本当に消えちまうぞ!!」

「身体からだを労いたわろうが、無茶をしようが、我われらが消滅する運命は変わらぬ……。だから今を生きるお前が……我らの心を……我のツインテールを……代わりに振るってくれ!!」

左のツインテールは解ほどけかけたままだ。このまま固まっていては、狙ねらい撃ちにされる。

俺は、ガイアギルディの注意を引きつけるように駆け出した。

プログレスバレッターを装着してツインテールを維持できないか試みようとしたが、そのプログレスバレッター自体が具現化できなくなってしまっていることに気づく。

ブレイザーブレイドを見ると、刃こぼれの加積で崩れ折れてしまっていた。

体力が尽きて形態変化チエインカスタムはできない、武装もテイルギアも限界……後できることといえば、属性玉変換機構エレメリーショングらいだが……ガイアギルディに通用するとは思えない。

神光が集束し、巨大な光球となって俺の眼前に着弾。衝撃波で吹き飛ばされる。

「ぐ……あああっ……!!」

空高く舞い上げられた俺は、変わり果てた戦いくさ女め神がみを意識おぼろに見つめていた。

執念──首領のために究極のツインテールを手にするという思いは、ここまで強いのか。

「……俺、だって……諦あきらめるわけには、いかない……!!」
　二本の足で大地を踏みしめ、ガイアギルディへと不屈の眼まな差ざしを放つ。
「ツインテールを結べないって、悲しんでいる女の子がいた……！　ツインテールを奪われたくないって、震ふるえている女の子がいた！　もう二度と、そんな思いをさせはしない!!」
　抱きしめた細い身体の温ぬくもりが、ツインテールが、俺を何度だろうと起ち上がらせる!!
「お前が全てを捨ててでも首領を守ろうとするように……俺にも、全てを懸けて守るべきツインテールがあるんだ!!」
　ガイアギルディが、自らの属性力エレメーラを最大にまとわせた両腕を、静かに振り上げる。
　万物を擂すり潰す終しゆう滅めつの両りよう掌しようが、俺の頭上に振り下ろされた──その瞬間。
〈属性玉エレメーラオーブ──百合属性ガールズラブ〉
　俺の左腕から激しい光が放たれ、ガイアギルディを腕もろとも弾はじき飛ばした。
　ガイアギルディが地面に沈む激震で五体を揺らしながら、俺は閃せん光こうの正体を悟る。
「百合属性ガールズラブ……ティラノギルディの属性玉エレメーラオーブが……独りでに発動した!?」
　そうだ、さっきドラグギルディは、属性玉変換機構エレメリーションがある俺の左腕に触れていた!!
「ドラグギルディの属性力エレメーラが、属性玉エレメーラオーブと呼応したのか!?」
　発動したはずの百合属性ガールズラブの属性玉エレメーラオーブが、左腕の属性玉変換機構エレメリーションから飛び出す。

　菱ひし形がたの属性玉エレメーラオーブが、虹にじ色の光を放ち──徐々に、その形を変えていく。
　やがて束ねた髪を咬かみ挟んでまとめる、ヘアクリップのような形に集束した。
　黄金に縁取られた、属性玉エレメーラオーブと同じ空色の輝きを放つそれは──。
「……進化装備エヴォルブアームズだ……！　エレメリアンが、俺のテイルギアに力を!!」
　ティラノギルディの属性玉エレメーラオーブを、ドラグギルディが発動した……それだけではない、無数のエレメリアンの属性力エレメーラが、この髪留めバインダーから迸ほとばしるのを感じる。
　本来なら許されざる、二つの同種を繋つなぐ力。
　異種族たるエレメリアンと、俺の心を繋ぐ進化装備エヴォルブアームズ!!
「エレメリアルバインダー!!」
　牙きばと牙を噛かみ合わせるように、フォースリヴォンの砕けた左の房へと装着する。
　解ほどけかけたツインテールが新たな結びに脈動し、全身に力が漲みなぎっていく。
　テイルギアが虹色の輝きに包まれ、装そう甲こうが変化。アルティメットチェインを基本ベースに、右腕、左足に特に重点的に追加生成された鋭い装甲。左右非対称のシルエットが、異端のツインテールを象徴している。
　日輪を描き広がっていた背中の六本の翼は折り畳たたまれ、過剰放射された属性力エレメーラに包まれたことで、虹色の光翼へと彩いろどられた。
　まるで……雄お々おしき竜の戦士がその背にたなびかせていた、マン

トのように。
　今までのどんな進化とも違う──無数のツインテールを一つに束ねたかのような重厚感!!

「これは心を繋いだツインテール───エレメリアチェインだ!!」

　消えゆくエレメリアンたちの心を束ねた、ただ一度だけの変身。
　奇跡のツインテールが、ここに誕生した。
　ガイアギルディは、機動の衝撃だけで大気を軋きしませながら迫撃。
　瞳ひとみからの神しん光こうもまた、砂すな礫つぶてにも似た高密度で放たれてきた。
　花粉のような紅あかい粒子の防御膜バリアフイールドが俺の周囲に展開され、神光を弾き散らす。
『レッドちゃーん、頑張って～』
　……ユグドラシルギルディの声⁉　遠く離れて戦っているはずのエレメリアンの声が、脳裏に……いや、ツインテールに直接聞こえる!!
　俺は試しとばかり、左の手の平に、鋭利な刃やいばを想念する。
　光が凝縮した後、アラクネギルディの魂たましい・男の娘の棒アマノムラクモが具現化していた。
『おお、テイルレッドが男の娘の棒をその手に握った！　感触でわかるでござる!!』
　今度は、アラクネギルディの歓喜が聞こえる。
　……ちゃんとアマノムラクモって言ったはずなのに何だ、この秘密裏にルビが消し飛ばされているような不安は。
『ぬうう、ずるいぞ！　テイルレッド！　我わが聖剣、輪廻の百合受攻アロンダイトも遠えん慮りよなく使えーい!!』
　やはりというか、対抗意識を燃やすようにティラノギルディの声が聞

こえてくる。
「すまない、俺にはちょっと刃渡りが長すぎると思う……」
『…………。そうか、使わんのか……。ふん、別によいわ……』
「わかったよ使うよ!!」
　相変わらず、すぐいじける奴やつだなあ！
　右手に輪廻の百合受攻アロンダイト、左手に男の娘の棒アマノムラクモ。
　神秘的な二刀流を装備し、ガイアギルディに反撃を開始する。
　流れるような左右の斬ざん撃げきは、誰だれかに手を引かれているような不思議議な疾走感。
　プテラギルディの高速移動。トリケラトップギルディの瞬間転移──。
　ガイアギルディから放たれる攻撃を、この身に宿った力を次々と発動させて回避していく。
　伸びる触手のように俺の周囲を飛旋したオーラ……リヴァイアクラーケギルディの技だ。
　ヘラクレスギルディの超膂りょ力りょく。ケルベロスギルディの三分身を駆使した斬撃。
　間断無く発動する力の前に、ガイアギルディの再生力が後こう塵じんを拝し始める。
　あれを使え、これを出せ。
　仕舞いには、こんな時に自分の好きな属性談議など。
　愛すべき変質者たちの声が、優しくツインテールに響く。
「これまでに戦った全てのエレメリアンの魂が、俺に力を貸してくれている!!」
　ヴァルキリアギルディ。心を捨ててまで、首領を守ろうと戦う女神。
　最後に俺が助けられたのは──お前がエレメリアンに再び与えた、心の力だった。

輪廻の百合受攻アロンダイト、男の娘の棒アマノムラクモをガイアギルディの左右それぞれの腕を縫ぬい止めるように投とう擲てきし、虹にじ色の光翼を最終噴射ファイナルブーストさせて特攻する。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
俺のツインテールから飛び出した無数のエレメリアンたちのオーラが、ガイアギルディを取り囲む。彼らそのものが、オーラピラーとなって拘束バインドするかのように。
すでに一本のブレイザーブレイドを破壊された俺だが──
『──テイルレッドよ！　我われとの戦いを思い出せ!!』
ドラグギルディの声が、右に残されたフォースリヴォンへと手を導く。
「ああ……伊だ達てにツインテールじゃねえ！　ってな!!」
かつてのドラグギルディとの戦いで逆転を果たした、残されし二本目の炎えん刃じん。
背中の翼が分離し、竜の片かた翼よくを思わせる段並びの乱みだれ刃ばで、その切り札のブレイザーブレイドへと合体した。
まるでそれは、ドラグギルディが振るう乱れ刃の大剣のように──。
傍かたわらにドラグギルディの心を感じる。俺が大上段に剣を構えると同時。
夢幻の光に包まれた竜の剣士の魂たましいもまた、大剣を掲げていた。
今──二対の魂ツインテールが、思いを一つに結ぶ。
「ドラゴニック！　ブレイザ──────────────────ッ!!」
放たれた極大の炎と光が、大だい地ち母ぼ神しんを包み込んでいった。
〈……見事、だ……。さすがは、首領様の御希望おのぞみになられた……究極の、ツインテール〉

　最後の一瞬、気け高だかき自我を取り戻し──ガイアギルディが、光の中へ崩れ落ちていく。
　戦いくさ女め神がみは今、完全消滅した。死者の魂を繫つなぐものはもう、何もない。
　悪夢の終しゆう焉えんと、時を同じくして……小さな夢の終わりが、始まった。



エピローグ　新たなる約束。

　トゥアールは、壮絶な光景の中にいた。
　天は紫し電でんを迸ほとばしらせ、灼炎を唸うならせ、空の体を為していない。
　地はことごとくがひび割れ砕け、大地であることを忘れてしまった。
　あれだけ樹立していた木々は、もはやただの一本も残っていない。
　ティラノギルディの背後、トゥアールの立つ場所だけが、扇状に地面の原型を留とどめているのみだった。
「ツインテールを信じよ、トゥアール」
　トゥアールに背を向けたまま、穏やかに諭さとすティラノギルディ。
「お前の惚ほれた男は、全てを失ってなおツインテールを輝かせたのだ。お前もあと一度だけ、ツインテールを信じてみるのもよかろう？」
　反論しようとして、トゥアールは止めた。
　助けられたことは紛まぎれもない事実。意地にならず、素直に礼を述べようとする。
「さっきあなたに言ったこと、謝ります。助けてくれて、ありが──」
　その言葉は、周囲へ響く轟ごう音おんに止められた。
　聖剣〝輪廻の百合受攻アロンダイト〟がティラノギルディの手から滑り落ち、刀身が地面に突き刺さったのだ。
「…………ティラノギルディ？」
　恐る恐る背中に声をかけるも、返事はない。
　そしてティラノギルディのツインテールは──粒子となって煌きらめきながら消えていく。

「□□□□」
　程なく全てを悟り、こみ上げる嗚咽おえつを噛かみ殺すトゥアール。
　また涙を流したら……この不器用な百ゆ合り好きは、いつまでも旅立てない。

　数百のホロウエレメリアンたちを相手取り、ついにトゥアールを守り抜いた。
　その雄大な背だけを最後まで晒さらし、決して地に膝ひざをつくことはなかった。
　己の信じる百合もののため、輝く聖剣を振るう。
　彼は今度こそ、気け高だかき帝王の生き様を完かん遂すいしたのだった。

◇

　俺たちの、たった一度の共闘。
　俺たちの、たった一度の奇跡が……終わりを告げる。
　ある者は手を振りながら。ある者はそっぽを向きながら。
　またある者はすでに、気け高だかく炎の中へと。
　ガイアギルディとホロウエレメリアンが完全消滅したことを皮切りに、最後の力を振り絞って現界していた再生エレメリアン……〝無毛で勇ましき者エインヘリアル〟たちも消えていく。
　俺の仲間たちはどんな思いで、それを見送っているだろうか。
　不思議なもんだ……恐ろしくてたまらなかったのに。
　毎日毎日戦いを強しいられて、厄介極まりなかったのに。
　あいつらが再び消えていく今……俺は、少し寂しさを感じてしまっている。

　また愛あい香かにどやされるだろうな……。エレメリアンと仲良くなろうとすんな、って。

　エレメリアルバインダーが属性玉エレメーラオーブに還かえり、俺も基本中結形態ノーマルチエインへと戻った。
「さすがにもう言っていいよな……疲れたぁ～～～～～～……」
「存分に誇るがよい。お前たちは、神の裁きをも食い止めたのだからな」
　俺とドラグギルディは、精根尽き果てて背中合わせで座り込んでいた。
　好みのツインテールに背中を流して欲しいなんて、変わった願いを持っていたこいつと、背中を合わせて語り合うとは……奇跡ってのは、粋だよな。
「お前たちの力を借りちまったな、ドラグギルディ」
「……貸したのではない。共に並び立って戦うとは、そんな他人行儀なものではあるまい。それが──」
「────ツインテールだ。……か？」
　俺の背中で、ドラグギルディは首しゆ肯こうしているだろうか。それとも、苦笑しているだろうか。
　一つだけわかった。生き方が違っても、戦友にはなれなくても……同じものを愛する者同士ならば、心を結ぶことはできるということだ。
「あれから色んなことがあったんだ……。俺、昔はこの装そう甲こう……テイルギアに頼りっぱなしだったんだけどさ。今なら自分で、けっこう上う手まくツインテールを結べるんだぜ？」
「ふむ。やり方を見せてもらいたいものだな」
「全部解ほどいてからじっくり結ぶと、この装甲が消えちまうんだ。それはちょっと俺的にまずいっていうか……」

「それは残念だ……」
「そうそう、それと──」
　後から後から、言葉が溢あふれてくる。
　ごめん、トゥアール。
　ドラグギルディは、お前やイースナの世界の仇かたきでもあるけど。
　今、この時だけは……少しだけ、他た愛あいの無い世間話をさせてくれないか。
　ツインテールを語り合うことを、許してくれないか……。
「よいかテイルレッド……今はその時ではない」
　窘たしなめるような語調に、俺ははっとする。
「お前が涙すべき時はただ一度。最後の最後……必ず将しようとして涙せし時がやって来るであろう。別離わかれの寂しさではない……ツインテールへの喜びでこそ涙せよ」
「ああ、言われなくたって……今は涙なんか出ねえよ」
　だって、俺たちはすでに一度、果たされるはずのない約束を果たしたんだぜ。
　随分、次のハードルが下がっちまってるじゃないか。
「俺のツインテールは、縁えにしだ。だから──」
　だからきっと。
　ツインテールが……またいつか、俺たちを繋つないでくれる。

「ドラグギルディ。来世また……逢あおうぜ」

「テイルレッドよ。お前がツインテールを愛する限り……そのようなこともあろうな」





逞たくましい背中の温ぬくもりが――消えた。

穏やかに吹きゆく風に任せて、俺のツインテールが揺れる。
旅立つ強と敵もたちを、手を振って見送るように。

侵略者たちへの誓いというおかしな言葉を……天昇る光に託した。
「――俺、戦い続けるよ。この世界のツインテールを守り抜く、その日まで」

テイルギア設定資料 12

テイルレッド エレメリアチェイン



武器：ブレイザーブレイドブレイカー
エレメリアセイバー
必殺技：ドラゴニックブレイザー

百合属性（ガールズラブ）の属性玉（エレメーラオーブ）を想定外の方法で発動したことで生まれた進化装備（エヴォルブアームズ）・エレメリアルバインダーにより、テイルレッドが未知の進化を遂げた姿。現在存在するエレメリアンの全武装・全能力をそのまま発動することが可能。ただし全エレメリアンの精神が同時に接続されてしまうため、仮に総二以外がこの形態を発動すれば瞬時に精神崩壊してしまう危険な力でもある。エレメリアンとすら絆を繋ぎ続けてきた総二だからこそ使いこなせる力であり、なおかつ消えゆくエレメリアンたちが意思を託したからこそ現実のものとなった、奇跡の形態である。宿敵の大剣を象った乱れ刃のブレイザーブレイド・ブレイザーブレイドブレイカーが最大の武器。

属性玉
－設定資料－
02

04 髪紐属性（リボン）

持ち主 フォクスギルディ

テイルギアのフォースリヴォンを翼状に変化させることで、使用者に飛行能力を与える。翼の形状はレッド、ブルー、イエローそれぞれ違う。レッドは髪型属性以外の属性玉の使用が苦手なため、イエローは重装甲なことからこの属性玉の使用は苦手なため、ブルーの使用率が圧倒的。移動・戦闘にと使い勝手がよく、ブルーがもっとも多く使う属性玉の一つである。

05 兎耳属性（ラビット）

持ち主 ラビットギルディ

跳躍力を強化できる属性玉。単純に垂直飛びの距離が伸びるだけではなく、動きの柔軟性や連続性など、跳躍という動きそのものが強化されるのが特徴。体操服属性のように対象の広いものに干渉する能力や、全身を強化するような能力に比べて、この兎耳属性のように強化箇所や強化事項が限定される能力は使いどころも難しいが、その分一点特化での力の恩恵は大きい。

06 学校水着属性（スクールスイム）

持ち主 タイガギルディ

地面を水中のように泳ぐことができるようになる。ただしコンクリート、鉄など、密度が高くなるにつれ移動速度は極端に遅くなる。現実的な使用箇所はやはり砂地など。奇襲や離脱に使用されることが多い。ちなみに触れた相手にも透過効力が及んでしまうため、トゥアールを頭だけ出して全身垂直に砂地に埋めるという悪戯をブルーがしたことも。

あとツインテールがき

　お久しぶりです、水みず沢さわ夢ゆめです。

　このあとがきを書いている時、日曜日朝の特撮番組の放送時間移動が発表されました。

　何だそのぐらい、と思われるかもしれませんが、脳の機能の九五パーセントを特撮とツインテールに割り振っている私からすると、これは本当に大事件です。

　常識だった放映時間が変わってしまう──常識だと思っていたことが時の流れによって移り変わっていくのは、ままあることです。

　子供の頃ころから親しんできた冥めい王おう星せいが勝手に惑星から降格させられたり、ティラノギ……サウルスには毛が生えていたよと新説が出され、その後いや、やっぱり毛はなかったかもしれん、と流る転てんしたり。ティラノサウルスに毛をつけて放映した戦隊はどうすればいいんだ。

　そのように時の移り変わりを噛かみしめながら、今回の俺ツイです。

　デビュー作である１巻では怪人にさらわれる側だった慧え理り那なが、今ではその怪人を自分で倒し、人々を守れるようになった。時の流れによる成長は、ヒーローものの醍だい醐ご味みですね！

　しんみりしたラストだったので、照れ隠しのようなあとがきでした。

　今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そして読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。この巻の影の主役はエレメリアンたちです。これまでの戦いで総二たちがどれだけ成長したか。そして敵とはいえ単純な善悪に別れて彼らと戦ってきたわけではないエレメリアンたちの信念とは。どうぞお楽しみください！

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。13

２０１７年８月25日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１７年８月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451692-0

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。


GAGAGA BUNKO
AUGUST
2017
ガ報
GAHO
No.124
10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!
ガガガ文庫
8月刊
絶賛発売中!!!
気温とともにボルテージ急上昇！
話題の人気作、揃い踏み！
ガガガの夏は終わらない！
宿敵ドラグギルディ、
完全復活ー!!
定価:本体630円+税
著者コメント
今回は再生怪人との戦い！今だからこそできるドリームマッチなど盛り沢山な内容ですので、お楽しみください!!
戦女神ヴァルキリアギルディの能力で、これまでに倒したエレメリアンたちが完全再生！終わりなき悪夢の始まりにツインテイルズは……!?復活したドラグギルディと相見える総二。ツインテール頂上決戦再び！
[俺、ツインテールになります。13]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩


癒せぬ傷を抱え、狩人たちは前を向く。
存亡の危機を免れた《門部》。未来を書き換えた代償を背負い、傷だらけの迷い子たちが踏み出す、新たな一歩とは。人類の存亡をかけた、影なる戦士たちの一大叙事詩。再起と転換の第5弾。
定価:本体741円+税
著者コメント
なんか一年以上もお待たせしてゴメンナサイほんと。ともあれ、ようやく後半戦の開幕です。刮目せよ!(主に作者が)
筺底のエルピス5 —迷い子たちの一歩—
著:オキシタケヒコ イラスト:toi8


定価:本体593円+税
友人キャラは大変ですか? 3
伊達康 紅緒
著者コメント
夏ですね。本作の主人公たちも、まさに夏休みを満喫している真っ最中です。夏バテ対策(?)に、ガガガ文庫を是非どうぞ!
その結婚、待った!!
俺の名は小林一郎。本物の主人公・火乃森龍牙の親友だ。
第二部終了後、唐突に持ち上がった青ヶ崎さんの縁談。
龍牙の専属ヒロインを狙うたぁいい度胸だ!
俺たちは阻止に動き出すのだが──。最強助演ラブコメ第3弾!
[友人キャラは大変ですか? 3]
著:伊達 康 イラスト:紅緒


悪魔が人類の隣人として
振る舞っていた時代。魔術師のダヤンと
屍人形のアリアは、悪魔退治を
生業としながら、旅を続けていた。
——これなるは忘却の果てに
垣間見る、魂と契約の物語。
悪魔を喰らう魔術師と
哀れな屍人形の旅。
定価:本体593円+税
忘却のアイズオルガン
Die Vergessenen Eisig Organ
宮野美嘉
illustration 薫る石
著者コメント
初めまして。トキメキを追求した結果、死体とか死体とか死体とかが出てきますが、試しに一口お召し上がりくださいませ。
［忘却のアイズオルガン］
著:宮野美嘉　イラスト:薫る石



定価:本体593円+税
異世界修学旅行、いよいよ大詰め!
著者コメント
高校生活を振り返るとやり直したいことも沢山ですが、だからこそ思い出になるのかもしれません。今回はそんな学園モノです。
浩介たちは聖徒会の野望を打ち砕くべく、魔王城へと乗り込んでいったのだが——気づくと彼らの眼の前には、どこか懐かしい母校の校舎がそびえていた。異世界で日本を想う修学旅行生たちの旅、第六弾!
[異世界修学旅行6]
著:岡本タクヤ　イラスト:しらび
※イラストは制作中のものです。


ガガガブックス
第4弾!
白刃閃き
任侠吼え、
血花咲き散り
舞い狂う!
定価:本体1,200円+税
異界残侠伝 真
ひときり包丁
著 鈴木 参
イラスト みく郎
著者コメント
拙作のなかに一つでも愛せる箇所を見つけていただけたら幸いです。
従業員入り口を抜けると、
そこは異世界だった——。
異世界カントレイアに迷い込んだ男、
九条尽は己の意地を通すため、
流離い剣士より死に際に託された
ひと振りの刀を携え、
命を懸けたネスト探索へ挑む!
[真・異界残侠伝 ひときり包丁]
著:鈴木 参 イラスト:みく郎

10th GAGAGA

ガ報
10th Anniversary
Play Back
だヨ!

ガ報の10年全部見せちゃうスペシャル!

ガ報10周年記念

10 th Anniversary GAGAGA ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!

ガガガ文庫の歴史はガ報とともにあり! 今月で124号を数える折り込みチラシ。本日はそんなガ報にフィーチャーして、その歴史をガガガ君と一緒にひも解いていくぞ! 今まで明かされなかった意外な真実も判明しちゃう!?

1 ガ報創刊! すべてはここから始まった!

2007年5月にガ報はガガガ文庫と一緒にスタートしたヨ! 黒と赤のロゴがとってもインパクトがあるヨ! 「人類が衰退しました」がスタートしたのもこの時!



▲このときつけられたキャッチコピーが「物語の新次元へ」。

▼記念すべき第1回小学館ライトノベル大賞受賞作も創刊時に2タイトル。



2 ガ報デザインはこう変わった!

ガ報は毎年マイナーチェンジをくり返しているんだヨ! その時々に味があって素敵だよネ!



▲毎年ガ報担当者とデザイナーさんがコンセプトを決めて、その一年のガ報デザインを決めています。

3 担当デザイナーさんに聞くぶっちゃけトーク!

ガ報を担当してくださっているデザイナーさんに、今日はぶっちゃけてもらうヨ! ガ報をやっていて一番驚いたことはなにカナ?

デ とにかく進行がギリギリでキツ…… あっ毎月特集記事がどんな内容が来るのか楽しみにしています!! あと、僕が装丁を担当している『やがて恋するヴィヴィ・レイン』、目茶苦茶面白いんで、皆さんぜひ読んでみてください!!

あまりのぶっちゃけ具合にボクもヒヤヒヤ…。ガ報担当者はしっかりして欲しいよネ! これからもデザイナーさんとたくさん面白い記事を作っていくんダカラ!

4 今ではお馴染みガガガくんの初登場2009年!?

2009 ガガガくん

ぼくはガガガくん。いつもガガガ文庫を読んでくれてありがとう。

▲品行方正系。とてもマジメな感じです。書店員さんとの座談会企画でデビュー。

2012 ガガガくん

祝! ガガガ文庫5周年! これもひとえに、ガガガ文庫を愛してくれる書店員さんとボクのおかげだネ!

▲このあたりから徐々に厚かましく……。方向性が決まった瞬間です。

2015 ガガガくん

梅雨で外に出られないイ? じゃあ、お家でガガガ文庫を読めばいいヨ!

▲とにかく語尾はカタカナ。2015年のガガガくんは気候の話をすることが多かったです。

2017 ガガガくん

実は微妙にしゃべり方が変わってるんだヨ! でも、ボクに中の人はいないヨ! イメチェンってやつだヨ!

▲語尾「ヨ・カナ・ネ・ナ」のときにカタカナ。メタ発言が目立ちます。

特別仕様ガガガくん



▲ツインテールモード。「俺ツイ」アニメ化に影響された姿。

▲匿名希望モード。裏情報をタレこむときのスタイル。

▲10周年モード。そろそろお馴染みになってきたでしょうか?

5 これからのガ報 NEXT 10 YEAR

いろんなところからガ報を振り返ってみたけど、どうだったカナ? これを機会にもっとガ報を読んでくれるとボクも嬉しいヨ! おもしろい企画や最新情報をバシバシお届けするから覚悟してネ!

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

10周年記念イベント追加情報!!

ガガガ文庫創刊10周年記念イベント



ガガガ文庫創刊10周年記念イベント(2017年9月23日開催)が行われる秋葉原にて、ガガガ文庫の作家さんらによるサイン会を開催することになりました! 10周年記念イベントに参加したり、作家さんらに会える貴重な1日になること間違いなし! 参加方法などの詳細はGAGAGAWIREや公式Twitterで発表しますのでお待ちください!!

【参加予定一覧】

- 浅井ラボ(『されど罪人は竜と踊る』) @コミックとらのあな 秋葉原店
- 渡 航(『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』) @アニメイトAKIBAガールズステーション
- 水沢 夢(『俺、ツインテールになります。』) @AKIHABARA ゲーマーズ本店
- 屋久ユウキ&フライ(『弱キャラ友崎くん』) @書泉ブックタワー
- 吉田円佳(映画『二度めの夏、二度と会えない君』ヒロイン) @書泉ブックタワー

また、イベント当日は会場限定のグッズも販売!! こちらも詳細はWIREを要チェック!!

【販売グッズリスト】

●やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。
- キャンパスアート……12,000円
- マフラータオル……2,000円
- クリアファイル……350円
- Tシャツ……3,000円

●妹さえいればいい。
- キャンパスアート……12,000円
- マフラータオル……2,000円
- クリアファイル……350円
- Tシャツ……3,000円

●俺、ツインテールになります。
- クリアファイル……350円

●二度めの夏、二度と会えない君
- トートバッグ……1,200円

●されど罪人は竜と踊る
- キャンパスアート……12,000円
- マフラータオル……2,000円
- クリアファイル……350円
- Tシャツ……3,000円

●弱キャラ友崎くん
- クリアファイル……350円

●青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。
- クリアファイル……350円

●人類は衰退しました
- トートバッグ……1,200円

●とある飛空士シリーズ
- クリアファイル……350円

※価格・商品の詳細はすべて現状のものです。

イベント 京まふ出展決定!!

9/16・17開催の「京都国際マンガ・アニメフェア2017」に、ガガガ文庫の参戦が決定! グッズの販売やメディアミックスタイトルの配布物など盛りだくさん! 詳細はGAGAGA WIREを要チェック!

実写映画 コミカライズ その他 二度めの夏、二度と会えない君

「ニドナツ」公開目前！

9/1よりロードショーの「ニドナツ」の実写映画に先駆けてそれぞれメディアミックス作品が好評発売中！ また、豪華帯キャンペーンも実施！ 詳細はGAGAGA WIRE&該当作品の帯をチェック！



▲カバー描き下ろし&書き下ろし短編収録！ 映画化記念の新装版！

著：赤城大空 イラスト：ぶーた
（小学館「小学館文庫」刊）



▲ゲッサン好評連載中！ 待望のコミックス第1巻！

原作：赤城大空 作画：源 素水
キャラクター原案：ぶーた



▲映画ノベライズ！ ひと味違う「ニドナツ」を！

原作：赤城大空 著：時海結以
（小学館「ジュニア文庫」刊）

©2017赤城大空・小学館/『二度めの夏、二度と会えない君』パートナーズ

TVアニメ 妹さえいればいい。

最速先行上映会開催決定！

2017年秋放送開始に先駆けて先行上映会の開催が決定！

- ●イベント名：祝・妹の日！「妹さえいればいい。」最速先行上映会
- ●日程：9月6日（水）夜
- ●場所：新宿ピカデリー



©平坂読・小学館/妹さえいれば委員会

詳細はアニメ公式HP（http://imotosae.com/）へ！

コミカライズ

コミカライズ2冊ほぼ同時発売！

9/20発売の原作8巻に合わせて、「サンデーGX」にて連載中の原作コミカライズが9/19に最新4集が「月刊ガンガンJOKER」（スクウェア・エニックス刊）にて連載中の外伝コミカライズが9/20に最新2巻が発売決定！TVアニメ放送目前から「妹」フィーバーが止まらない!!

TVアニメ されど罪人は竜と踊る

ガユスのアニメ絵素材公開！



©LABO ASAI/SHOGAKUKAN

2017年秋TVアニメ放送に向けて制作進行中!! TVアニメ版ガユスの姿に、追加STAFF&放送情報を公開！ さらなる続報待て！

●放送情報 TBS：10月5日（木）深夜2:28～放送予定

STAFF
総監督：錦織 博　監督：花井宏和　キャラクターデザイン：北尾 勝
シリーズ構成：伊神貴世　OP：fripSide　ED：黒崎真音
アニメ制作：セブン・アークス・ピクチャーズ

コミカライズ

コミカライズ第1集が9/19発売決定!!

「サンデーうぇぶり」にて好評連載中の『されど罪人は竜と踊る 輪舞』第1集が、原作20巻とほぼ同日発売！ アニメ公開目前に、まずはコミカライズで「され竜」を総復習しよう！

原作：浅井ラボ　作画：ミトガワワタル
キャラクター原案：宮城・ざいん

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

9月刊 9月20日ごろ発売!!

[妹さえいればいい。8]
著:平坂 読 イラスト:カントク
新年を迎え、春斗や京、千尋や土岐や新人作家たちにも変化が訪れる。大人気青春群像劇、待望の第8弾!

[されど罪人は竜と踊る⑳ 三千万の美しき残骸]
著:浅井ラボ イラスト:ざいん
ガユスとギギナはニドヴォルクが示す先へと導かれる。シンジラ山の地下迷宮、そして激動のルゲニア共和国へ。

[七星のスバル6]
著:田尾典丈 イラスト:ぶーた
旭姫を奪われ、失意の底にしずむスバル。しかしエリシアの言葉にわずかな希望を見出しーー?革新的青春オンライン第6弾!

[マイダスタッチ3 ～内閣府超常経済犯罪対策課～]
著:ますもとたくや イラスト:人米
巨大カジノへの潜入捜査。そこで行われていたマネーゲームに潜む陰謀とは。マネークライムシリーズ第3弾!

[やがて恋するヴィヴィ・レイン4]
著:犬村小六 イラスト:岩崎美奈子
ルカとファニア。ふたりの思いはすれ違ったまま、ガルメンディア王国はついに革命のときを迎える……。

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑫]
著:渡 航 イラスト:ぽんかん⑧
雪乃、結衣、八幡、それぞれの答え。……たとえ、その選択を悔やむと知っていても。

ガガガブックス **[最下位職から最強まで成り上がる2 ～地道な努力はチートでした～]**
著:上谷 圭 イラスト:桑島黎音
無事、冥府の迷宮を脱出したルークたち。かつての敵国エジンバラで生きなければならない彼らだが……。

10月刊 10月18日ごろ発売!!

- [俺と彼女の恋を超能力が邪魔している。2] ーー著:助供珠樹 イラスト:いつい
- [クズと天使の二周目生活] ーー著:天津 向 イラスト:うかみ
- [シスターサキュバスの官能除霊(仮)] ーー著:赤城大空 イラスト:魔太郎
- [ジャナ研の憂鬱な事件簿2] ー著:酒井田寛太郎 イラスト:白身魚
- [ストライクフォール3] ー著:長谷敏司 イラスト:筑波マサヒロ
- [物理的に孤立している俺の高校生活3] ー著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo
- [魔法医師の診療記録6] ー著:手代木正太郎 イラスト:ニリツ
- ガガガブックス [熊撃権左 ～明治陸軍二等卒ですが異世界で魔獣討伐はじめました～(仮)] ーー著:三島千廣 イラスト:クレタ

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。


シリーズ累計
85万部突破!
アニメ化企画でトラブル発生……!?
それぞれの物語が進むなか、千尋の心にも
大きな変化が――。大人気青春ラブコメ
群像劇、待望の第8弾!!
イラスト:カントク
※イラストは
既刊のものです。
TVアニメ
放送間近!
ガガガ文庫10周年を彩る
メディアミックス2作品登場!!
《暗黒ライトノベルの始祖》
20巻の大台到達!
新たなる〈宙界の瞳〉を
求めて、ガユスとギギナ
原点回帰の二人旅!
イラスト:ざいん
※イラストは既刊のものです。
シリーズ累計600万部突破!
『俺ガイル』
最新⑫巻!!!!!!
圧倒的支持を受ける青春ラブコメの
行方から目が離せない!!
イラスト:ぽんかん⑧
※イラストは既刊のものです。

ここガ知りたい！ ガガガ特捜部

喧嘩をして変に意地を張ってしまって、謝れずにそのまま別れてしまう。結局、そのままなんとなく謝れなくて、という経験をした方も少なくないのではないでしょうか。そんなわけで今回の質問はこちら。

質問 喧嘩して「ごめんなさい」が言えないうちに、友達が引っ越してしまって後悔しています。先生方にも言えなくて後悔している「ごめんなさい」の瞬間ってありますか？ （宮城県・凄技ニッパー・27歳）

●先生たちの「ごめんなさい」……岡本タクヤ先生☞原稿の進捗状況報告にリアルとファンタジーを混在させてごめんなさい。

天津 向先生☞相方がエロ詩吟で大ブレイクした時、あまりにも嫉みの気持ちが強すぎて「ブーム終わったら覚えとけよ」と言ったことです。

中沢 健先生☞作中に登場する悪役のモデルに、身近な人を使ってしまいごめんなさい！

ハマカズシ先生☞「ごめんなさい」よりも「ありがとう」が言えなくて後悔しがちな人生を送っています。

赤城大空先生☞色々思い出していたら暗黒面に落ちかけたので、ここは『特になし』でどうか…。

秋目 人先生☞数日前、道を尋ねられた時、焦って間違った場所を教えてしまった事がそれです。正解を知っていたのに……！

遍 柳一先生☞実家に住んでいた頃、風呂場の天井に一匹のアシナガグモがいました。毎日なんとなくその様子を見ていたんですが、たまたま床に降りて来ていたときにシャワーをかけてしまい、排水溝に絡まって死なせてしまいました。虫にはごめんなさいが伝わらないから辛いですね。

天宮伊佐先生☞「売れなくて、ごめんなさい」ガガガ編集部様へ。

質問募集！ 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ（GAGAGAWIRE）で見られます。

書店員さんとガガガくん

10th GAGAGA ガガガくん

今年も暑くて溶けちゃいそうな夏が来たネ! ガガガ文庫と一緒に残暑を乗り切ろうヨ!

今月の書店員さん



GAGAGA SUPPORTER SHOP

アニメイト姫路 北口 翼さん

住所:兵庫県姫路市東駅前町54
ハリマセンタービル1F/2F
電話番号:079-288-1323
営業時間:10:00〜19:00　定休日:なし
URL:https://www.animate.co.jp/shop/himeji/

ライトノベルの品揃えは地域で一番です！ ライトノベルをお探しなら是非当店へご来店ください。

北口さんのオススメ本



[勇者に期待した僕がバカでした]

勇者と魔王のファンタジーですが、仕事あるあるに溢れています。オススメファンタジー社畜コメディ!!



▶フォトプリントも大々的に展開してもらえて大感激！ 面陳でたくさん推してもらえて嬉しいヨ!!

編集後記

・人生で100回目ぐらいのダイエット中。
今回のテーマは「リバウンド対策を怠らない」です。(野)
・今年まだ冷やし中華食べてない! 食べなきゃ夏が終わっちゃう!(☆)
・いろいろあってネット動画配信サービスに加入。海外テレビドラマおもしろい!(濱)
・岡崎体育と編集(小)がめっちゃ似てる説。主にビジュアル。(岩)
・20年来の友人の結婚式で涙腺崩壊。年をとったものです。(飯)
・人生を彩る、新しい何かを見つけたい。
アイデンティティクライシスの夏。(小)
・最近ひと月に一回体調を崩しているマンなので強くなりたい。(田)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!



10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!